

## 2 遺構各説

検出した主な遺構は、古墳時代から中世に及ぶ。以下のA～Jでは、山田寺創建から平安時代の遺構について記述し、山田寺創建以前の遺構と中世の遺構については最後のKで一括して記述する。

### A 回廊内の整地

回廊内には、前節Bで触れたように、後世に削平、攪乱された部分を除くと、ほぼ全面にわたって上にバラス敷面、下に瓦敷面があった。他に塔や金堂周辺では、基壇築成に伴う部分的な整地が認められたが、これらについては本節D・Eで詳しく述べる。

#### i バラス敷 (Ph.5・7～10・22・24、付図2)

バラス敷は、5～8cm程度の礫を、厚さ5～13cm程度、最も厚いところでは厚さ20cmで敷いており、部分的には瓦の小片や土を混えていた。瓦敷の上であり (Ph.5)、回廊側では雨落溝SD061・081に接し、この上端近くまである (Ph.5・8・24、Fig.19～22)。北面回廊の東から第3間付近 (ほぼ27ライン) から南約40mの間でバラス敷面の標高をみると、南雨落溝SD081の南側石南肩 (標高約118.65m) から南約0.8mのLR区までで10cmほど高くなり、中間のLK区 (金堂の中軸東方) 付近が約118.60m、南端のLE区 (金堂の南縁東方) 付近が約118.50m。さらに南約15mのMT区 (塔東方) が約118.47mとゆるやかに南に下る。

バラス敷  
の標高

金堂付近では、バラス敷は北面階段犬走りの見切石上端 (標高約118.60m) より2cm下で見切石にほぼ接し、北約6mまで残る (Fig.44参照)。上面はわずかに北下りになっているが、削平されているので、本来は水平に近かった可能性がある。東面階段付近では、犬走り見切石 (上端標高約118.62m) 外は瓦敷のまま、5～6mあたりから以東がバラス敷 (標高約118.60m) となり、東面回廊西雨落溝SD061側石際は標高約118.55mと急に低くなる (Fig.20)。西面階段付近では、犬走りの見切石 (上端の標高約118.56m) 西2mほどから西に厚さ5～10cmのバラス敷 (標高約118.47m) がわずかに残る。犬走り見切石近くは瓦敷のまま、西のバラス敷面よりわずかに低く、のちこの上に淡茶褐色粘質土が堆積したようである (Fig.46参照)。南面階段付近も似た状況であり、バラス敷は礼拝石SX011と灯籠SX012Bの間 (標高約118.60m) から南に次第に厚く、高くなり (厚さ10～15cm、標高約118.65m)、塔の北面階段犬走りの見切石近くで再び薄くなる (標高約118.60m、Fig.51参照)。礼拝石はバラス敷で埋まらず、灯籠も基壇上面はバラス敷から上に出ていることが確かである。

塔付近では、各階段とも残りが悪く明瞭にはわからないが、東・西面ともに犬走り見切石 (上端の標高は118.60～118.64m) 近くまでバラス敷がある (Fig.21・51)。東の上面は、塔寄り東面回廊寄りが標高118.50m前後だが、中間はやや高い (標高118.55m、厚さ約10cm)。回廊西雨落溝SD061側石際は標高約118.40mと急に低くなる。西の上面は、見切石外が標高118.55m、西2m付近が標高118.70m (厚さ35cm) と盛り上がり、さらに西では標高118.55m (厚さ20cm)

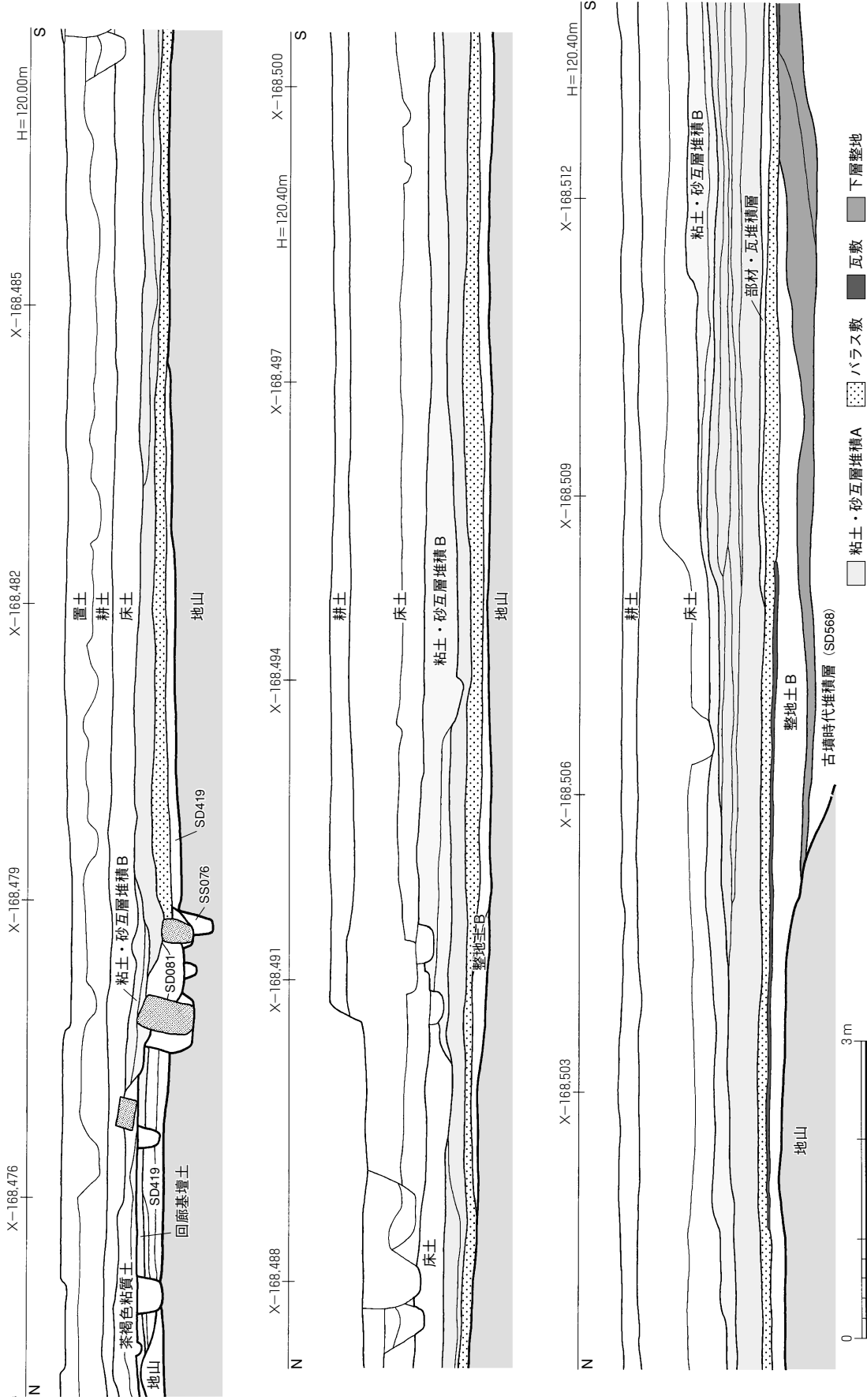


Fig.19 北面回廊（第3間）以南の土層 1:60

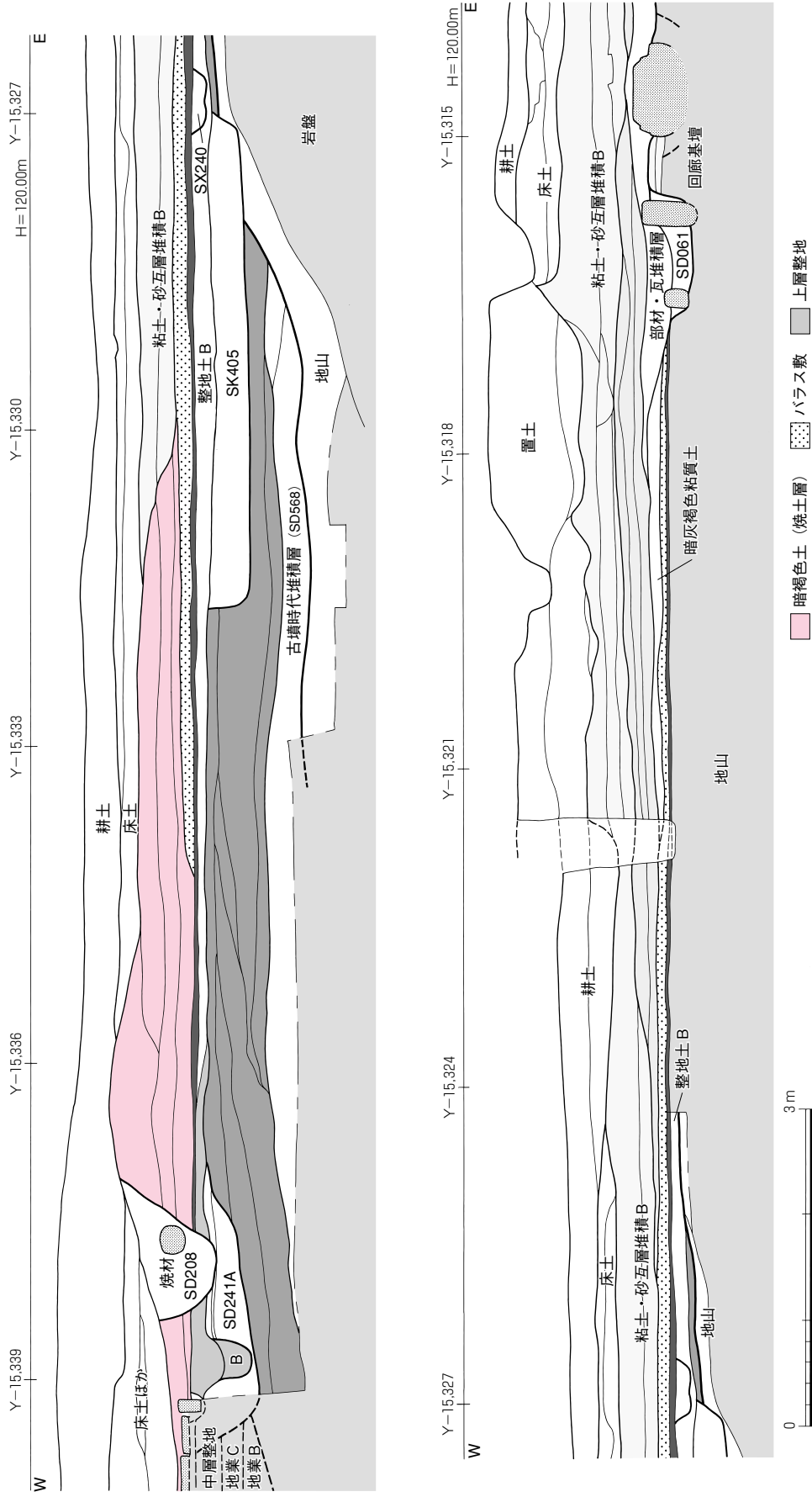


Fig. 20 金堂 (東面階段犬走り)・東面回廊間土層図 1:60

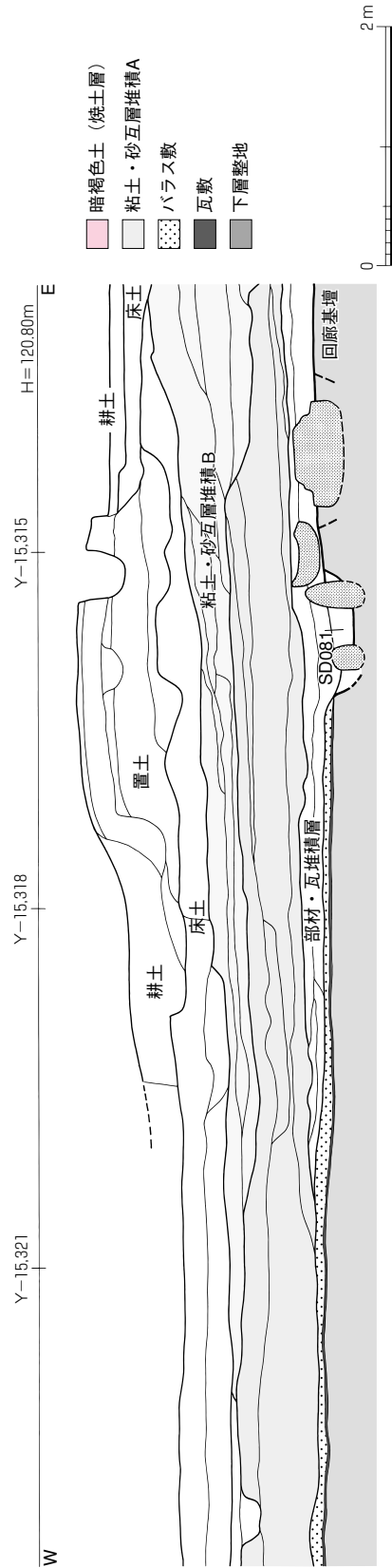
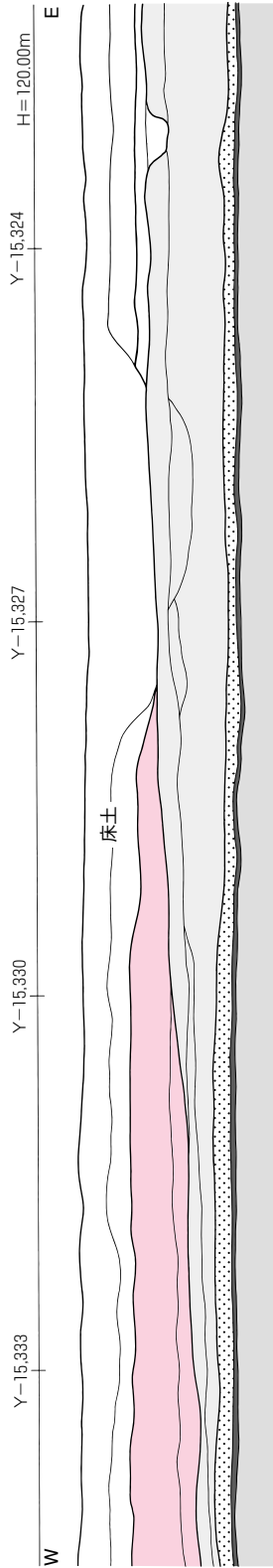
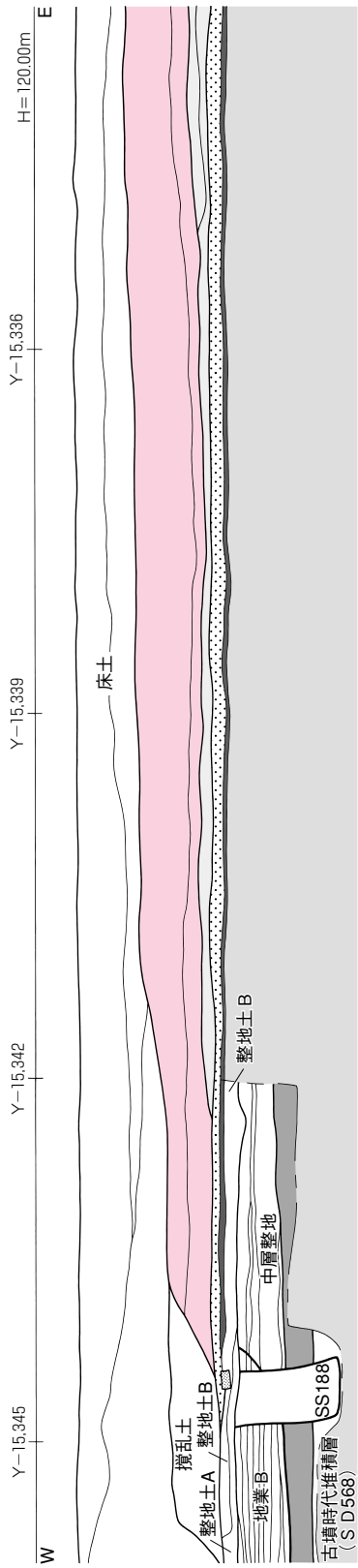


Fig. 21 塔 (東面階段犬走り)・東面回廊間土層図 1:60



に下る。南面階段付近では、南約9mまで厚さ10cmほどのバラス敷があり、標高は北端が約118.70m、南端が118.55mと南に傾斜する。

以上のように、バラス敷は、全体としてみると南へ傾斜するが、塔・金堂各基壇まわりは水平か瓦敷のまま低くなっており、排水（水勾配）を考慮したものでない。金堂・塔東に厚くしかも高くバラス敷を敷いているのは、後で触れるように、この部分が地盤沈下したための処置と考えられる。

バラス敷の機能

バラス敷からは10世紀の土師器が出土した。また、東面回廊付近ではバラス敷と、その上に倒壊した建築部材との間にある暗灰褐色粘質土（第5次調査）から10世紀末～11世紀初頭の土師器や黒色土器が出土し、バラス敷を切り込んでいる土坑SK206からは11世紀中頃の土器が出土した。したがって、バラス敷年代は、大きく10世紀代といえる。

バラス敷の年代

## ii 瓦敷 (Pl.23, Ph.2～5・17・26・39, 付図2)

瓦敷は、塔と金堂の間と、これらの東から東面回廊沿いでは稠密だが、後世の攪乱を受けていないと思われるバラス敷下でも瓦の疎らな部分やない部分があり、全面的に密に敷いたものではなかったようである。また、金堂や塔の周辺などでは、下の瓦敷面（以下、下層瓦敷）の上にも瓦敷面（以下、上層瓦敷）が部分的に認められ、時期差と推測できる。

瓦敷は2層

下層瓦敷は面としてよく残る。遺存状態が良好なところで見ると、東面回廊の西雨落溝SD061や北面回廊の南雨落溝SD081（東辺部）の側石上端から約5cm下で、側石に接する（Ph.4・26・39, Fig.20・21）。SD081東辺部（北面回廊東から第5間付近）の瓦敷面の標高は、側石際が約118.65m、側石から約0.5mぐらいまではわずかに高くなる。南10m付近では約118.60mとなる。金堂基壇東約20mの位置（北面回廊の東から第3間付近）で、北から南へ瓦敷の標高をみると、金堂の中軸東方付近のLK区で約118.55m、これより南約16m（金堂南縁の東方）のLE区で約118.40m、さらに南約15mのMT区（塔東方）で118.35～118.45m。LE区以南は下に旧流路SD568・569があり、幾分か地盤沈下を考慮しなければならないが、瓦敷は北から南に下っているとみている。

瓦敷の標高

金堂付近では、基壇や階段をめぐる犬走りの見切石上端（標高は西面が約118.56m、他は118.60～118.62m）から5～10cm下で、各見切り石に瓦敷が接し（Ph.3・43・44・51, Fig.20・44・46）、南の礼拝石にも瓦敷が接する。瓦敷の標高は、金堂の北・東・南面各階段の犬走り見切石外で標高118.55m前後、西面階段の犬走り見切石外のみ約118.46m。金堂北面階段北方の瓦敷は約9mまで残るが、レベルはほぼ水平。東面階段の東6m付近は標高約118.45mと下るが（地盤沈下か）、東面回廊西雨落溝SD061側石外では標高118.50m前後となる。西面階段の外は瓦敷の残りが悪いが、わずかに西に下る。南面階段外から塔北面階段付近まではほぼ水平。

塔の各階段・犬走りや瓦敷はいずれも残りが良くないが、瓦敷が犬走り見切石（上端の標高は118.60～118.64m）に接することは明らかである（Ph.47・48, Fig.21・51）。北面階段犬走り外の瓦敷（標高約118.55m）は、見切石上端より3～8cm低いが、東・西面の階段犬走り外の瓦敷は、見切石上端と同じか1～2cm高くなっている。後述するように塔階段の犬走りは改修されており、周辺の瓦敷も一部を改めた可能性が強い（上層瓦敷）。東面階段犬走り見切石外で瓦

敷の標高は118.60m前後、東面回廊寄りで標高は約118.40m、両者の中間地点では約118.45mと東に傾斜する。東面回廊西雨落溝際は標高約118.35mと傾斜をもたせている。東面階段犬走り脇の瓦では標高約118.53mのものもあり、これが下層瓦敷面であろう。この場合も東に傾斜する。西面階段犬走り見切石外では約7mまで瓦敷面が残る。標高は東端が118.55m前後、西端が118.48mと西下り。南面階段の犬走り外の瓦敷（標高118.60m前後）は、見切石上端より1～5cm低い。レベルが高いのは参道SF004に伴うもので、他は下層瓦敷であろう。瓦敷面は部分的にだが南6m付近にもある。この瓦敷の標高は118.50～55mと南下り。

瓦敷の機能 以上のように、瓦敷は金堂北方や塔と金堂間ではほぼ水平だが、金堂や塔の東・南・西面にわずかに低くなり、排水（水勾配）を考慮したものであったといえる。なお、瓦敷（下層）に伴う整地は、塔と金堂の間で部分的にそれらしいものがある以外にはない。したがって、瓦敷以前の整地土面も基本的には金堂及び塔から東や西、あるいは南に雨水が流れるように配慮したものであったと推測される。

瓦敷の施工 下層瓦敷には、瓦を敷くときの基線もしくは作業単位と考えられる目地がある（Pl.23、Ph.2～5・17・26、Fig.22）。直線的な目地は、方位（国土座標）との振れから、①塔・金堂・回廊方位とほぼ揃い、北で1°前後西に振れるもの（Fig.22A・D～F・K）と、東で1°前後北に振れるもの（Fig.22a・e・f）、②振れがなくほぼ東西であるもの（Fig.22c・d・g～n）、③北で2～3°前後東に振れるもの（Fig.22G～J）と、東で2°前後南に振れるもの（Fig.22o）、④北で4°前後西に振れるもの（Fig.22B）と、東で4°前後北に振れるもの（Fig.22b）とに区分できる。

①のAは塔基壇東犬走り東端の南延長線上、aはこれと南6.1m（6尺か）で直交するもの。Dは金堂東面階段犬走りの見切石の東1.5～1.6m（5尺か）を通り、金堂東南部に続くとも推測されるもの、EはDの東1.8m（6尺）を通り、塔東辺まで続くとも推測されるもの、FはEの東2.1m（7尺）にあり、塔の東でわずかに残る。Kは金堂北面階段犬走りの見切石の北方で、伽藍推定中軸線の西0.4～0.5mにあるもの。部分的に残り、振れは②になる可能性もある。fは東面回廊の南から第11間の中央やや南寄りに位置し、eはfの南1.8m（6尺）に部分的にあり、西に延長すると、塔北面階段犬走りの北面にほぼ揃う。

②のcとdは、3.6m（12尺）の間隔をもち、東面回廊の南から第9間の南・北礎石（第9・10柱筋）心にほぼ揃う。西に延長すると、cは塔東面階段犬走りの北面、dは塔基壇北面にほぼ揃う。hは、東は東面回廊の中央、東扉口SX065の南軸摺穴に揃う。東扉口の北軸摺穴の西延長部には、東西方向の目地はなく、瓦敷は乱れている。gはhの南1.9m（6尺か）にあり、西に延長すると、灯籠SX012Bの心のわずか南（約10cm南）になる。金堂東南隅近くのiは、hから1.2m（4尺）の間隔になる。lとmは3.6m（12尺）の間隔をもち、前者の西延長線は金堂北面階段犬走りの北面にほぼ揃う。kはlの南3.6m（12尺）、jはkの南3.6mに位置する。nは北面回廊の南に、0.9m（3尺）、1.6m（5尺か）、1.8m（6尺）間隔程度で、瓦を並べたもの。必ずしも一直線ではなく、乱れもある。

③のG～Jは、金堂東方のもの。間隔は、GとIが5.1m（17尺）、HとIが1.8m（6尺）、IとJが5.5m（18尺か）。Iの目地には礫が詰まっている。oはHとIをつなぐもの。Cは金堂東面階段犬走りの見切石の南延長線上にあるが、北で東に1°前後と、振れはG～Jほど大きくない。

④のBは塔東面階段東方にあり、これとほぼ直交するbの西延長線は、ほぼ東面階段犬走り南

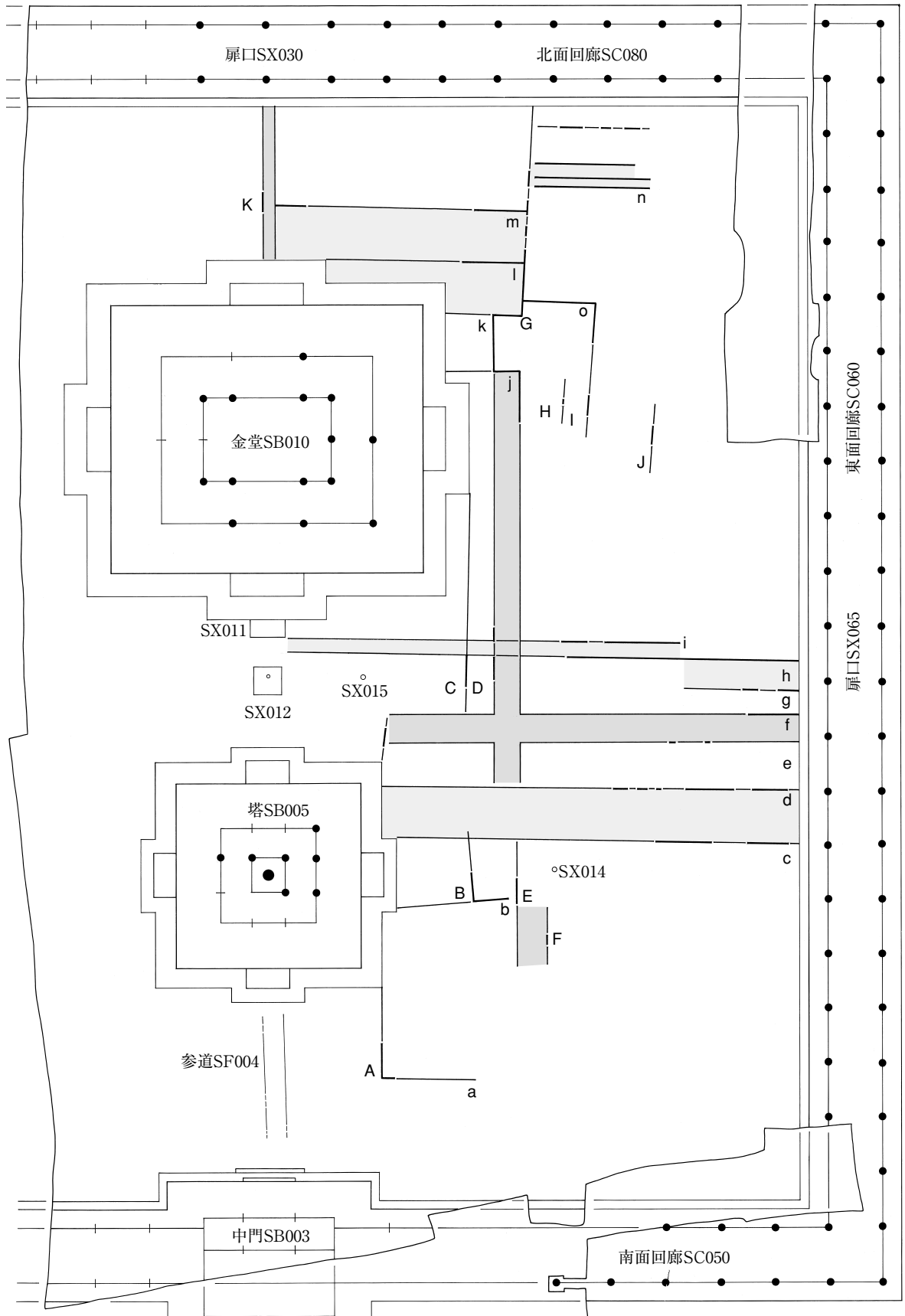


Fig.22 瓦敷計画図 1:400

面に揃う。塔の犬走りは後述するように改修されている。とくに東面階段の犬走りは南面が東で北に振れており、これにあわせて瓦敷も一部改めた可能性がある。

①～③については、上・下層の差はない。面としても、東面回廊西では①のfと②のc・d・g、金堂東南隅では①のDと②のi、金堂東北部では①のD・E、②のk～m、③のG・H・Iとoとが一連(Ph.2)であり、大きな時期差はないと考える。①と②のほとんどがそれぞれ南北方向、東西方向であるのも、施工時における振れの誤差を示そう。③が金堂東北部に顕著であるのは特異であり、瓦敷作業にあたって別個の単位が担当したか、最終作業であったと考える。

なお、①のDは南延長である金堂東南部(Ph.3)において、①のeや②のgは西延長にあたる塔・金堂間において、iは東延長にあたる東面回廊近くにおいて、それぞれ瓦敷が乱れており、施工にあたっては、必ずしも目地を通していなかったことがわかる。また、①のc・d間や、③のG・I間などでは、小さく円形に瓦敷(Ph.3)をしており、小単位で作業分担したことも推測される。

瓦敷の年代 下層瓦敷は、後述するように飛鳥Ⅳの土器を含む土坑SK405の上を整地したのちに施行されており、7世紀後半以後となる。瓦敷に用いられた瓦には、丸・平瓦のほかに、軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦、鴟尾、面戸瓦、鬘斗瓦などがあり、土管や土器小片もある。丸・平瓦は金堂創建期のものも多いが、天武朝のものもある。縄叩き目の平瓦も各所でかなりの量を使用している。縄叩き目平瓦は天武朝にあるがごく少なく、主体は8世紀に入る。瓦敷の下限を示す資料は、730年～740年代前後と考える山田寺式の四重弧文軒平瓦FⅠ種(第6次調査)、8世紀前半の縄叩き目がある一枚づくり平瓦や同巧で「大」とヘラ書きした一枚づくり平瓦(第5・6次調査)である。後者は上述した①のdの目地にも使用(Pl.23)。これらの瓦は、8世紀前半に堂塔の修理に使用され、その後、再修理によって屋根から降ろされて瓦敷に使用されたと考えるべきであろう。したがって、下層瓦敷の年代は、8世紀中～後半と推測する。下層瓦敷直上から、平城Ⅲ(中～新)の土器が出土していることとも矛盾はしない。

瓦敷として取り上げた遺物には、天平宝字年間(757～764年)と確定できる鬼瓦、奈良時代末～平安時代初期頃の鬼瓦や土器がある。鬼瓦は金堂・塔に使用したのち、瓦敷に再利用されたものであり、上層瓦敷は平安に入った時期で、バラス敷の10世紀より前になる。

なお、灯籠SX012Bの基壇は下層瓦敷に接し、SX012Bの東や塔の東には下層瓦敷に接して土管を立てたSX014・015があるが、これらについては後で触れる。

## B 中門SB003

### i 遺存状況(Pl.9、Ph.6、付図1・2)

中門SB003の位置するあたりは、北や西より1.5mほど低い水田であり、かなりの削平を受けていると予想された。実際に、中門推定位置の遺構面は、塔と中門をつなぐ参道SF004の瓦敷面南端の標高118.52mより0.9～1.1mも低く、一部の基壇土らしきものと、柱穴列SS013を検出したにとどまる(Pl.9)。基壇土らしきものは、水田耕作に伴う細溝等によって破壊され、島状(東西約5m、南北約2m)に残る。黄褐色粘土と灰褐色砂質土の互層で、厚さ約15cm。山田寺

創建時の整地土上による (Fig.23、付図1・2)。

柱穴列は掘立柱穴で8個を検出した。東西に2列に並び、4個ずつの穴がそれぞれ柱筋を揃える。柱間は、東西方向の両端が約3.9m (13尺)、中央2間が約3.45m (11.5尺) 等間で、南北方向が約4.2m (14尺) である。柱掘形は70~90cmの方形で、直径20cm弱の柱痕跡をもつ。深さは、現状の遺構面から大半が30cm (標高117.2~117.4m) だが、西の1個だけは70cm (標高116.90m) ある。他に、西寄りで柱穴らしきもの1個 (SX009) を検出しているが、性格や年代は明らかでない。

中門位置  
の柱穴列

## ii 柱穴列SS013による中門の復元 (Fig.23・24)

中門基壇と参道及び南面回廊との関係 (Fig.23) 『飛鳥・藤原宮概報7』では、上述の柱穴列SS013は、柱穴が小さいのに柱間が広いこと、位置が伽藍中軸を挟んで対称であることなどから、足場穴とみた。また、参道SF004の高さがそのまま中門に及んでいるとすると、足場穴が1.1~1.6mと非常に深くなることから、中門付近は創建時に一段低く、参道南端には階段状の施設があったのではと考えた。その後、南面回廊SC050を調査し、上述の柱穴列は南面回廊上に位置し足場穴の可能性は強まった。だが、南面回廊は、東端から第7柱筋まではほぼ水平 (基壇標高約118.78m) であると判明。中門を周囲より一段低くすると、南面回廊も第7柱筋以西は急傾斜するか、段差をつくらざるを得ず、再検討が必要となる。

足場穴から  
の復元

中門の基壇規模は、後で改めて触れるが、梁行2間 (A案) の場合で南北が約10.3m、梁行3間 (B案) の場合で約12.0m、東西が梁行2間の場合で約13.9m、梁行3間の場合で約14.2m。基壇高 (北雨落溝側石まで) は、南面回廊 (東半) より幾分か高く、中門北中央では40cmぐらいと推測する。

梁行2間のA案でも梁行3間のB案でも、SS013を足場穴とすると、基壇北端はSS013の掘形の南になる。基壇の出は最大で2.5~2.6m。この北に雨落溝があり、階段もあったはずである。回廊の雨落溝と同様に内幅約0.6m、階段は1段で幅約25cmとすると、階段部分の雨落溝側石北の位置は、SS013の北肩あたりになる。

足場穴の深い例は、平城宮の西 (第二次) の大極殿<sup>1)</sup>や、東 (第一次) の朝堂院第二堂<sup>2)</sup>にあり、前者では一辺0.3~0.5mに対して、深さが0.8~1.1m。山田寺でも、金堂SB010では一辺0.8m、1.4mに対して、深さ1.4m、1.6m、塔SB050では一辺0.45mに対して0.85m。足場解体後の整地完了面からだ、さらに10~20cmは深いことになる。中門で検出した柱穴列SS013は、削平された一辺が0.7~0.9m。足場穴とすると、深さは1mを越えても可能となる。後述する南門の場合、建物は切妻で、足場穴も約0.6~0.7mと浅い。SS013が深いことは、中門の建物が高かったことを示そう。

山田寺金堂例を上限とすれば、足場穴の深さは掘込み面から1.4m、整地完了面からだ1.5mぐらいでも可能である。この仮定で、中門北雨落溝の側石北の標高を約118.30mとし、参道SF004南端瓦敷面まで約4.6m間を、比高差約22cmの傾斜面 (傾斜角3°弱) としたのがFig.23である。これだと階段はないであろう。後述するように塔建立にあたって南に10cm程度の整地が行われた可能性があることからすると、中門創建時には、北からの傾斜は幾分か緩やかであったことになる。基壇土らしき土は、中門の推定基壇下端から0.9m近く低くなる。基壇の低い南門や回

中門の標高

廊では掘込み地業はなく、足場穴も概して小さく浅いのに対して、中門の足場穴は大きくて深いと推測されることからすると、掘込み地業であった可能性もある。

中門の内側（北）からみた基壇高を約40cmとしたのは、南面回廊SC050第7柱筋の基壇上面（標高約118.72m）とほぼ水平とした仮定。中門の基壇は、飛鳥寺のように回廊より若干高くなることもありうる<sup>3)</sup>。後述するように北面回廊がわずかに西下りである点や、南門SB001と新南面大垣SA631との取付きを考慮すると、南面回廊は第7柱筋から西にゆるやかに下り、中門基壇近くで反り上っていた可能性もある。

**中門SB001の復元** (Fig.24) 『飛鳥・藤原宮概報7』では、上述の柱穴SS013を足場穴として解釈し、桁行3間で13尺(3.9m)等間、梁行2間で14尺(4.2m)等間、『飛鳥・藤原宮概報9』では桁行3間で中央間14尺(4.2m)、端間12尺(3.6m)、梁行3間で12尺(3.6m)等間の中門を推定していた。前者は残存する足場穴の配置から、後者は前者を踏襲しながらも、飛鳥寺・法隆寺など古い時期の例に倣った復元である。その後、南面回廊の位置が確定し、中門の東西方向の軸も推定できることとなった。そこで、伽藍全体計画との整合性から、あらたに中門の規模を推定してみることにする。

第VI章1C・Dで述べるように、伽藍の規準尺は、1尺が30.24cmの唐尺で、回廊東西総長（外々）が280尺、南北総長（外々）が287.5尺である。南北方向は23間で、1間が3.78m、唐尺で12.5尺等間。中央に扉口を設け、北と南をそれぞれ11間に割り付けている。一方、東西方向は、唐尺の280尺を1間12.5尺で割ると、22間と残り5尺となる。この端数が中門の規模を反映していると推定する。そこで、南面回廊を割り付けると、中門の東と西が各10間、唐尺で計250尺であり、残る唐尺で30尺分が中門の桁行総長と推定できる。これで中門総長は確定するが、その柱位置は想定するしかない。

山田寺中門の桁行柱間数は桁行総長から考えて、3間とするのが妥当であろう。中門の東と西に仁王像を置くと、端間は壁で仕切ることになり、出入口の中央間が広がる。飛鳥寺中門<sup>4)</sup>を参考にすると、中央間が唐尺で12尺、端間が唐尺で9尺になろう。梁行の柱間数は2間の場合と3間の場合が考えられる。梁行2間の場合は梁行柱間寸法が唐尺で9尺等間とする案（A案）が考えられる。この場合は、屋根は入母屋にもなりうる。一方、梁行3間の場合は、飛鳥寺中門の平面形式を参考にすると、梁行柱間寸法が唐尺で7.5尺等間とする案（B案）が考えられる。桁行の端間が9尺に対して梁間が7.5尺だと真隅（45°）にならない。飛鳥寺と同様振隅の入母屋だったのかもしれない。

中門が梁行3間の例は、上述のように飛鳥寺や古調を残す法隆寺西院伽藍（711年完成か）で、文武朝の大官大寺にも残るが、梁行2間の例は天智朝頃の川原寺、天武朝の本薬師寺にあり、以後一般化する。山田寺の中門はこの過渡期にあたり、いずれとも決め難い。以下、本報告書における、伽藍全体を示す模式図内の中門は、梁行3間の復元案（B案）に則って示す。

**基壇規模** 中門の基壇規模をA・B両案で復元しておく。中門の北側柱筋は、南面回廊SC050の心から、A案では唐尺で9尺、約2.7m、B案では唐尺で8.75尺、約2.65mであり、それぞれの柱心から足場穴SS013の掘形南端までは約2.5m、約2.6mある。足場穴は基壇外になるので、基壇の出はA案で唐尺の8尺、B案で唐尺の8.5尺が最大値となる。建物規模が一回り大きい飛鳥寺中門では、基壇の出が約3.0mであり、山田寺中門には妥当な数値と考える。この仮定によると、基壇南北

の規模は、A案で約10.3m、唐尺で34尺、B案で約12.0m、唐尺で39.5尺。東西規模は、A案では出を8尺とみて約13.9m、唐尺で46尺、B案では振隅とすると出が8.5尺より大きくなる可能性もあるが、飛鳥寺（出8.5尺）に倣い、約14.2m、唐尺で47尺と推測しておく。

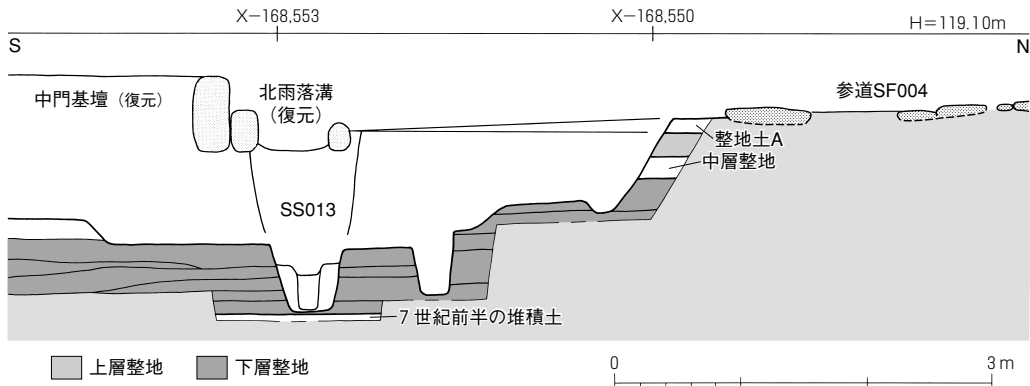


Fig. 23 中門基壇復元 1:60

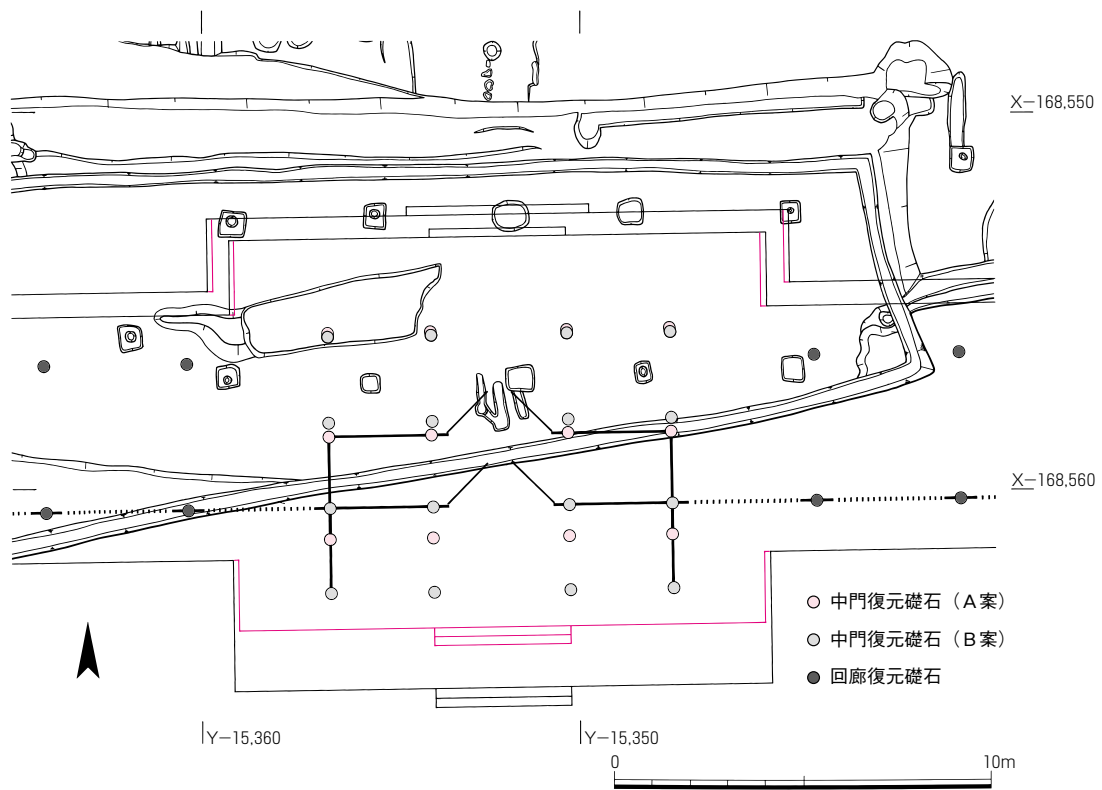


Fig. 24 中門復元平面図 1:200

- 1) 奈良国立文化財研究所（以下、奈文研と略す）『平城宮発掘調査報告XIV』奈文研学報第51冊、1993年。
- 2) 奈文研『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983年。
- 3) 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊、1958年、Fig.22。
- 4) 註3) 文献。

## C 回廊SC050・060・070・080

### i 遺存状況

東面回廊SC060と、南面回廊SC050および北面回廊SC080の東辺部は、廃絶時の基壇の状況がそのままに残っていたが、西面回廊SC070や南面回廊及び北面回廊西半部は、基壇が削られ、礎石の据付け穴や抜き穴も多くが削平されていた(Ph.1、付図1)。

稀有なことに、東面回廊および南面回廊の東辺部では、基壇上やその西に瓦や建築部材が倒壊した状況で残っていた(Pl.17)。その時期は、基壇上の瓦や建築部材を含む層などから出土した土器によって、11世紀前半になる(第IV章10参照)。東面回廊では、以下で述べるように、礎石は沈下し、基壇側石も倒れたり、ずったりしていたものがあり、倒壊以前にかなり傷んでいたことが知れる。なお、回廊の柱間や柱の数え方は、東・西面回廊の場合は南から、南・北面回廊の場合は東から、それぞれ第1間、第2間…、第1柱、第2柱と呼ぶ(Fig.25)。

柱間や柱の  
数え方

**建物の倒壊状況** 東面回廊SC060および南面回廊SC050東辺部では、瓦および部材の出土状況から回廊の倒壊状況が復元できる(Pl.17、Ph.7～15、20～25、27・28・32～34)。

西へ倒壊

東面回廊は主として西に倒壊している。とくに、南から第7～11間では、柱、連子窓の部材、頭貫、組物が西にそのまま倒れた状況である。ただ、第10～11間では基壇中央に棟木があり、ここでは棟がまず落下し、続いて全体が西に倒壊した様子が窺われる。第3～6間では柱が西南方向に倒れ、頭貫も西側に倒れながら南端が東寄りにねじれて落下した状況がみられる。

南面回廊東辺部では、南柱筋の東端から第4柱筋の柱は北に、この西の柱は西に倒れた状況を示す。北柱筋の東端(回廊の入隅)では、棟木を受ける組物が真下に落下している。南面回廊は北側に倒れつつも、東面回廊とつながる隅近くはねじれるように倒壊したと推定される。

東面回廊の第12間以北は、部材の量が減じ、遺存状況もよくない。瓦は多量だが、かなり乱れた状態であり、回廊倒壊後に部材の多くはかたづけられたと考えている。北から第12～18間までの部材をみると、西及び南西方向に倒れているものがある。北面回廊東辺部では、瓦は多量だが、かなり乱れた状態であり、部材も出土していない。少なくとも東面回廊との取付き部分は倒壊の影響を受け、のちかたづけられたと考えられる。

**落下瓦** 東面回廊では、全体にわたって、倒壊部材上に多量の瓦があった。これらは回廊倒壊直前まで屋根にのっていた瓦であるが、建物の倒壊が複雑であったり、倒壊後のかたづけのために多くは乱れていた。そのなかで南から第4～9間は、東流れの屋根瓦が、西に倒れた東側柱や連子窓の上に、葺いていたときに近い状態で落下していた(Ph.15・21、Fig.26)。

瓦葺き復元

その結果、回廊の屋根瓦については、7世紀後半や8世紀後半(軒瓦6134-6703A)の補修瓦などを含むが、90%以上が創建時のものであること、丸瓦は玉縁式が主だが行基式も用いていること、平瓦は二枚重ねで葺き足が長いこと、棟には割鬘斗瓦を3～4枚積んだ上に大型の平瓦をかぶせていたことなどが判明した。南面回廊東辺部では、北流れの軒瓦や丸・平瓦が反転して落下し、棟通りの東端付近では鬘斗瓦や面戸瓦が多く出土していることから、屋根の棟はそのまま落下し、全体としては屋根がくの字に折れて倒壊したと推定される。



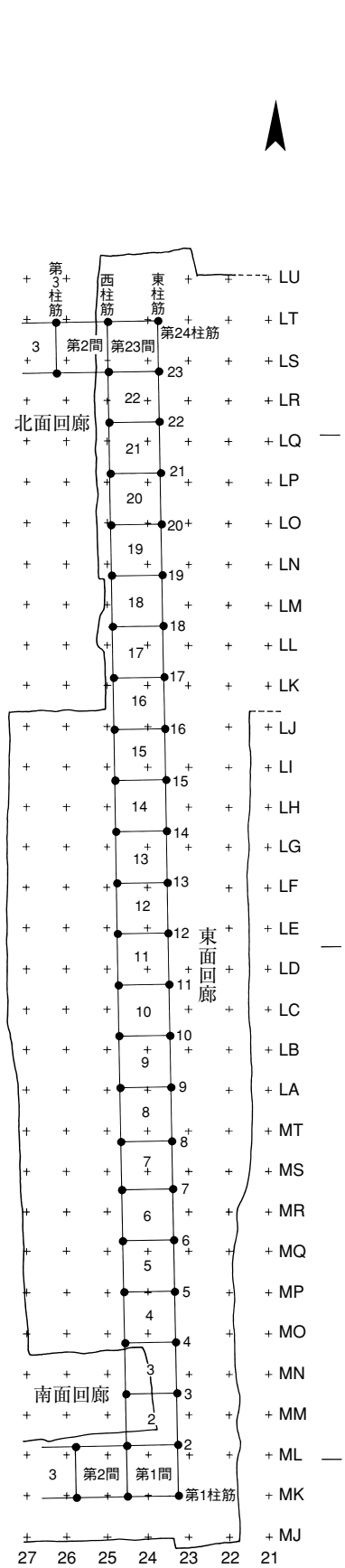


Fig.25 回廊地区割・番付図

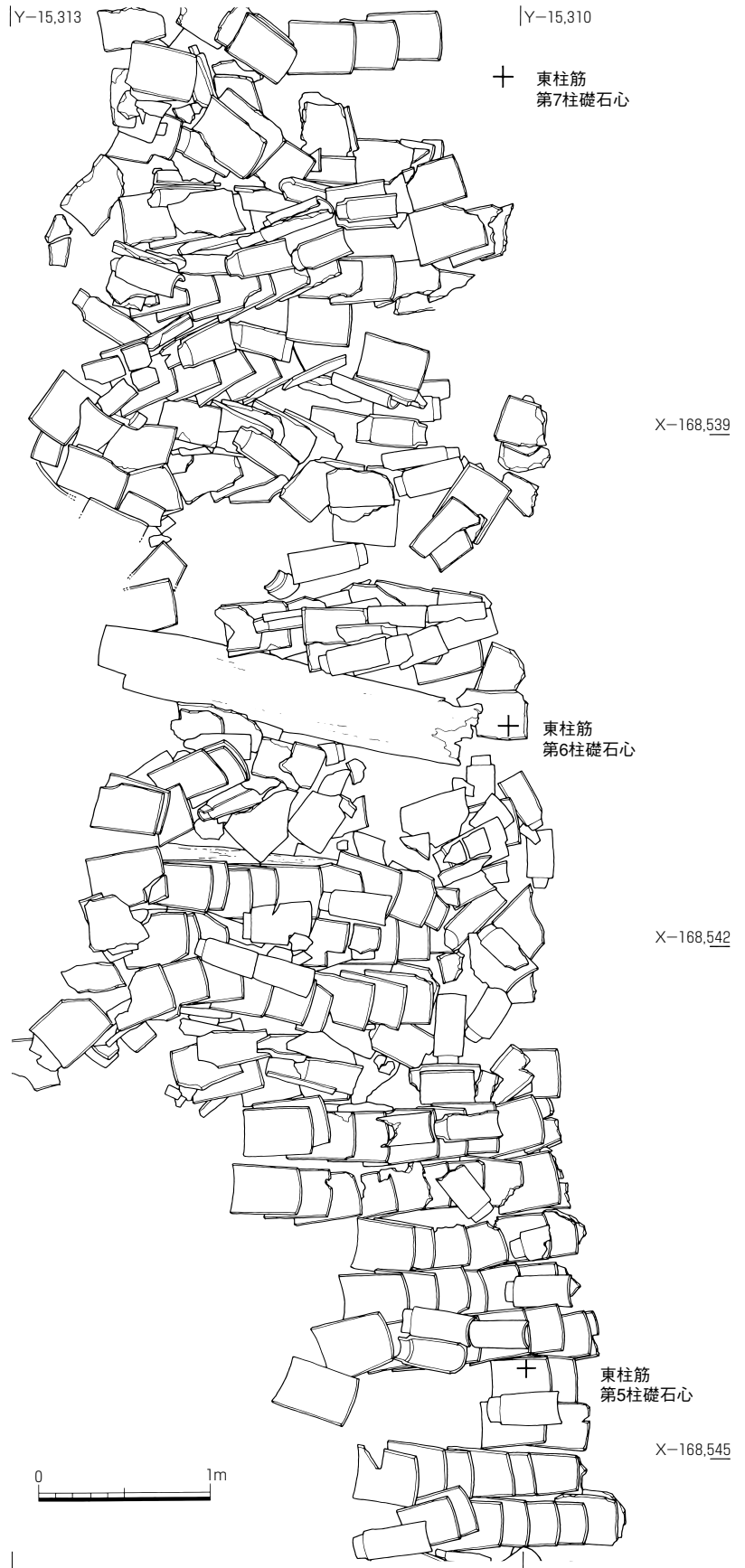


Fig.26 東面回廊瓦落下状況 (第5~8間) 1:40

なお、東面回廊では、東でも西でも基壇のすぐ外で軒丸瓦や垂木先瓦が目立って出土し、南面回廊の南側でも似た状況であった。これらは建物が建っていた時にすでに脱落したもので、倒壊直前に回廊は軒先等が傷んでいたことを物語る。

ii 東面回廊SC060 (Pl.2～6、Ph.1・2・7～31、付図1・2)

東面回廊SC060は、第4～6・8次調査によって、ほぼ全体を発掘した。南北23間の単廊で、総長（南北端の柱の距離）は約86.9mである。土間床である。礎石、地覆石、足場穴の他に、中央（第12間）と北端に扉口SX065・666、南から第22間に暗渠SX670、西に雨落溝SD061などがある。

**基壇築成** 東面回廊のベースは、第IV章1Aで触れたように、南から第14間以北は主に花崗岩風化土の地山、第3～14間は古墳時代の深い谷か旧流路SD568・569、南端も浅い旧流路SD730である。基壇は、これらの深いところ（主に南半）を埋めて整地し、高いところ（主に北半）は部分的に削り残したのち、上に版築で積土を施している。積土は礎石を据える以前と以後のものがある。基壇高（側石上端までの高さ）は、後述するように基本的には東で推定約35cm、西の雨落溝SD061の西側石上面から約20cm（南半は30cmほどか）である。

基壇面は、礎石方座下のほとんど加工していない部分の上面（以下、地の面と称す）付近である例が多いが、地の面より下になっている所もある。後者は浸蝕を受けた結果である。前者の例として、南から第21柱筋の状況を見ておく（Fig.27）。

検出時の状況だと、東柱筋礎石の方座と地の面の標高は約118.90mと約118.83m、これに対して付近の東側石上面の標高は118.86～118.90m。排水（雨勾配）を考慮すると、礎石脇の基壇上面は方座上面近くと思われる。ただし、後でも触れるように、東側石はほとんど沈下していな

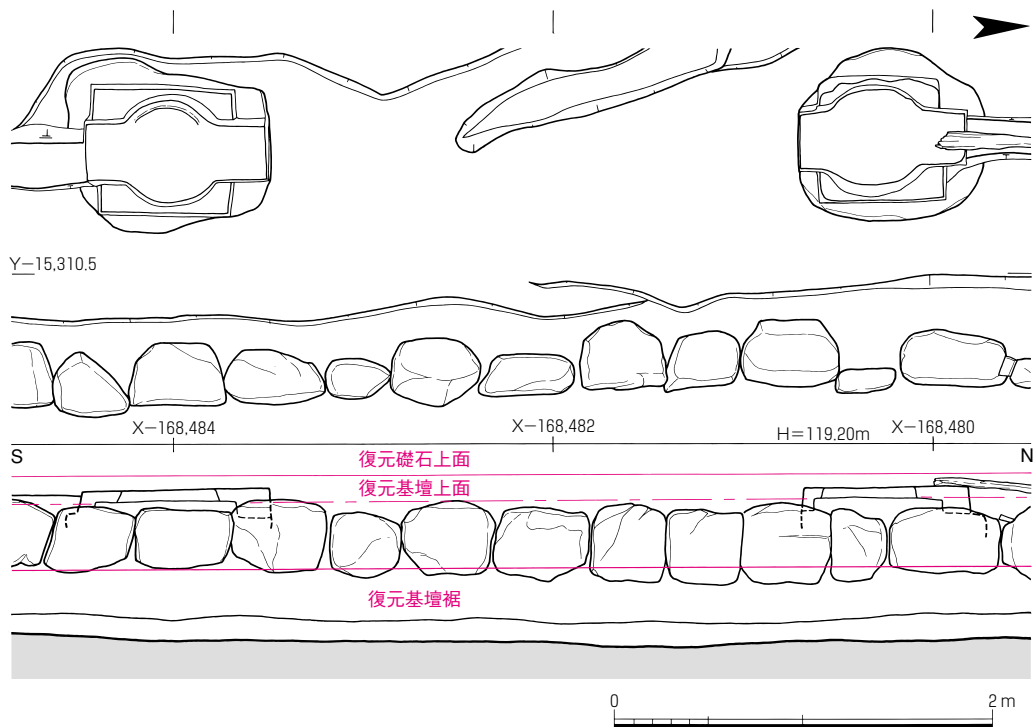


Fig.27 東面回廊東側石立面図（第21間） 1:40

い（復元側石上面標高118.88m）のに対して、東柱筋の礎石は7cmほど沈下しており、方座上面と方座下端（地の面）の創建当初の標高は118.97mと118.90mに復元できる。すなわち、礎石際の基壇土は方座下端あたり（以下、これを復元基壇上面と呼ぶ）で基壇縁にむかってわずかに傾斜していたと推測できる。礎石は各所で沈下しており、創建当初の方座下端、すなわち基壇上面を復元することはかなり難しいが、後で詳述するように扉口のある中央第12間が最も低く（復元標高約118.87m）、ここから北（北端標高約119.07m）と南（南端復元標高約118.90m）に次第に高くなっていくとするのが穏当である。以下、この復元案により、北から順に詳細を述べる（Fig.28）。

南から第21柱筋の礎石位置（Fig.28-1）だと、既述したように、復元基壇上面の標高は約118.90m。この面から地山面（標高約118.60m）までが約30cm。西の礎石は地山面から約15cm上（標高約118.75m）で掘形を掘って据え、2～4cmの積土したのち東の礎石を据え、最後に10cmほどの暗黄褐色粘質土を積んで基壇上面としたようである。地山面と西礎石の据付け面との間約15cmは、3層程の黄灰色ないし青灰色粗砂層。版築状の積土と考えたこともあったが、北東に傾斜する点は異質である。後述するように、すぐ西の北面回廊第3間南半も同じ状況である。回廊基壇築成以前に旧流路SD419があり、これを埋め立てた土や堆積土と推測する。基壇の東外は、地山面が標高約118.38mだが、SD552等によってかなり浸蝕され、側石の根方が露出する。後述のように東での基壇高は推定約35cm（東での地山面の復元標高約118.53m）であり、基壇築成前の地山・堆積土等の削り出しは約22cmとなる。

南から第16柱筋の礎石位置（Fig.28-2）では、復元基壇上面（標高約118.80m）から地山面まで約20cm（標高約118.60m）、この間に花崗岩風化土を主とした茶褐色粘質土や暗青灰色砂が2層（厚さ約15cm）ほど残る。礎石はほぼ地山面から据付けたとみることができよう。基壇高は東で推定35cm（東裾の地山面復元標高約118.43m）、西の瓦敷面まで約28cm（標高約118.52m）。基壇基底部の削り出しは、西ではわずかだが、東では17cmほどになる。

南から第14柱筋の礎石位置（Fig.28-3）では、地山面（標高約118.58m）で東礎石を据付ける。復元基壇上面の標高は約118.77mで、積土は約20cm（残存は約10cm）。西礎石の東約1.2mで、地山は西へ急角度に落ちる。古墳時代の旧流路SD569にあたり、深さは1.1mまで確認。この流路は深いところで60cmほどを整地土で埋め立てている（山田寺創建時にはSD569の少なくとも一部は完全には埋まっていなかったことになる）。基壇高は、東で推定35cm（東裾の地山復元標高約118.39m）、西の瓦敷まで約25cm（標高約118.47m）。地山の削り出しは、西からみるとわずかだが、東では約20cm。

第11柱筋の礎石位置（Fig.28-4）では、基壇のベースは古墳時代の谷か旧流路SD568の堆積土である青灰色砂礫や青灰色粘土（標高約118.40m）で、この上に厚さ5cmほどの積土を施して礎石を据付けたようである。礎石の方座下端は標高約118.49m。沈下や傾きがあり、復元すると基壇上面は約118.73m。堆積土自体もかなり沈下したと考えられる。基壇の東は古墳時代の青灰色粘土面（標高118.10m）であるが、沈下や浸蝕を受けており、復元値は約118.36m。基壇高は東で約37cm、西の瓦敷面まで約30cmになろう。回廊基壇は古墳時代の堆積土を東で10cm程度は削り出したと推測する。

南から第6柱筋の礎石位置（Fig.28-5）では、古墳時代のSD568の堆積土面が標高約118.30

第IV章 遺跡

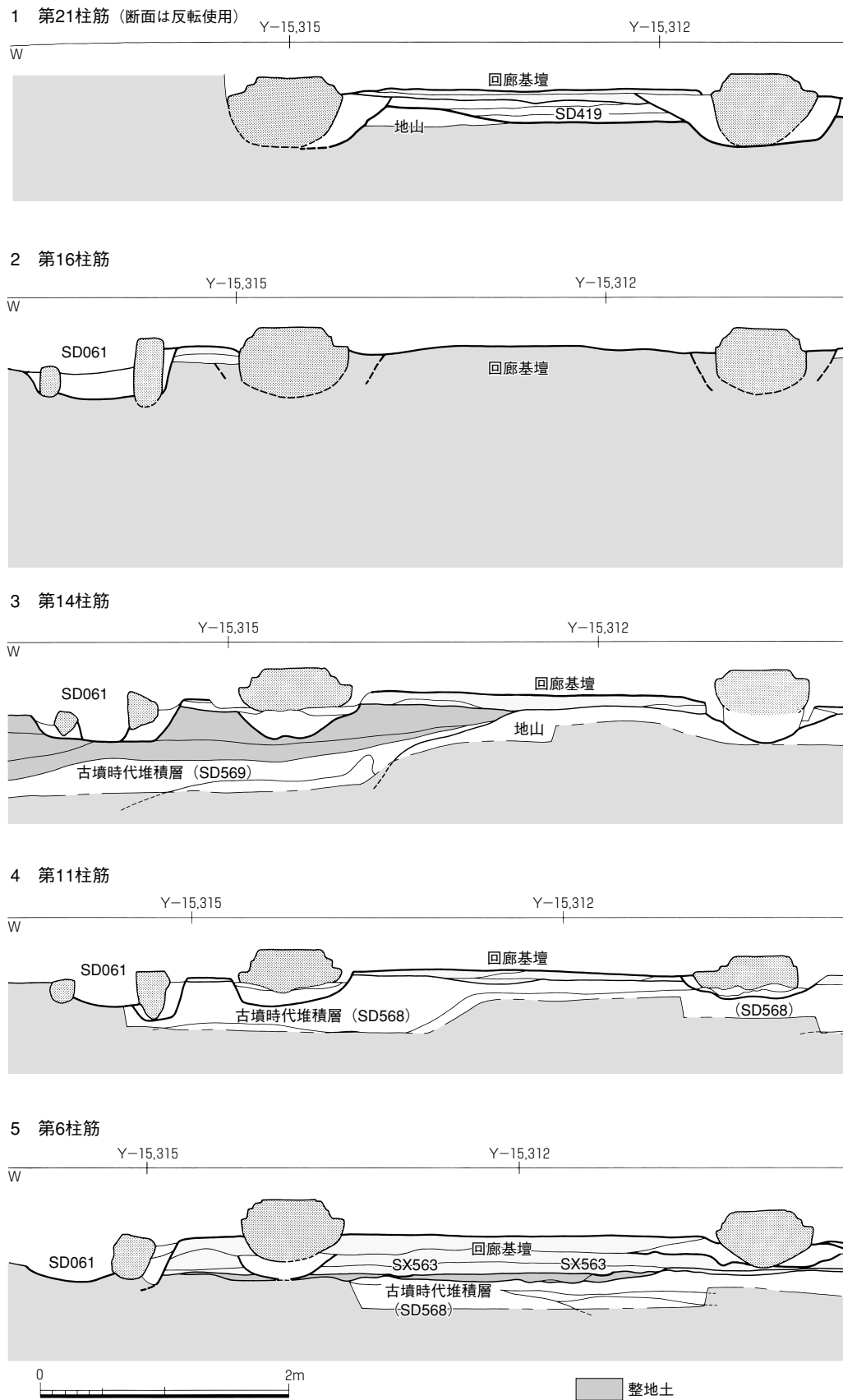
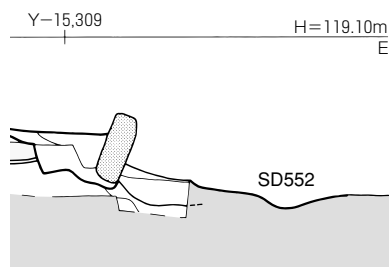
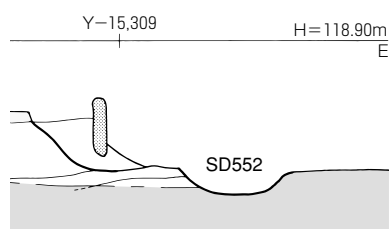
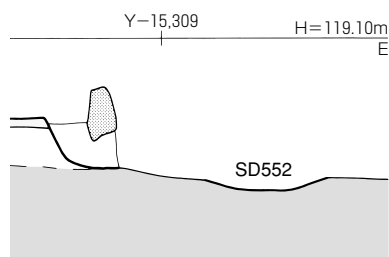
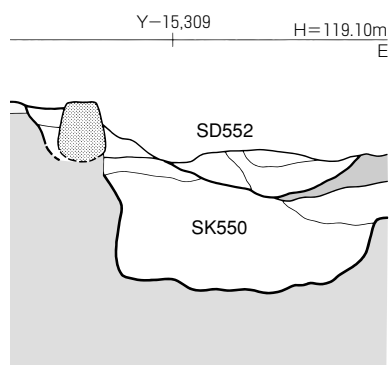
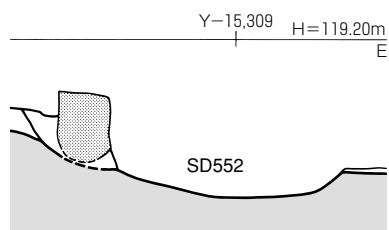


Fig.28 東面回廊断面図 1:50



m。この上には、凹んだ部分に整地土らしい厚さ5～10cmの黄白色粘土層と、花崗岩風化土を主とした2～3層の積土（厚さ10～20cm、最上部の標高約118.45m）があり、これらを切って礎石を据える（地の面の標高約118.62m）。ここでも地盤沈下などがあり、復元すると、基壇上面は118.77m。基壇高は東で約40cm（東裾の復元標高118.36m）。基壇はSD568の堆積土をわずかながら削り出したと考えられる。

東面回廊（復元基壇上面標高約118.21m）の南端（第1柱筋）では、礎石の方座下端の標高が約118.69mだが、10cmほど沈下。積土は15cm残り、この下が礎石の据付け面で標高約118.45m（Fig.36参照）。沈下を考慮するとともに118.50m前後となる。南面回廊での知見（東から第2間）によると、旧流路SD730の堆積土面に近い。検出時の基壇南の地山面の標高は約118.0m。基壇南側石の高さは50cm前後で、創建後に側石裾がかなり浸食されたことがわかる。南面回廊の知見から、側石南裾の復元標高は約118.35mである。復元基壇高は約40cmで、SD730の堆積土の削出しは15cmほどになる。東面回廊北端も復元基壇高約40cmである。

以上を要約すると、東面回廊の北半と南端では、地山や旧流路の堆積土を、東から最高で20cmほど削り出し、この面で礎石を据付けているのに対して、SD568・569がベースとなる部分（南から第3～14間）では、旧流路の堆積土を削り出した上に版築状の積土を最も厚いところで20cmほど施したのち、礎石を据付けていたことになる。礎石据付け面は、北端部が標高118.75mと高いが、南2/3は118.50～118.60mで面を揃えたようである。礎石据付け後はともに5～25cmの積土を施して基壇を完成する。

なお、南から第6柱筋付近の黄白色粘土（整地土）上面では、東と西の礎石間で、南北方向に幅15～20cm、深さ約2cmの浅い溝2条SX563を検出した。心心距離約1.6m。回廊の礎石等を運搬したコロの道板痕跡である可能性がある。幅は広く、車の轍ではあるまい。

**基壇外装** 基壇外装には、長さ20～100cm、幅15～40cm、高さ25～55cm程度の花崗岩または一部で安山岩の自然石を1石立て並べる（Pl.19～21、Ph.28～30）。主となるのは長さ40～50cm、幅20～30cm、高さ40～50cmである。これ

基壇築成の全体像

礎石運搬の痕跡か

らは基壇土築成後に、20cmほど基壇土を削って据付けたのち、裏込土を詰めて据える。細長い石材だと竖てて用い、上端をなるべく揃えているが、三角形に近い石材では、小さな石を上置いて二段となる部分が、東側石の南から第2間にある。また、大きな石と石との間に小さな石を挟むように置いた部分が西側石の南から14～15間にある。

東・西側石とも、後述するSD552・565や西雨落溝SD061によって裾を洗われ、外に傾いたり、ずったり、さらに転落した箇所が処々にあった。それでも原位置を保つ部分もかなりある。

**計画高復元** 残りがいいのはベースが地山の花崗岩風化土である第14間以北の東側石である。先に第21柱筋 (Fig.27) で検討したように、沈下した7cm分を上げて復元した礎石の方座下端 (標高約118.90m) と、検出時の側石上面 (標高約118.88m) は、雨勾配を考慮すると穏当な高さ関係になる。同様のことは、南の第14～20柱筋、北の第22柱筋でもいえる。扉口SX065 (第12間) 以南では、ベースが旧流路SD568・569の堆積土になるため沈下が著しいが、礎石の方座下端と側石上面がほぼ揃う所がある (第4・7～9柱筋)。礎石と側石が同じように沈下し、礎石の方座下端と側石上面との高さ関係を保った結果であろう。したがって、側石上面は礎石の方座下端から2cmほど下、礎石円柱座上面から約15cm下で計画され、標高は東扉口SX065付近が最も低く、北と南に高くなったと考える。

**基壇の高さ** 東側石の裾は、浸蝕のため根方の露出した所が多い。検出時の状態だと、側石上面から40～50cm下がるが、側石は高さが40cmほどのものも多く、これ以下にはならない。遺存状態がいい北半でみると (Ph.29・30、Fig.27)、側石上面の計画高から下に35cmで、側石の根方がかろうじて納まる。したがって、基壇高は約35cmが基本と推測する。なお、後で触れるように、南・北面回廊は基壇高が約40cmで、それぞれ東端の裾標高は約118.35mと118.52m。東面回廊中央の扉口付近までは基壇高約35cm (裾の復元標高約118.37m) だが、南端では南面回廊と揃えて基壇高約40cm (裾の復元標高約118.35m) だったと推測される。南半の傾斜はゆるやかであるが、第1・2間の側石の高さは40cmのものも多く、裾をこれ以上低くすることはできない。北は第22柱筋付近までは基壇高約35cm (裾の復元標高約118.55m) だが、北端では北面回廊と揃えて基壇高約40cm (裾の復元標高約118.52m) であった可能性が高い。第22柱筋間に暗渠SX670があり、東で北 (SD693・SD552) に排水していることから、第22柱筋付近以北が幾分か低くなっていたと考えられるのである。

**基壇の幅** 基壇幅は側石の外側から外側までで、6.3～6.6m、柱心からの基壇の出は1.3～1.4mである。細かくみると、東面回廊の北約2/3 (第10間以北) は基壇幅約6.4mが基本。北端で東側石が薄手でしかも東へ10cmほど出たり、南から第3、7～9、12～14、17間で一部の側石が薄く、比較的高い位置に据えているのは改修の可能性が高い。西側石は第9間から南がわずかに西に出、東側石も第6間あたりから南がわずかに東に出、幅が6.5～6.6mとなる。薄手の石はほとんどなく、地盤沈下等はずったのであろう。南端近くの東側石はさらに東へ出る。これは裾が洗われずったのであろうが、薄手の石もあり改修の可能性がある。基壇の東縁は地覆石抜き後の補修時に基壇土を積み直している (Fig.31参照)。西縁の少なくとも一部 (第8間目や16間目) も同様である。

創建時の基壇幅と考えるのは、6.4m前後である。後述するように1尺=30.24cmの唐尺として、基壇幅21尺 (約6.35m) に復元できる。

**礎石** (Pl.18、Ph.40) 礎石は、既に触れたように、北半と南端では基本的に地山や旧流路の堆積土を削り出した面から、古墳時代の旧流路 (SD568・569) 上では積土面から、それぞれ掘形を掘って据え、その後積土を施して基壇面を完成させている。根石は使用しない。第15柱筋の西礎石は、底に山土を混えた砂を置き、周辺に黄灰色粘土をめぐらしていた。ベースがSD568を埋め立てた整地土で、礎石自体もやや薄手 (厚さ約32cm) であるため、根固めとしたのであろう。

礎石は、調査範囲ではすべて残り、一部をのぞいて遺存状態も良好だったが、基壇縁にむかって傾いていたり、沈下しているものが多い。材質は花崗閃緑岩で、幅は61~76cm、長さは140~150cm、厚さは30~60cm。上面に一辺55~79cm (平均約65cm)、高さ6.6cmの方座と、この上に下径平均約60cm、高さ約7cmの円形の蓮華座を造り出す。蓮華座は、単弁12弁の蓮華文を側面に浮彫し、上面に直径平均約42cm、高さ約1cmの柱座を造り出す。後述する金堂の礎石より一回り小さいが、同巧である点が注目される。回廊東側 (外側) 柱筋の礎石には、別に幅約24~30cm (平均幅27cm)、長さ12~60cm、高さ7~8cmの地覆座も造り出す。また、地覆座の外端は、地覆石をのせるため、地の面をさらに一段下げる。両端を加工するものと、下端だけを加工するものがある。この差違は、石材の大きさによるのであろう。

蓮華座

礎石上面の標高 (Tab.9) は、大きくみると南下りであるが、中央南寄りの第6~12柱筋とともに低く、第5柱筋も北下りである。ベースが旧流路SD568・569であるため沈下したとみていい。ただし、北から南に直線的に下っていたとすると、第10・11柱筋は35~38cmも沈下したことになる。むしろ、法隆寺西院伽藍の回廊のように、中央の第12間の扉口 (小門) が最も低く、北と南に次第に高くなっていったと考えるべきであろう。法隆寺西院伽藍の場合、南面回廊も中門から東と西に漸次高くなっている。以下、北からその詳細を述べる。

扉口より北と南が高い

北端の第24柱筋では、東礎石は東北に傾くが、西礎石はほぼ原位置 (標高約119.07m)。第23柱筋は北面回廊第3柱筋からみて当初は約119.07m。南へは、第19柱筋まで急傾斜、以南は第14柱筋までゆるやかとなる。ただし、中間の第17柱筋の西礎石は高く残り、第14柱筋の面と復元した第23柱筋の面とほぼ一直線になる。したがって、第23柱筋から第14柱筋まではほぼ直線的に南下していたと推測できる。この傾斜角度 (約 $0^{\circ}18''$ ) でいくと、中央の扉口SX065 (第12間) の礎石上面の標高は約118.87mになる。扉口以南も直線的に高くなろう。南端の第1・2柱筋の礎石上面の標高は、南面回廊の第7柱筋が標高約118.90mであり、これ以下にはならない。一方、東面回廊南端部は基壇高を約40cm (標高約118.75m) に復元したが側石の高さからこれが限度。裾も、扉口付近からはわずかに2cm下りで、これ以上高くできない。したがって、南端第1・2柱筋の礎石上面は第7柱筋と同じ118.90mと考える。

以上の復元案でも第10間は約28cmの沈下となる。東柱筋と西柱筋との礎石心の高低差は、多くが1~3cmだが、南・北端と第9間では5~8cm、第6柱筋では約10cmあり、建物にかなりの影響があったと推測される。

**地覆石** 東面回廊が倒壊しても、東柱筋の地覆材自体は比較的原位置に残ったものが多い。地覆材のベースとなる地覆石は、第10間の南端と第18・19間、および第20間南端に当初の材が残る

当初材

(Ph.29、Fig.29)。長さ30~60cm、幅約25cm、厚さ8~20cmの流紋岩質溶結凝灰岩 (榛原石) である。上・下面は自然の剥離面だが、四辺は切っている。基壇築成後に、幅0.8~1.2m、深さ10cm程度の掘形を掘って据え、礎石上では両端の地の面を一段削り下げた所に据える。原位置に

Tab.9 礎石標高一覧1 (東面回廊)

	第1柱	第2柱	第3柱	第4柱	第5柱	第6柱	第7柱	第8柱	第9柱	第10柱	第11柱	第12柱
東柱筋 <sup>*1</sup>	118.82	118.84	118.87	118.87	118.85	118.75	118.71	118.69	118.67	118.62	118.59	118.70
	118.81	118.82	118.86	118.86	118.84	118.74	118.70	118.69	118.67	118.60	118.59	118.66
	118.80	118.82	118.86	118.85	118.84	118.74	118.70	118.68	118.65	118.60	118.59	118.64
傾き <sup>*2</sup> (比高差)	(4)	(2)							(2)	(2)		(6)
西柱筋 <sup>*1</sup>	118.86	118.87		118.84	118.86	118.84	118.75	118.67	118.63	118.64	118.64	118.66
	118.85	118.87		118.84	118.84	118.84	118.74	118.66	118.62	118.64	118.63	118.65
	118.85	118.86		118.84	118.84	118.83	118.74	118.66	118.62	118.64	118.63	118.65
傾き <sup>*2</sup> (比高差)				(2)								
復元値	118.90	118.90			118.89				118.88			118.87

	第13柱	第14柱	第15柱	第16柱	第17柱	第18柱	第19柱	第20柱	第21柱	第22柱	第23柱	第24柱
東柱筋 <sup>*1</sup>	118.82	118.89	118.87	118.89	118.93	118.93	118.91	118.94	118.96	118.98	119.00	119.05
	118.81	118.88	118.86	118.89	118.93	118.93	118.91	118.94	118.96	118.98	119.00	119.00
	118.80	118.88	118.86	118.88	118.92	118.93	118.90	118.94	118.95	118.95	119.00	119.00
傾き <sup>*2</sup> (比高差)	(2)									(3)		(5)
西柱筋 <sup>*1</sup>	118.78	118.86	118.87	118.91	118.95	118.89		118.93	118.94	118.94	118.98	119.07
	118.78	118.86	118.86	118.88	118.95	118.89	118.90	118.93	118.93	118.93	118.97	119.07
	118.77	118.85	118.86	118.88	118.95	118.88		118.91	118.92	118.93	118.96	119.05
傾き <sup>*2</sup> (比高差)			(2)				(2)	(2)			(2)	
復元値	118.87	118.89	118.91	118.93	118.95	118.97	118.99	119.01	119.03	119.05	119.07	119.07

※1 上段は最高値、中段は心の値、下段は最低値 (m)  
 ※2 2cm以上の場合

残存する地覆材の幅は約13cm、厚さ約8cm。北端近くの第22間にある暗渠SX670位置では、沈下を防ぐためにSX670の蓋石上に大きな石を埋めて基礎としている (Pl.20、Ph.31)。地覆石を据えた時期は、後述する足場穴SS062の柱を抜き取った後になる。

抜き取り痕跡

地覆石のない部分でも地覆材がほぼ原位置に残り、粘質土や砂質土に瓦や礫を詰めて地覆材の土台としていた (Ph.18、Fig.29・30)。抜き取り痕跡の幅は60~80cm、深さは30~35cm。礎石の南・北端には地覆石用の加工痕があり、もともと地覆石があり、これを抜き取って土台を改めたと理解される (SX560)。地盤沈下が主な原因であろう。遺存する地覆材の多くは、中央が下方に湾曲しており、改修後再び地盤沈下の影響を受けたようである。

地覆石抜き取り痕跡SX560からは、10世紀 (第5次調査) もしくは10世紀末~11世紀初頭頃 (第8次調査区) の土器が出土している。後述する南面回廊の知見をあわせると、10世紀後半頃を中心とした時期の改修と考えられる。

**足場穴** 桁行柱間の中間および、棟通り位置に掘立柱の柱穴SS062・064とSS066がある。柱穴は40~80cmのほぼ方形で、深さは50~80cm、柱痕跡は15~25cmである。いずれも基壇築成後に掘られている。東面回廊の東柱筋にある柱穴SS062では、柱を外側から抜き取っている。

第18・19間にあるSS062の柱穴は、地覆石の据付け前に柱が抜き取られており、回廊創建時になる。西側のSS064や棟通りのSS066もSS062と筋がほぼ揃い、足場穴と解釈するのが妥当である。足場は、梁行方向に3本立ててつなぎ、適宜に桁行方向につないでいたと考えられる。こ



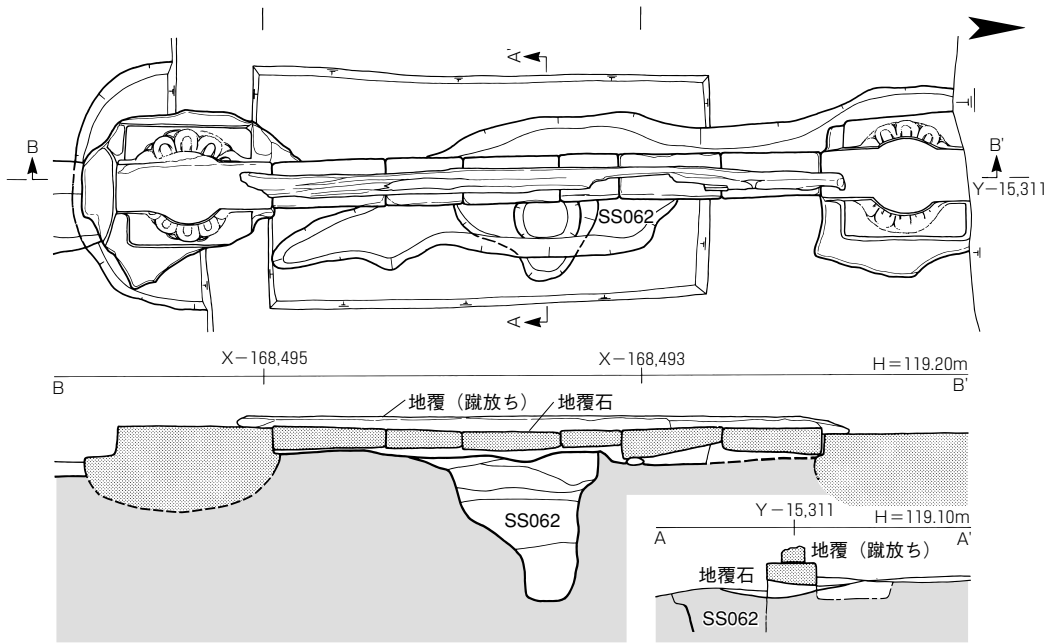


Fig.29 東面回廊（第18間）の地覆石と足場穴SS062 1:40

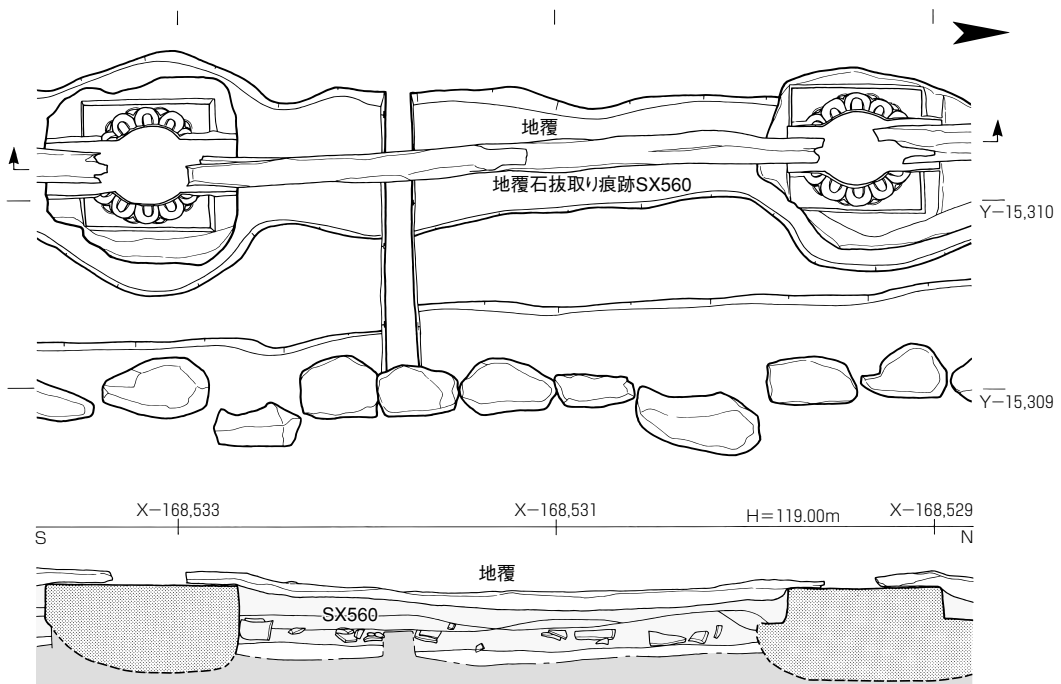


Fig.30 東面回廊（第8間）の礎石と地覆 1:40

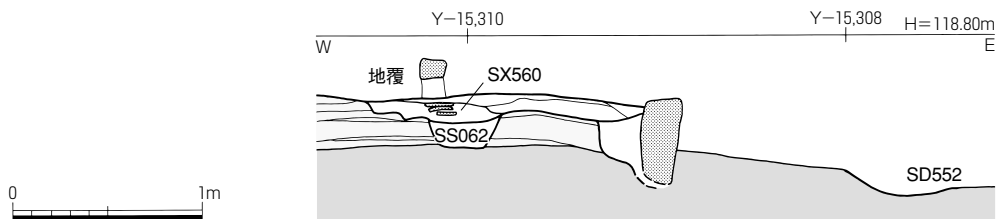


Fig.31 東面回廊（第8間）地覆石抜き取り痕跡SX560と足場穴SS062 1:40

建築過程  
の復元

これらの柱は少なくとも地覆石が据え付けられる時には抜かれているので、回廊の建築過程は、基壇築成途中に礎石を据付ける→足場を組む→柱から屋根までの主体構造を立ちあげる→足場を解体→地覆石を据付けて連子窓をつけ、基壇面も完成する、のようになる。このような建築過程は、回廊出土部材から推定される建築過程とも一致する (Fig.29・30)。

なお、第12・13間の基壇西端外約1.4mで検出した2個の柱穴SS067や、第12～14間の基壇東外約1.4mで検出した3個の柱穴SS068もSS062・064・066とほぼ筋が揃い、創建時の足場穴であろう。径15～50cm、深さ20～30cmの円形ないし隅丸方形で、基壇上の足場穴より小さい。東面回廊西では、瓦敷があり、創建時の足場穴の多くはこの下にあると考える。第9間の西礎石間にある掘立柱穴からは、縄叩き目のある平瓦が出土しており、回廊の補修に関わる。この点については後で触れる。

**扉口** 軸摺穴の残る地覆石が東面回廊の中央、第12間の東柱筋と、東面回廊北端（北面回廊の東端の間）にあり、扉口 (SX065・666) であったことがわかる。おそらく、伽藍中軸に対して対称位置である西面回廊の中央の間と、西面回廊北端（北面回廊の西端の間）も扉口であったと考えられる。また、南面回廊のところで触れるように、東面回廊南端にも扉口 (SX735) が推定できる。

中央の扉口

東面回廊中央のSX065では、礎石間に幅60～80cm、厚さ50cm程度の3個の花崗岩地覆石が並ぶ (Pl.4・5、Ph.27、Fig.33)。一回り大きな掘形を掘り、瓦や小石をかませて据える。長さは、南から95cm、90cm、101cmで、上に地覆座を造り出す。両端の地覆座の幅は、南北それぞれの端から50cm、35cmの位置までは礎石に造り出された地覆座と同じ約25cmで、中央寄りには回廊内側に張り出して31～33cmとなる。中央の地覆石は、地覆座の幅が約32cmである。地覆座の高さは、いずれも西側（内側）で約8cm、東側（外側）で約11cm。両端の地覆石には、柱筋の心から西側寄りに、扉の軸を受ける軸摺穴がある。

扉口の構造

軸摺穴の直径は約8.0cm、深さ約5.5cm。東柱筋から軸摺穴心までの距離は、北穴で約8cm、南穴で約11cm。両穴とも原位置に残る幅約15cm、残存高約7cmの地覆材（蹴放ち）にはほぼ接している。軸摺穴間の心々距離は197.8cmである。扉は両開きで、回廊の内側に開き、扉1枚の幅は1.02mに復元できる (Fig.167参照)。北穴内には、扉軸の下端までを包み込む円筒形の鉄製金具が2重になって残っていた (Fig.32)。外側のものは軸受金具で内径約7.0cm（厚さは側が約5mm、底が5～7mm）、残存高約3cm。内側のものは座軸を保護した金具で、内径約5.6cm（厚さは側が約6mm、底が2～5mm）、残存高約4.8cm。軸受金具と軸摺穴の間には直径5.6cm、厚さ0.2～0.4cmの円筒状の木製品を詰めており、下面に鉄片が残っていた。倒壊した部材の中に扉板や方立はなかったが、地覆材（蹴放ち）に方立の柄穴がかすかに残ることや、扉軸の上部は出土材から藁座で納めたことなどが判明した。

なお、扉口の東や西に階段はなかったが、東では北の軸摺穴にほぼ心が揃う東西溝SD069を検出。幅は約50cm、深さは約10cm。後述する南北溝SD552より古く、創建時に遡る可能性が強い。南の軸摺穴に対応する位置にも東西溝があったとすると、扉口から東への通路が想定される。後述するように、11世紀初頭には東面回廊のすぐ東にSD565が設けられており、階段があっても破壊されたであろう。扉口の西、回廊内では、後述するように瓦敷を一部破壊して2条の東西溝SD237・238があり、この間は通路SF205として利用されている。基壇高は低く、腐食しや

すい簡単な木製の橋などをかけていたのかも知れない。

東面回廊の北端（北面回廊の東端の間）のSX666でも、礎石間に3個の地覆石並んでいたと考えられるが、西端の1個は中世頃のSD667で破壊され、東端と中央の2個のみ残存している（Pl.6・19、Ph.30）。東端の地覆石は長さ80cm、幅75cm、中央の地覆石は長さ105cm、幅80cm。ともに花崗岩で、上面に幅約36cm、高さ10～12cmで、地覆座を造り出している。回廊北側（外側）の面が礎石の地覆座（幅約30cm）と揃い、内側は5～6cm南に出る。内側は2段で、下の段のレベルが、礎石の地の面と揃う。東端の地覆石には、柱筋心から回廊の内側寄りに、直径9cm、深さ4cmの軸摺穴が穿たれており、穴底には鉄製の軸受金具の底だけが残っていた。北柱筋から軸摺穴心までは7～8cm。西側の軸摺穴と東側の軸摺穴間との心々距離は約2.1mに復元できる。扉は内開き。扉1枚の幅は約1.1mと、前述のSX065の扉より広くなる。

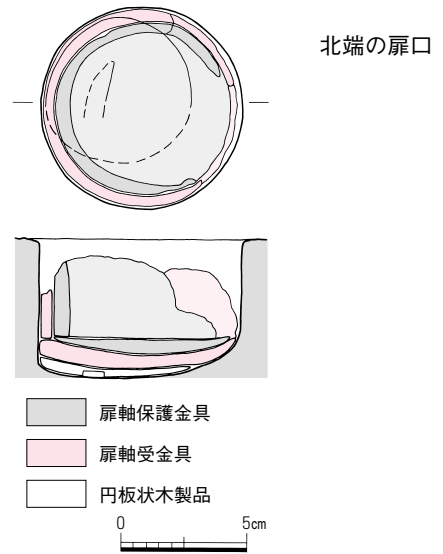


Fig.32 SX065の軸摺穴 1:3

**北階段と通路** 扉口SX666の北では、基壇側石のほとんどが倒れたり、ずったりしているが、中央の1石はほぼ原位置にある。この北に接してやや平板な2石がある（Pl.19、Ph.30）。西の石Aは側石が倒れた可能性もあるが、東の石Bはその可能性が薄い（SX668）。これらの北は、南北方向に幅約1mの範囲が高まり、上に10～20cmの石や礫が散在する。花崗岩風化土の地山上に青灰色砂土と粘土を厚さ約15cm盛り上げたもので、小石はこの盛土に直接のる。通路（SF669）と考えていいであろう。とすると、SX668は階段になる。A・B2石の間が扉口のほぼ中軸であ

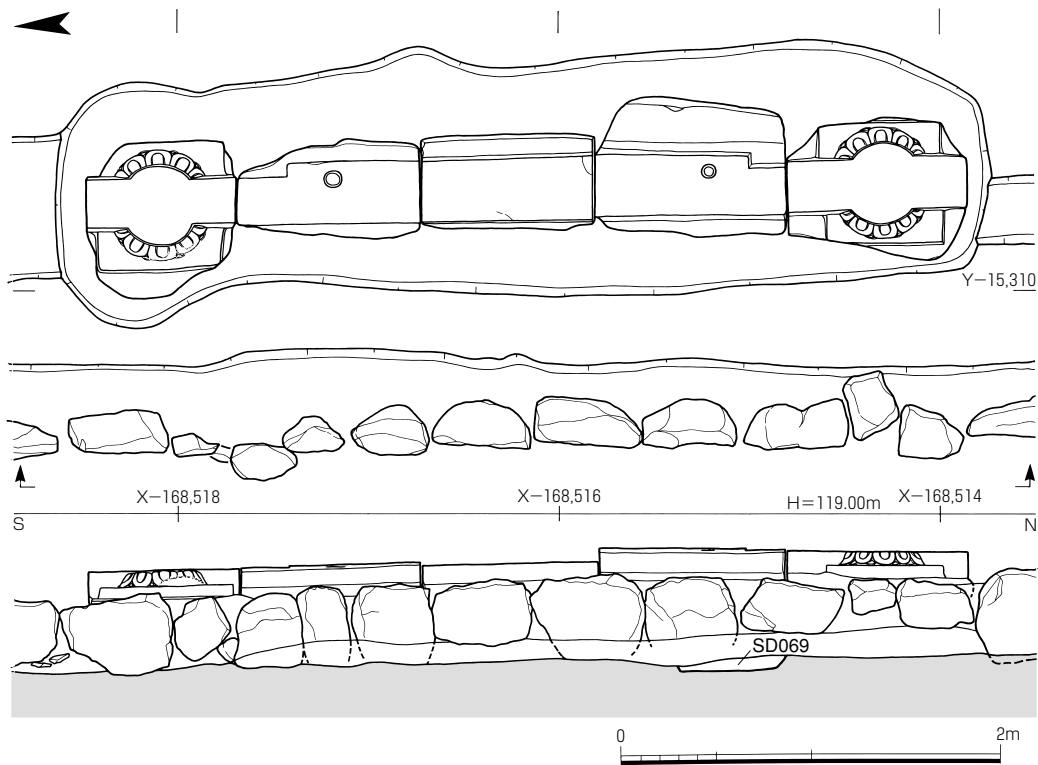


Fig.33 東面回廊東扉口SX065 1:40

る。東の石Bの東端を扉口の中軸で折返すと、SX668の幅は約1.1mとなる。東の石Bはやや東に傾くが、復元すると、上面は北面回廊基壇上面から25cmほど低い位置になる。この北約1mのSF669上面はさらに30cmほど下る。北面回廊のすぐ北を中世以降の水路SD431が通るため詳細は不明だが、通路SF669まではもう1段あった可能性は薄い。石Bの北40cmにも大きな石Cがある。上面はほぼ水平であり、Bの上面ともほぼ同じレベルであるが、当初のものではあるまい。

SF669の年代は、11世紀前半の土器を含む黒灰色粘土（SD672・656の合流堆積土）が覆うことからそれ以前、地山上に盛土してベースとしていることからすると、創建時に遡る可能性もある。階段SX668も同時期であろう。

**建物の平面** 梁行1間、約3.78mの単廊である。桁行は23間。桁行柱間寸法は梁行と同じく3.78mで、総長（外々）は約86.9m。中央（12間目）に東扉口SX065を設け、この北と南を各11間としている。柱間寸法の3.78mを、『飛鳥・藤原宮概報7』では12.5尺（1尺=30.24cmの唐尺）、『飛鳥・藤原宮概報13』以後は10.5尺（1尺=36cmの高麗尺）としている。今回、造営尺の検討をおこなった結果、第VI章で述べるように、回廊の造営尺は、金堂と同様に1尺=30.24mとするのが妥当。南北総長は、唐尺でも287.5尺と端数が出る。復元案としては中央の扉口を唐尺で13尺、南北総長288尺と考えたいところだが、柱位置を割り付けると礎石心から大きくずれ採用できない。方位は、後述するように北で西に1°04'31"振れる。

**小礎石SX673・674** 東面回廊北端（回廊東北隅）の間では、基壇上面から掘形を掘って据えた小礎石が中心（SX673）と、東から第2柱筋の中央（SX674）にある。SX673は東西約45cm、南北約26cmの榛原石（切石）である。回廊の地覆石を転用した可能性がある（PL.6、Ph.30）。上面が焼けているようだが、その理由は判然としない。SX674は東西約45cm、南北約50cmの安山岩の自然石である。ともに上面のレベルは礎石方座のレベルに近い（Fig.41-1）。これらの上に柱を立てて回廊の荷重を支えたとする解釈と、床束を立て東北隅の間を床張りとしたとする解釈がある。後述するように北面回廊の東端部は内側（南側）の柱筋にも地覆石を据えて仕切っていることを考えると、SX673・674は後者の可能性が強い。この場合、東面回廊の第23柱筋の礎石中央にも小礎石が必要になるだろうが、後世のSD667の影響が残っていない。時期については、後述するように南面回廊東端（東南隅）にも同様の遺構があり、10世紀後半頃と推定できる。

なお、SX673・674が床張りとなると、内開きである北扉口SX666は開閉できないことになる。この北の階段SX668や通路SF669の下限もこの頃になろう。

**暗渠SX670** 東面回廊の北から2間目（第22間）のほぼ中央で、北面回廊南雨落溝SD081から東へ排水するための暗渠SX670を検出した。東は東西溝SD671をへて、南北溝SD693につながる。この点については第IV章2Hで触れる。

SX670は、基壇築成後に幅0.8~1.1m、深さ0.7~0.8mの掘形を掘り、長さ50cm、幅18cm、厚さ6cm程度の塼（方塼を半截）を底に敷き、この両側に長さ40cm、高さ25cm、厚さ6cmの榛原石の切石を立て、長さ20~60cm、幅40~50cmの榛原石の切石や未加工の板を蓋とし、蓋石の隙間を瓦や小切石で塞いでいる（Pl.6・20、Ph.31）。回廊の東柱筋の位置にのみ大きな石が高くあるのは、地盤が沈下しないように工夫したものであろう。したがって、暗渠の設置は地覆石据付け以前となる。暗渠の内寸法は幅18cm、高さ約20cm。標高は東端が118.14m、西約6.4mの位置が118.25mと東に下る。

暗渠の西端部では、蓋に長さ約1mの巨大な螻羽瓦を伏せて使用している。螻羽瓦は、瓦当面を西向きとし、基壇西側石の底裏に接する。基壇西端まではさらに約0.3mあり、暗渠の底の塼や側石は調査区外にもう1枚はあるはずである。螻羽瓦は大きく内弯しており、暗渠内側の高さは約30cmと高い。この東約0.7mまでの蓋石も、螻羽瓦と同じ高さである。受口を高くして雨水の流れをよくしたのであろう。螻羽瓦と東の蓋石との間を塞ぐ瓦は、蓋石上にものみあり、不自然である。螻羽瓦は改修に伴う可能性がある。

暗渠の改修

暗渠の東端は、塼でなく、やや幅広（約34cm）の切石を底石とし、側石を底石上に立てて用いる（内寸法で幅約25cm、高さ約22cm）。同様のことは後述する南面回廊の暗渠SX700にも認められる。改修でなく、当初のものであろう。

**西雨落溝SD061** 東面回廊の西雨落溝は、基壇西側石が雨落溝の東側石を兼ねる。伽藍側の西側石は、長さ20～55cm、幅・高さとも15～25cm程度の、基壇側石と同質ながらも小振な自然石を1石並べる。底石はない。西側石はずり落ちたものが多いが、残りのいい第13～15間（Ph.26、Fig.34）でみると、雨落溝の内寸法は幅約60cm。西側石の上面は、東側石（回廊基壇西側石）の復元上面より約20cm下でほぼ揃う（標高118.52～118.58m）。これが西側での基壇高の標準値。瓦敷面は西側石復元上面より約5cm下。溝底は東側石復元上面から40～50cm下、西側石復元上面から20～30cm下。第12間以南は、原位置にあるものはほとんどなく、しかも地盤沈下のため詳細が明らかでないが、南下りであることは確か。逆に基壇はわずかながら高くなっており、

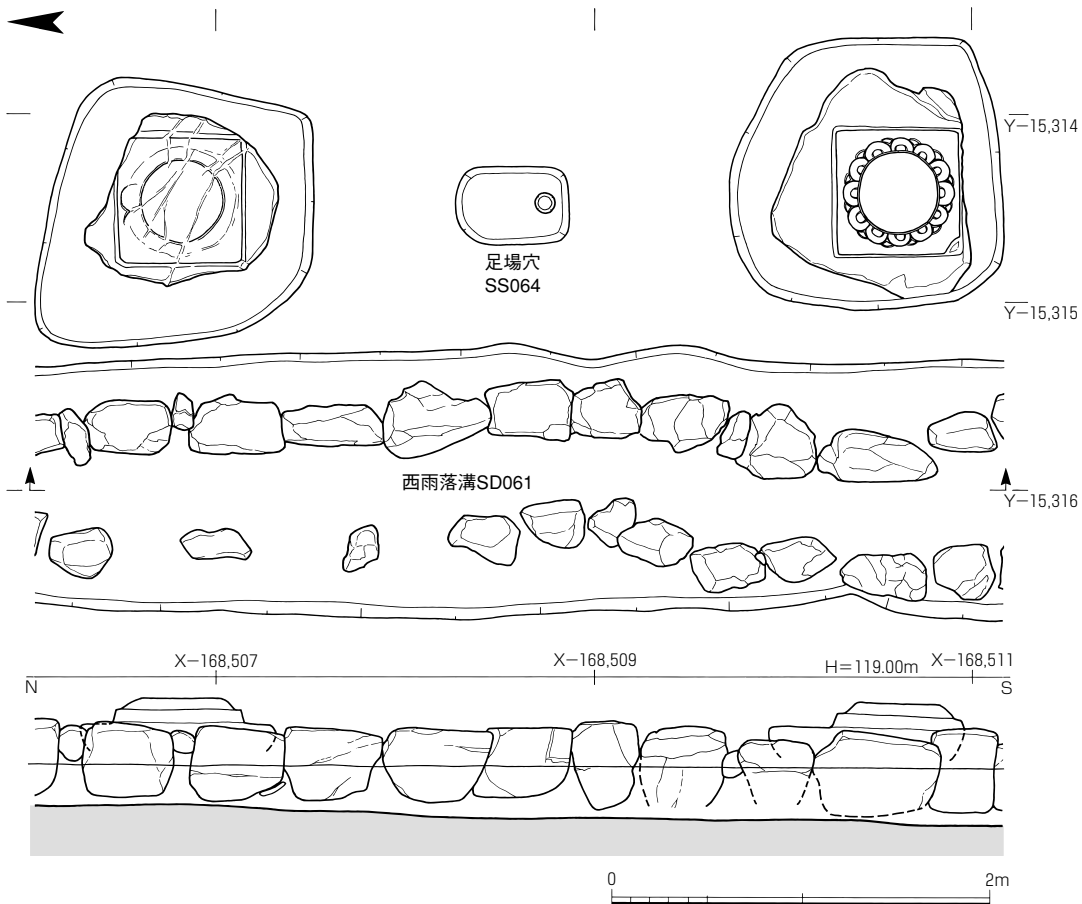


Fig.34 東面回廊（第14間）西側石と雨落溝SD061 1:40

南面回廊近くでは基壇高は30cm近くになろう。雨落溝の底のレベルは、第14・15間あたりで標高約118.30m、沈下している第10間あたりで約118.15mだが、第9間付近では118.20mと緩やかに南に下る（南の暗渠SX700の北底は標高118.17m）。溝内からは10世紀後半の土器が出土。南面回廊の暗渠SX700上を南流するSD731は11世紀に入る可能性が強く、SD061も東面回廊倒壊直前まで機能していたと推測する。

東の排水路  
は3条重複

**東面回廊東側の遺構** 東面回廊のすぐ東には3条の南北溝SD552・565・561が重複する。SD552→SD565→SD561の順に新しく、位置もこの順で基壇寄りになる（Pl.3～6、Ph.16・17・26・29・30、Fig.35）。

SD552は東面回廊東側石から東に0.4～0.7m隔てた所に位置する素掘りの南北溝である。幅0.8～1.2m、深さ0.2～0.6mだが、南端近くでは流れが拡がったためか遺構としては残っていない。堆積土は2～3層あり、灰褐色砂が主で、底に暗灰褐色粘質土、上に暗褐色有機質土がある。溝底の標高は、北の第18～22間付近が約118.2m、第4～10間が約118.1～118.15m。北方では第8次調査区北壁で117.8m前後。ベースが花崗岩風化土であるところが高く、これを境として、水は北と南とに流したと推測できる。第9間付近は118.0mと低い。これは地盤沈下を示す。

SD552は  
9世紀から

SD552については、東面回廊東雨落溝とする見方もあったが、西雨落溝SD061とは異って素掘りで、位置も基壇から離れること、時期も9世紀の土器を含む淡青灰色粘質土上面より掘り込まれていることなどから雨落溝として計画されたとはいいがたい。東面回廊の第16～18間位置で、東に長く調査区を設定した第4次調査区の知見によると、造営時には地山上に明青灰色粘質土の整地を部分的に施して、全体がゆるやかに東に傾斜（12mで約40cm下り）するように造成（第IV章1B参照）。上述の淡青灰色粘質土はこの上にある厚さ5～30cmの整地土もしくは堆積土であり、上面もほぼ水平となる（標高118.4m前後）。こうした事態を受け、東面回廊東辺の排水を図るために、SD552があらたに開削されたのであろう。

暗渠詰まる

東面回廊の北から2間目（第22間）にある暗渠SX670からの水は、東につづく東西溝SD671を通過して後述する南北溝SD693に流れる。SD671は幅0.6～0.9m、深さ約0.3mの素掘り溝。SD552はSD671より新しく、底も10cmほど高い。暗渠SX670東出口の底石上面のレベル（標高118.14m）よりも3～4cm高いが、SD552への排水は可能である（Pl.20参照）。SD552の開削によって暗渠SX670からの排水はSD671からSD552に変わったと考える。ただし、SD552の西肩は、暗渠SX670位置を木材で護岸する。やがて暗渠が詰まり、回廊内東辺の雨水は主に東面回廊西雨落溝SD061で南に排水されたと推測する。

SD552からは、若干の瓦や9世紀～10世紀後半の土器が出土。また、南半の第5次調査区では肩近くで寛平大宝（初鑄890年）も出土した。

SD565は、SD552埋没後に、東面回廊東際に掘られた素掘りの南北溝。幅は0.8～1.3m、深さは0.2～0.4mで、堆積土は灰色ないし青灰色粗砂。底の標高は東面回廊の第12～22間が118.4～118.5m、第4間付近が118.2m前後と南流する。以南は部分的に残るが、南端は流れが拡がったためか遺構は検出できなかった。北方の第8次調査区北壁では、SD565の遺構を確認していないが、後述するSD672と合流していることから、水は北にも流れたと推測できる。

SD565とSD552の間には、厚さ20～30cmの暗褐色有機質土が堆積する。この堆積土は、一部では東面回廊東側石の肩近くまであり、東は後述する東面築地SA535付近まであって、樹木の生

えていたことが明らかである(第IV章1B参照)。SD552を含めて、東面回廊東辺が徐々に埋まったことを示す。SD565はこうした事態に対して開削されたと推測できる。開削時期は、ベースの暗褐色有機質土出土土器から、11世紀初頭頃になる。SD565の上には東面回廊の倒壊の一因となった暗灰色粘質土や暗灰色砂土(粘土・砂互層堆積A相当)があり、11世紀前半が廃絶時期になる。

SD561は、東面回廊倒壊後に掘られた、やや蛇行する南北溝である。東面回廊の第4間以南では、東肩はほぼSD552上にあり、軒瓦や丸・平瓦や一部東面回廊用と推測される部材で護岸する。西肩は東面回廊東側石と東礎石間にあり、落下瓦がのぞく(Ph.19)。最大幅は1.4~1.5

m、深さは0.1~0.3mで、堆積土は灰色ないし青灰色粗砂。底の標高は118.7m前後。回廊東南隅を横切って、南西に曲がるようである。年代観から、南門SB001東の斜行溝SD629につながるとみて誤りが無い。第19間以北では、ほぼSD565上にあり、西肩は東面回廊の東側石、東肩は東面回廊用と推測する部材(垂木・大斗など)や瓦で護岸する(Ph.30参照)。最大幅は約0.8m、深さは10~15cmで、堆積土は灰色粗砂。底の標高は118.5m前後。北方の第8次調査区北壁では標高が118.4mであり、水は北にも流れたと推測する。中間の様相は明確ではないが、東面回廊の東側石上かやや西寄り西肩とする幅1m前後、深さ20~30cmの淡黄灰色粗砂層があり、これがSD561と推測できる。底の標高は118.7~118.8m。

東面回廊倒壊後にSD561を設けた理由は判然としないが、この時期には塔・金堂そして中門等は残っており、東からの流水や土砂の流入を防いだものと考ええる。

### iii 南面回廊 S C 050 (Pl.3・9・13、Ph.32~36、付図1・2)

南面回廊SC050は、第1次と第10次調査によって、全体の2/3近くを発掘した。中門付近から西は完全に削平されていたが、東端から第6間までは比較的良好に残っていた。土間床である。礎石、足場穴の他に、東から第2間に暗渠SX700などがある。

**基壇築成** 南面回廊のベースは、東から第2間までが古墳時代の浅い旧流路と推測されるSD730

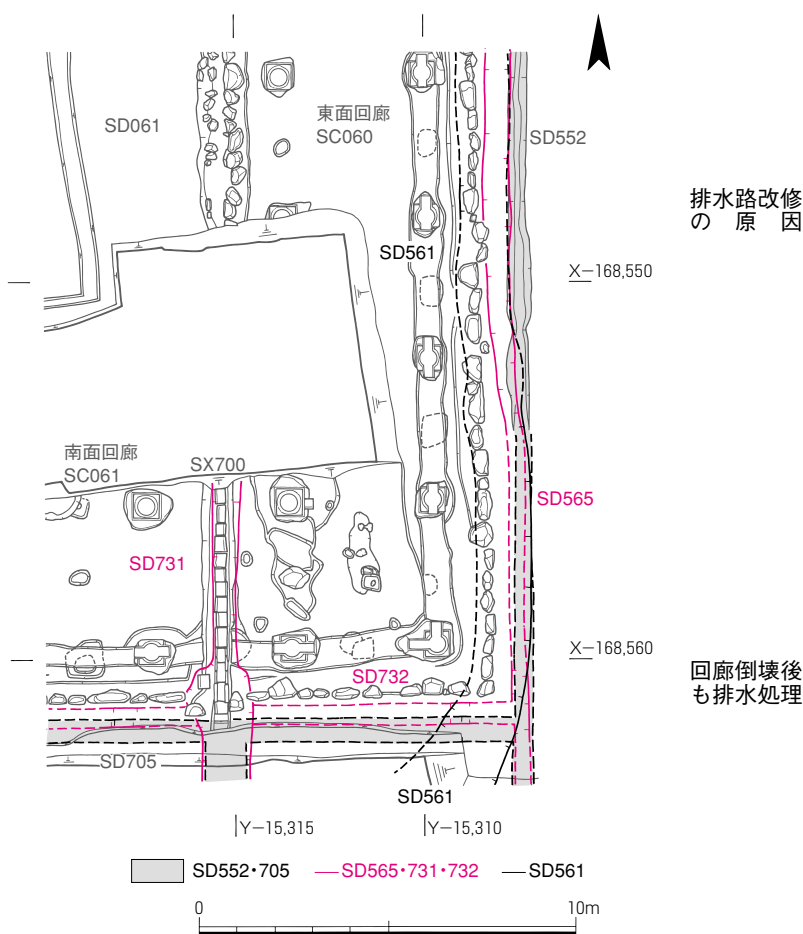


Fig. 35 溝SD552・561・705等関連図 1:200

である以外、花崗岩風化土の地山である。基壇は、これらの地山と堆積土を削り出し、上に版築工法で20~30cmの積土を施す (Fig.36・37)。積土は、青灰色砂質土や赤褐色粘土などをそれぞれ厚さ3~10cmで積む。基壇の東から第2間のベース (SD730堆積土面) や第4~6間のベース (地山面) は標高118.55~118.60m。後述するように、基壇高は南で約40cm、裾の推定標高約118.35mであり、基壇ベースの削り出しは25~30cmになる。礎石の据付けは多くが地山ないしSD730の堆積土面であるが、第3・4柱筋の南礎石は、積土後に据付ける。この積土は礎石の地の面まで残るが、礎石自体が沈下、傾斜しており、積土はさらに2~8cmを施して基壇面を完成したと推測される。

**基壇外装** 基壇外装 (南側) は、東面回廊と同様で、基壇築成後に据付け掘形を掘り、花崗岩の自然石を1石立て並べる (Pl.21、Ph.35参照)。SD705などによってかなり浸蝕されたようで、側石の根元がのぞくものも多く、回廊倒壊以前に倒れたり、ずり落ちていたところもあったが、原位置に近いものもある。とくに第1柱筋近くの3石は、上面の標高が約118.74m。この数値は、東面回廊南端部の東側石の復元上面標高118.75mとほぼ一致し、原位置と考えていい。後述するように、礎石は東南に傾くとともに7~8cm沈下しており、復元すると礎石上面 (円柱座) の標高は約118.90m、方座下端の標高約118.78m。東面回廊と同様に、南側石上面は礎石上面から下約15cmで計画され、基壇土は東側石上面にむかって若干の勾配をもっていたと推測できる。第6柱筋の礎石と南側石も同様であり、ここではともにほぼ原位置を保つ。これらの側石は高さが45~55cmあり、基壇高を約35cmとすると根方はかなり深くなる。基壇高は45cmとみることも不可能ではないが、東面回廊の南端部と揃え、約40cmに復元しておく。

基壇上面の  
復元

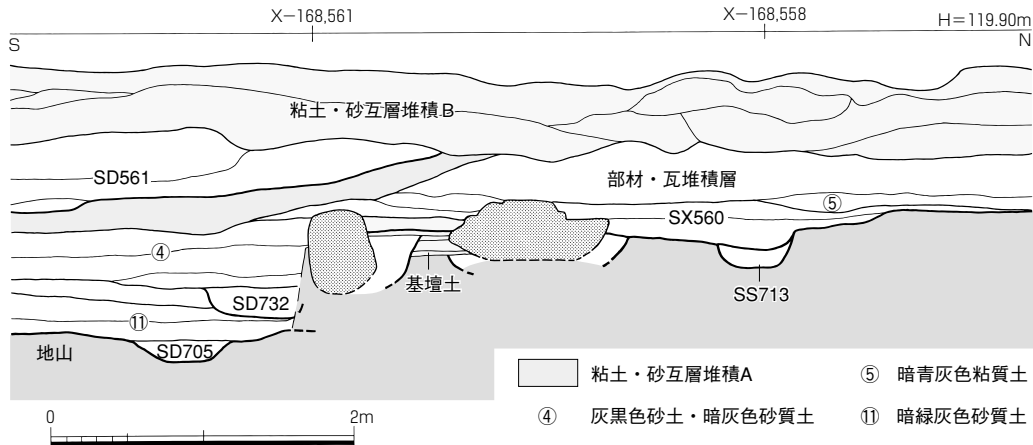


Fig.36 南面回廊 (第2柱筋) 土層・断面図 1:50

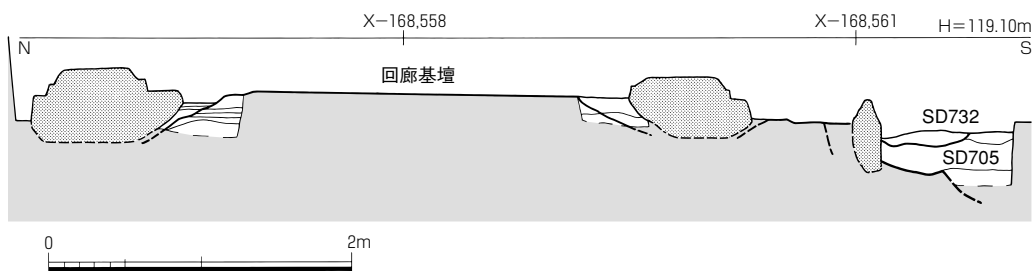


Fig.37 南面回廊 (第3柱筋) 断面図 1:50



Tab.10 礎石標高一覧2 (南面回廊)

	第1柱	第2柱	第3柱	第4柱	第5柱	第6柱	第7柱
北柱筋 <sup>*1</sup>	118.84	118.87	118.88				
	118.82	118.87	118.88				
	118.82	118.86	118.87				
傾き <sup>*2</sup> (比高差)	(2)						
南柱筋 <sup>*1</sup>	118.84	118.86	118.83	118.90	118.91	118.90	118.90
	118.81	118.86	118.82	118.89	118.90	118.90	118.90
	118.80	118.85	118.81	118.89	118.89	118.90	118.90
傾き <sup>*2</sup> (比高差)	(4)		(2)				
復元値	118.90	118.90	118.90	118.90	118.90	118.90	118.90

※1 上段は最高値、中段は心の値、下段は最低値 (m)

※2 2cm以上の場合

原位置を保つ南側石の南面から、南柱筋心までは約1.3mであり、基壇幅は東面回廊の創建時と同様に約6.4mに復元できる。なお、暗渠SX700の出口付近では、後述するように南側石を意図的に倒して水の流れをよくしている。

**礎石** 南柱筋では7個とも原位置にあり、北柱筋では入隅とこの西の1個が原位置にあったが、以西では近世の流路SD702によって破壊され、据付け掘形SX723・725を検出したにとどまる。既述したように、礎石のほとんどは削り出し面で据え、のち2～3層積土を施して基壇を完成する。いずれも根石はない。

礎石は、花崗閃緑岩で、東面回廊と同巧。南柱筋の礎石のみ、地覆座を造り出す点も同じ (Pl.3・18、Ph.41)。南柱筋の礎石上面の標高は、東から第5～7柱筋がほぼ118.90mだが、以東の3石は118.81～118.85mと低い (Tab.10)。北・南柱筋の礎石心での高低差は2～6cm。ベースが旧流路SD730であることなどから、地盤沈下したり、北の西雨落溝や南のSD705などによって基壇裾が洗われてそれぞれ北や南に傾いたためである。既述した東面回廊南端部の復元から、第5柱筋以东もほぼ同じ高さになる。第7柱筋以西については、中門の項でゆるやかに西へ傾斜していたと推測した。

礎石の標高

**地覆石** 南面回廊が倒壊しても、南柱筋はほぼ原位置に地覆材が残っていた。ただし、地覆石はすべて抜取られ、そのあとには東面回廊と同様に、粘質土や砂質土に瓦や礫を詰めて土台としていた (SX710)。礎石の東・西端は地の面を一段削り下げており、ここに榛原石の地覆石をおいていたことは確かである (Pl.18、Ph.35・40)。SX710出土土器から、10世紀中頃～後半の改修になる。基壇南縁にはSX710を一部覆うようにして瓦混りの土があった (Fig.39右)。SX710と同じ時期に、基壇南縁の上部を積直したのであろう。また、地覆材の下に砂層のあるところがある (Fig.38)。倒壊直前に流水が基壇土に及んだことを示そう。

抜取り痕跡

**足場穴** 桁行柱間および棟通り位置に掘立柱穴列SS713・720とSS721がある。柱穴は一辺0.5～1.0mのほぼ方形で、柱抜取り痕跡か柱痕跡 (約20cm) がある。深さは基壇上面から0.5～0.7mである。いずれも地覆石抜取り痕跡SX710より古く、創建時の足場穴である可能性が高い (Fig.38・39左)。

**建物の平面** 南面回廊の柱間は、東端から第7柱筋までは3.78m等間 (唐尺12.5尺) で、ほぼ礎石心になる。以西については、中門の項で触れたように、10間目まで等間であり、中央に中門SB003

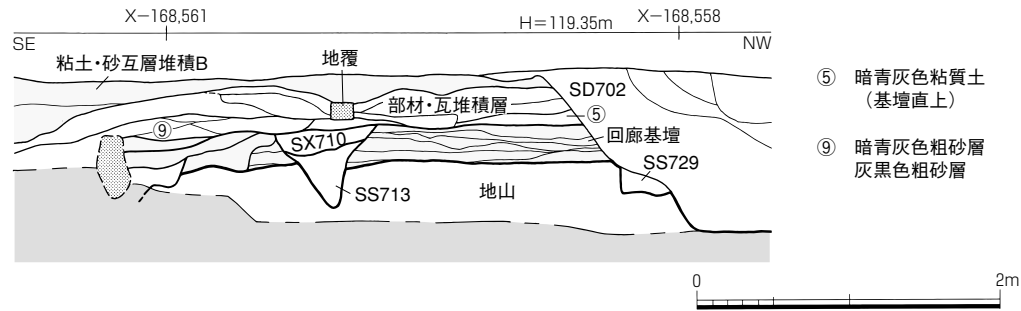


Fig.38 南面回廊（第5間）土層・断面図 1:50

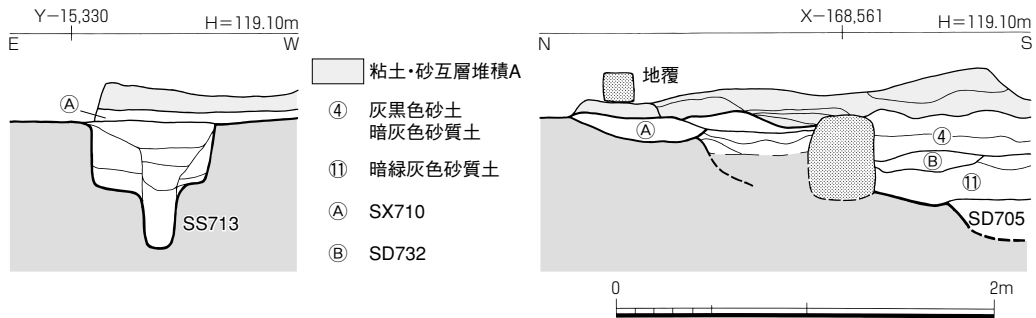


Fig.39 南面回廊（第3間）土層・断面〈右〉と足場穴SS713〈左〉 1:40

（桁行は唐尺で30尺）が開く。中門の西も10間で、3.78m等間に復元できる。

方位は、後述するように西で南に1°15'45"振れる。

**小礎石SX708・715・717** (Pl. 3, Ph.35) 南面回廊の東端（回廊東南隅）の間には、基壇上面から掘形を掘って据えた小礎石が中心（SX708）と、第2柱筋の南・北礎石間のはほぼ中央（SX717）にある。SX708は東西約25cm、南北10~20cmの花崗岩の自然石、SX717は東西約73cm、南北65cm、厚さ約40cmの花崗岩で、地覆石を天地逆にして転用。他に、入隅の礎石のすぐ東で、方座に接して南北約32cm、東西約26cm、厚さ約10cmの榛原石の切石（地覆石の転用か）SX715がある。回廊東北隅と同様に、これらの上に束を立て、東南隅の1間分を床張りとした可能性が高い。この場合、SX715の東にも小礎石が必要となろうが、残っていなかった。また、倒壊した南側柱の加工痕からすると、第5柱筋は南北に仕切っていた可能性が高い。とすると、内側（北側）柱筋の第4間以東も仕切っていたとみるべきであろう。

これらの時期については、SX717が手掛りの一つとなる。SX717は、もとは地覆石で、中央に幅約35cm、長さ約65cmの地覆座を造り出す (Fig.40)。同様のものは扉口SX065・666の地覆石（3石の内中央）にある。すぐ近くの回廊東南隅の南面に扉口（SX735）があり、その中央の地覆石を転用した可能性が高い。回廊東南隅の南面に残る地覆材の下に花崗岩の小石（SX712）があり、SX708と位置がほぼ揃うことからすると、地覆材の据え直しと床張りとは一体として進められたのかもしれない。とすると、SX717は回廊創建後で、全体的に地覆石を抜取って補修した時期、10世紀後半頃に比定できる。これらは、通るのに障害となる棟通りに小礎石があること、上を回廊の倒壊部材が覆うことから、回廊の倒壊直前頃までは存在したと考えられる。扉口SX735の南には階段はなかった。後述するように、11世紀初頭頃には、南面回廊のすぐ南にSD732が設けられており、階段があっても破壊されたであろう。

東面回廊  
南端に扉口

なお、奈良時代の興福寺の様子を伝える『興福寺流記』（平安時代末頃に成立）は、回廊について「宝字記」を引き「小門八口」、「延暦記」を引いて「四方各小門二門」と記す。山田寺でも南面回廊には、中門の東と西に小門（扉口）各1門があったことの傍証になる。

**暗渠SX700** (Pl.21, Ph.36) 南面回廊の第2間にある暗渠SX700は、基壇築成後に幅1.0~1.1m、深さ0.6~0.7mの掘形を掘り、底に長さ50~57cm、幅18cm、厚さ10~12cmの埴（方埴を半截）を敷き並べ、この外に長さ30~55cm、高さ25~30cm、厚さ6~8cmの榛原石の切石を、上端面が揃うように側石としておき、長さ30~58cm、幅約30cm、厚さ7~12cmの榛原石の切石を蓋石とする。石と石の継ぎ目は粘土で目張りする。

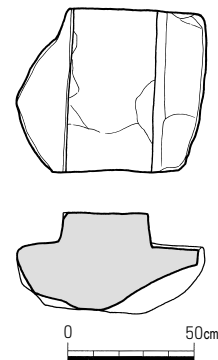


Fig.40 SX717  
1:30

暗渠の内寸法は、幅が約18cm、高さが約20cmである。底埴の標高は、検出した北端で約118.17m、これより南約5.5mの基壇南側石近くで118.10mと南に傾斜する。南端では底埴の下に一部がかかるとして、幅広の榛原石の切石（長さ45cm以上、幅約36cm、厚さ約7cm）を敷き、南側石から35cmほど南に出す。この南は幅約0.5mの素掘りの南北溝SD733Aにつながる（底の標高は約117.9m）。

なお、暗渠SX700の蓋石は、回廊倒壊前に北端と、南端から約1.2mの地覆材あたりまでが取り除かれる。これにあわせて、出口の基壇土は削って掘られ、側石も南に倒される。暗渠が詰まったための措置と考えられる。その時期は明確ではないが、後述する地覆石拔取り痕跡よりも新しく、10世紀後半以後になる可能性が強い。再び暗渠が詰まったようで、SX700の上には素掘りの南北溝SD731が南流する。SD731は、幅0.6~0.8m、深さ0.3~0.4mで、底は暗渠SX700の蓋石に達する（標高118.2m前後）。調査区南壁の土層によると、底は標高118.1mで、平瓦を敷いていたことがわかる。

暗渠の改修

**南面回廊南側の遺構** 南面回廊のすぐ南には2条の東西溝SD705・732 (Fig.35~39) がある。

南の排水路は2条重複

SD705は、南面回廊南側石から南に約0.5m隔てた所に設けられた素掘り溝。幅は約0.7m、深さ約15cmで、肩は南面回廊南側石上端から約0.8mだが、検出面は基壇側石の裾より30cm下。これとつながる可能性が強い東面回廊東のSD552と同様、もともと広く、かつ深かったが、流れが拡がって肩も不明確になったのであろう。上を暗緑灰色砂質土（東面回廊東の暗褐色有機土対応）が覆う。埋土に10世紀後半頃の土器を含む。

SD732は、南面回廊南側石際にある素掘り溝で、暗緑灰色砂質土上面から掘込む。幅約0.6m、深さ約0.2m。肩は南面回廊南側石上端から0.4~0.5mで、上を10世紀中頃~11世紀初頭頃の灰黒色粘砂土・暗灰色砂質土が覆う。

SD705とSD732の底の標高は、それぞれ回廊東南隅近く（第5次調査区東壁）で118.0mと117.80m、暗渠SX700の西約3mで118.3mと118.2mであり、ともに東流する。これらの年代観や底のレベルおよび回廊との距離から判断して、SD705とSD732は東面回廊沿いのSD522とSD565につながっていたと推測できる。

東の排水路との関係

既述した暗渠SX700やこの上のSD731との関係は、調査の制約もあって判然としないが、SD705以前は暗渠SX700から南のSD733Aに排水、SD705開削後はSD733AとSD552に排水、SD732はSD733BとSD565に排水、SD732埋没後はSD731から南にだけ排水されたと考えられる。

iv 北面回廊SC080 (Pl.6・12・14、Ph.37・39、付図1・2)

北面回廊SC080は、第2次と第3次調査によって、里道部分をのぞくほぼ全面を発掘した。東辺の約1/3はほぼ完存するが、西にいく程削平され、第3次調査西区（東から第17～21間）では礎石の落とし込み穴7個を検出したにとどまる。土間床であり、礎石、足場穴の他に南雨落溝SD081などがある。東端の間の北面（東面回廊北端）には既述したように扉口SX666がある。北面回廊の中央には扉口SX030が推定できる。

**基壇築成** (Fig.41) 北面回廊のベースは、西半部が古墳時代の谷か旧流路SD568・569である以外、ほとんどが花崗岩風化土の地山である。

伽藍中軸（第12柱筋）付近から東では、基壇築成にあたって地山を削り出し、この上に版築で積土する。

**東半の状況** 東から第3間 (Fig.41-2) でみると、基壇上面の標高は約118.95m、花崗岩の岩盤に近い硬質の地山面の標高は約118.60m。この間の約35cm分について基壇土とみる見解もあったが、下半の約20cm分は、北半がやや軟質の地山と類似した茶褐色土が1層であるのに対して、南半は南に傾斜して3層となり、基壇積土としては不自然である。南半は東面回廊の北から3間目（第21間、Fig.28-1参照）付近西に延びる旧流路SD419の埋め立て土（整地土）で、北面回廊の南雨落溝SD081の南約6mまで続き、北半は地山（上面の標高約118.7～118.8m）である可能性が強い。

第4柱筋 (Fig.41-3) の両礎石の据付け掘形面は、標高約118.7～118.8mで、ほぼ地山面とわかる。この面から上、厚さ約15cmの茶褐色土混り灰褐色土や灰黄色砂質土の2層ほどが礎石据付け後の積土であり、礎石の方座下端（標高約118.95m）に揃う。後述するように、南の礎石、側石とも原位置を保つ。基壇南の整地土（SD419埋め立て土）面の標高は約118.55mであり、南側（内側）からみると、基壇基底部の削り出しは15～25cm。回廊外側（北側）は創建時の整地土がない。残存する地山面で最も高い所（北側石のすぐ北）は標高約118.45m。1mほど北では、この上に11世紀前半頃の灰褐色粘質土があり、回廊北側はもともと南側より5～10cmは低く造成されていたと考えられる。

第8柱筋の礎石位置 (Fig.41-4) では、基壇積土は5cmが残る程度。地山面の標高は約118.7m。基壇南では創建時の整地土が深いところで厚さ40cmほどある。整地土上面の標高は基壇寄り約118.50m、南寄り約118.60m。ベースは地山で標高約118.20m。西に8mのところ（36ライン）では、基壇の南は削平され、床土直下が地山となるが、標高は約118.50mと高い。したがって、上述した整地土は、第3間付近から続く旧流路SD419の埋立て土と推測される。基壇基底部（地山）の削出しは、南からは約20cm。基壇北は地山で標高約118.30m。中世以降の水路SD431の削平を受けてはいるが、北側石の根方はかろうじてすわっており、削平の影響はそれほど深くない。ちなみに、北側石上端の標高は約118.85mで、東から3間目と基壇土は15cmほど削平されたと推測できる。

**西半の状況** 伽藍中軸より西方の、第16柱筋の礎石付近 (Fig.41-5) では、古墳時代の旧流路SD568・569上を整地する（整地土上面の標高は約118.05m）。次いで、回廊予定位置に南北幅約6m、残存部で厚さ約30cmの盛土（主に淡青灰色土、上面の標高約118.35m）を施したのち、回廊内側に

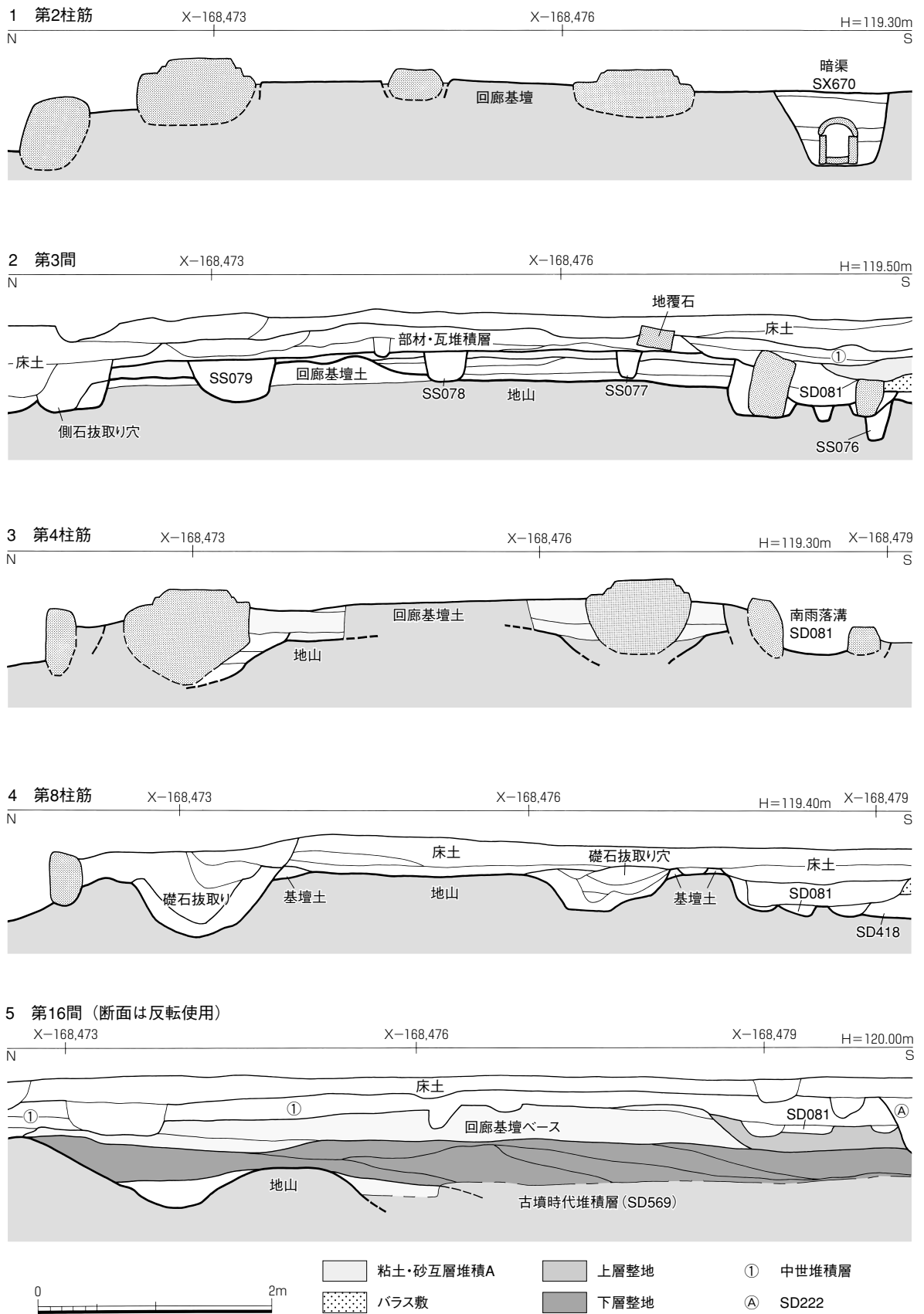


Fig.41 北面回廊断面図 1:50

厚さ20cm程度の整地をおこなう（上面の標高約118.20m）。整地は、回廊の南側石や雨落溝SD081の西側石を据付けているので、回廊建設途中の整地といえる（後述する金堂付近の最終整地である上層整地にはほぼ対応）。盛土は、さらに幾分か高くなって、礎石の据付け掘形面になっていた可能性もあるが、基壇土が削平されているため確定できない。基壇の北は、中世の遺物包含層直下が花崗岩の岩盤となる。標高は118.2m前後である。以東と比較して、それほど深くは削平されていない。

**基壇外装** 基壇外装は東・南面回廊と同様で、基壇築成後に据付け掘形を掘り、花崗岩と一部は安山岩の自然石を1石立て並べる。南側石は、第8～17間まではすべて抜き取られていたが、第3～7間目は遺存状態がいい（Pl.6・12、Ph.38・39、Fig.42）。

基壇上面の復元

第4柱筋では南礎石、南側石ともほぼ原位置にあり、標高は礎石上面が約119.07m、礎石の方座下端が約118.95m、側石上面が118.92m。東面回廊と同様、側石上面は礎石上面から約15cmに計画し、礎石の地の面（復元基壇上面）から若干傾斜させていたとみていい。ほかの第5～7柱筋でも、礎石や側石が傾いたり、沈下しているために若干の差異はあるが、高さ関係は近似する。後述する南雨落溝SD081の南側石上面と基壇南側石との比高差、すなわち南での基壇高は約20cmであり、礎石と同様わずかに西に低くなっていたと推測される。瓦敷面まではさらに5cmほど下る。

北側石は、すぐ北に沿って掘られた14世紀頃の土器を含む中世以降の水路SD431（農耕用か）のため、破壊されたり、ずったりしたものが多い。第3～7間（Pl.6・12、Ph.38・39）には、とびとびに原位置に近い石がある。これらの上面の標高は118.85m前後。南側石上面の復元標高

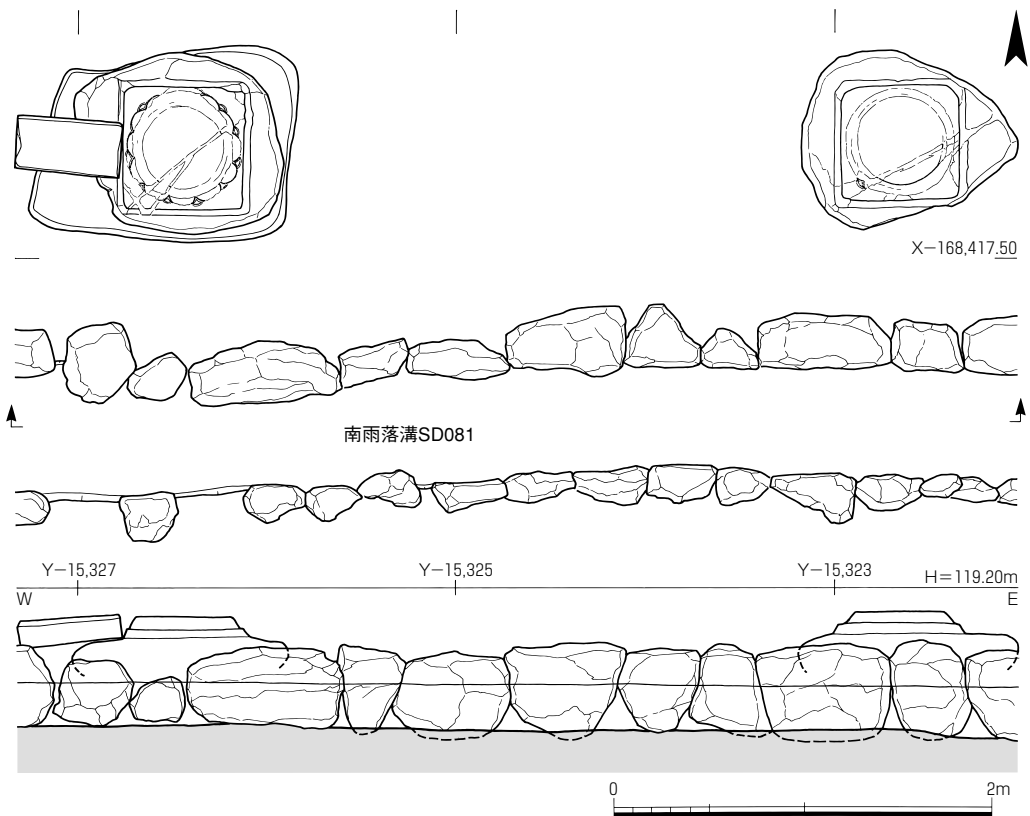


Fig.42 北面回廊（第4間）南側石と雨落溝SD081 1:40

Tab.11 礎石標高一覧3 (北面回廊)

	第1柱	第2柱	第3柱	第4柱	第5柱	第6柱	第7柱
北柱筋 <sup>*1</sup>	119.03 119.00 119.00	119.07 119.07 119.05		119.00 118.99 118.98	118.96 118.96 118.95	118.98 118.98 118.97	119.02 119.01 119.00
傾き <sup>*2</sup> (比高差)	(5)	(2)					(2)
南柱筋 <sup>*1</sup>	119.00 119.00 119.00	118.98 118.97 118.96		119.09 119.07 119.07	119.06 119.06 119.05	119.01 119.01 119.00	119.01 119.01 119.00
傾き <sup>*2</sup> (比高差)				(2)			
復元値	119.07	119.07		119.07	119.06	119.05	119.05

※1 上段は最高値、中段は心の値、下段は最低値 (m)

※2 2cm以上の場合

は約118.90m前後であり、原位置とは考え難い。礎石は北に傾いたり、沈下したりしており、側石も同様と考える。基壇の削り出しは南側(内側)より一段低くしていること、さらに東面回廊北端部は北に低くしていることなどから、北側の基壇高は約40cmと推測する。

礎石心から南側石の南面まで、すなわち基壇の出は約1.3m。北側も、原位置に残る側石からみてほぼ同様であり、基壇幅は約6.4mに復元できる。

**礎石** 礎石の多くは抜取られている。ほぼ原位置にあるのは、南・北柱筋とも東から第4～7柱筋である。第15間の4個は、近くに大きな穴を掘って落とし込んでいた。東・南面回廊と同巧の花崗岩製で、上面に方座、蓮華座、円柱座を造り出す。北柱筋のものは別に地覆座も造り出す(Ph.41)。既述したように、ほぼ地山や旧流路の埋立て土面で礎石を据付けたのち、厚さ15～20cmの積土をして基壇面を完成する。根石は使用しない。

第4～7柱筋の礎石の標高を復元しておく(Tab.11)。第4柱筋の南礎石は検出時の標高が約119.07mである。第2柱筋の北礎石(東面回廊第24柱筋)も同様である。したがって、第1～4柱筋は水平になる。第6・7柱筋の南・北礎石は検出時で約119.01mであった。だが、この傾斜(約0°18′)でいくと、第7柱筋西方の南側石は、以東に比してやや高くなってしまふ。おそらく、第5柱筋の南礎石の約119.06mが原位置で、第6・7柱筋は119.05m、119.04mに復元できよう。東端の第1柱筋(東面回廊東柱筋)は第2柱筋に比して東に10cm傾き、第2柱筋や第4・5柱筋はそれぞれ南と北に8～10cm傾くか若干沈下しており、建物にかなりの影響があったと推測される。

礎石の標高

第8柱筋以西は、礎石が抜き取られていて詳細は不明だが、据付け底面のレベルを手掛りとすると、第7・8柱筋で標高約118.35m、第12柱筋(伽藍中軸)や第15柱筋で118.30m前後であり、総長約35mの間で約15cmほど西に向かってわずかに低くなっていることがわかる。

なお、第18～21柱筋で検出した礎石の落とし込み穴7個は、位置は近いが、第18柱筋で北の穴底(深さ約15cm)は標高約117.50mとかなり下り、原位置を保っていないことがわかる。

**地覆石** 北柱筋の礎石には地覆座があり、しかも両端は地の面をさらに一段削っていることから、礎石間に地覆石を置いていたことは確かであるが、地覆石自体は残っていない。東・南面回廊から類推すると、地覆石を抜取り、そのあとに瓦や塼を混じえた土を入れて地覆材の土台としたが、その痕跡も基壇土の浸蝕や削平のため残らなかったと推測される。

一方、南柱筋の第3・5間や第2柱筋の礎石の西には、地覆石と考えられる長さ約50cm、幅

改修の痕跡

約25cm、厚さ約15cmの榛原石の切石SX421・442・675が残る（Pl.6、Ph.38・39、Fig.42）。部分的であることや、SX442が基壇上面から少し浮き上がっていることからみて、回廊廃絶時のあとかたづけが、地覆石の一部にも及んだと考えられる。第5間ではその据付けSX441も溝状に残る（Pl.6、Ph.39）。礎石自体には北柱筋のように地覆石を置いた削り込みがなく、本来は地覆石を用いなかったとみていい。東面回廊の東北隅を床張りとした10世紀後半頃に、北面回廊の内側（南側）も壁などで仕切ったのであろう。

**足場穴** 南柱筋や北柱筋の礎石の間および棟通り位置で、ほぼ筋が揃う掘立柱穴SS077～079がある。東・南面回廊と同様に、創建時の足場穴とみていい。基壇北の足場穴は明らかでないが、基壇南の足場穴SS076は、南雨落溝南側石下にある（Fig.19参照）。基壇上の足場穴SS079の一部は、掘形から7世紀後半の土器が出土しているようで、北面回廊もある時期、足場を組むほどの修理がなされた可能性を示す。

**建物の平面** ほぼ原位置を保つ第4～7柱筋の礎石は、東面回廊から割り付けて3.78m等間である。以西は、礎石の据付け掘形や抜き取り痕跡の位置から判断して、東から第10柱筋（第9間）まで3.78m等間となる。第12柱筋は伽藍中軸とほぼ一致し、左右各1間（第11・12間）が広いことは確実である。後で詳述するように、約4.5m（唐尺15尺）等間の復元が可能である。伽藍中軸を挟んで左右各2間（10～13間目）を広くし、約4.2m（唐尺14尺）等間に復元する案も考えられなくはないが、以西の礎石の据付け掘形や抜き取り痕跡からはずれず。伽藍中軸を挟んだ2間が広く、この東と西は3.78m等間、各10間とするのが妥当である。中央2間が広いのは扉口（SX030）であろう。先に引用した『興福寺流記』に回廊の「四方各小門二門」とあるのは、その傍証になろう。

中央に扉口

北面回廊の中央に扉口SX030があるとすると、北柱筋に軸摺り穴をもつ大きな地覆石が必要となる。基壇が削平されているため明確ではないが、第12間にある溝状の遺構をその痕跡と考えることができよう。階段は後世のSD431の影響か検出できなかった。

**南雨落溝SD081** 北面回廊の南側石が雨落溝の北側石を兼ねる。雨落溝の南側石は、北側石よりやや小振りの花崗岩と一部に安山岩や砂岩の自然石を1石立て並べる。第8間以西はすべて抜き取られているが、以東は比較的良好に残る（Ph.38・39、Fig.42）。原位置を保つ所で見ると、南側石上面の標高は第5～7柱筋で約118.70mである。北側石（基壇南側石）上面との比高差、すなわち南側の基壇高は約20cmである。第4柱筋付近の雨落溝の南側石上面は約118.65m。東面回廊（暗渠）にむかって下っていたようである。内幅は約0.6mで、底石はない。溝底の標高は、第5間付近が約118.50mと最も高く、西は第7間付近が約118.45m、第15間付近が約118.16mである。東は第3間付近が約118.45m、SD081から東につづく東面回廊の暗渠SX670東底の標高が118.25m。水は、東から第5間を境として西と東に流したとわかる。

#### v 西面回廊SC070（Pl.13・14、Ph.1・6、付図1・2）

西面回廊は、明治時代には礎石も残っていたようだが、その後削平され、調査では礎石の落とし込み穴4個を検出したにとどまる。これらの穴は、位置的にはほぼ東柱筋の南から第8・9柱筋、西柱筋の南から第7・8柱筋にあたる。検出面の標高は117.2～117.5m前後、底の標高は116.9～117.2m前後。調査時には、これらの穴を礎石抜き取り穴とも考えた。仮に高いところ（標



高約117.5m)で側石の高さ分、50cmほどが削平されたとすると、第7～9柱筋における西面回廊の基壇上面は118.0m前後で、同じ位置の、東面回廊の検出時の基壇上面(標高約118.60m)より60cmも低くなる。ただし、大垣で見ると西がかなり低く、西門SB685B付近の造営時の復元標高は約117.3m(第IV章2J参照)であり、西面回廊も東面回廊に比して30～40cmは低かったと考えていいであろう。

回廊は  
西下がりか

第7・8柱筋における東面回廊の東柱筋と、西面回廊で検出した西柱筋の礎石落とし込み穴との心々距離は、84.5～84.6mである。第VII章で詳述するように、回廊東西総長(外々)は、唐尺1尺=30.24cmで280尺、84.67mに復元が可能であり、西面回廊の上記の穴は原位置に近いといえる。

#### vi 回廊の改修

回廊は、後述するように造営尺や所用瓦の検討から、金堂と同じ頃、7世紀中頃の創建である。創建以後は、前項の各所で触れたように、基壇土、基壇側石、地覆石、暗渠等が改修され、東北・東南隅では床張りに改められたことなどが推測できる。一方、出土部材にも改修の痕跡がある。

これらのうちで、改修が明瞭であり、時期も特定できるのは、地覆石の抜き取り改修である。東面回廊の東柱筋では、ほとんどの地覆石を抜き取った跡に、瓦や礫を混えた土を入れて土台(SX560)とし、この上に地覆材を置いていた。南面回廊も同様(SX710)。北面回廊も同様と推測される。出土土器からみると、東面回廊では10世紀(南半)、10世紀後半～11世紀初頭(北半)、南面回廊では10世紀中頃～後半だが、各部分が時期を違えて施工されたとは考えがたい。おそらく10世紀後半のある時点で、一度に施工されたのであろう。

地覆石の  
抜き取り改修

地覆石抜き取り改修と同時に、東面回廊基壇東縁や南面回廊の基壇南縁は、基壇土の上半を積直す。おそらく全面に亘ろう。南・北面回廊の側石は、調査範囲が狭かったり、遺存部分が少なかったりするためか、据え直しと判断できる箇所はない。東面回廊の東側石は、南から第1・

基壇土と  
側石の改修

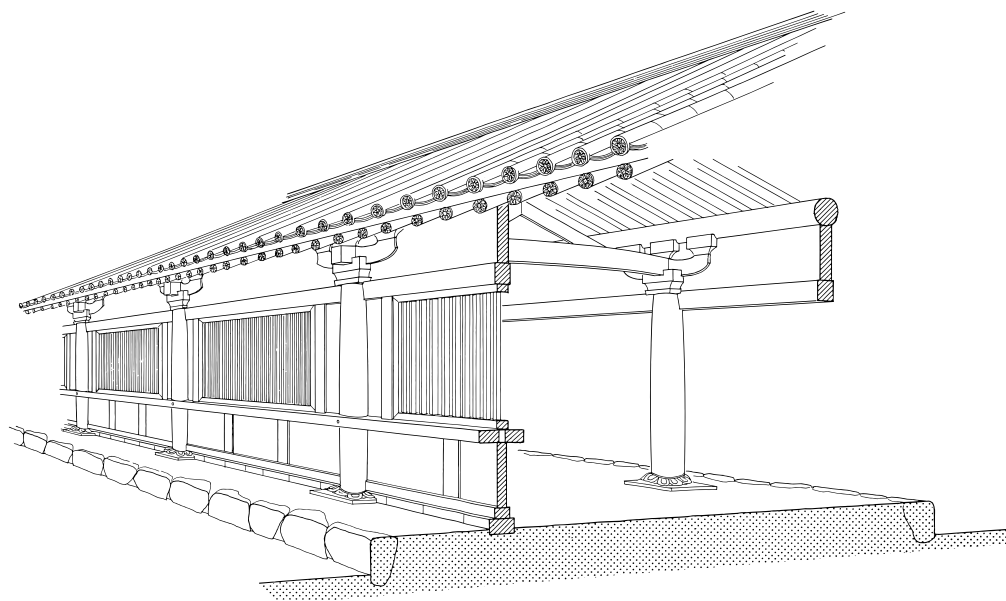


Fig.43 回廊復元図

3・7～9・12・13・17・23間で、他より高い位置に据えた薄手の石が部分的にあり、そのためか倒れかけたり、ずりかけたりしたものが目立つ。また、南・北端は南・北面回廊との関係で、基壇高をやや高く40cmと推定したが、隅の側石は高さが35cmほどで、ともにずっている。改修時のものであろう。

これらの側石は、回廊東辺が一部で側石の上端近くまで暗褐色有機土で埋まった時期、10世紀後半に据え直された可能性が高い。とすると、地覆石抜き取り改修と同時となる。東面回廊の基壇西縁も積直されており、東縁と同時期施行の可能性はあるが、全面に及ぶかは不明。西側石自体は、倒れたり、ずったりしている所があるが、明確に据直したといえる箇所はない。

東北・東南隅は床張り

回廊の東南・東北隅各1間分は、小礎石を据え、床張りとした可能性が高い(SX673・674、SX708・715・717)。東南隅の場合、SX717は南扉口SX735の地覆石を転用したと考えられることなどから、南柱筋の地覆石抜き取り改修と同時となる。北東隅では、別に、入隅から西の少なくとも4間分(北面回廊の東から第2～5間)は南柱筋を仕切り、南面回廊も柱の加工痕から第4柱筋を南北に仕切った可能性が高い。これらは東北・東南隅の床張りと同時期で、北面回廊の第1～5間、南面回廊の第1～4間は全体を連子窓・壁などで仕切った、閉鎖的空間として利用されたと考えるべきであろう。

閉鎖的空間

他に、東面回廊の南から第18間では、基壇中央部を9世紀頃に再版築、第9間の西柱筋の足場穴SS064掘形では、古くても7世紀後半の縄叩き目平瓦、北面回廊の北柱筋の足場穴SS079掘形の一つでは、7世紀後半の土器が出土している。特に後二者は、回廊建物の改修に関わる点で重要である。

出土部材による検討

回廊の建物部材については、すでに『部材集成』(奈文研史料第40冊)で詳述し、本報告でも第V章第9節でその要約と、追加資料の検討を行っている。改修についての要点は主に以下の①と②である。

①地覆材は腰壁束を立てる枘穴が2個(束が2本)あるのが大半だが、東面回廊では東柱筋第1・2間は枘穴が1個、第8間は枘穴2個を1個に改作。後一者では連子窓を土壁に改め、腰壁も改修した可能性が高い。南面回廊では、地覆材は当初材だが、腰壁は改修されたと推測できる。

②東面回廊の柱は次の一例をのぞくとヒノキだが、東柱筋第6柱筋はクス。組物(三斗)もこのみはケヤキであり、取替えたと推測している。

①と②がいつなのかは定かでない。東面回廊の南半では、落下瓦に天武朝頃の瓦が多いことから、回廊の修理をこの頃と推測する見方もある。だが、①については地覆石を抜取って土台を改めた時期、10世紀後半頃も有力候補となる。腰壁や連子窓などの加重を受ける地覆材をそのままにして、地覆石を抜取るのはかなり難しい。ただし、地盤沈下によって地覆石と地覆材との間が広がったため、地覆材及び連子窓や腰壁などの改作は部分的であったとみることもできる。それが可能であったとしても、南端の扉口SX735では大きな地覆石を抜取っていることから、ここは壁や連子窓に改めたと推測できる。

②は軸部材であり、回廊は一部分が未完成であったとする見方もある。だが、『部材集成』では、部分的に軸部の取替えも可能であり、8世紀も早い時期までの改修と推測した。足場穴の一部に創建時でないものがあるのは、こうした部分的な改修に伴うものかもしれない。

## D 金堂SB010 (Pl.11、Ph.42~46、付図1・2)

**遺存状況** 金堂SB010は7世紀中頃の創建である(第IV章1B参照)。基壇は土壇状に残るが、上面は20cmほどが削平され、礎石は2個のみが原位置に残存していた。他に基壇上では、12個の礎石据付け穴と抜取り穴、側柱筋で3個の地覆石の抜取り穴や据付け穴、及び原位置を動いた地覆石3個を検出した(Ph.42)。

須弥壇は痕跡すらなかったが、周辺からはその石材らしきものが出土している(第V章10A参照)。また、金堂の内壁面には壁画があり、塼仏も飾られたことなども判明している(第V章4・10B参照)。

基壇外装の地覆石は、抜取られてモナカの皮状に残存しているところが多いが、西北部では地覆石が完全な形で残り、ごく一部ではあるが羽目石の下部も残存する。基壇周囲の犬走りは比較的遺存状態がよい。このうち、南面の敷石には火を受けて赤く焼けた部分がある。犬走りやその外は瓦や焼土を多く含む暗褐色土(焼土層)に覆われており、焼失したことが明らかである。犬走り外の暗褐色土以下にはバラス敷、瓦敷が遺存していた(第IV章2A参照)。

金堂は焼亡

**基壇築成**(Fig.44~47、Tab.12、別図2) 金堂SB010の基壇は、造成時の整地土(以下、下層整地)を切り込んだ掘込み地業上に築成されている。主に基壇中央で行った断割り調査の知見をもとに、掘込み地業から基壇外装完成までの工程を復元すると、①掘込み地業、②基壇築成、③整地と足場穴及び周辺の排水、④階段の積土と外装、⑤整地と犬走りの順となる。

①掘込み地業の深さは中央部で約1.8m(標高は上面で約118.4m、底で約116.6m)。底はほぼ平坦で、古墳時代の流路SD568に達する。側壁は3段になるところがあり、版築は大きく3工程(地業A~C)に区分できそうである。それぞれ3~5cmで粘質土と砂質土を互層にして6~13層に積む。

地業の工程

最終の地業Cについては、西面階段中央と北方約6mの地点の、計2箇所断割り調査で、側壁が内傾することを確認している(Fig.44・46)。版築途中に側壁が崩れたと考えられなくもない。だが、西面階段の場合、地業の側壁と基壇版築の立上がりとは直線につながることから、両者は一連の作業として進められた可能性が高い。換言すると、少なくとも西辺では、地業Cは基壇状に築成し、その後周辺を整地したと考えられる。

工程としては、西に低い上層整地面(標高は北・東辺中央で118.3~118.4m、西辺中央で117.85m)を掘込み、まず地業A・Bを行う(地業B上面の標高は約117.9m)。次の地業Cの段階では、西辺は基壇上に立上げ、やがて外を標高118.35m付近まで整地(以下、中層整地)し、他と揃えたことになろう。南辺中央は足場穴SS017のために地業の掘込み面は不明(ベースの下層整地の標高は118.20m)だが、北・南辺の西寄りには西辺に似た状況と考えられる。この場合、地業Cと基壇の本格的な築成までの間に、金堂西方では厚さ0.4m前後の整地が行われたこと、換言すると、金堂の掘込み地業は造成が完了しない時点で開始されたことになる。

掘込み地業の範囲は、北・東辺中央では基壇端から3.5~3.8m外で、ほぼ階段の犬走り見切石付近まで。地業の側壁も3段。西辺は基壇端と揃い、側壁も直に近い。掘込み地業の東西規模は約25m。南辺の中央付近は明確でないが、足場穴SS017付近までと推測すると、掘込み地業の

南北規模は23mぐらいとなる。

基壇の  
築成工程

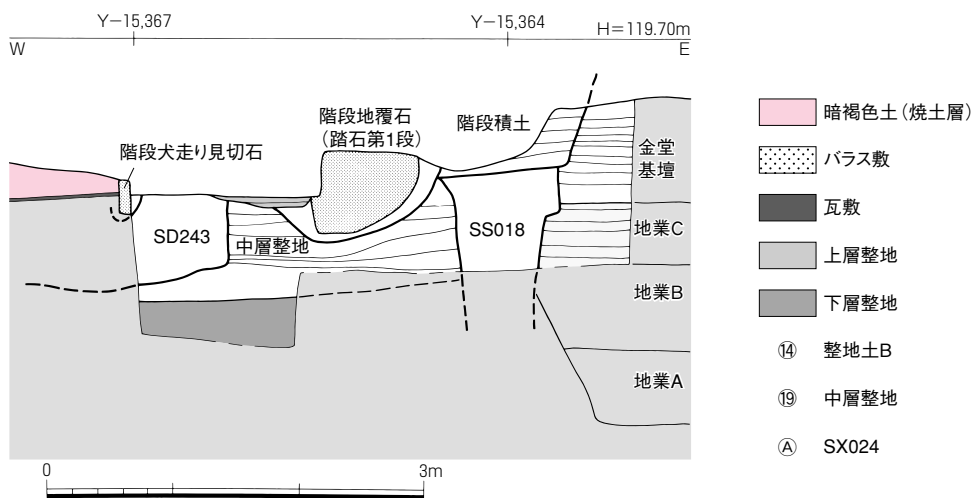
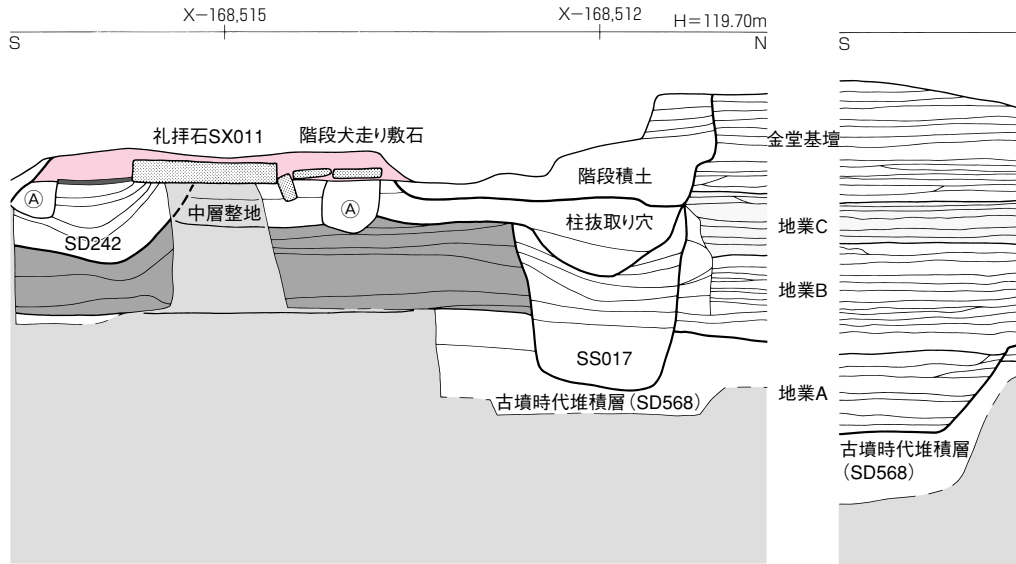
②基壇は掘込み地業上面（中央での標高約118.4m）に版築で築成する。基壇土は掘込み地業面から高さ約1.8m（標高約120.2m）まで残る。塔のように細かな工程は不明だが、高さ1.4m前後（標高119.8m前後）で礎石を据付け、その後さらに版築を加えて基壇の版築を完成する（後述するように敷石を施した時点での基壇上面の標高は約120.4m）。

基壇築成の範囲は、北面階段（Fig.44）で立上りがかろうじて残り、階段には及ばないことがわかる。西面階段でも近い状況である（Fig.46）。この点は塔と異なる。なお、金堂基壇の版築層からは7世紀前半の土器片が少量出土している。

整地と足場

③北辺とおそらく東辺中央では掘込み地業上面に整地し、西辺では掘込み地業の外に整地する（中層整地）。南辺中央でも厚さ約20cmの整地（上面の標高118.38m）を行い、基壇裾のレベルをほぼ揃えるが、掘込み地業の外か上かは不明。中層整地は、基壇の立上りより新しく、次述する足場穴や階段積土より古いことから、金堂基壇築成途中の整地と考える。

西・北面階段位置で検出した柱穴SS018・019は、ともに中間整地や基壇の掘込み地業を削り



込み、階段積土の下にあることから、金堂建物構築時の足場穴になる (Fig.44)。東・南面階段の積土下で検出したSS016・017も同様の足場穴とみていい。

各階段をめぐる犬走りの見切石下で溝 (SD241~244) を検出。詳細は後述するが、基壇の掘込み地業や中層整地より新しく、犬走りに伴う整地土 (以下、上層整地) より古い。したがって基壇築成途中から犬走り完成までの間に、基壇の周囲にめぐらした仮排水路と考える。なお、上層整地は、既述した建設途中整地にほぼ対応する。

④階段の積土は基壇の版築や中層整地及び足場穴を一部削ったのち、改めて版築している。階段の踏石は、階段の積土を切って据える。

⑤階段踏石の据付け掘形を厚さ5~20cmの上層整地が覆う。この整地の上面に犬走りの敷石や見切石を置き、金堂の外観が完成する。

**仮排水溝** 各階段の犬走り見切石下あたりで溝SD241~244を検出した (Fig.44、付図2)。西

階段の積土

基壇築成中に排水処理

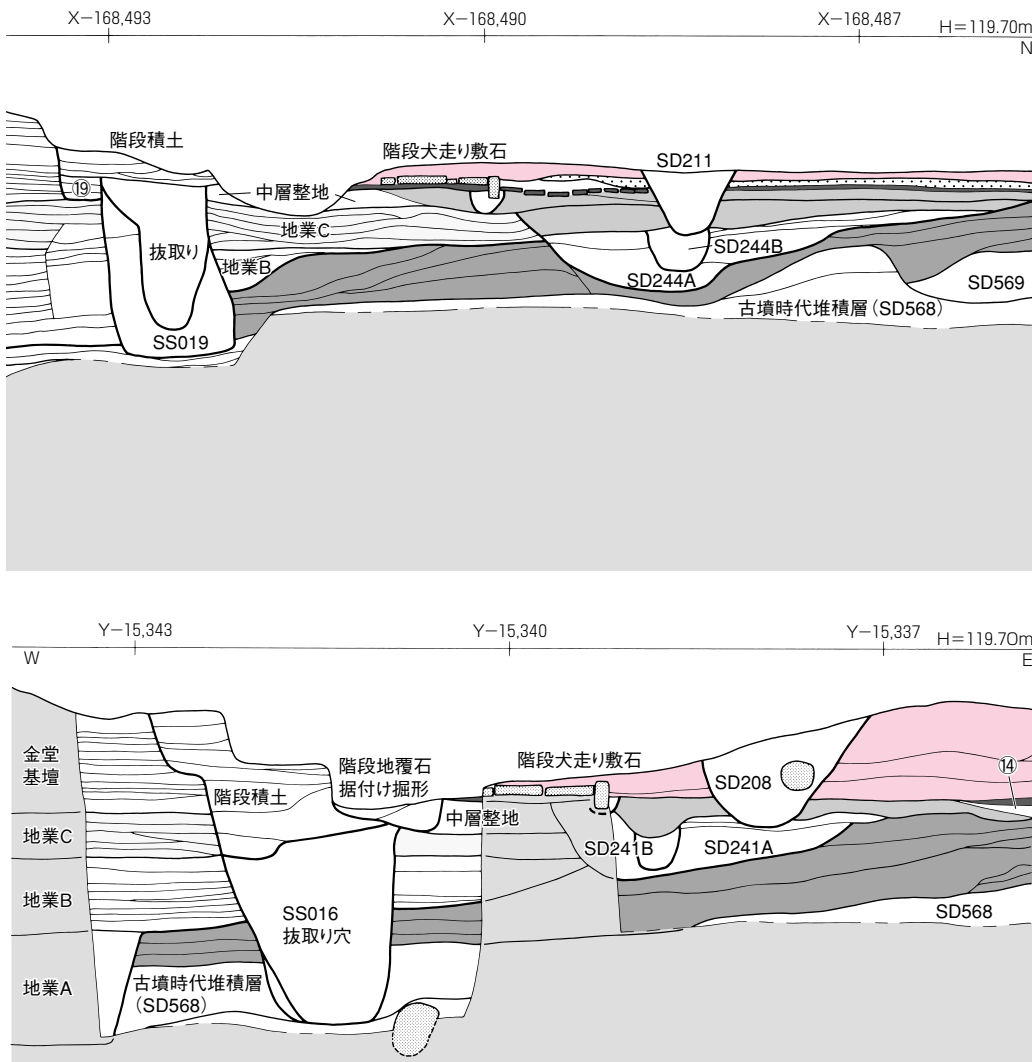


Fig.44 金堂基壇築成状況 1:60

Tab.12 金堂周辺の整地層序

層 序	西辺中央	南辺中央	東辺中央	北片中央	備 考
上層整地上面	118.45	118.50	(118.52)	118.52	金堂最終整地（回廊基壇ベース）
中層整地上面	118.35	118.38	118.48	118.48	金堂基壇造成途中の整地
下層整理上面	(117.85)	118.20 <sup>a</sup>	118.30	118.40	最初の造成土
下層整地下面		117.65	117.30	117.30	下層整地下は古墳時代SD568等の堆積土

数値は標高 (m) ( ) は推定値 = 掘込み地表面

深さ約0.7m。東辺のSD241も似た状況で、上を上層整地が覆う。新旧2時期あり、古いSD241Aは幅2.1m以上、深さ約0.5m、新しいSD241BはSD241Aの中央に幅・深さとも約0.4mにつくる。南辺のSD242は後述する礼拝石SX011下から南に及ぶ。幅1.2m以上、深さ約0.6m。北辺のSD244も上層整地下で検出。新旧2時期あり、古いSD244Aは幅約4.1m、深さ約0.7m、新しいSD244BはSD244Aが半ば埋まった折に、幅約0.5m、深さ約0.4mの細溝に改めている。

これらの溝は、基壇築成から犬走り整地が行われるまでの期間、雨水の排水のために、基壇の周囲に巡らされたと考える。溝底の標高は、古いAが117.7～117.8m、新しいBが117.9～118.0m。基壇南西方約9mの調査区壁際で検出した落とし込みSD247（幅約2.8m、深さ約0.4m）は、金堂・回廊完成頃の整地（上層整地）下であり、底の標高も約117.7mであることから、SD241～244の排水口になるのではと考えられる（Fig.58参照）。後述するように金堂焼亡後に基壇周囲に巡らされた溝SD208～211の排水が、西南のSD213になされていることも参考になる。

**基壇外装** 基壇外装は、地覆石や羽目石が残っており、切石壇上積基壇であったことが明らかである。残存する地覆石から復元される基壇規模は、地覆石の外側から外側までの寸法（葛石も同様と推測）で、東西21.6m、南北18.5mである。基壇裾を示す犬走り敷石上面の標高は、少しばらつきがあるが、北・東辺では118.58m前後（西北部は不等沈下のためか118.50m前後）。礎石上面は標高120.54mで、高低差は約1.97m。回廊の状況だと、礎石の方座下端あたりが基壇上面になる。金堂の礎石方座下端の標高は約120.38m。第V章10Aで触れるように、基壇面には厚さ12.2cmの凝灰岩の切石を敷くが、側面を欠き取って、礎石や地覆石の地の面にそわせている。後述する階段の傾斜からみて、敷石面の推定標高は120.38m（礎石・地覆石上面から約16.5cm下）で、基壇高は犬走り敷石面から約1.8mに復元できる。

地覆石は花崗閃緑岩で、長さ0.6～1.0m、幅0.3～0.4m、厚さ0.4～0.5mである。外面と上・側面は加工しているが、内・下面は未加工。地覆石上面には、外面から約25cm内側に、羽目石と噛み合わせるための深さ約1cmの欠込みがある。地覆石は、基壇土を削りながら、幅80cm程度の掘形を掘って据え、裏込土を詰める。下約20cmは地中に埋められ、上部約25cmが犬走り面から上に見える（Fig.47）。

西北部分では地覆石上に、羽目石が残存する。羽目石は凝灰岩で、遺存状況は悪く、最も良く残っている部分でも、高さ13cmを残すのみである。地覆石外面から約10cm内側に外面を置く。羽目石の外面には幅27cm以上、奥行6cmの束を造り出す。東石部分は、基壇西北隅から1.95mの位置にあり、基壇西北隅と北面階段の北入隅部分との間を四等分する位置に設けられていたと推定される（Pl.11、Ph.46、Fig.45）。階段との入隅に束を造り出したか否かは不明。なお、基壇の周辺からはかなりの数の凝灰岩片が出土していることから、羽目石だけでなく、葛石にも

基壇の規模

基壇高復元

束は羽目石に造り出し

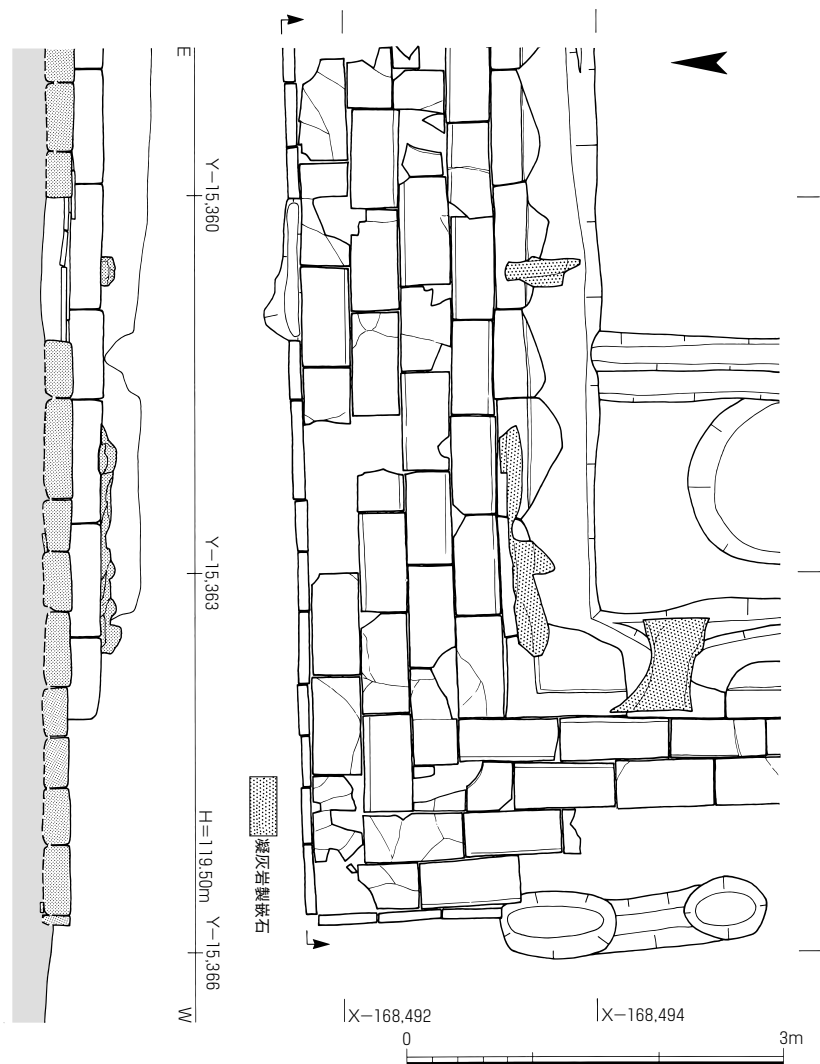


Fig.45 金堂基壇（西北隅）地覆石・羽目石と犬走り 1:60

凝灰岩が用いられたと推測される。後で触れるように、階段の羽目石に浮彫りがあるが、基壇本体の羽目石は無文のようである（第V章10A参照）。

**階段**（Pl.22、Ph.44・45、Fig.46） 基壇の四面にはそれぞれ階段が取り付く。階段は、基壇土を一度基壇に沿って削り取ったのち、版築で築成し、階段の踏石第1段（地覆石）を据えている。踏石及び階段の地覆石や羽目石は西面でのみ残っていた。

西面階段の幅は南と北の地覆石の外側と外側で約4.5m、出1.55mである。東面階段も地覆石の抜き取り痕跡から、西面と同じと推測できる。南・北面階段は、犬走りの敷石の切れ目より地覆石位置を復元すると、幅が約5.0mで、出が1.55mに復元できる。各面の階段羽目石が西面階段の羽目石と同形式であったとすると、階段両羽目石の外々、心々、内々の幅は、東・西面が4.4m、3.95m、3.5m、南・北面が4.9m、4.45m、4.0mとなる。後述のように金堂の底での桁行中央間の柱間寸法が4.84mであるから、南・北面の階段は階段外面と柱心が揃うように計画されたと考えられる。東・西面では、階段は妻柱に心がほぼ揃う。基壇の南北長が、東西長よりも短いことを考慮して、南・北面の階段よりやや狭くしたのであろう。

西面階段の地覆石は花崗岩で、外面と上・側面を平滑に加工し、内・下面は未加工のまま

階段の幅

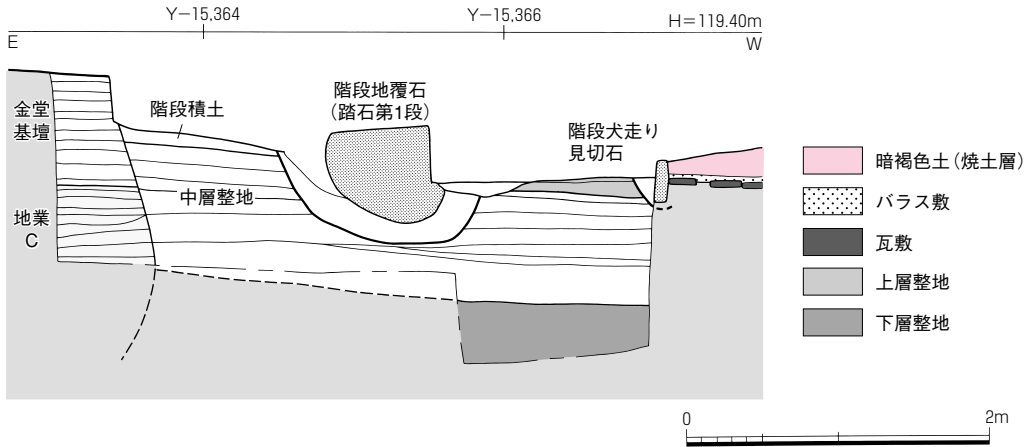


Fig.46 金堂基壇西辺の地業と階段積土 1:50

ある。外面下端は舌状に残す部分もある。犬走りの敷石をのせるための工夫であろう。長さ0.5~0.7m、幅0.4~0.6m、厚さ0.4m前後。基壇地覆石と同様に掘形を掘って据え、犬走り面から約25cm上に出す。

西面階段の踏石は、1段目(=階段地覆石)の3個のうち、北側の2個が残る。花崗閃緑岩である。中央の石は長さ約1.7m、幅約0.4m、厚さ0.65mだが、北の石は長さ約0.9m、幅約0.4mと小さい。

西面階段に唯一残る階段羽目石は北側のもの。凝灰岩で、残存長約0.8m、残存高約0.4m、厚さ0.45m。地覆石外面から約5cm内側で、地覆石上面に据えている。下面は平坦で納などの加工はない。外面に“獅子”などを浮彫りしていることについては改めて詳述するが、この羽目石は“獅子”の首の後、胴部の上で直角に切欠いており、複数の羽目石を組合わせていたことがわかる(Fig.48)。切欠きは、下端から約15.2cm、階段前面から約84cmの位置になる。階段の出は1.55mであるから、下半の羽目石は、階段の出をほぼ2分する位置で、東西2枚で組合わせたことになろう。この位置での階段羽目石の復元高は、後述するように約78cm。階段の地覆石上面からの高さは1.55mであるから、上半の羽目石は階段の地覆石からの高さをほぼ2分する位置で、下段東(奥)の羽目石上で組合わせたことになろう。

羽目石に浮彫りあり

階段の傾斜

階段の傾斜は、基壇葛石の上面前端(羽目石からの出は地覆石と同様10cmと仮定)と階段踏石第1段(地覆石)の上面前端で結ぶと、出が1.55m、高さの復元値1.55mであり、45°で計画されたと考え得る。

耳石に文様

金堂周辺からは、第IV章10Aで述べるように上面に水波状の文様を彫った、残存厚7~8cm

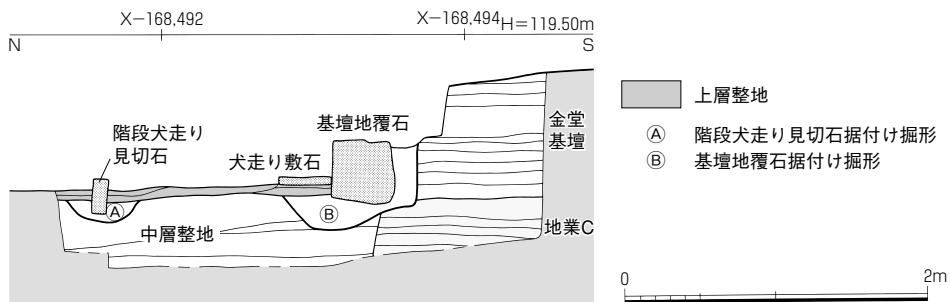


Fig.47 金堂基壇の地覆石・犬走り 1:50



の耳石（羽目石上のにせる蓋状の石、別名は登り葛石）と推測できるものが出土している。下面は曲折する面をもつ（以下、長く残る面をA、短く残る面をBと仮称）。Aと上面の角度は $133^\circ$ 前後。Bはごく一部が残るのみで、Aと直角になるのか、鈍角になるのかは判断が難しい。直角とすると、耳石上端の破片でAを基壇葛石の切欠部に落とし込み、Bを階段羽目石上に載せたことになる。この場合、耳石の厚さは、原位置に残存する羽目石上面すれすれとしても9cmほどと極めて薄いものになる。下面のAとBが鈍角になるとすると、耳石下端の破片で、Bは羽目石全体を覆うことになる。この場合、耳石の厚さは、次で触れる大阪・鳥坂寺の金堂並に20cmほどはとれ、穏当な復元案といえる。なお、耳石と羽目石とは柄などで組合わせていたはずであるが、その部分は残っていない。

階段の踏石は、確実に第1段（地覆石）が残るだけである。犬走り敷石からこの第1段の上面までが高約25cm、第1段の上面から葛石（基壇）上面までの復元高は1.55m。踏石が完存する大阪・鳥坂寺金堂や河内国分寺塔だと、それぞれ踏石の高さ（蹴上り）は18.3cmと25.5cm、奥行（踏面）は20cmと34.5cm<sup>2)</sup>。これらを参考にすると、第2段から基壇面まで入れて7段で、高さ・奥行ともを22.2cmとする案（A案）と、同じく6段で高さ・奥行とも25.8cmとする案（B案）とが考えられる。周辺から出土した凝灰岩には、踏石かと推定される高さ14.6~16.5cm、幅19.5cmの破片もある（第IV章10A）。これだと第2段から基壇面まで含めて10段と多く、奥行もない点が疑問である。復元にはA案を採用しておく。なお、各面階段とも高さを出はほとんど等しく、階段の傾斜や踏石の段数は同じと推測する。

段数の復元

現存する階段羽目石の外（北）面には浮彫を施す（Pl.22, Fig.48）。西を向いた動物で、前肢、首、胴部が残る。胴部は地に接しており、首を立てて伏した状態である。胴部後半の下端にある表現は後肢、胴部中央の上端にある表現は翼状であろう<sup>3)</sup>。似た図像は中国の南朝陵墓の

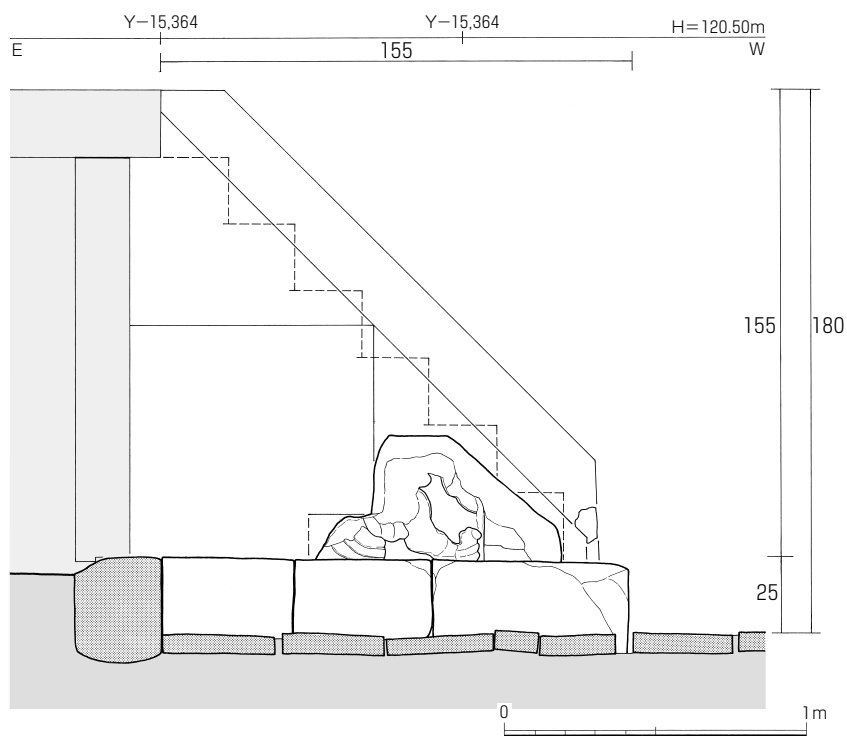


Fig.48 金堂西面階段復元図 1:50

羽目石に  
“有翼獅子”

参道におかれた有翼の獅子である<sup>4)</sup>。また、仏前の座石に蹲踞した獅子を置くのは、鞆県石窟<sup>5)</sup>をはじめ中国の各所でもみられる。山田寺金堂西面階段の動物像については四神のうちの白虎とみる説もあったが、白虎には翼はないし、伏した姿もない。仏を守護する有翼の獅子が、各階段の左右にも配されたとみるのが妥当であろう。

“獅子”の前肢より前（西）は、凸帯状に3.5cmほど高くなる。残存部で幅13cmほどだが、30cmはあり、階段前面から10～20cmまで続いていた可能性が強い。上辺にこうした凸帯があったかは不明。“獅子”の首と凸帯の間には小さな浮彫がある。雲形あるいはパルメット文様との説もあるが定かでない。“獅子”の後や後上方にはかなりのスペースがあるが、ここにどのような浮彫があったかは謎である。

なお、金堂周辺から出土した凝灰岩片にも浮彫が残っていた。“獅子”の肢のようで、材質も類似することから階段羽目石の一部とみた。これらにはベンガラ<sup>6)</sup>の赤彩がある（第IV章10B参照）。山田寺の階段は日本では、例のない、きわめて装飾に富んだものであったことが知れる。**犬走り**（Pl.11・22、Ph.43、Fig.45） 基壇と階段をめぐって犬走りを設ける。縁には見切石を立て、基壇地覆石との間に板石を敷く。基壇の犬走りは、南北両端間の距離が約21.7m、東西両端間の距離が約24.8m。犬走りの見切石外面は、各面とも地覆石外面から約1.6m外に位置する。階段の犬走りは、南・北面が幅約8.2m、出約1.6m、東・西面が幅約7.8m、出約1.6m。階段両脇の犬走りの幅は、南・北面では、約1.6mだが、東・西面では約1.65mと少し広い。見切石は、長さ40～90cm、高さ20～25cm、厚さ5～10cmの流紋岩質溶結凝灰岩（榛原石）である。上・側面は平滑に加工するが、下面は未加工。幅20～40cmの掘形を掘って立て並べ、敷石面から2～6cm、外の瓦敷面から5～10cm上に出す。

犬走り敷石  
の施工順序

基壇犬走りの敷石は、長さ40～90cm、幅33～42cm、厚さ5cm前後の切板石（榛原石）を互目にしながらかつて4列に敷き並べる。やや詳しくみると、基壇犬走りの西北隅（Ph.43、Fig.45）では4列とも西面に南北に長い材、北面に東西に長い材を組むように置く。そして、北面の最も内側の材の西端は、基壇地覆石の西端に揃える。敷設の順序としては、北面からではなく、西面から始めたと考えるのが妥当。東南隅もほぼ同様で、ここでは南面から東面の順（Pl.11）。大きくみて、犬走りの敷石は、西面から始め、南面、東面、北面に及んだと考えられる。

階段犬走りの敷石も4列。互目とするために、両端では長手の材と方形に近い材を交互（Pl.11・22、Ph.44）に用いているが、南面の西端のみは例外で3列とも細長い材で埋めている（Pl.11、Ph.44）。基壇、階段とも犬走り敷石面は外にむかってわずかに低くなる。なお、南面階段の東入隅や、東面階段の北入隅の犬走り見切石には、上面から5cmほど下、ほぼ敷石面近くに、水抜き用の小さな方孔が穿れていた（Ph.46）。

**足場穴** 各階段の積土下で、柱穴SS016～019を検出した（Fig.44）。基壇の掘込み地業や基壇築成途中の中層整地より新しいことから、金堂（建物）構築時の足場穴になる。東・南面のSS016・017は一辺1.2～1.4m、深さ1.5～1.6mで、ともに柱穴抜き取り穴がある。とくにSS017の柱は南に大きく倒して抜いたことがわかる。西・北面のSS018・019は一辺1.0m前後、深さ約1.4mで、後者には柱抜き取り穴がある。

**礎石**（Pl.11、Ph.46） 礎石は、既述したように基壇を掘込み地業から高さ約1.4mまで築成した段階で、掘形を掘って据え、その後さらに版築を加えて基壇面を生成する（Fig.49）。根石は認

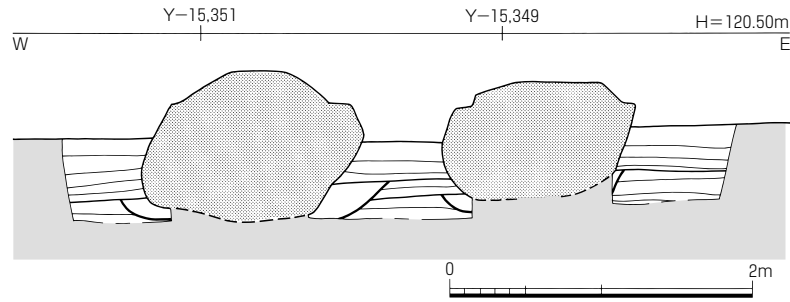


Fig.49 金堂（身舎）礎石 1:50

められない。残存する2個の礎石は花崗閃緑岩で、直径140~150cm、厚さ80cm以上の自然石の上面に、直径97~100cm、高さ7cm以上の方座を造り出す。さらにその上に直径90cm、高さ9cmほどの円形の盛り上がりがあり、遺存状態が悪いが、蓮華文の浮彫りがあるようである。1904年頃には金堂上に12個の礎石があったという。山田寺金堂の礎石と伝える藤田美術館蔵の数個の礎石は、いずれも蓮華座をもつ。このうちの1個は、一辺96~100cm、高さ9cmの方座に、直径92cm、高さ11.5cmの12弁の蓮華座を造り出し、中央に下端直径60cm、高さ1.5cmの円柱座をつくる。回廊の蓮華座をもつ礎石と文様が酷似し、しかも寸法は一回り大きく、山田寺の金堂用とみていい。現存する2個の礎石は身舎正面（南面）東端間の礎石で、地覆座を造り出しておらず、庇・身舎間は間仕切り装置がなく、開放であったと推定できる。藤田美術館蔵の蓮華座のある礎石には、寸法から金堂用と推定され、しかも上幅約38cm、高さ約20cmの地覆座を造り出すものがある。後述する地覆石の寸法と類似し、山田寺金堂の庇の礎石である可能性が高い。

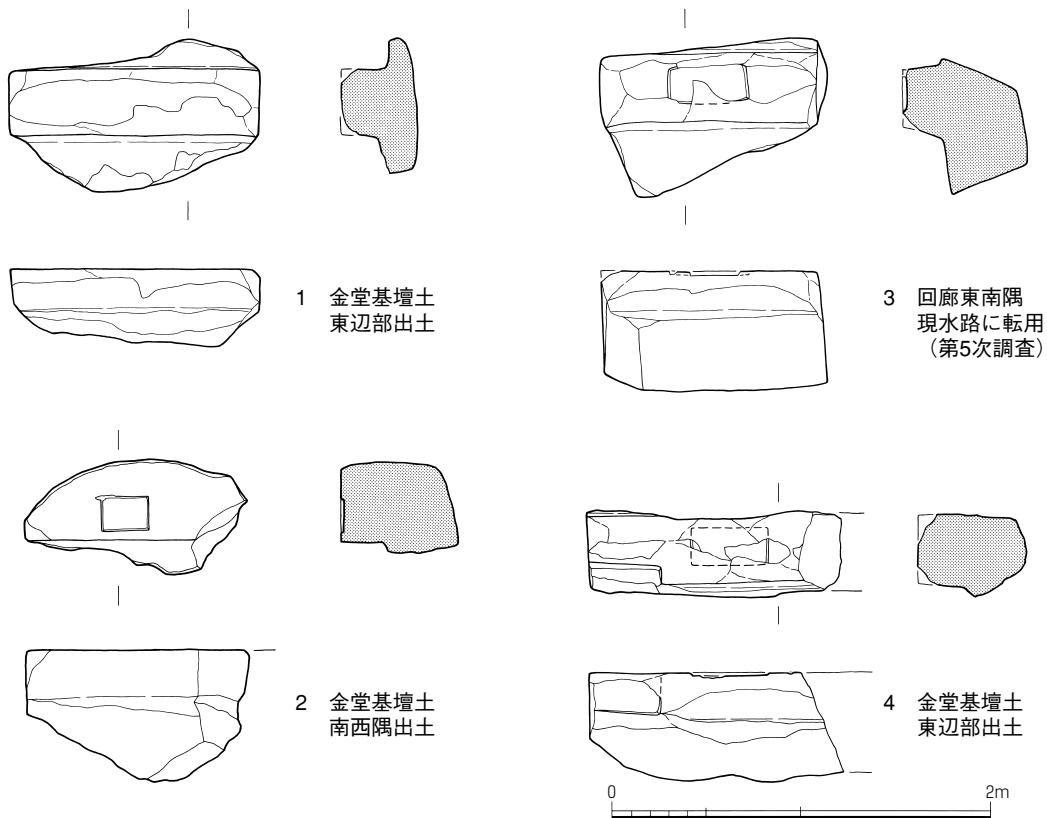


Fig.50 金堂（庇）地覆石 1:40

**地覆石** 庇の東・南柱筋で、地覆石抜取り穴や据付け穴を3個(SX021・022)検出するとともに、原位置を動いた3個の地覆石を礎石の北や基壇西南隅で検出した(Pl.11、Fig.50-1・2・4)。据付け穴SX021・022は長さ1.4~1.8m、幅0.6~0.8m、深さ約20cm。据付け面は礎石と同じ。地覆石は長さ1.2~1.3m、幅50~80cm、厚さ40~65cmの花崗閃緑岩で、上面に上幅34~36cm(下端幅40~44cm)、高さ20cm前後の地覆座を造り出す。

**間柱の穴** 出土した3個の地覆石のうち2個には、上面のほぼ中央に幅約17cm、長さ約40cm、深さ2.5cmの長方形の穴を穿つ。礎石と礎石の間に間柱を置いたと理解している。この穴は、地覆石の見込心よりやや片側に寄る。穴をもつ2個の地覆石の1個には、穴から15cm離れて側面に深さ約10cm、長さ38cm以上の繰り込みがあるが、用途は明らかでない。他に東面回廊南端部の第5次調査でも水田水路に転用されていた、間柱穴をもつ地覆石(Fig.50-3)を発見している。地覆座は幅約40cm、高さ約22cm。間柱穴は幅約40cm、長さ約24.0cm、深さ1.6cm。寸法がやや異なるが、これも金堂用であろう。

**建物の平面** 金堂は、現存する礎石や礎石の据付け穴から、桁行3間、梁行2間の身舎に桁行3間、梁行2間の庇がつくもので、身舎の両端間だけが狭いという特異な平面形式になる。この形式は、山田寺金堂で判明したのち、滋賀・穴太廃寺や三重・夏見廃寺でも確認されている。

柱間については『飛鳥・藤原宮概報9』では現存する身舎南側東端の2個の礎石の心々距離約2.0mを6尺、すなわち基準尺を1尺が33.3cmとして、身舎の桁行中央間15尺、同端間6尺、梁行9尺等間、庇の桁行15尺等間、梁行18尺等間とした。復元(Fig.6)では、庇の梁行中央と、桁行の両端間の中央やや外寄りに、身舎の柱と揃えて間柱が建つと考えた。『飛鳥・藤原宮概報13』では基準尺を1尺が36cm(高麗尺)として、身舎の桁行中央間14尺、同端間5.5尺、梁行8尺等間、庇の桁行中央間14尺、同端間13.5尺、梁行16尺等間(もしくは庇桁行14尺等間、梁行16.5尺等間)としている。

**造 営 尺 は**  
30.24 cm

しかし、後述のように、山田寺創建時の造営尺は1尺が30.24cmと推定されるので、柱間寸法は、身舎の桁行中央間16尺(4.84m)、同端間6.5尺等間(1.97m)、梁行9.5尺(2.87m)等間、庇の桁行16尺等間(両端間の外から6.5尺に間柱)、梁行19尺(5.75m)等間(各中央に間柱)である。建物総長は桁行48尺(約14.5m)、梁行38尺(約11.5m)。基壇規模は東西約21.6mで71尺、南北約18.5mで61尺、基壇の出は各面とも約3.5mで11.5尺に復元できよう。方位は、基壇地覆石や犬走りの見切石からみて北で西に約1°振れる。

**礼拝石**(Pl.11、Ph.42・44・51) 金堂南面の階段のすぐ南に礼拝石SX011がある。東西2.4m、南北1.2m、厚さ約18cmに加工された流紋岩質溶結凝灰石(竜山石)の、1枚ものの切板石である。階段犬走りの見切石に接していることから、金堂創建時に比定。礼拝石の東西の心は、金堂(階段)の中軸から10cmほど西にずれている。礼拝石の上面は犬走り敷石面から2cmほど高く、周辺の瓦敷面から15~16cmほど高い。金堂前にこのような礼拝石を置く例としては、大阪・四天王寺の転法輪や、家形石棺の蓋を転用した大阪・鳥坂寺があるが、類例は少ない<sup>6)</sup>。

なお、礼拝石SX001の北と南では、径40cm前後、深さ30~40cmの小穴SX024を検出している。南穴は後述する11世紀頃の溝SD209より古い。北穴は金堂の足場穴SX017の抜取り痕跡より新しいが、南面階段の犬走り敷石下である。ほぼ金堂中軸線上にあること、SX011との距離が等しいことなどから、礼拝石の設置に関連するものと推測しておく。

## E 塔SB005 (Pl.10、Ph.47～50、付図1・2)

**遺存状況** 塔SB005の基壇は土壇状に残るが、基壇上面が削平され、礎石は心礎と西北隅の四天柱の礎石のみ残存していた。他に基壇上では、6個の礎石据付け穴を検出した。発掘前には基壇中央に礎石が露出しており、心礎とも考えられた。しかし、発掘の結果、この礎石は明治期に置かれたようで、実際の心礎は復元基壇上面から1.3mの位置に据えられた地下式であることが判明した。基壇外装の地覆石は1石を除き、すべて抜取られていた。犬走りの敷石はほとんど残っていないが、見切石は比較的よく残る。

犬走り付近から外側には、瓦や焼土を伴う暗褐色土（焼土層）があり、塔の焼亡を物語る。犬走りの外では、暗褐色土下にバラス敷、瓦敷が残っていた（第IV章2A参照）。暗褐色土などからは火を受けた多数の埴仏が出土しており、塔内壁は埴仏で飾られていたことが判明した（第V章4参照）。

塔は焼亡

なお、塔の掘込み地業より古い柱穴などを数個検出しているが、これについては本章のFでまとめて触れる。

**基壇築成** (Fig.51～52、Tab.12、付図2) 塔SB005の基壇は、南北約14.5m、東西約15.7mの範囲で整地土を切り込んだ掘込み地業上に築成されている。主に基壇中央で行った断割り調査の知見をもとに、掘込み地業から基壇外装完成までの工程を復元すると、①掘込み地業、②基壇築成、③足場穴と整地、④階段の積土と外装、⑤整地と犬走りの順になる。

①掘込み地業面の標高は、北辺中央で118.55m、東・西辺中央で118.35m前後、南辺中央で118.40mである。既述した金堂西・南辺の掘込み地業面（標高117.85m～118.20m）より高く、しかも南・北辺では金堂の最終整地（上層整地）面を切っている可能性が高いことなどから、塔の造営は金堂完成後になる。塔の造営は天智朝に計画されたようだが、完成は天武朝である（第IV章2A参照）。

地業の工程

金堂→塔

掘込み地業の深さは、中央付近で約0.8m。上面の標高は約118.4m、底の標高は117.6m前後。西辺の底はほぼ平坦（標高約117.6m）だが、他の3辺の底は溝状に一段下る（標高117.4～117.5m）。版築を行うまでの、一時的な排水を考慮したものであろう。

掘込み地業の範囲は、北・南・西各辺が心礎心からそれぞれ7.2～7.3mと、塔基壇端の外約0.8mまでだが、東辺では上半部の地業が塔基壇端の外約2mまで広がる。後者の状況（Fig.51）からみて、掘込み地業の版築は大きく2工程（地業A・B）に区分できそうである。それぞれ5cm前後の黄褐色粘質土と灰色砂質土を互層にして5～9層に積む。底には部分的に小石を置く。

②基壇は、心礎の据付け前（以下、基壇土A）、心礎据付け直後（以下、基壇土B）、立柱後（以下、基壇土C）、礎石据付け後（以下、基壇土D）に大別できる。

基壇築成は4工程以上

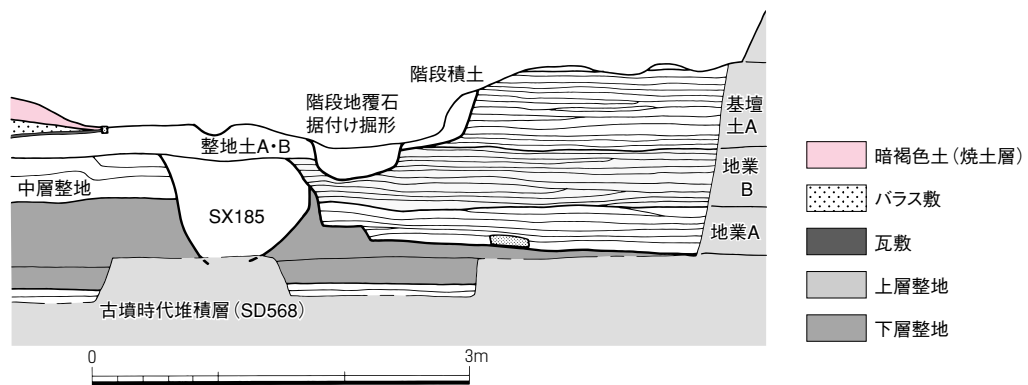
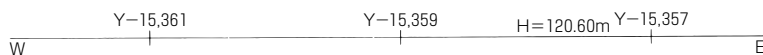
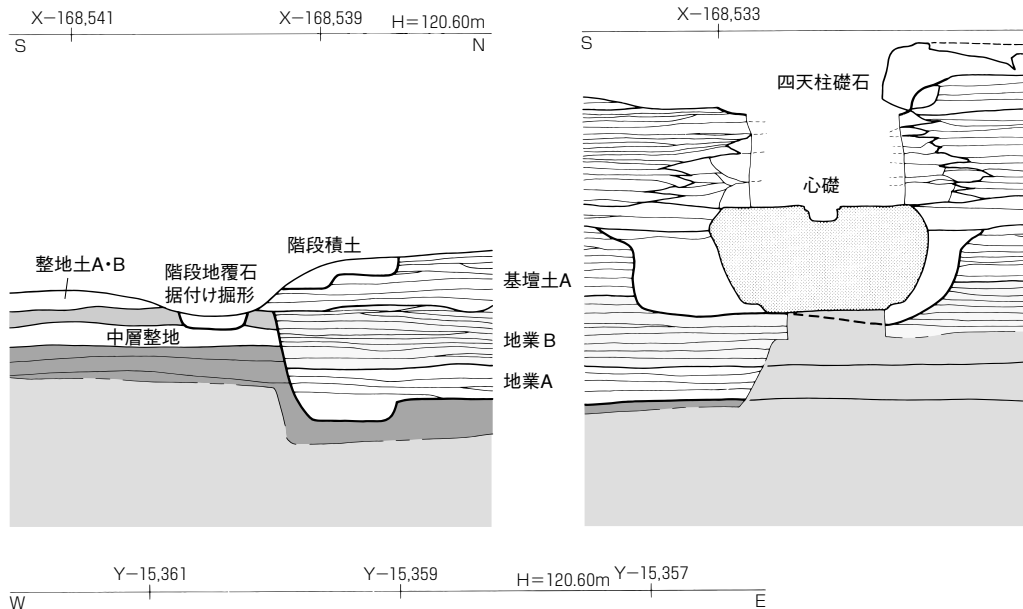
基壇土Aは、厚さ0.5～0.6mで、黄褐色粘質土と灰色砂質土を細かく互層に搗き固める。範囲は、基壇地覆石付近までだが、階段予定位置では張出す。心礎は基壇土Aの中央を掘り下げて据え、周囲を版築で埋め戻す。心礎の搬入は、据付け穴が南北ともほぼ直なので、東か西からと推測できる。

基壇土Bは心礎の肩（標高約119.2m）まで積んだものである。厚さ約0.2m。

Tab.13 塔周辺の整地層序

層 序	西辺中央	南辺中央	東辺中央	北辺中央	備 考
整地土B上面	118.50	118.50	118.46		塔最終整地（北方にはない）
整地土A上面	118.48	118.45	118.38		塔構築直後の整地（北方にはない）
上層整地上面	西方にあり	118.40		118.55	金堂最終整地（東方にはない）
中層整地上面	118.32	118.28	118.38	118.30	金堂基壇築造途中の整地
下層整理上面	117.95	118.10	118.00		最初の造成土
下層整地下面	117.25		117.72		下層整地下は古墳時代SD568等の堆積土

数値は標高 (m) ( ) は推定値 = 掘込み地業面



基壇土Cは、心柱の周囲に黄土色の粘土を根巻にしなが、黄褐色粘質土や灰色砂質土等を順次積む (Fig.51)。厚さ約0.8mで約11層。

基壇土Dは、基壇土Cの上面 (標高約120.0m) で礎石を据付けた後、さらに厚さ30cmほどの版築を施す (後述するように敷石を施した時点での基壇上面は標高120.42m)。

③東面階段の北出隅で検出したSS188は、基壇の掘込み地業より新しく、上を2層の整地土が覆う。上半の整地 (以下、整地土B) は後述する犬走りに伴う。したがって、SS188は塔 (建物) 構築用の足場穴、下半の整地 (以下、整地土A) は厚さ0.1~0.2mで、塔構築直後頃に比定できる。整地土Aの上に基壇地覆石を置き、基壇外装を開始する。

整地と足場

④階段の積土は、基壇版築土や整地土Aを削ったのち、黄褐色粘質土と灰色砂を互層に搗き固めて築成する。その後、階段の踏石を設置。積土に凝灰岩の粉末が混ることから、この段階では基壇外装が進行していたことが知れる。

階段の積土

⑤基壇端付近から外に少なくとも4mの範囲まで厚さ0.1~0.2mの整地土Bを整地土Aの上に施す。この整地土B上に犬走りの敷石や見切石を置き、塔の外観は完成に至る。

最終の整地

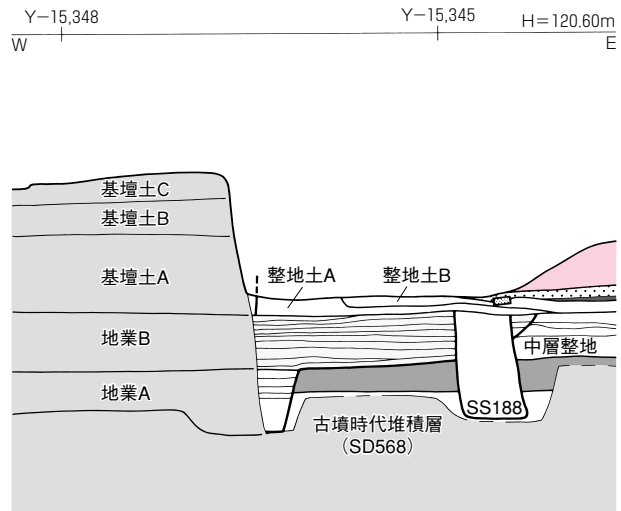
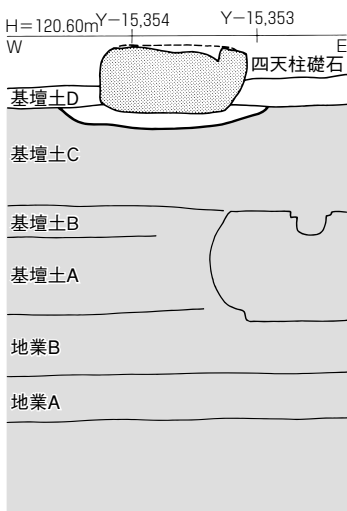
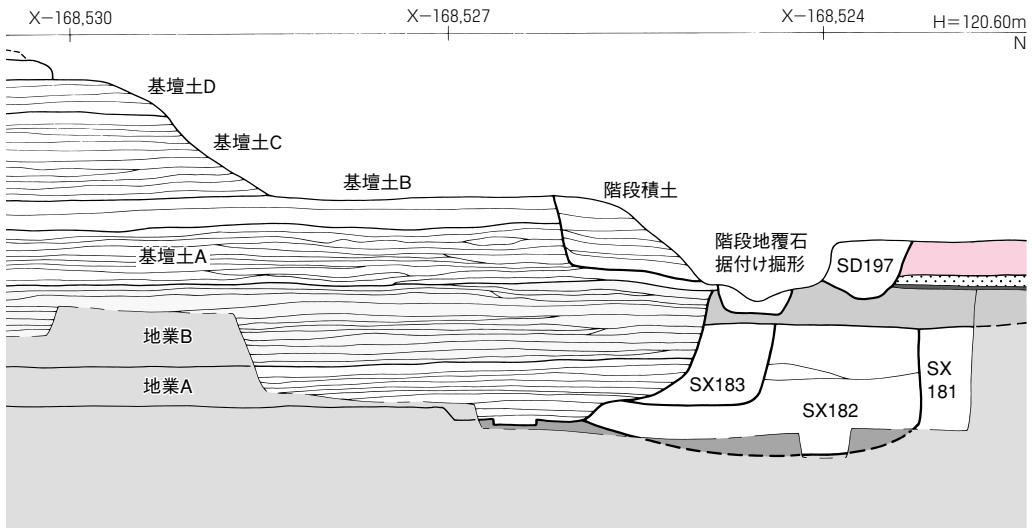


Fig.51 塔基壇築成状況 1:60

**基壇外装** 基壇外装は、1個だけ残存する地覆石から、切石壇上積基壇であることが明らかである(Ph.49、Fig.52)。基壇の平面規模は、南・北面の地覆石抜取り痕跡からみると約12.9mだが、東南隅の地覆石の痕跡(モノカの皮状に残る)東端から西南隅の地覆石痕跡西端までの直線距離が12.78mであり、東西・南北長ともに約12.8mに復元できる。

基壇裾を示す犬走り敷石は、ほとんど残っておらず、高低差にばらつきがあるが、北西部や東南部に残る犬走り敷石面の標高は118.66~118.70mである。西北の四天柱礎石上面の標高は120.48mで、犬走り敷石面との高低差は約1.8mである。既述したように金堂や回廊では礎石方座下端あたりが復元基壇上面(礎石上面から15~17cm下)。塔の礎石は方座がなく、礎石上面から5cmほどで地の面である。おそらく地の面が一部覗いたあたりが基壇上面になろう。後述するように階段の傾斜を金堂と同様に45°計画とすると、基壇上面の標高は120.42m、礎石地の面から2cmほど下になる。この場合の基壇高は1.74m。

地覆石は東面南側に唯一ほぼ完形に近い形で残っていた。長さ0.6m、幅0.5m、高さ0.44mの花崗岩である。基壇犬走りの見切石上面からの高さは約25cm、犬走り敷石面からだと約27cm。地覆石の上面には北端から長さ12cm、幅8cm、深さ2.2cmの穴がある(Ph.49、Fig.52)。東(前)端からは約9cm。『飛鳥・藤原宮概報7』では羽目石を立てる穴と解釈しているが、羽目石用の穴ならば溝を南北に通して彫るはずである。穴は東面階段南入隅と基壇東南隅の間をほぼ3分する位置にあり、東石を立てる柄穴と推定できる。したがって、基壇は地覆石上に東石と羽目

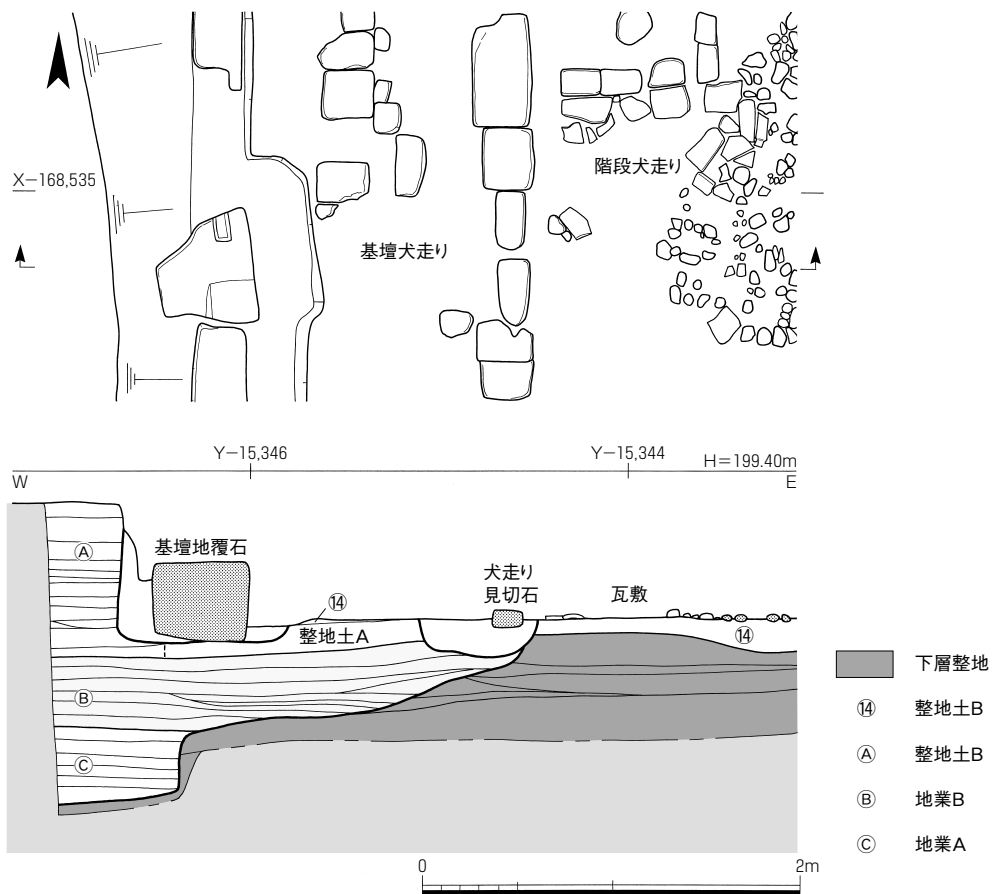


Fig.52 塔基壇(東辺)地覆石・犬走り 1:40



石を立てる形式であったといえる。この点は金堂とは異なる。その他の地覆石は、抜取り痕跡から幅50cm程度、長さ60～80cm程度のもが多く、基壇隅と階段部分では大振りの石を使用していたことがわかる。地覆石は、基壇土を奥に20cmほど掘って据えられている。羽目石や葛石は残っていないが、基壇周囲から加工面をもった凝灰岩の破片が出土しており、羽目石や葛石は凝灰岩であったと考えられる（第V章10A参照）。基壇上の敷石も凝灰岩（厚さ約9.5cm）であること、塔内には凝灰岩を用いた壇などの構造物があったことなども推測できる。

金堂と違う  
基壇外装

**階段**（Ph.47～49、Fig.51） 基壇の四面中央にはそれぞれ階段が取付く。階段の積土は、既述したように基壇版築土を一度削り下げた後、黄褐色粘土と灰色砂を搗き固めている。羽目石や踏石は残っていない。地覆石もすべて抜取られていたが、モナカの皮状に残る地覆石の痕跡で規模を復元すると、若干の差はあるが、各面とも幅は外々で約3.3m、出は約1.47mになる。

階段の傾斜を金堂と同様に45°計画とみると、階段地覆石前面の肩から基壇（葛石）上面までは、出と同じ1.47m。基壇東辺の南に残る地覆石は犬走り敷石面からの高さが約27cmであり、これをそのまま階段地覆石（踏石第1段）に援用すると、階段の高さすなわち基壇の高さは1.74mとなる。階段の段数は、第2段から基壇を含めて7段とすると、高さ、奥行きとも約21cm、6段とすると、高さ、奥行とも24.5cm。金堂に倣い前者とみておく。

階段の復元

**犬走り**（Ph.48、Fig.52） 基壇と階段の周囲を犬走りがめぐる。基壇の犬走りは見切石が比較的良く残る。復元すると、外々の距離は約15.7m。犬走り見切石外面はほぼ階段地覆石外面と揃っており、基壇地覆石外面から犬走り見切石外面までは1.47mと推定する。見切石は、幅30～40cm、長さ40～50cm程度の、雲母を含む砂岩系の黒い板石を敷き並べる。内側には、部分的にしか残らないが、見切石と同質の小型の板石を敷く。金堂では板石を立てて見切石とし、内側に大きな板石を敷くので様相が異なる。

金堂と違う  
犬走り敷石

階段の前面には、犬走りの張り出しがある。出は約1.0m、幅は北面が約4.9m、西面が約5.0m、南面が約4.7mである。東面は東南隅にのみ残り、基壇南北中軸で折り返して復元すると、幅4.8mになる。見切石は砂岩系の板石のほかに、南面では一部に花崗岩、西面では一部で磚を立てて使用している（Pl.10、Ph.48）。また、張り出し部分の中心が階段の中心と揃わないことや各面で規模が異なること、さらに東・西面では振れていることなどから、改修を受けたものである可能性が高い。この改修は、瓦敷に伴うもので、東・西面は上層瓦敷の平安時代に入る可能性もある（本章2A参照）。

犬走り改修

**礎石**（Ph.50、Fig.51） 心礎は、既述したように地下式で、基壇築成途中に掘形を掘って据えられており、心礎上面（標高119.20m）は四天柱礎石上面（標高120.48m）より約1.3m下に位置する。また、心柱の周囲に根巻き粘土を巻きつけながら基壇土を積み上げたことも判明。ただし、法隆寺・法輪寺塔<sup>7)</sup>などで検出されている添柱の痕跡は認めることができなかった。

添柱は不明

心礎は、南北1.72m、東西推定1.8m、厚さ0.84mの花崗岩である。上面を平滑に加工し、中央に円形穴を2段に彫る。『帝説』裏書によると、下段の穴に金・銀・ガラス3種の容器に入れた舍利を納めたようである。上段の穴には蓋を置いたのであろう。また、『帝説』裏書には「円穴」に「浄土寺」と刻したとあるが、舍利孔にはそれがなかった。蓋に刻したのかもしれない。1888年に盗掘を受けており、今回の調査では攪乱土から磚仏1点が出土したのみである。上段の穴は直径30cm・深さ3cm、下段の穴は直径23cm・深さ15cmで、底部は椀状を呈し、内面に赤

心礎は盗掘

色の顔料が残る。なお、心礎は、下面に直径約1mの円柱座を造り出しており、転用材のようである (Fig.51)。

四天柱の礎石は、心柱立柱完了後の基壇面 (標高約120.0m) に掘形を掘り、部分的に根石を置いて据えられる。その後、厚さ25cmほどの版築を施して基壇を完成している。原位置に残存している西北の四天柱の礎石は、南北1.62m、東西約1.2m、厚さ0.58mの安山岩で、上面に直径約1.0m (下端部直径約1.1m)、高さ約5cmの円柱座を造り出す。心礎付近に移動されていた礎石は、長さ約1.8m、幅1.45m、厚さ約0.6mの花崗岩で、上面に直径0.95m (下部直径1.05m)、高さ約5cmの円柱座を造り出している。ともに方座はない (Ph.50)。後者は、円柱座の大きさが前者とほぼ等しく、四天柱の礎石と考えられる。東南隅の四天柱の据付け跡には抜取った花崗岩の底部が残っており、四天柱は安山岩と花崗岩を併用していたことがわかる。なお、東北の四天柱の礎石は蓮華座をもつとの伝えもあったが、それを疑う見解もある<sup>8)</sup>。今回の発掘でも、残りが悪いこともあるが、蓮華座は確認していない。方座がない点は金堂、回廊、講堂とも異なる。

金堂と違う  
礎石の型式

**足場穴** 唯一、東面階段の北出隅近くの断割り調査でSS188を検出した (Fig.52)。一辺0.4~0.5m、深さ約0.9m。塔の掘込み地業より新しく、基壇地覆石や犬走りに伴う整地土A・Bよりも古いことから、建物構築時の足場穴になる。

**建物の平面** 礎石や礎石据付け穴より、平面は方3間である。残存する心礎の中心と西北隅四天柱礎石柱座の中心から算出した中央間 (四天柱間) の柱間寸法は2.38mである。これを8尺と考えると、1尺は29.7cmとなる。後述するように、金堂・回廊創建時の造営尺は1尺が30.28cmと推定されるが、塔の造営は出土瓦の年代や遺構の重複 (第IV章1B参照) から、金堂・回廊創建よりも下ると推定され、1尺が29.7cmであったと考えても差し支えない。一方、端間の柱間寸法は、側柱筋で基壇が崩壊し、礎石据付け穴の一部しか検出し得ておらず、礎石の中心位置は正確には決めがたいが、おそらく7尺で計画されたと考えられる。したがって、塔の建物全長は22尺 (6.53m)、基壇規模は43尺 (約12.8m) で、側柱心からの基壇の出は10.5尺 (3.12m) となる。方位は、基壇犬走りの見切石から、北で西に約1°前後振れる。

造 営 尺 は  
29.7 cm

- 
- 1) 河内国分寺はあるが、7世紀後半の鳥坂寺にはない。おそらく後者であろう。大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告19、1968年、同『河内国分寺跡発掘調査概要』1970年。
  - 2) 註1) と同じ。
  - 3) 唐獅子の卷毛に復元している例 (奈文研『山田寺展』1981年 p.54) もあるが、巻きが逆方向である。中国では、唐獅子は牡丹とともに7世紀末~8世紀初頭に流行し、年代的にもふさわしくない。
  - 4) たとえば陳文帝陵の石獅子像である (姚遷ほか『南朝陵墓石刻』文物出版社、1981年)。
  - 5) 河南省文化局文物工作隊『鞏縣石窟寺』文物出版社、1963年、PL.80・84。
  - 6) 文化財保護委員会『四天王寺』1967年、Fig.69。鳥坂寺は註1) 文献、図版4・6
  - 7) 奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観一』(法隆寺一) 岩波書店 1972年、『大和古寺大観一』(法起寺・法輪寺・中宮寺) 岩波書店、1977年参照。
  - 8) 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936年、p.136。

## F 回廊内のその他の遺構

## i 参道と通路 (Pl.4・5・9~12, Ph.2・3・53, 付図1・2)

**参道SF004** (Pl.9・10, Ph.53) 中門SB003と塔SB005の間には、南北方向の参道SF004がある。幅は約1.5m。長さ20~60cm、幅10~20cmの花崗岩の自然石をとし、側石の間には2~3cm低い位置に瓦小片を敷く。外側の地面からみた側石の高さは5cm前後。遺存状態はよくないが、側石の外も本来は瓦敷であり、高さも一部では側石の上端近くまでであったことがわかる。

南の中門寄りには地下げのため失われているが、北は塔南面階段の犬走り近くまで側石の抜取り痕跡と側石間の瓦敷面が残る。残存長約7.7m (復元総長約11.6m)。傾斜は、側石の上面でみると、北から6mあたりまではゆるやかだが、以南は2~3°とやや強くなる。このことは中門の復元成果ともほぼあう (本節B参照)。

参道SF004は、方位が塔や回廊などより、さらに北で西に振れている (N2°弱W)。塔南面階段の犬走り見切石位置でみると、参道の中軸線は塔の中軸線より東約20cmになる。犬走りは塔の中軸線より東に15cm前後寄り、むしろこれにあわせた可能性が高い。他方、中門の復元北面階段位置でみると、参道の中軸線は中門の中軸線より東約40cmとなる。中門の中軸は回廊の柱間から復元したものだが、金堂や塔を含めた伽藍の中軸線とは大きく異なる。したがって、参道の中軸線が中門の中軸線から40cmも東になる理由は明らかでない。参道は、南半部では少し西寄りになっていたと推測しておく。

塔南参道は  
8世紀中頃

時期は、塔建立後の整地土上 (本節E参照) に設けられており、塔建立時かそれ以後となる。方位が振れていることや側石間の瓦敷に縄叩き目平瓦があることからすると、回廊内を瓦敷とした時期、奈良時代中頃になる可能性が高い。上をバラス敷が覆い、10世紀には参道として機能を失ったことが知れる。塔建立時にも参道はあったであろうが、推定の域を出ない。

**SF205** 東面回廊の東扉口SX065の西にある回廊内の通路。南と北に心々で約1.2mの距離をもつ幅約10cmの細溝SD237・238がある (Pl.4, Ph.2, Fig.22参照)。これを西に延長すると金堂の礼拝石と灯籠の間になりSX065から金堂への通路と考えた。南のSD238はSX065の南扉の軸摺穴、北のSD238はSX065の中心にほぼ揃う。SX065の北扉の軸摺穴位置には溝がなく、東扉口の南半の幅で通路としたようである。

金堂西通路

年代は、SD237・238が下層瓦敷を切り、しかもバラス敷より古いことから、8世紀後半~9世紀に比定される。ただし、SD237の北肩は瓦が列として残り、下層瓦敷の時期、8世紀中頃~後半に存在していた可能性もある。東面回廊の西雨落溝SD061には、SF205位置に階段の痕跡がない。おそらく木製の橋などが架かっていたのであろう。

**SX248** (Pl.11, Ph.3・44) 金堂北面階段の犬走り見切石に接して板石SX248がある。東西約50cm、南北約20cm。板石の東辺は金堂の中軸線にほぼ一致。レベルが高く、上層瓦敷に伴うものであるが、幅約1mで北に延び、北面回廊の北中央扉口SX030に至る通路であった可能性が高い。下層瓦敷もほぼこの位置 (Ph.3, Fig.22参照) で目地が北に延びており、通路としての意識があったと推定される。

金堂北通路

ii 灯籠SX012 (Pl.10・23、Ph.51・52、付図1・2)

塔と金堂のほぼ中間に灯籠SX012がある。詳しくみると、灯籠(台石)心は、金堂と塔の中軸線上にあり、金堂南面階段と塔北面階段間の距離約11.4mの中間に位置する。両階段の犬走り間だと、灯籠心は約30cm北になる。

遺構としては、灯籠の台座とこの下の台石及び石組みの壇が原位置に残る。竿石以上は失われているが、周辺から凝灰石の火袋や竿石の破片が出土しており、復元が可能である(第V章10A参照)。ここでは原位置に残る遺構について触れておく。

石組みの壇は、一辺約1.9mの略方形であり、長さ20~40cm、幅10~20cm、高さ25~35cmの自然石を側石とし、内部に小礫を敷く。外は瓦敷で側石上面までの高さは10~15cmである。工程としては、まず側石や後述する台石を、それらの上面から20~30cm下の整地(上層整地)面に直接据える。続いて上層整地と同質の土(褐色土)を側石の外に約10cmほど整地し、内には20cm前後盛って壇としている。壇上の礫敷下には、旧地表と考えられる炭化物や瓦、小礫を含む黒褐色土がある。

石組み壇は  
改 修

東面の側石は南から3個目以北がやや小振り、内側に寄っている。しかも、この側石のすぐ東側の瓦敷下で採取痕跡を確認していることから、東面の側石は改修されたもので、本来は直接的になっていたと推定される。側石の周囲には、下層瓦敷側石に密着しており、側石の改修は8世紀中頃になる(SX012B)。壇上に礫を密に敷いたのもこの時期であろう。

灯籠本体も  
据え直し

台石は東西約102cm、南北約60cmの略長方形の花崗閃緑岩で、根石を置いて据えたのち周辺に盛土する。台石には、中央南寄りに約1/3の位置に竿石の出柄を受ける、柄穴を穿つ。柄穴は直径15cm、深さ18cm。周囲には直径14cmの範囲で、深さ2~3mmの窪みがあり、竿石の当たり痕跡と考えられる。台石の南に接して3枚の塼が置かれ、この上に台座がかかる。台石の柄穴が南にずれており、不足分を補うものといえる。ただし、この塼は奈良時代(第V章2M参照)。塼の下には前述した旧表と考えうる黒褐色土がある。壇の改修にあわせて8世紀中頃~後半に、灯籠本体も改作あるいは据え直しが行われ、この折りに塼が新しく補われたと推測される。

台座は八角形の凝灰岩一枚造りである。細かく割れ、風蝕も著しいがほぼ完形品である。さしわたし寸法約78cm、高さ約15cmで、上半部に直径約60cmの単弁八弁の反花を造り出す。反花の中央には竿石を立てる直径25cmの円孔をあけ、孔の周囲に幅約7cm高さ、約3cmの凸帯を造り出す。下面は平坦でなく、縞っており、下の台石との間には土や小礫、それに鉄釘をつめて安定させている。なお、台座の円孔は、台石の柄穴より心が西に3cmほどずれている。このずれは、おそらく竿石を抜取った時に生じたのであろう。

改修以前の時期については、決め手はないが、金堂創建時とみていいであろう(SX012A)。東面大垣付近(第9次調査区)で素弁蓮華文を造り出した石が出土しており、これが金堂創建時の灯籠の台座か中台であった可能性も残る。だが、現存する台座は、蓮弁が金堂や回廊の礎石と類似することなどから、これが当初のもので壇は改修を受けたと考えておく(第IV章1B、第V章10A参照)。

10世紀後半  
まで機能

なお、SX012付近では多量の灯明皿が出土した。その年代から、SX012Bは8世紀後半頃から10世紀後半頃まで機能を果たしていたと推測できる。

## iii 幢幡遺構ほか (Pl.9~12、Ph.2、Fig.53~55・205~207、付図1・2)

**SX180** 中門の東北東にある一辺約0.7mの柱穴1個である(Ph.2・6)。径15cmほどの柱痕跡があるが、断割り調査をしていないので深さは不明。西方は1.2m近く地下げされており、対となる柱穴があった可能性はあるが、ほかの3方には柱穴はないことから、幢幡を建てた穴である可能性が高いと考える。SX180の位置は、伽藍中軸から東約12m、南面回廊北雨落溝の北側石から北約4mになる。中門の推定北東隅から、東北東5.5~5.7mにあたる(Fig.24参照)。

中門北東に

**SX181~183** 塔基壇の断割り調査時に、塔の北面階段及び犬走り下で検出した3個の重複する穴(Fig.51参照)。北のSX181、中央のSX182、南のSX183の順に新しくなる。最も古いSX181は一部を検出しただけで、南北0.4m以上、深さ約0.8m以上、SX182は南北2.0m以上、深さ約1.0m、SX183は南北0.9m以上、深さ約0.5m。

塔建設以前  
金堂南方に

これらはいずれも塔の掘込み地業より古く、ベースは周辺の土層から推して金堂基壇築成途中の中層整地面である。上を覆う土は判断が難しいが、金堂の最終整地(上層整地)に対応させると、SX181~183は金堂造営中の土坑となろう。ただし、埋土に遺物をほとんど含まず、黄褐色粘質土で一気に埋めた状況や、金堂のほぼ真南にあることからすると、幢幡を建てた穴であった可能性もある。この場合、SX182が幢幡支柱の掘形、SX183がその抜き取り痕跡、上を覆う土は抜き取り後の整地になろう。SX181は一時期古い幢幡用の穴であったのかもしれない。ちなみにSX183の北肩の位置は、金堂南面階段の犬走り見切石から南約9.8m、灯笼SX012の心から南約5.8mに位置する。

**SX184・185** 塔基壇の断割り調査時に、塔の掘込み地業下や、塔構築直後頃の整地土A下で検出した2個の穴である。ベースは金堂基壇築成途中の中層整地(標高118.2~118.3m)であり、時期は金堂創建時における。柱の抜き取り痕跡は不明だが、金堂や回廊の方位にほぼ揃えて南北に位置することから土坑ではあるまい。金堂造営時の作業小屋としては穴が大きく深いことから、幢幡を建てた穴と推測する。

SX185は塔西面階段すぐ北の犬走り下で検出(Fig.51参照)。東西1.2m以上、深さ0.8m以上。SX184はSX185から南約5.0mで検出した穴(Fig.53)。東西約0.9m、深さ0.9m以上。それぞれが2個1対であるのか、単独であるかは不明である。

位置的には、SX184・185の心は伽藍中軸から西へ7.8~8.0mで、金堂の西妻柱から少し西あ

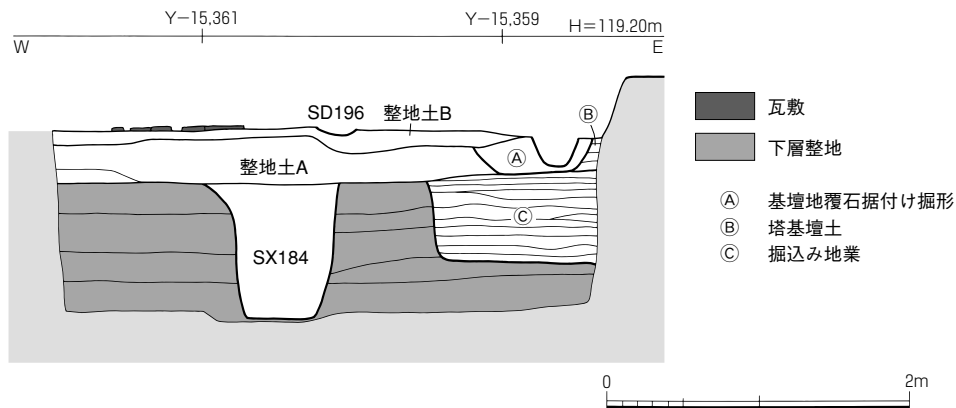


Fig.53 塔掘込み地業とSX184 1:50

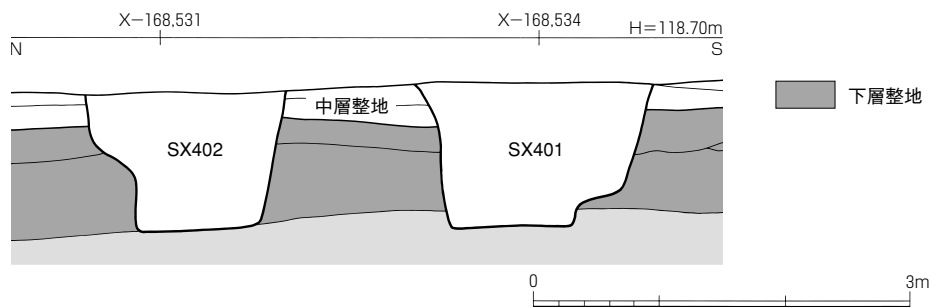


Fig.54 帷帳遺構SX401・402 1:60

たりになる。両者は南と北に約5mの距離を置く。他にどれぐらいの穴があったかは不明だが、2本以上の帷帳が南と北に建っていたとみて誤りあるまい。西側だけでなく、伽藍中軸を挟んで東側にもあったであろうが、断割り調査の範囲が狭く、検出していない。

**SX401・402** (Pl.10) 塔西方で検出した2個の穴。南北方向の断面 (Fig.54) でみると、南穴SX401の北壁と北穴SX402の南壁はほぼ直だが、他方の壁は両者とも上方に拡がり抜取り痕跡のようになる。大きさは上端で南北1.6~1.9m、下半で南北1.0~1.1m、深さは1.2m以上。検出時のベースは中間整地だが、削平のため掘込み面は不明である。

位置的にみると、SX401・402の中間点が、塔の東西方向の中軸線にのる。柱穴の南北心々距離は2.44m。おそらく唐尺で8尺であろう。2個の穴が支柱用で、この間に帷帳の竿（主柱）が建っていたと考えられる。塔の南北方向の中軸線からは21mほどになろう。西の対称位置にも想定されるが、瓦敷が残るため検出していない。近い位置には、次述するように下層瓦敷の時期にSX014があり、SX401・402及びこの対称位置に想定する帷帳支柱は、下層瓦敷の8世紀中頃~後半以前、塔の創建頃に比定できよう。

**SX404** 塔・金堂間の西方でSX404の一部を検出 (付図1)。調査区北壁にかかったもので詳細不明だが、東西長約2.6m、深さ1.1m以上。上面が削平されており、掘込み面は不明。出土遺物もない。淡黄灰色粘質土で一気に埋め戻している。単なる土坑かもしれないが、帷帳を建てた可能性もある。ちなみに穴の心は、伽藍中軸線から西約23mになる。東の対称位置は瓦敷があり、検出していない。既述したSX181~183の真西にあたる点は計画性を窺わせる。

塔・金堂横に立つ土管

**SX014・015** ともに下層瓦敷面に土管を立てたもので、時期は8世紀中頃~後半になる。SX014は塔東の土管 (Pl.10, Fig.55-1)。鏝付きと推定される粘土板作りの土管で、上・下端を欠く。残存高約32cm、残存上部内径約22cm、残存下部内径約26cm。土管は、一辺約40cm、深さ約45cmの掘形内に下約20cmが埋まり、上約10cmが下層瓦敷面から出ていた。この種の鏝付き土管は全長が50cm以上 (第V章2M参照) あり、SX014ももっと高かったと推測される。

SX014の心は、塔心礎心から東約19.8m、東面階段の推定犬走り前面から東約9.8mで、塔の東西方向の中軸線から15cm前後北になる。西の対称位置にもあったであろうが、調査区外のため確認できていない。

SX015は金堂前の灯笼SX012の東の土管 (Pl.10, Ph.5-2, Fig.55-2)。粘土紐作りの鏝付き土管様製品で、上・下端を欠く。残存高約13cm、内径約25cm。掘下げていないため掘形の大きさ不明。土管は下層瓦敷面から10cmほど上に出ていた。

位置は、灯笼SX012の心から東約6.6mで、伽藍の東西方向の中軸線で復元すると南に約10m

になる。西の対称位置にもあった可能性があるが、削平のため確認できない。

SX014・015がどのような機能を果たしたか不明。だが、単に立てただけではなく、何らかの飾りを差し込んでいたと推測する。

**SX229・235・240** (Pl.5、Ph.2) SX235は金堂北東にある東西2個の柱穴、SX229は金堂の東にある南北2個の柱穴、SX240はSX229の中間にある南北方向に細長い土坑状の穴。

SX235は、断割り調査で検出したため詳細は不明だが、一辺0.8m程度、深さ0.3m以上。両柱穴間の距離は約6mあるが、中間に穴はなく、それぞれ独立したものと考えられる。

SX229は、一辺0.6~0.9m、深さ約0.5mで、ともに柱抜き痕跡がある。抜き痕跡の心々距離は約6.9m。中間に柱穴はなく、土坑状のSX240がある。SX240は長さ約2.4m、幅約0.6m、深さ約0.2mで、底の一部に瓦を敷く (Fig.20)。南・北端は、SX229の柱穴から1.8~2.0mの距離をおく。

SX229とSX235の東柱穴は心が揃い、方位も金堂・回廊に近い。したがって両者は金堂の東北を鍵手に囲むように配置されたと考えられる。SX229の位置は、金堂東面階段の犬走り見切石から東約12.6m、SX235は金堂基壇の犬走り見切石から北約0.5mにあたる。

既述したようにSX235は6mの間隔をおく単独の柱穴。SX229も約6.9mの間隔をおき、中間に柱穴はない。SX235の東柱穴とSX229の北柱穴との間は8.5m前後で、この間にもう1個柱穴があった可能性もあるが、これらは堀ではなく帷帳を建てた可能性が高い。SX229の中間にあたるSX240は、SX229とほぼ筋が揃う。機能は不明だが、帷帳の竿を嵌めるために、穴を穿った長大な材を埋めたと考えておく<sup>2)</sup>。

SX229・235は、バラス敷下で検出しているが、瓦敷との新旧関係は不明。SX240は下層瓦敷の下にあり、しかも後述する7世紀前半の土坑SK405より新しいことから、7世紀後半~8世紀中頃になる。西の対称位置にもあったであろうが、調査区外である。

**SX216** 金堂の北にある東西2個の穴 (Pl.12、Ph.2)。穴は一辺0.7~0.8mの隅丸方形。深さは 金堂の北に

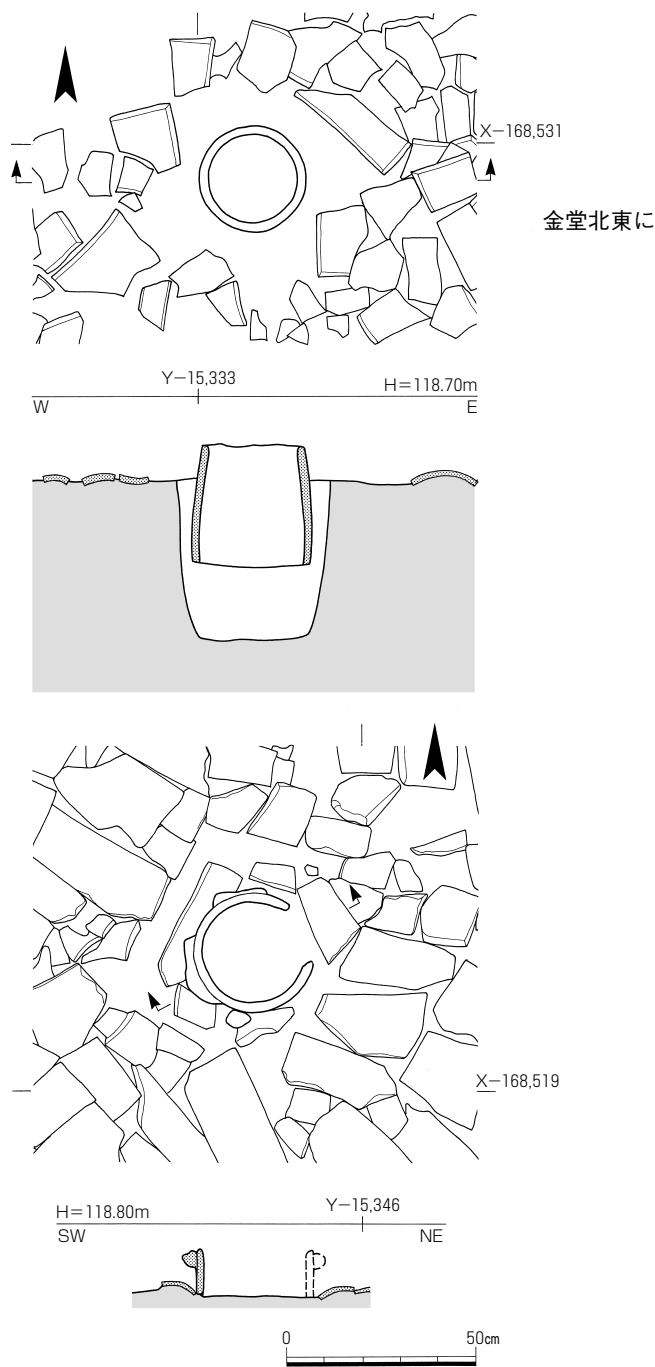


Fig.55 SX014 〈上〉・015 〈下〉 1:20

15cm以上、柱抜き取り痕跡も不明。だが、伽藍中軸線を挟んでほぼ対称位置にあり、柱穴の可能性が高い。心々距離は約4.2m。塀でなく、小規模な幡などを建てたのであろう。ちなみにSX216の位置は、金堂北面階段の犬走り見切石から北約5.4mになる。付近は削平が深く、掘込み面は不明だが、伽藍中軸線を意識していることから、金堂焼亡以前であることは確かである。

**小結** 近年は、各地における寺院跡の発掘調査によって、境内の各所に幡幡を建てた様相が明らかになってきている。南門前や講堂周辺の幡幡遺構については、本節G・Iで触れることとし、ここでは回廊内と中門周辺の幡幡遺構について、山田寺と他との比較、検討しておく。

中門周辺の幡幡遺構については、奈良時代後半の様子を窺わせる『興福寺流記』の南中門条に引く宝字記が参考になる。「四角各幡一株、二各金銅鳳柱。頭各冠二金銅筒一。自ヨ鳳。二翼備」とあり、山田寺のSX180が東北隅の一本になる可能性を示唆する<sup>3)</sup>。他の三隅にもあったであろうが、削平されたり、調査区外のため確かめられない。武蔵国分尼寺では、中門の北約8.6mの地点で、大きくて深い柱穴1個を検出。中軸線から東約1mの位置であり、対称の西にもあった可能性がある。四隅でなく、中軸位置にもあり得ることは、後述する山田寺金堂南のSX181～183の理解に一助となる。

武蔵国分寺では中門と回廊西南隅とのほぼ中間、やや南寄りの位置でも1個の大きく深い柱穴を検出<sup>5)</sup>。遠江国分寺では回廊の東南方で2個一対の大きな柱穴を検出<sup>6)</sup>。一方、7世紀後半の奈良・紀寺（小山廃寺）では、回廊の西南入隅近くで2個一対の柱穴を検出<sup>7)</sup>。中門の四隅としてはかなり離れる。時代は寛弘4年（1007）と新しいが、『四天王寺御手印縁起』に「宝幡肆基、二本廊東西、一本廊乾南、一本廊長角」とあり、回廊の隅にも幡幡として建てていたことに対応しよう。

塔と金堂周辺の例 山田寺の塔の真西では幡幡竿の支柱と考える2個一対の柱穴SX401・402を検出。680年発願の大和・本薬師寺では、東塔の西で2個一対の柱穴を検出。西塔の東にもそれらしい穴がある<sup>8)</sup>。7世紀後半の栃木・薬師寺でも塔の西で2個一対の柱穴を検出。したがって、塔の近くにも幡幡を建てたことを知りうる。

山田寺の金堂の南では、SX181～183が中軸線近くにあり、このほぼ真西にSX404がある。また、金堂の北東には幡幡遺構と考えるSX229・235がある。

7世紀前半に創建された奈良・奥山久米寺では、金堂と塔の間の中軸線上で、1個の大きくて深い穴を検出<sup>9)</sup>。灯籠を据えた穴か、幡幡を建てた穴かとするが、深さからみて後者の可能性が高い。武蔵国分尼寺<sup>10)</sup>では、金堂の前約4mの位置で、幡幡を建てたと推測する1個の大きく深い柱穴を検出。中軸線から西約1mであり、対称の東に柱穴を想定できる。同国分尼寺では時期が異なるが、金堂の前方約15mの位置でも、中軸線を挟んで東西にそれぞれ2個一対の穴を検出。山田寺のSX181～183・404も、幡幡を建てた穴であった可能性は十分ありうる。

金堂東北部での幡幡遺構の発見例はないようだが、『四天王寺御手印縁起』には東北に宝幡を建てたと記しており、参考となる。『四天王寺御手印縁起』には「宝幡肆基、二本廊東西」ともあり、SX181～183・404がそれに類したものであったことを推測しよう。

『東大寺要録』の実忠二十九箇条には、西大寺の御齋会に計20基の幡を建てたと記載する。その位置は示されていないが、種々の法事等に境内が飾りたてられたと推測できる。山田寺の各所で検出された幡幡遺構は、そうした様子を髣髴させるものといえよう。



## iv 土 坑 (Pl.5～9・13、Ph.2、付図1・2)

**SK006** 塔基壇犬走りの南西隅から西4～5mにある大土坑である(Pl.9・10・13、Ph.5)。形は歪つで、東西は約16m、南北6～9m。底も凸凹があり、深さは東で0.8～1.1m、西で0.9～1.5mである。

西半はかなり削平されているが、東半では上を覆うバラス敷が部分的に残り、金堂造営時の最終整地である上層整地を切り込んでいることがわかる。土坑内からは、山田寺式軒丸瓦B種(塔創建用)を含む多量の瓦、韃の羽口、鉄滓、手斧による削り屑、刀子の柄、7世紀後半(飛鳥Ⅳ)の土師器や須恵器などが出土。したがってSK006は塔創建時の廃棄物を捨てた穴と考えられる。

塔 創 建 時

**SK405** 金堂の東面階段犬走りから東約7mにある楕円状の土坑(Pl.5・10、Fig.20参照)。南北約7.5m、東西約4.6m、深さ約0.3～0.5m。底は北と南がやや低い。

SK405は瓦敷下で検出。土坑内からは多量の瓦のほか、布片や7世紀後半(飛鳥Ⅳ)の土器が出土している。したがってSK405は、金堂を塔創建にあわせて修理(第Ⅴ章2、第Ⅵ章3参照)した折に、その廃棄物を捨てた穴と考えられる。

金 堂 修 理 時

なお、SK405と上の瓦敷の間には、厚さが10～20cmの整地土(暗黄褐色土)があった。この整地土は、土坑を中心として、東西に12m以上、東寄りでは南北に20mほど広がる(Fig.19・20参照)。土坑の埋戻しにあたって、地盤沈下(第Ⅳ章2A参照)した所などを併せて整地したもので、塔最終の整地である整地土Bに対応しよう。

**SK206** 金堂の北東にある楕円形の土坑(Pl.11、Ph.54、Fig.56)。長径約3.4m、短径約1.9m、深さは瓦敷面から約0.4～0.6m。検出面のバラス敷からださらに10～20cm深くなる。底は北と南が深い。

土坑内からは、多量の瓦と、寸法等からみて回廊用と考えられる巻斗、肘木、茅負などの建築部材、円筒状石製品(内径18～22cm、残存長約51cm)、11世紀中頃の土器が出土。したがってSK206は、11世紀に倒壊した回廊の部材を暫くしてからかたづけけた土坑のようである。円筒状石製品は、灯籠の竿石とする見方があったが、塔の椽管か、幢幡の支柱を嵌め込む管の可能性が強い(本項註1参照)。

回 廊 倒 壊 後

**SK203・204・207** 金堂・塔周辺にある楕円形の土坑(Pl.10～12、Ph.2)。いずれも焼土混り

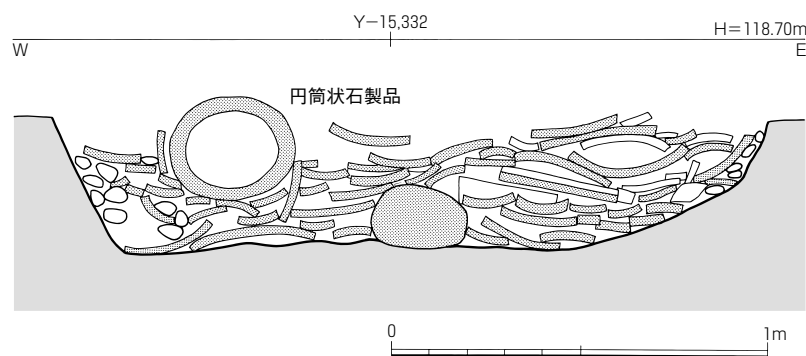


Fig.56 土坑SK206 1:20

金堂と塔の  
焼 亡 後

の暗褐色土（焼土層）を切り込み、しかも多量の瓦や12世紀中頃から後半の土器を含むことから、金堂・塔焼亡後のあとかたづけに伴う土坑と考えられる。

SK203は、金堂・塔間の西寄りにあり、長径約1.5m、短径約1.2m、深さ約1.1m（付図2）。SK204はSK203の北西にあり、長径約6.4m、短径2m以上、深さ約0.3m（Fig.58）。SK207は金堂の北東にあり、長径約5.0m、短径約3.5m、深さ約0.5mである。

**S K 564・567** 回廊の東南入隅近くで、瓦敷下の整地土を10cmほど掘下げて土坑S K 564・567の一部を検出した（Pl.4）。深さはともに0.5m前後で、底は古墳時代の流路SD568の堆積土に至る。瓦片を含み、回廊造営か修理時に廃棄物を捨てた穴かもしれない。

v 溝（Pl.3・9～12、Ph.2、付図1・2）

**SD236** 回廊東南入隅近くで検出した湾曲する溝（Pl.3・9）。幅は2.5～4.5mで、西で広くなる。深さは1.1m前後、底の標高は東で約117.6m、西で約117.3m。埋土は灰色砂で、南面回廊用の地覆石などを含む。バラス敷より新しく、14世紀中頃の井戸SE231よりは古い。

回廊倒壊後

東面回廊南端部の知見（Fig.36）によると、回廊倒壊後で、中世の粘土・砂互層堆積B以前の堆積層（底の標高約118.8m）があり、これがSD236の上流となろう。下流は、後述する南門SB001の東と斜行するSD629とみていい。時期は、東・南面回廊が倒壊した11世紀前半以後だが、中門や南門を避けて南に迂回させているらしいことから、山田寺が焼亡する12世紀後半（末頃）以前に比定できよう。埋土に金堂・塔所用と推定できる火を受けた石材が含まれること（第V章10A参照）からすると、焼亡後にも存続した可能性がある。

**SD196・197** 塔の北辺から西辺を囲むようにしてある細溝（Pl.10、Ph.47・48）。上面を削平されており、残存部で幅20～40cm、深さ10～40cm。暗褐色土（焼土層）を切り、塔焼亡後になる（Fig.51）。次述する金堂のSD208～211と同様に、焼亡後の跡かたづけに塔周辺の排水溝として掘削されたと考えられる。

金 堂 と 塔  
焼 亡 直 後 頃

**SD208～211・213・215** 金堂の周囲をめぐる溝とその排水路。多量の瓦や焼土を含む暗褐色土（焼土層）を切り、金堂焼亡後のあとかたづけに、排水のために掘削されたと考えられる。

金堂の周囲をめぐるSD208～211は、幅0.8～1.5m、深さ0.5～0.9mである（Pl.11、Ph.2・54、Fig.44参照）。東辺のSD208や南辺のSD209の東寄りでは、焼材を杭で留めて護岸としている（Fig.20参照）。削平を受けていたためか、北・東・西辺では一時期だが、南辺のSD209では掘直しがある（Fig.57）。底の標高は、北・東辺中央で118.30m前後、南辺中央では118.10m、西辺中央では下層が118.30m、上層が118.50mと南に低い。

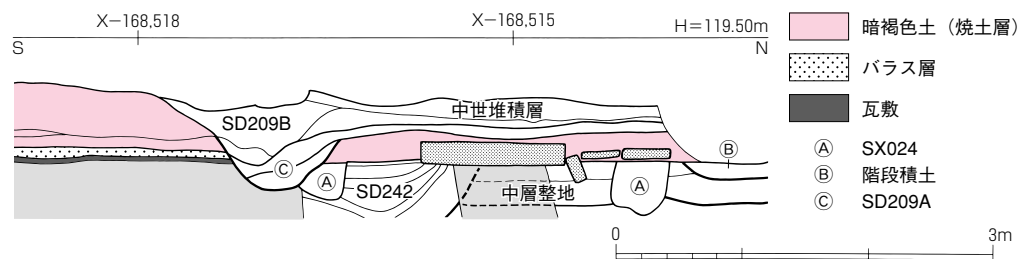


Fig. 57 溝SD209土層図 1:60

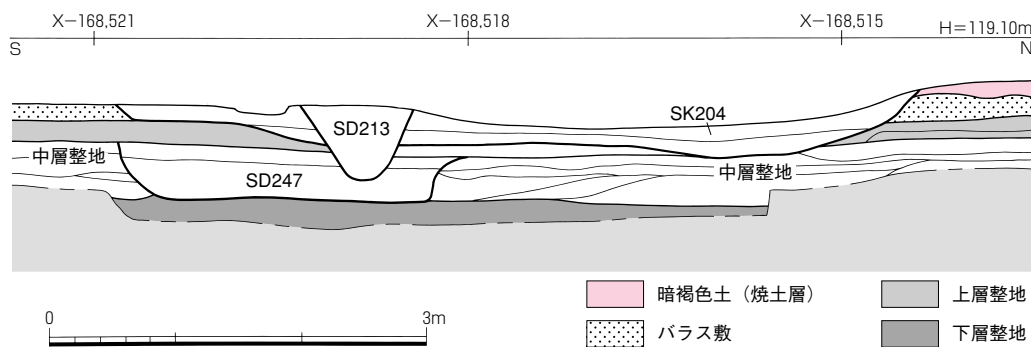


Fig.58 土坑SK204と溝SD213・247 1:60

SD213は上述した溝の南西隅からSX212をへて南西に斜行する溝 (Fig.58)。幅約1.0m、深さ約0.7m。底の標高は約117.9mである。SX212は側面に平瓦を斜めに立てて並べた暗渠 (Pl.10・11、Ph.54)。平瓦は2重で、小礫と瓦小片を含む粘質土を裏込めとする。蓋は削平されて残っていない。残存高約0.5m、上端端約0.6m、下端幅0.2~0.3m。

SD215は、金堂の周囲をめぐる溝の西北隅につながる南北溝 (Ph.11・12、Ph.54)。幅約15cm、深さ約10cm。南端には両側に石を置く (SX214)。あるいは暗渠になっていたのかもしれない。北が高く、北面回廊付近の水を南に流したようである。

SD208~211からは、12世紀中頃~後半の土器が出土。しかも、これらの溝は各面の階段を迂回するように掘削されていることから、金堂基壇が良好に残っていた焼亡直後に掘削され、金堂焼亡時期も12世紀中頃~後半に比定した。土器資料からは12世紀末頃にもなりうる。なお、SD211の東端近くでは、埋土から巴文軒丸瓦 (右巴文A種) が出土しており、13世紀前半頃にも機能していたことが知れる。SD210の掘直しに対応するのかもしれない。

- 1) 吉川真司は宝幢遺構を文献史料から再吟味し、宝幢を取付ける主柱「宝幢柱」は2本の脇柱 (支柱) の間に埋設した筒状固定具「管」に落とし込んだもので、常設でなく、儀式的折々に設置したことを示した (「長岡宮時代の朝廷儀礼-宝幢遺構からの考察-」向日市埋蔵文化財センター年報『都城』10、1999年)。
- 2) 註1) 参照。
- 3) 金子裕之氏の教示をうけた。
- 4) 国分寺市教育委員会『武蔵国分尼寺跡Ⅰ』1994年、第12図ほか。
- 5) 国分寺市教区委員会吉重蔵氏の教示をうけた。
- 6) 磐田市教育委員会『平成7年度遠江国分寺周辺 国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』1996年、第13図ほか。
- 7) 奈良県立橿原考古学研究所「明日香村紀寺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1977年度』1978年。
- 8) 『飛鳥・藤原宮概報26』1996年、『奈文研年報1997-II』1997年。
- 9) 『飛鳥・藤原宮概報18』1988年。
- 10) 註4) に同じ。

## G 講堂及び僧房と周辺の遺構

### i 講堂SB100 (Pl.15・16・22、Ph.55・56、付図1)

**遺存状況** (Ph.55) 講堂SB100は、大半が現山田寺の境内であり、礎石や地覆石が比較的良好な状態で残されている。しかし、第3次調査として実施した東端部は、明治期の水田化で地山面まで削平され、礎石や地覆石の据付け掘形や抜き取り穴を検出したにとどまる。調査区内で検出した礎石の据付け掘形や抜き取り穴は5個、地覆抜き取り穴は2個である。ともに東端の抜き取り穴には焼土を含む。基壇東端北にも焼土を含む赤茶褐色土があり、これを後述する中世の大溝SD455が切ることから、講堂は塔、金堂とともに焼亡したとみてほぼ誤りが無い。なお、講堂の造営は所用瓦などから天武朝に比定(第IV章1B参照)。

**基壇築成** 講堂SB100の基壇北際に設定した2本の小トレンチで、基壇の築成状況を知ることができた(Ph.56、Fig.59)。それによると、基壇の築成にあたっては、掘込み地業を行わず、平坦にした砂礫層の地山面や整地土面(標高約118.0m)上に直接版築を行っている。版築層は粘質土と砂質土を交互に搗き固めたものである。礎石の据付け掘形は基壇を20~30cm築成した段階で掘られ、根固め石を使わずに礎石を据え、その後さらに版築を行って基壇を完成させている。

**基壇外装** 第3次調査区では、基壇の外装はすべて抜取られていたが、東端で南北方向の地覆石の抜き取り穴SX460を検出した(Pl.16、Ph.55)。幅約35cm、深さ約6cmで、講堂妻柱心から地覆石抜き取り穴東端まで約2.2mを測る。抜き取り穴の埋土には焼土のほかに花崗岩片が含まれ、周囲には凝灰岩が散乱していることから、金堂や塔と同じく花崗岩製の地覆石と凝灰岩製の羽目石及び葛石を用いた壇上積基壇と推定できる。

基壇の規模は、後述のように造営尺を1尺=29.45cmとすれば、東側の出が約7.5尺になる。地覆石抜き取り穴SX460付近の地山面の標高は118.10m。講堂北トレンチでの礎石の標高は上面で118.88m、方座下端で118.70m。北は削平や攪乱のため地覆石の抜き取り穴も残らないが、付近の標高は約118.0m。一方、西の礎石上面の標高は118.84~118.91m。したがって、基壇裾から礎石上面までの高さは0.7mかもう少し低かったと推測できる。回廊等によって礎石方座下端を基壇上面とすると、基壇高はさらに20cm低かったことになる。なお、東端では階段は検出していない。西でも階段についての手掛かりはつかめていない。

**足場穴** (Pl.15・16) 第3次調査区では、講堂の東と北の地山面上で柱穴列SS471とSS472を検出した。SS472は東西に並んだ5個の穴で、径0.4~0.7mの略円形を呈し、一部に径20cmほどの柱抜き取り痕跡がある。深さは20~30cm、間隔は東端が約3.5mと広いが、他は2.5m前後。講堂北側の基壇の出を東と同様2.2mとする

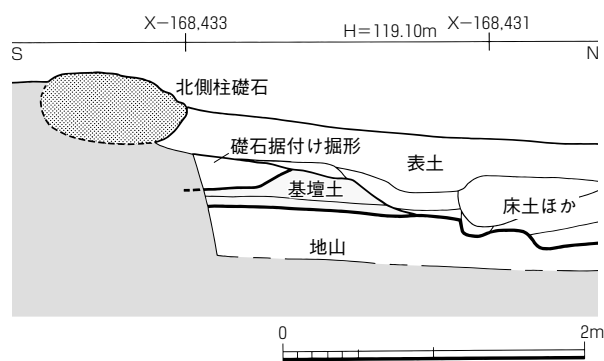


Fig.59 講堂SB100基壇と礎石据付け状況 1:50

と、この北1.5mほどになる。SS471はSS472の東端の穴から南約11mと約18mにある径約0.5m、深さ約20cmの穴。これらの間では削平のためか穴を検出していない。位置は、東の基壇端から約1.2mになる。

SS471・472は基壇からの距離が若干異なるが、講堂を囲む状況にある。建設時か修理時の足場穴になる可能性が高いと考えられる。

**礎石** (Pl.15・16・24、Ph.55・56) 調査区外の礎石は、29個中の13個が現存しており、北側東端の1個を除く12個が原位置をとどめる。

礎石は、すべて花崗岩の自然石で、上面と地覆石に接する面を加工している。北・西辺の側柱礎石は、上面に一辺0.9～1.1m、高さ5～8cmの方座と、この上に下部直径0.8～0.9m、上部直径0.7～0.75m、高さ11～12cmの円柱座を造り出すが、回廊や金堂のような蓮華座はない。また、柱筋には上端幅約38cmの地覆座を造り出している。ただし、南辺の礎石は石材が短いためか、地覆座の造り出しがない(Pl.24、Ph.56-3)。身舎の礎石は、側柱礎石よりわずかに大型で、一辺1.1m、高さ3～4cmの方座の上に、下部直径0.9m、高さ約10cmの円柱座を造り出している。上部直径は不明である。残存する2個とも地覆座はない。礎石上面の標高は大半が118.88～118.91mだが、西北部は118.84mと若干沈下しているようである。

蓮華座なし

第3次調査区内において検出した5個の礎石の据付け掘形や抜取り穴は、身舎の妻柱筋の3個と、南側の東から2個目及び側柱の東北隅の1個にあたる。このうち身舎の南2個の礎石抜取り穴は焼土を含む。大きさは残りがいいもので東西約1.7m、南北約1.5m、深さ約30cm。

**地覆石** (Pl.15・16・24、Ph.55・56) 北・西・南各側柱筋の礎石間には、1～3個の花崗岩の地覆石が並べられている。長さ0.5～2.4m、幅0.3～1.2mで、厚さは講堂北側において調査したもので約35cm。上面には上幅約38cm、高さ約15cmの地覆座を造り出す。上面のレベルは礎石の円柱座や地覆座と同じ。北側柱筋の東から5間目では、両端の地覆座上に、柱心から6cmほど外(北)に直径約15cm、深さ約10cmの軸摺穴が穿たれている(Pl.24、Ph.55-2)。穴の心々距離は2.56m。同様の軸摺穴は、西側柱筋の南端間北寄り、南側柱筋の西端間の東寄り、そして東から3間目の柱間西寄りの、合計3箇所にある。このうち前二者は対となる位置に軸摺穴がなく、片開きと考えられる(礎石の推定中心からの距離は約75cm)。なお、北柱筋の東から4間目にも地覆石のような石列があるが、これらは後補である。

**建物の平面** 多くの礎石と礎石抜取り穴などが残り、平面形式が桁行8間、梁行4間の六間四面であることは明らかである。柱間寸法は、現存する礎石の円柱座中心で測った場合、身舎の桁行柱間を15尺等間、梁行柱間を14尺等間とし、庇の出を10.5尺等間とすると最も各々の造営尺が揃う。だが、各々の造営尺は、南身舎柱筋で29.41cm、同側柱筋で29.44cm、西側柱筋で29.34cm、北側柱筋で29.59cmとなり、最大2.5mmはばらつく。これが施工誤差なのか、あるいは後世の地盤変動に起因するのかわからないが、いずれかの値を選択して復元すると場所によって柱底部が礎石からはみ出すことが起こるので、これらの平均値をとって29.45cmを講堂の造営尺と仮定しておく。この仮定にたつと、建物総長は東西111尺、32.69m、南北49尺、14.43m。基壇の出は東が7.5尺、約2.2m、基壇規模は東西126尺、37.11m、南北64尺、18.85mになる。

造営尺は  
29.45cmか

造営方位も、現状の礎石と地覆石は、全体として東で北にやや振れているが、その値は身舎南柱筋が1°18′、南側柱筋は1°33′であり、近接した身舎と庇でも揃っていない。また、北側

柱筋が $1^{\circ}19'$ で、西側柱筋が $1^{\circ}38'$ であるように直角にもなっていない。つまり建物の平面は微妙にねじれているので、これらの平均値をとって $1^{\circ}27'$ を講堂の造営方位と仮定しておく。

柱間装置  
の復元

各側柱筋の柱間装置は、左右対称と仮定して地覆石や軸摺穴から復元すると、南正面は両端間が片開き扉で、他はすべて両開き扉になる。東西両側面は南端が片開き扉で、他は壁になる。北背面は中央2間が両開き扉で、他は壁になる。扉はすべて外開である。

ii 講堂・北面回廊間の遺構 (Pl.6・12・16, Ph.55, 付図1)

講堂の東に  
幢幡置構

**SX445** 講堂の東で検出した一対の柱穴である (Pl.16, Ph.55, Fig.60)。掘形は一辺0.5~0.9mの隅丸方形で、深さ0.9~1.1m。径約35cmと約40cmの柱根が高さ0.8mほど残る。柱根の心々距離は約1.8m。他に関連する柱穴はなく、幢幡の支柱と考えられる。方位は東で南に約 $14^{\circ}$ 振れる。時期は出土した土器から10世紀後半になる。

位置は講堂南入側柱筋のほぼ東延長線上になる。両柱根の中央に建ったであろう幢幡の位置は、講堂の基壇端から東に約9m、南入側柱の延長線から南に約30cmである。奈良・巨勢寺では講堂の北で、2個一対の幢幡用と考える支柱穴が検出されており、講堂周辺のいくつかの場所で幢幡が飾られていたことを知りうる。

**SK430・454** (Pl.6・16) SK430は北面回廊の北約6mの位置で検出した径約2.5mの円形土坑である。削平されており、深さ約20cm。SK454は講堂の東北東約14mで検出した不整形な土坑。大半が北側にある中世の水路SD455で破壊されている。東西長2.4m以上、深さは削平されており10~20cm。ともに埋土から7世紀後半の土器が少量出土した。

**SK434・447, SX429** (Pl.6・12) SK434は北面回廊の北約13mの位置で検出した径約1.6mの円形土坑である。深さ約35cm。埋土から11世紀後半の土器が出土した。SX429はSK434の北から南に向かって落ち込む窪み。SK434より古く、11世紀中頃の土器が出土。

SK447は講堂の東約13mの位置で検出した一辺1.3~1.4mの隅丸方形の土坑である。削平を受けており、深さは約30cm。埋土から9世紀頃の土器が出土した。

**SD437** (Pl.6・12・16) 講堂と北面回廊の中間で検出した東西方向の溝である。幅約0.7m、深さは削平されており約10cm。埋土から奈良時代中頃(平城Ⅲ)の土器が少量出土した。底はわずかながら西に低い。

SD437の溝心は講堂南側柱心から約12.5mである。この位置は、講堂南側柱と北面回廊北側柱との心々距離約26.1mの中間点より、北約55cmにあたる。南の側溝が削平されたとみると、講堂と北面回廊との中央かやや南に幅1~2mの通路を復元することができよう。

講堂と回廊  
の間に通路

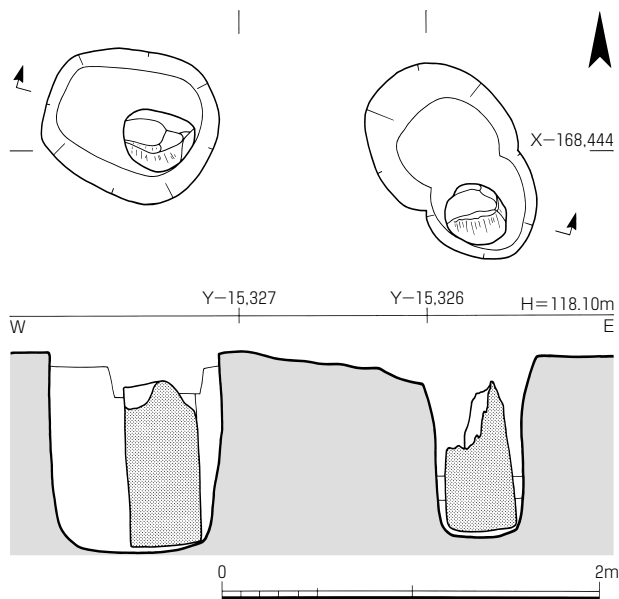


Fig.60 幢幡遺構SX445 1:40

## iii 僧房SB110・111 (Fig.61)

1978年に、講堂東北の里道上で、水道管理設に伴う立ち会い調査（幅約0.8m）を実施し、僧房と推定されるSB110の礎石2個と基壇土、南北溝SD478などを検出した。

**SB110** 検出した2個の礎石は、一部分を発掘しただけで、最大長約0.8m、厚さ20～30cm程度（Fig.61）。花崗岩で、上面は平坦だが、柱座の造り出しはない。東の1個は基壇土と推測される黄褐色土に据わっているが、西の1個は動いている可能性がある。検出した部分での各礎石中央間の距離は約5.2mである。東の礎石上面の標高は118.46mで、講堂の礎石上面の標高より40cmほど低い。基壇土は、断割り調査をしていないため、築成状況が明らかでない。

通常の配置からすると、伽藍中枢部の東と西にある僧房は南北棟であり、SB110も同様であろう。規模を知る手がかりは少ないが、北面回廊東端近くにある南北方向の通路SF669（本章2 C ii 参照）を北に延ばすと、SB110の東礎石のすぐ東になり、しかも西礎石のすぐ西で基壇土がなくなるので、SB110の2個の礎石は東と西の側柱と推測される。ちなみに東礎石は、北面回廊の北柱筋から北約53m、講堂SB100の東妻柱筋から東約25mの位置になる。

東の僧房

**SD478** 幅約1.5mの素掘りの南北溝。少量の瓦が出土した程度であるため、時期を確定できない。位置は講堂の北約16mで、伽藍中軸線から東5～6mであることは注目される。

その理由は、明治初期に、講堂の東北約4間（約7.2m）離れたところで、東西棟の僧房を推定させる多数の礎石が残っていたことにある。それによると、礎石は約30個で、東西に3列あり、間隔が各約2間（約3.6m）であったという（以下、SB111と称す）。大きな規模であり、その西辺を溝SD478が画した可能性がある。

北の僧房

本章2 Kで述べるように、山田寺は12世紀後半に焼亡したのち、鎌倉時代に入って復興をみる。講堂東北部には中世の大きな東西溝SD455が掘られており、SB111は中世でなく、古代の僧房であった可能性が高い。配置は、講堂の東に南北棟（SB110）、北に東西棟（SB111）があり、三面僧房の形式になろう。SB111の礎石が東西に3列であったとする点については、2棟の建物、あるいは大房と小房であった可能性が考えられるが、推測の域を出ない。

三面僧房か

『帝説』裏書によると、大化4（648）年に僧が住み始めており、『日本書紀』の大化5年条にも僧が登場している。したがって、金堂や回廊が造営された7世紀中頃には僧房があったとみていいが、三面僧房を備えていたかは不明といわざるを得ない。

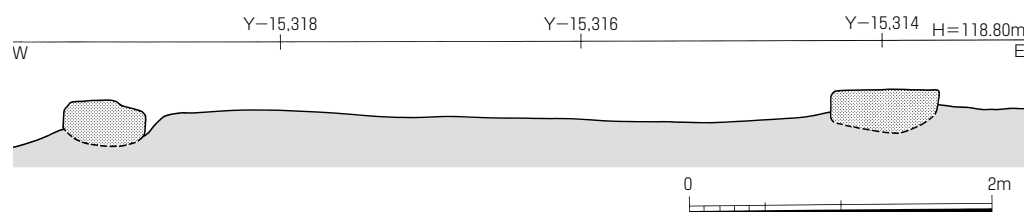


Fig.61 僧房SB110の礎石 1:50

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所『大和を掘る 1988』1989年。
- 2) 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936年、pp.137・138ほか。上田三平「山田寺址」（『奈良県に於ける指定史蹟 第2冊』1928年）では、礎石は約20個で、僧坊か食堂と推定。

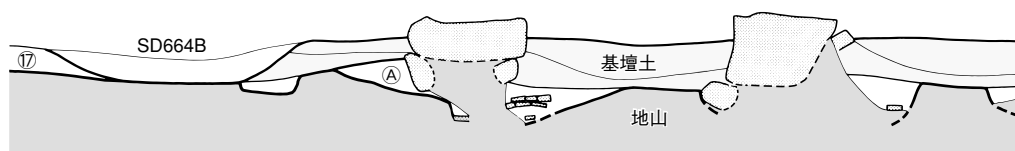
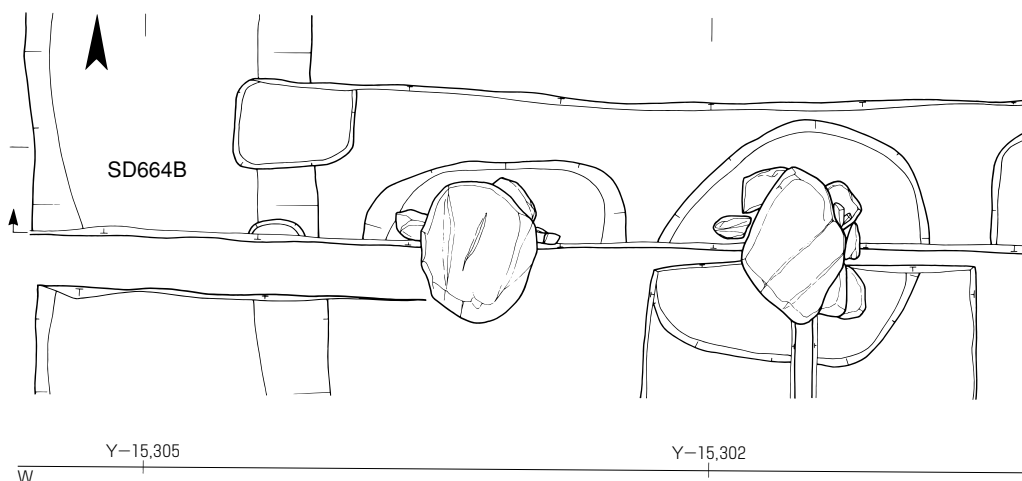
## H 宝蔵SB660 (Pl.5・6、Ph.57・58、付図1)

**残存状況** 回廊東北隅部の東側、回廊と東面大垣に挟まれた位置に、方3間の宝蔵SB660の礎石や基壇及び雨落溝が良好な状態で残っていた。そして、基壇上や周辺には木簡、木製品、金属製品が散乱し、西雨落溝上やこの西南からは建築部材や瓦が集中して出土した(Ph.57・58)。これらの上を11世紀前半の土器を含む黒灰色粘質土が覆っていることから、建物は回廊とともに倒壊したと推測できた。ただし、建築部材は茅負や垂木で、他の部材が全くと言っていい程ないことから、SB660は屋根部が南西に落ちたが、軸部はなお健在で、その後かたづけられたと想定される。また、基壇上の遺物は西半に集中することから、床が落ちた可能性もある。

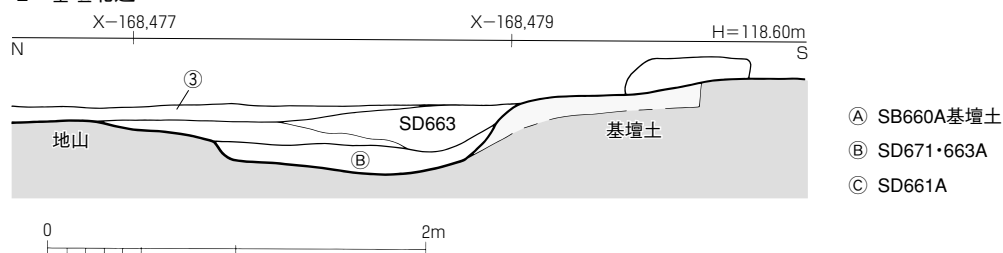
**基壇** (Ph.57、Fig.62) 宝蔵SB660は、基壇を部分的に断割って調査した結果、礎石や基壇土の積直しを行った可能性が高いと判明した。古いものをSB660A、新しいものをSB660Bとして、基壇の築成や礎石の据付け状況等を見ることにする。

**当初の基壇** SB660Aは、改作のために不明な点が多いが、掘込み地業はしていない。礎石の据付け掘形は、一辺1.0~1.5mの隅丸方形で、瓦小片を詰めて根固めとする。位置はほぼSB660Bの礎石下

1 基壇中央東西(断面図は反転使用)



2 基壇北辺





であり、柱間寸法もSB660Bと大差ないと考えられる。礎石の据付け掘形面は東にやや傾斜する地山面である。地形に逆らって東下りである点は、東面回廊東辺の雨水を、東面大垣西脇の南北溝SD693に排水計画したことによる（第IV章1B参照）。SB660Aの基壇土は西端で幅40cmほどが残存。後述する西雨落溝SD664Aの底からだとも高さ約20cm。基壇外装はない。

SB660Bの基壇築成にあたっては、まずSB660Aの基壇土を礎石の根固め面までほぼ全面的に除去したようである。南辺では、掘込み地業風（Fig.62-3）になるが、部分的で、全体にわたるものではない。その後、10~20cmの根石を置いて礎石を据え、乳白色粘質土を礎石の周囲に高くなるように積み、さらに上に暗青灰色砂質土を積んで基壇を完成させている。

SB660Bの基壇にも外装の痕跡がない。周囲をめぐる雨落溝SD661B・662B・664Bの底からだとも、残存する基壇上面まで高さは20~25cm、礎石上面までの高さでも35~40cmである。雨落溝外側の面からだとも、基壇上面とは差がなく、礎石上面が15cmほど高いだけである。基壇の出は残存するところで、東・西面が約1.1m、北面が約1m。南面は、後述する雨落溝SD661Bの浸蝕によって礎石の裾が洗われる状況になっているが、北面と同様と推測される。

**礎石**（Pl.6、Ph.57・58、Fig.62） 礎石は長さ・幅が0.6~1.0m、厚さが0.3~0.5mの自然石である。上面は平坦だが柱座の造り出しはない。上面の標高は、118.48~118.53mで、西に低くなっている。沈下したのであろう。東から第2筋目では、南から2個目以外の3個の礎石と、第3

改修基壇

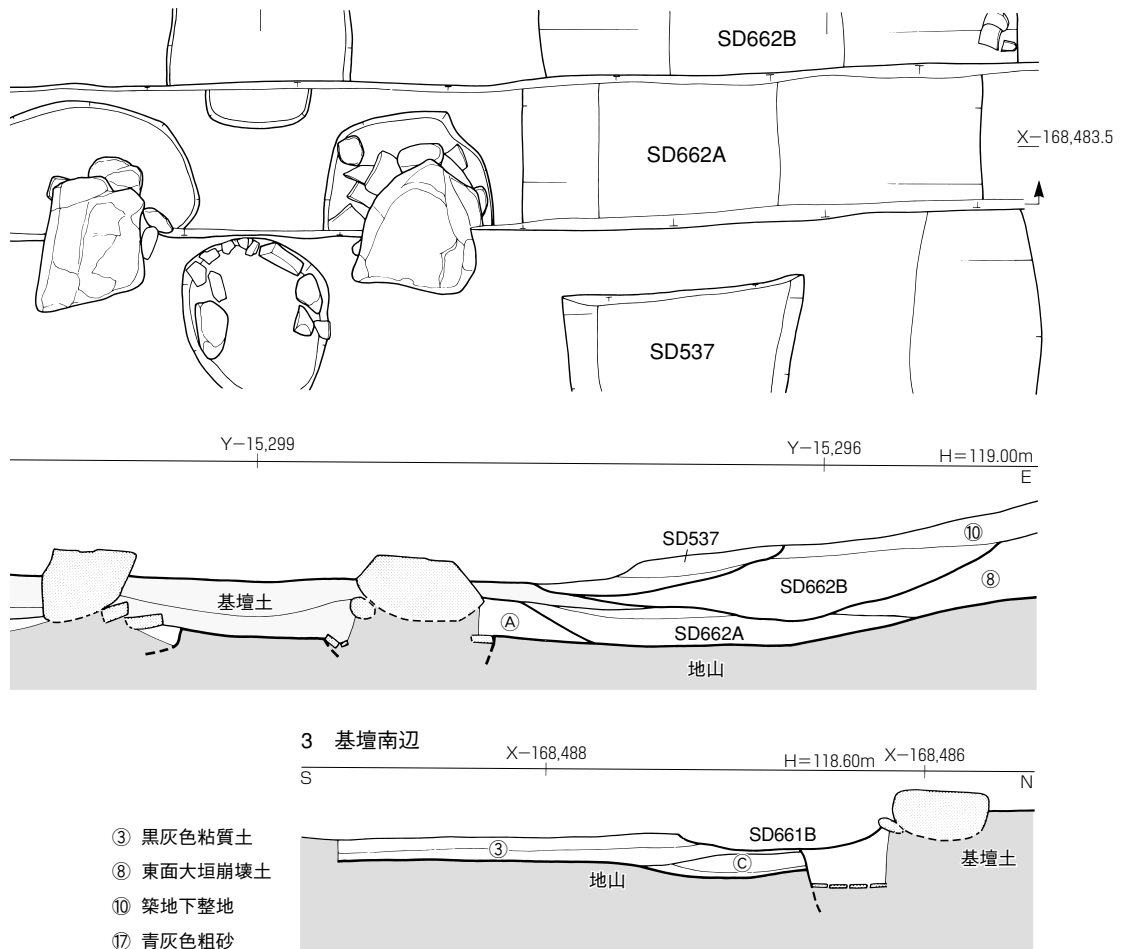


Fig.62 宝蔵SB660の基壇と雨落溝 1:40

**柱当たり痕** 筋目の南から2個目の計4個の礎石に明瞭な柱の当たり痕跡が認められた。直径は34~39cmで、それぞれの推定中心を測ると、東から第2筋目の南北総長は6.00mで、2.00m等間、第2筋目と第3筋目とは1.66mになる。また、建物の方位は、東から第2筋目でN0°51'39"Wである。

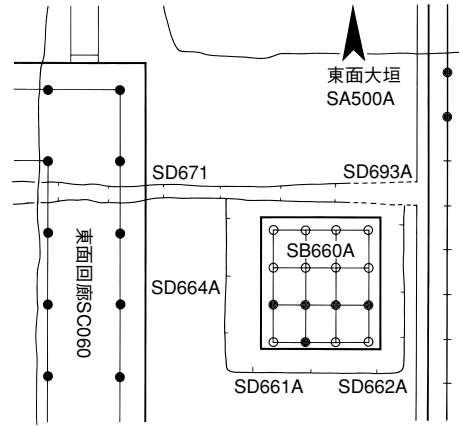
**建物の平面** SB660Bは、上述のように南北3間分の総長が6.00mで、2.00m等間である。東西は1間分が1.66mで、3間とも等間に割付けられることから、総長は4.98m。したがってSB660Bは南北棟であったと思われるが、出土した茅負に隅留めの仕口を残すものがあり、振隅の入母屋か寄棟であったと思われる。

造営尺について、桁行1間分の2.00mと、梁行1間分の1.66mに共通するものを探すと、前者が6尺、後者が5尺とした場合の造営尺の差が1.3mmと最も少ない。このときの造営尺は33.3cm前後となり、これによる計算上の柱位置と実際の柱の当たり痕跡のずれは、1間あたり1cm以内に収まる。造営尺を36.6cm前後とし桁行5.5尺、梁行4.5尺とする場合、造営尺を30.5cm前後とし桁行6.5尺、梁行5.5尺とする場合も、計算上の柱位置と遺構上の当たり痕跡の位置のずれは1間分あたり2cm程度に収まるので、十分に可能性があると思われる。ここでは回廊と金堂の造営尺30.24cmに近い30.5cmを造営尺とし、桁行6.5尺等間、梁行5.5尺等間を復元案としておきたい。

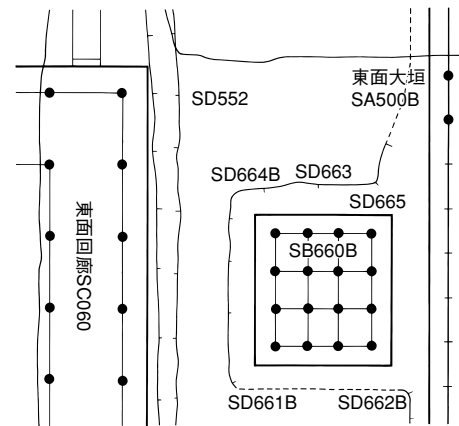
**雨落溝ほか** 宝蔵の四周には雨落溝SD661~664がめぐる。周辺の排水路との関係を絡めてやや詳しく記述しておく (Fig.63)。

**当初の排水** 当初のSB660Aの時期には、基壇のすぐ北に、回廊東北隅の暗渠SX670から続く東西溝SD671があり、東面大垣SA500の西雨落溝SD693Aに注ぐ。SD671は素掘りであり、幅は0.6~0.9mで東に広がっている。後述するように、東端部はSD665下、西端部はSD552・565の氾濫堆積土下になる。深さは宝蔵北では約30cm。

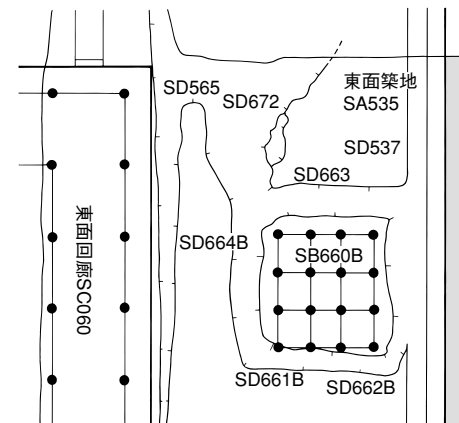
基壇の他の3辺には、雨落溝SD661A・662A・664Aがある。いずれも素掘り。東のSD662Aは幅約2.1m、深さ約20cm。すぐに東に南北溝SD693Aがあるが、両者の間はわずかながらも高くなっている。西のSD664Aは、SD664Bが重



1 7世紀後半~9世紀前半



2 9世紀中頃~9世紀末頃



3 10世紀前半~11世紀前半



Fig.63 宝蔵SB660の変遷 1:400

なり不明瞭だが、地山が窪みその存在が知れる。南のSD661Aは、宝蔵基壇の改作が深く及んだためか、北端を失っている（Fig.62-3）。残存幅約1.0m、深さ約10cm。底の標高は、それぞれ中央付近で、西のSD664Aが118.15m、南のSD661Aが118.05m、東のSD662Aが118.02m、北のSD671Aが117.98mと、東と北に低くなっていたことがわかる。

SB660Bに改めた時期には、基壇北のSD671は埋没（本節C ii参照）し、四周を南北溝がめぐ  
9世紀の姿  
る。いずれも素掘り。北のSD663は最終期の幅で約2.2m、深さ約40cm。中央での底の標高はSD671と同じで117.98m。他の3辺は掘り直される。南のSD661Bは幅約1.1m、深さ約10cm、中央付近の底の標高118.18m。基壇のごく近くにあり、南の礎石に及ぶ状況である。本来はもっと南にあったが、雨水の浸蝕によって溝の肩がわからなくなったと推測される。SD661Aとの間にある厚さ10cmの土が、SD661Bが広がった時期の堆積なのであろう。西のSD664Bは幅約1.4m、深さ約15cm、中央での底の標高118.15m。東のSD662Bは最終期の幅で約2.5m、深さ約35cm、中央での底の標高118.20m。

改作後の雨落溝は東北隅で素掘りの南北溝SD665、北西隅で素掘りの南北溝SD672に連結して  
10世紀の姿  
いる。SD665は後述するように東面大垣SA500の西の雨落溝SD693Bをやや西に掘直したものであり、これが埋まったのち、10世紀前半に南北溝SD537が掘られる（Fig.62参照）。一方、SD672は、南で幅約2.5mだが、北では大きく拡がり、東面回廊東の排水溝SD565と合流するようになる（本節C ii参照）。出土した土器は11世紀前半である。したがって、宝蔵SB660Bをめぐる雨落溝の水は、当初は北東のSD665に排水、やがて東が埋まり、10世紀前半になって北西のSD672に排水するようになったと推定できる。

**建物の性格と造営年代** SB660Bの倒壊に伴って、基壇や雨落溝の上に銅板五尊像、各種仏具、  
経軸、厨子部材、経典の出納に関わる奈良時代後半～平安時代初期の木簡などが散乱していた  
ことから、SB660は高床の宝蔵と考えた。宝蔵とした理由は、通常、経蔵や鐘楼は回廊北の東  
西に配置するのに、SB660が回廊の東にあり、経蔵と断定できないことによる。奈良・唐招提  
寺では「経楼」の他に、回廊東の北端から北に3棟の「経楼」「宝蔵」が並ぶ<sup>1)</sup>。SB660Bが倒壊・  
埋没後のことを記す建久9年（1197）の『多武峯略記』には、経蔵の跡が残るとある。したがっ  
て、山田寺ではSB660の他に経蔵があった可能性がなお残っている。  
他に経蔵も

SB660Bの造営時期は、上層の基壇土である暗青灰色砂質土の出土土器によって、9世紀中頃  
になる。倒壊時に茅負などとともに出土した瓦は天武朝のものであり、前身のSB660Aが天武朝  
創建で、SB660Bの屋根にはSB660Aの瓦をほとんどそのまま使用した可能性が高い。建物を解  
体せず移動させ、礎石を据え直したのち元の位置に戻したことも考えられよう<sup>2)</sup>。

なお、第VI章第1節D ivで述べるように、宝蔵の位置は、金堂や回廊の造営尺30.24cmで、回  
廊の中心から整数値で割り付けることができ、創建時（7世紀中頃）に計画されていた可能性  
もある。ちなみに、宝蔵の西側柱筋と東面回廊東側柱筋との距離は約7.9m、宝蔵の東側柱筋と  
後述する東面大垣SA500の柱心との距離は約3.8mである。  
創建時期に  
問題も残る

1) 長和4年（1015）の「招提寺建立縁起」（『護国寺本諸寺縁起集』）の東1～東3甲倉（校倉）にあたり、うち2棟が現存。現存建物は天平時代（奈良六大寺大観刊行会『六大寺大観 一二』唐招提寺一、岩波書店、1969年）。

2) 註1) 文献参照。

## I 南門及び南面大垣と周辺の遺構

### i 礎石建ち南門SB001 (Pl.8・9、Ph.59~61、付図1・2)

**遺存状況** (Ph.59・60) 床土直下で、南門SB001の基壇及び礎石等を検出した。基壇の東半分は上面がわずかに削平された程度で、花崗岩礎石6個が原位置に残るが、西半分は削平が著しく、計6個の礎石据付け穴や抜取り穴を検出したにとどまる。基壇はきわめて低い。基壇外装は、榛原石を並べたもので東北部の残りがよく、西面でも1石が残る。

なお、SB001の建設以前には掘立柱の南門SB599があるが、この遺構については便宜上、次の南面大垣とあわせて記述する。

**基壇** 南門SB001は、後述する前身南門SB599や旧南面大垣SA600の遺構面(標高117.70~117.75m)及び整地土を40cmほど掘り窪め、根固め石を用いずに礎石を据えた後、3層ほどの積土を施して基壇を完成している(Fig.66)。掘込み地業はしていない。礎石上面の標高は118.05~118.08m。基壇上面は、最も残りのいいところで礎石上面から約5cm下であり、基壇土の厚さは25~30cmとなる。

**基壇外装**は、北面の東半と東面の北半及び西面の一部に残る(Ph.60・61、Fig.65)。厚さ約10cm、高さ約20cm、長さ30~60cmの榛原石の板石を1石だけ立てた簡単な造りである。これらの側石の多くは外側に倒れていた。北面の西半には側石の抜取り痕跡が溝状に残る。

基壇の規模は、東と西の側石外々で約11.2m。南北は、北側石を建物推定心から折り返すと約7.7mである。基壇の高さは、礎石上面に対して、後述する北雨落溝SD647の底から5cmほどだが、SD647北側石上面からは1~2cmとほとんど差がない。南では後述するように玉石敷面から約15cmに復元できる。

**礎石** (Ph.60・61) 基壇の東半で、南北3個2列、計6個の礎石を検出した。長さ・幅が0.5~1.3m、厚さが40cmほどの花崗岩である。北の4個は上端がほぼ平坦だが、南正面の2個のみは上端直径約60cm、下端径約70cm、高さ2~3cmの円柱座を造り出す。礎石上面と基壇側石上面との差はほとんどなく、礎石は基壇面からわずかに出た程度である。

棟通りの東端の礎石には西に寄って1個、すぐ西の礎石には左右に2個の軸摺穴が穿たれており、東間と中央間に両開きの扉が吊り込まれていたことがわかる(Fig.66-1)。おそらく棟通り3間全てが扉構えだったのであろう。軸摺穴は、直径12cm前後、深さ5~7cm。心々距離は約2.4m。扉は、両開き(幅約1.2m)で、北に開く。

棟通りは  
全て扉構え

**足場穴** 南門の足場穴SS633を基壇南半の外側で検出した(Pl.8)。基壇の南正面は5間分であり、両端は北に折れて2間分つづく。正面では、西端と玉石敷に隠れて検出できなかった東から2個目を除いて、他の柱穴すべてに柱根が残る(Fig.64)。うち4本は径12~21cm、長さ25~65cmの荒削りな多角形の柱根である。東南隅では径約20cmの柱根の北に径14cmの丸太に近いものが添えられていた。柱間寸法は、中央間が約3.0mと南門SB001の中央間に揃えて広いが、東と西の各2間分は2.4m程度である。北に折れる2間分は1.8m等間。柱筋からの距離は東・西辺が約1.8m、南辺が約2.0mである。

SS633の時期は、南側の柱穴が、後で触れる南門SB001と同時期と考える橋脚SX622の柱穴やSB001の基壇南の玉石敷より古いことから、南門SB001創建時の足場穴といえる (Fig.64)。他に、基壇上の棟通りなどで小穴を検出。足場穴の可能性もあるがまとまりに欠ける。

**建物の平面** 南門は、礎石と礎石の抜取り穴から、正面3間、側面2間の建物で、棟通りの柱間がすべて扉となる、古代寺院では例のない三間三戸の形式であることが判明した。梁行と桁行の柱間寸法が異なることから、屋根は切妻であったと思われる。

類例のない  
三間三戸

『飛鳥・藤原宮概報20』では、1尺を29.5cmと仮定し、桁行3間は10尺等間、梁行2間は9尺を意図したが、施行ではやや小さくなったとした。南正面の2個の礎石の円柱座心々距離は2.97mを測り、これが10尺であれば造営尺は29.7cmである。一方、梁行寸法としては、南端の礎石の円柱座心と棟通り礎石の軸摺穴南端との距離が2.62mであるが、第IV章2Cで述べるように古代寺院の礎石と地覆材の大きさは密接に関係していると思われる。そこで軸摺穴の南に南門と回廊の礎石および扉口SX065の地覆材から復元される幅18cm程度の地覆材(蹴放ち)があったと考えると、梁行間は2.53mに復元できる。造営尺を桁行と共通のものとするためには、梁行1間2.53mを8.5尺とすればよい。したがって、造営尺は29.7cmで、塔に近い。

造営尺は  
29.4cmか

以上の仮説にたつと、建物の桁行総長は30尺、約8.9m、梁行総長は17尺、5.1m。基壇の出は、やや不揃いで、東が約1.2m、西が約1.1m、北が1.35m、南は玉石敷が残り約1.2m。計画としては、基壇規模は東西が38尺(約11.3m)、出が各4尺、南北が26尺(約7.7m)、出が各4.5尺だったのであろう。南の出が計画値より短いのは、後述する東西大溝SD625Bの北肩までの距離があまりなく、この距離を延ばして1.55mにした結果と推測される。

南門SB001は、後で詳述するように天武朝の創建と推定している。軸摺穴の方位をとると、東で北に $1^{\circ}23'$ の振れ。これが仮に建物全体の方位を示すとすれば、回廊などの振れより大きく、後述のやはり天武朝造営と思われる講堂の振れ $1^{\circ}27'$ に近い。

**雨落溝** (Ph.60) 基壇のすぐ北側に、幅約0.7m、深さ約10cm(標高約118.0m)の雨落溝SD647がある (Fig.65)。北側に長さ・幅とも20cmほどの花崗岩や凝灰岩を1石立て並べたもので、西半部には抜取り穴が溝状に残る。浅いことから、犬走りともみたこともあったが、後述するように南門両脇に暗渠SX632・643があり、これらとつながる雨落溝と理解できる。なお、基壇の南側は玉石敷であるが、石組みの東面大溝SD625Bと関連が深く、後で詳述することにする。

**暗渠** 南門の東西両脇には、暗渠SX632・643がある (Ph.60・61、Fig.66-1)。東のSX632は、両側に塼や榛原石の切石を1石ずつ立て並べ、底に塼、蓋に榛原石の切石を置いたもの。暗渠の据付けは、礎石据付け後で、基壇側石据付け前になる。

側に用いた塼や榛原石は、長さ40~50cm、高さ22~25cm、厚さ約9cm、底塼は長さ30cm以上、

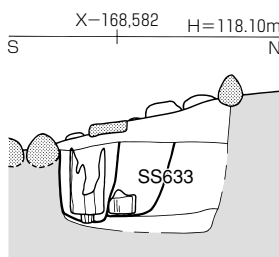


Fig. 64 足場穴SS633と木橋SX622 1:40

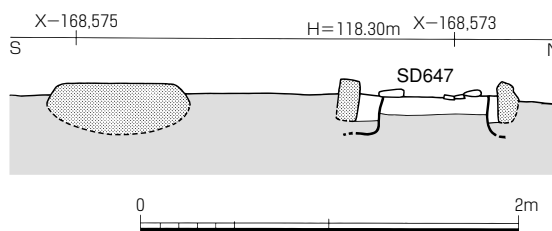
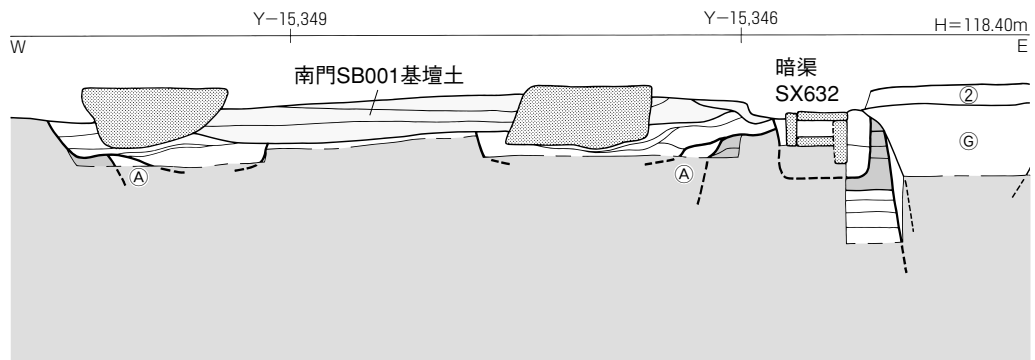
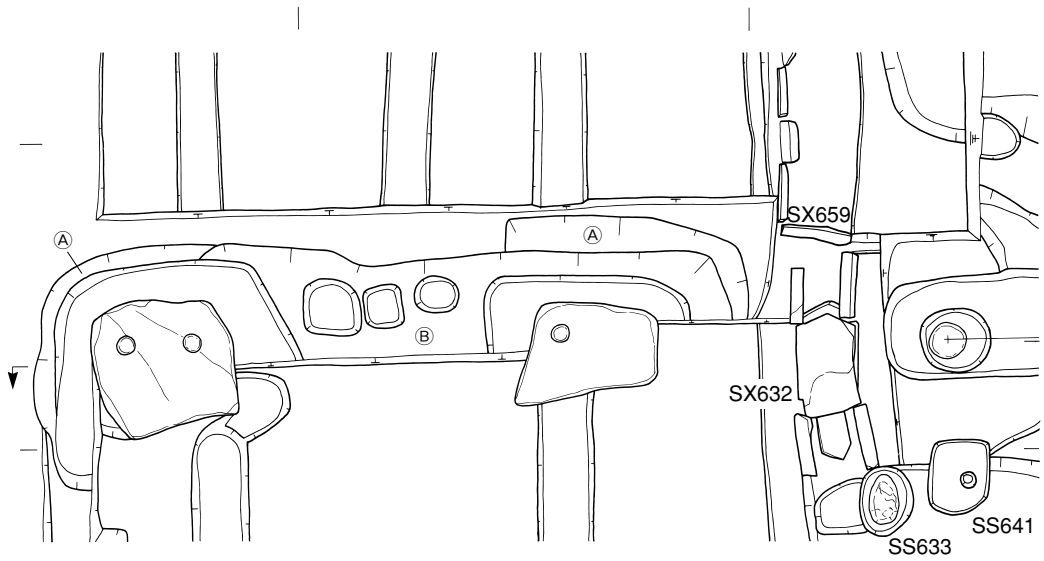


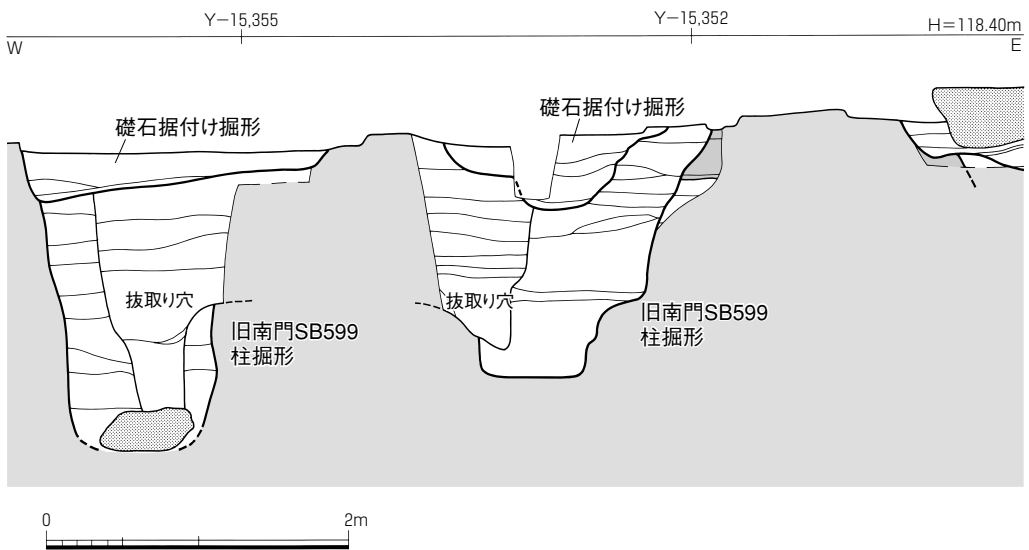
Fig. 65 南門北雨落溝SD647 1:40



1 南門東半～南面西大垣 (断面図は反転使用)

- 整地土
- (A) 旧南門SB599掘形
- (B) 旧南門SB599抜き穴
- (C) SA630抜き穴

2 南門西半 (断面図は一部反転使用)



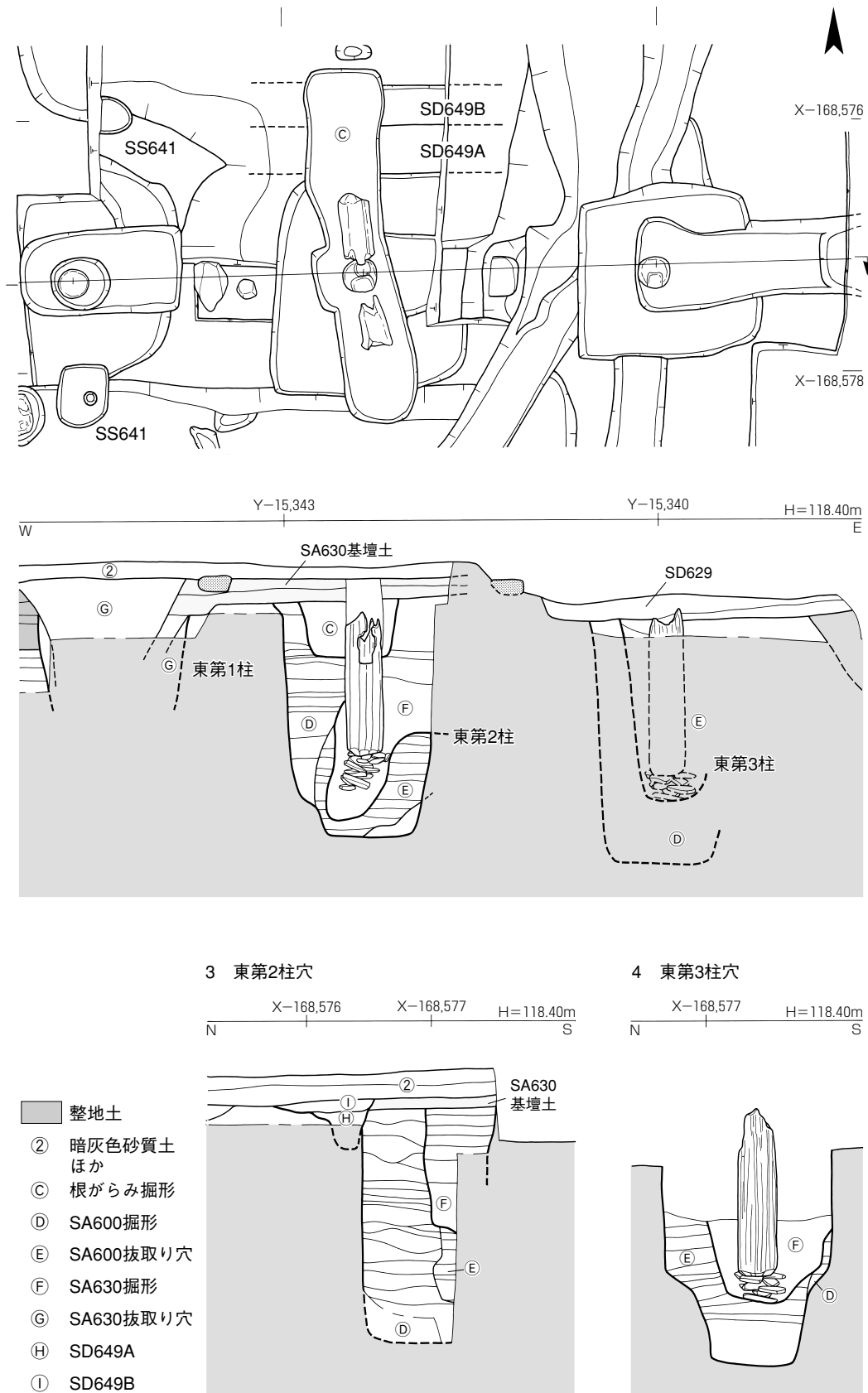


Fig.66 南門及び南面大垣断面図 1:50

幅約20cm、厚さ約6cm、蓋石は長さ約65cm、幅約40cm、厚さ約6cm。蓋石をはずしていないため不明な点があるが、側は各3枚で、底は2枚ほどと推定される。南北長約1.5m、内法寸法で幅25～32cm、深さ約20cm。

SX632の底塼上面の標高は117.72m。既述したSB001の北雨落溝SD647の標高は約118.0m。したがって、SD647の水は暗渠SX632を通して南に排水したと考えうる。SX632の南には後述する南面築地の南雨落溝SD642があり、古い時期の遺構は残っていない。だが、SD642の南はSX632の底より高いことから、SX632の水は南に流れ得ない。したがって、南面大垣SA631の南にも雨落溝（SD648）があり、東に排水したと推測できる。SD647とSX632をつなぐ南門SB001の東雨落溝は攪乱のため確認できなかった。なお、暗渠SX632のすぐ北は榛原石SX659が塞ぐ。この東にも石を抜取った細い溝がある。この理解については、後の南面築地のところで触れる。

西のSX643は、底塼及び榛原石の南側石各1枚と、東側石の抜取り痕跡が残るだけだが、SX632とほぼ対称位置にあり、類似した寸法と推測される（Pl.8、Ph.60）。底塼の大きさは一辺約24cm。底塼上面の標高は117.73mであり、既述した南門SB001の北雨落溝SD647の水はSX632とともにSD643を通して南に排水されたと推測できる。

#### ii 南面大垣と南面築地（Pl.8、Ph.59～62、付図1・2）

3 時期変遷  
南面大垣は、礎石建ち南門SB001に伴う掘立柱のSA630・631とこれを改めた築地と推測されるSA650・651、SB001の前身である掘立柱南門SB599に伴う掘立柱のSA600の、大きく3時期の変遷がある。

##### a 新南面大垣SA630・631

**SA630の柱穴**（Pl.8、Ph.60・62、Fig.66）南門SB001の東で4間分の新南面東大垣SA630の柱穴を検出した。以下では、これらを便宜上、西から順に東第1柱穴、東第2柱穴というように呼ぶ。

新旧柱位置はほぼ同じ

SB001から東へ2個目と3個目、すなわち東第2・第3柱穴からは、他の大垣と同じく手斧で16角形に面取りした柱根が出土した。東第2柱穴の柱根は、旧南面大垣SA600の柱を東に抜き取った後、抜取り穴の一部を掘り下げ、底近くに5～7段の瓦を敷き込んだ上に据えている（Fig.66-1・3）。この北と南には、柱を半截した厚さ約25cm、長さが40cmと60cmの根がらみが残っていた（Ph.62）。一端に出柄をつくり、柱根の下から70cmほどの位置につくられた長方形の柄穴（縦約20cm、横約10cm）に北と南から差し込んでいる。根がらみは、柱穴を埋めた後、再度掘り返して据えており、施工途中の急遽の工夫とも考えられる。

東第3柱穴の柱根もSA600の柱抜取り穴に根固めの瓦を重ね、この上に据えている（Fig.66-1・4）。東第4柱はSA600の柱を西と一連で抜き取った跡に、東第1柱はSA600の柱を東に抜き取った跡に据えられたようである。東第4柱では、東第2柱穴と類似した根がらみの掘形がある（Pl.8）。

南門脇は柱間が狭い

残存した柱根の直径は2本とも約30cmで、残存長は東第2柱が1.1m、東第3柱が約1.3mである。これら2本の柱根の心々距離は2.36m、東第2柱穴の柱根と南門寄りの東第1柱穴の柱痕跡との心々距離は2.26m。東第1柱穴の柱痕跡と南門SB001西妻の礎石心との距離も約2.33mと短い。この点については後で触れる。東第2・第3柱穴の2本の柱根の底面の高さを比較すると、南門に近い東第2柱（標高116.55m）が東第3柱（標高116.38m）より17cm高く据えられており、



SA630は南門の両脇で反り上がっていたとも考えられる。

**SA630の基壇と雨落溝** SA630の東第1・第2柱穴付近では、基壇土と考えられる褐灰色砂質土や淡褐色粘土（厚さ15～30cm）が残っていた。SA630の柱掘形より新しいが、この土の上にSA630の柱根が出ることから、柱を立てたのち積土したことがわかる（Fig.66-1）。基壇積土下面の標高は117.75m前後。

この基壇土を切るようにして北には東西溝SD649の一部が残る。幅約80cm、深さ20cm以上の素掘り溝で、上・下層がある（Fig.66-1・3）。下層のSD649Aは、SA630の根がらみの掘形より古いことから、旧南面大垣SA600の北雨落溝、上層のSD649BがSA630の北雨落溝になろう。SA630の柱心からSD649Bの南肩までの距離は約80cmであり、肩の崩れを考慮すると基壇幅は1.65m、唐尺で5.5尺に復元される。SD649Bの雨水は、既に触れたように南門SB001脇の暗渠SX632を通過して南に排水され、さらにSA630の南雨落溝に注いだと推測される。

なお、SA630の柱通りには2個の板石（南北30～40cm、東西約25cm、厚さ約12cm）が残っていた。SA630の基壇積土上にあることから、SA630の壁材の土台、地覆石様のもとと推測される。上面の標高は約117.93mと117.98mで、西がやや高い。

壁の土台か

他にSA630の東第1柱穴の南と北では、柱穴SS641を検出。北は一部分だが、南は一辺約40cmで柱痕跡がある。心々距離は約2.3m。位置的にみてSA630の足場穴で、SA630の基壇土を切ることから修理時か解体時のものと推測する。

**SA631** 南門SB001の西では、新南面西大垣SA631の掘立柱穴を計5間分検出した（Pl.8、Ph.61-3）。以下では、これらを東から順に西第1柱穴、西第2柱穴と呼ぶ。

SA631の柱穴は、一部を断割り調査しただけなので詳細不明な点が多いが、いずれも旧南面大垣SA600の柱を南北方向に抜き取った後に、その穴を利用して柱を立てたようである（Ph.62-3、Fig.67）。SA631の柱も南北方向に抜き取られているため柱位置は明確でない。SA630でみられた基壇土や雨落溝も、SA631付近では削平され残っていなかった。

**新南面大垣の復元** 上述のようにSA630の2本の柱根の心々距離は2.36mあるので、仮にこれを8尺とすれば造営尺は29.5cmになる。他方、新南面大垣は、第VI章1D iで詳述するように新東面大垣南端の柱位置と、新西面大垣南端の柱位置が復元できることから、総長118.21mと算出される。これを29.5cmで割ると400.7尺となる。したがって新南面大垣は、400尺計画であり、造営尺は29.55cmに補正した方がよい。柱間も8尺が基本であろう。

全長400尺

新南面大垣には中央に30尺の新南門SB001があり、この東の大垣SA630と西の大垣SA631はそれぞれ185尺になる。185尺は23間分が8尺とすると1尺余る。1間分だけは9尺間の通用門と考えられる。ただし、南門寄りの2間分は、既述したように柱間が2.33m、2.26mと狭い。これは、後述する旧南門SB599が桁行総長28尺であったのを、30尺の新南門SB001に改めた折に、2尺分（東と西で各1尺分）を南門SB001寄りかで処理し、他は旧南面大垣の柱位置を踏襲したことを示そう。したがって、通用門も10尺になる。通用門の位置は、後述するように西面・東面回廊基壇外の南方に想定できる。なお、後述するように新東面大垣は、倒壊状況から瓦葺きと判明している。新南面大垣も同様であろう。

通用門あり

造営方位は、第VI章1D iで述べるように東で北に0°59'20"振れていると推測される。

b 南面築地SA650・651

**SA651の雨落溝と足場穴** 新南面西大垣SA631の柱を抜き取った跡は、10cmないし20cmごとに、少なくとも4層の瓦を敷き詰めていた(Pl.8、Ph.62-3、Fig.67)。削平されて積土は残っていないが、柱抜き取り穴を丁寧に埋戻していることから、この上に築地SA651があったと推測する。

SA651の南には幅約0.7~1.2m、深さ約0.6mの東西溝SD637、北には幅約1.2~1.7m、深さ約0.5mの東西溝SD639がある。旧状を残す西端での心々距離は約4.9m(Fig.68)。溝内からは多くの瓦が出土。また、SD639からは9世紀後半~10世紀前半の土器が出土。位置的にも南面大垣SA631の雨落溝ではなく、SA651の雨落溝になる。

SA651とSA631はともに南門SB001に取付くことから、心が揃うと仮定すると、SA651心から両雨落溝の内側の肩まではそれぞれ約2.1mで、肩と肩の距離は約4.2m。後述する東面築地の知見を援用すると、築地本体は幅約1.2mで、北と南がそれぞれ幅約1.5mの犬走りか低い基壇になっていたと推測される。雨落溝や周辺から多くの瓦が出土していることから、SA651は瓦葺とみて誤りない。

南雨落溝SD637のすぐ北には約4.5mの間隔をもつ東西2個の柱穴SS645、北雨落溝SD639の北肩や溝内にも約4.5mの間隔をもつ東西2個の柱穴SS646がある。一辺0.5~0.6m、深さ約30cmで、一部には柱抜き取り穴がある。SS645とSS646の心々距離は約4.8m。ともに雨落溝より古い(Fig.68)。位置的にも、SA651造営時(屋根用)の足場穴とみていいであろう。

**SA650と雨落溝** 東のSA630の柱抜き取り穴ではSA631のような状況はなかった。だが、SA630と南門SB001の間にある暗渠SX632の北口を塞ぐ板石SX659が一つの手掛りとなる(Ph.61-2、Fig.66-1)。板石は長さ約45cm、東西方向に立てて据えている。1枚だけが残るが、すぐ東には細い溝があり、東にもつづいていたことがわかる。SX659の内(南)面の位置はSA630の心から北60~63cm。既に触れたように東面築地SA535の築地本体の推定幅は約1.2m。したがってSX659

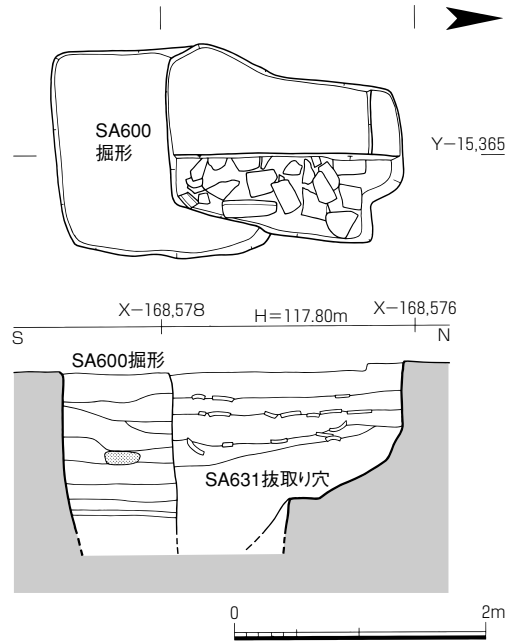
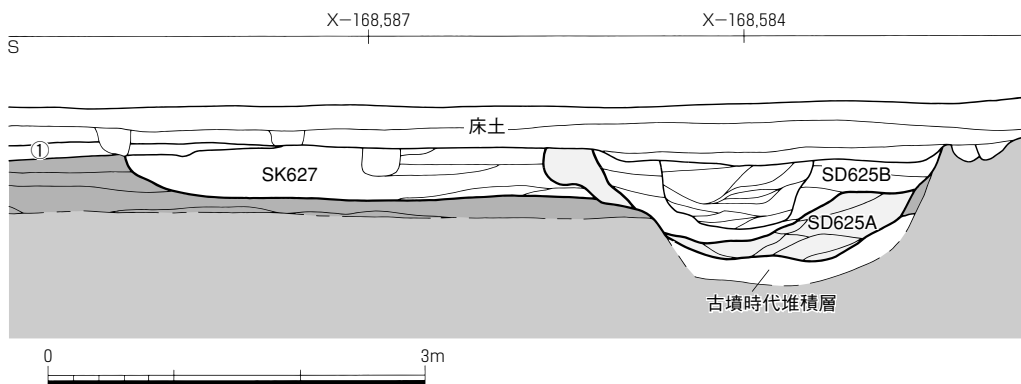


Fig.67 南面大垣SA600・631西第4柱穴断面図 1:60

築地の復元



は、SA630と心をほぼ揃えて南面東築地SA650もつくられたこと、築地本体の幅が約1.2mであったことを示そう。機能は築地本体の裾を雨水の浸蝕から保護することにあつたと推定する。

築地裾石か

SA650の南には、幅約1.7m、深さ約30cmの素掘りの東西溝SD642がある。埋土から8世紀前半～9世紀前半頃の土器小片が出土。位置的にはSA650の南雨落溝になる。北の雨落溝は、攪乱もあってその存在を確認することができなかった。

### c 旧南面大垣SA600と掘立柱南門SB599

**柱穴** (Pl. 8、Fig. 66) 既述した礎石建ち南門SB001の棟通りで前身の南門SB599の掘立柱穴を3間分、新南面大垣SA630・631下で旧南面大垣SA600の掘立柱穴を9間分検出した。以下では、SB599の東の柱穴すなわち旧南面東大垣の柱穴を西から順に東第1柱穴、東第2柱穴、SB599の西の柱穴すなわち旧南面西大垣の柱穴を西から順に西第1柱穴、西第2柱穴というように呼ぶ。

柱穴のベースはいずれも山田寺創建時の整地土である。掘形は一辺1.6m前後の隅丸方形で、深さ1.65～1.9mを測る (Fig. 66)。柱はいずれも抜取られている。旧南面西大垣の柱は南北方向に抜き取っているのに対して、旧南門SB599と旧南面東大垣の柱は東西方向に抜き取り、一部は隣り合う2本の柱を一緒に抜き取っている。SB599西妻は柱抜き取り痕跡 (Fig. 66-2) からすると、柱径は約30cm。底に幅60cmほど (厚さ10cm以上) の石を置き礎盤としている。ちなみに礎盤上面の標高は115.92m。旧南面大垣の東第2柱穴の抜き取り穴底の標高は115.89m、柱穴の掘込み面は117.75mである。なお、後述するように東面大垣SA500Aには基壇が伴うが、SA600では削平や攪乱のためそれを確認できなかった。

**旧南面大垣と旧南門の復元** 以上12個の柱穴については、柱が残らず、断割り調査も部分的で、正確な柱位置をつかむことができなかった。唯一柱位置が推定できるのは、礎石建て南門SB001の西妻下で検出したもの (Fig. 66-2) で、推定柱心はSB001西妻心より約30cm東になる。これとすぐ東の柱穴掘形中心の距離は約2.5m。したがって、SB001下の掘立柱穴3間分は、両端間各8.5尺、中央間11尺の旧南門 (SB599) と推定される。SB001の北側柱筋の西端とすぐ東の礎石据付け穴を断割り調査したが、古い柱穴はなく、SB599は棟門である。

旧南門は棟門で狭い

一方、SB599を含めたSA600の全長は、SA600の柱穴が既述したSA630・631とほぼ重複することから、SA630・631と同様に118.21m (400尺) と推定される。柱間も8尺 (2.36m) が基本であり、SB599の東と西の大垣は22間分が8尺、1間のみが10尺の通用門となる。なお、SA600の柱抜き取り穴の底に瓦を重ねて根固めとし、この上にSA631の柱を立てていることから、SA600も瓦葺きであったとする見方もあるが、確定できない。

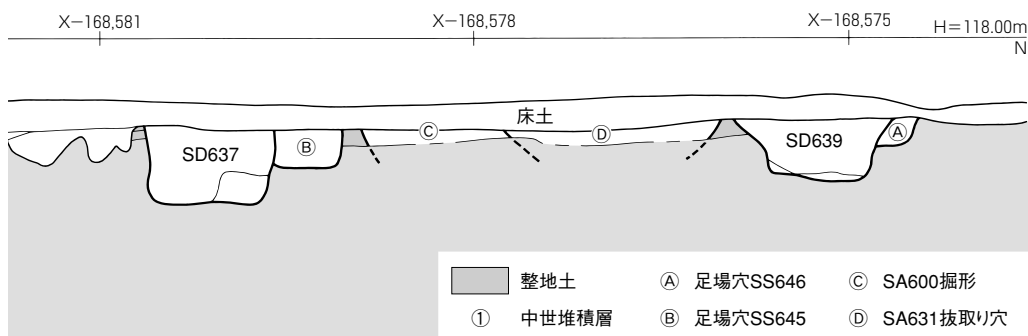
全長400尺  
通用門あり

Fig. 68 大溝SD625と南面築地雨落溝SD637・639ほか 1:60

iii 南門周辺の遺構 (Pl.7・8、Ph.59~61・63・64、付図1・2)

**参道SF640** (Pl.8・9、Ph.60) SF640は南門SB001から中門SB003に至る参道である。溝状の掘形内に長さ10~25cm、幅10~15cmの花崗岩の玉石を南北に並べて東側石とする。西の側石は削平されて残っていないが、中軸線で折り返すと幅は約2.4mに復元される。南門SB001の中央間は約2.79mであり、これより参道は狭かったことになる。またSF640の南端は、SB001の北雨落溝SD647が東西に通るが、橋などの遺構はなかった。

**東西大溝SD625A・B** (Pl.8・25、Ph.59~61・63) 南門SB001の南にある東西方向の基幹排水路であり、新旧2時期がある。古いSD625Aは素掘り溝、新しいSD625Bは幅を狭め、南門前を石積みにする。

**旧東西大溝** 古いSD625Aは、調査区西端 (Fig.68) だと上幅3.1m、深さ約95cm (底の標高約116.5m)。調査区東端は壁が崩れたため詳細不明の点があるが、上幅3.3m前後、深さ約50cm (底の標高約116.8m)。中央部はSD625Bの石積みがあるため不明瞭だが、後述する木橋SX622の位置から、北岸だけ迫り出し、幅2.6m前後であった可能性がある。後述する南門前の参道SF610の東西両側溝SD611・612が合流するあたりでは、SD625Aの南岸は南に拡がり、幅約3.8mとなる。SD612が合流する部分の底の標高は116.52m。SD625Aの水は西に流れていたことがわかる。SD625Aは、次述するように南門の西方で実施した第11次調査区で検出しており、西面回廊位置からさらに西に延びることが確かである。

埋土から出土した土器には飛鳥I~Vもあるが、平城Ⅲ (新) を含み、廃絶時期は8世紀中頃。開削時期は、SD625Aの南岸堆積土下で飛鳥Ⅳの土器を含む土坑SK626を検出したことから、天武朝が候補となる。だが、後述するように7世紀中頃に遡る可能性が高い。

**新東西大溝** 新しい溝SD625Bは、調査区西端で幅約2.7m、深さ約80cm (底の標高約116.6m) である。北肩はSD625Aと重なるが、南肩はSD625Aの少し北になる (Fig.68)。堆積土の状況からみると溝浚えが行われたようで、この時期の幅は約1.2m、深さは約70cm (底の標高116.7m) となる。同じ状況はSD625BとSD612の合流する辺りにも認められる。南門SB001の前は、基壇の東西両端近くまで、両岸を石積みとする。詳細は次述するが、中央での上幅1.65m、深さ0.9~1.0m (底の標高約116.8m) である。これも水は西に流れる。西延長部は第11次調査で検出している。

第11次調査で検出したSD625は上幅2.9~3.3m、深さ約70cm、底の標高約115.7m。堆積土は大きくみて3層ある。上2層がSD625B、下層がSD625Aのようである。南門前の溝底心と第11次調査の溝底心を結ぶと、約43mの間で約50cm南、西で約2°南に振れ、南面大垣より振れが約1°強くなる。おそらく、西面回廊位置付近から西は地形に沿って南に曲がったことを物語るのであろう。

SD625Bの石積みは、基本的には最下段に高さ40~60cm、幅30~50cmの自然石 (花崗岩) をほぼ直に立て、この上にやや小振りの自然石を2~3段控え気味に積んでいるが、橋脚SX623部分では比較的大振りの石を平積みとする (Pl.25、Ph.61-1、63)。

石積みは、処々で内側に膨れたり、崩れかけているが、原位置を保つものもあり、北岸の肩は標高117.76m、南岸の肩は標高117.68mに復元できる。中央付近だと、底の標高は116.81m、北岸での深さは0.95m、南岸での深さは0.87mになる (Fig.69)。平面的にみると、南・北岸と

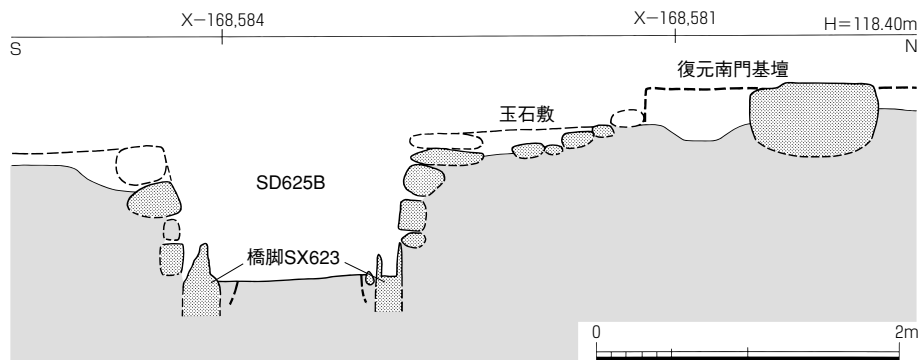


Fig.69 大溝SD625と橋脚SX623 1:50

も西端部は拡がり気味で下端幅1.45m前後、東端は北に曲がり気味で下端1.1~1.2m、中央部では北岸の橋脚部分だけは内(南)側に7~8cm張出すようである。石積み下端幅は1.1~1.2mだが、橋脚の横に迫り出した石もある。橋脚の後面同士の距離1.4m前後が計画幅であろう。石積みの上端幅は1.65mほどに復元できる。

SD625Bの石積みの北は、南門SB001の基壇まで、10~40cm大の玉石を敷いている。この玉石敷は漸次北に高くなる。SB001の基壇南端は後世の溝で破壊され、残存する玉石敷もSD625Bの石積みが内側に膨んでいることもあって原位置を動いているようだが、木橋SX623の北部分は他に比して玉石も大きく、ここがSB001への通路として意識されたことが窺われる。

新南門前は  
玉石敷

残存する玉石敷の北端の石は、上面の標高が117.90m前後で面がほぼ揃う。位置は、南門SB001の南側柱心から南に約1.8mであり、基壇端としてふさわしい。とすると、SB001の基壇上面は標高118.05mであるので、南の基壇高は約15cmとなる。復元したSD625Aの北岸からSB001の基壇南裾までの距離は1.56m、高低差は約15cm、木橋SX623から北はおそらく階段状になっていたと推測する (Fig.69参照)。

なお、SD625Bの南岸では、木橋SX623の南に瓦敷がごく一部残る。通路の痕跡であろう。また、南岸石積みの裏込めからは、10世紀頃の土器が出土しており、一部が積み直されたことが知れる。

SD625Bの堆積土は砂礫を含み、一時的に相当の水量があったことを窺わせる。溝内からは多量の瓦や、主として8世紀中頃~10世紀後半の土器などが出土。最上層には11世紀頃の瓦器を含み、廃絶時期の一点を知ることができる。

廃絶時期

**木橋SX622・623ほか** (Pl.8、Ph.63・64) SX622・623は、南門SB001の南中央で検出した新旧2時期の木橋の遺構である。ともに南門と中軸がほぼ揃う。

南門前に  
木橋2時期

古いSX622は、既述した東西大溝SD625Bと南門SB001との間にある玉石敷下やSD625B南岸の瓦敷下で親柱の柱穴を検出しており、東西大溝SD625Aに架かる (Ph.63-3)。南北、東西とも1間である。北端柱穴と南門SB001の推定基壇南端との距離は約80cmである。溝底の南・北端に橋脚があった可能性もあるが、SD625Bの石積みがあり、在否は不明である。親柱の掘形は一辺50~60cm、深さ30~50cmで、いずれも柱根が残る (Ph.64-3・4、Fig.64)。柱間寸法は南北2.95m、東西2.85m、柱根の残存長は40~50cm、径は22.8~25.5cmと不揃いである (底の標高は約119.1m)。下端に丸柄及びその切断痕、下端から14~16cmの位置に方形の貫通する穴 (一辺7~11cm) がある。大垣の柱を天地逆にして転用したものである (第V章9参照)。このうちの1本は年輪年代測定によって伐採年が665年+aで、新大垣用材の転用であろうが、他は旧大垣

大垣転用材

の転用と推測される。

新しい木橋SX623は、東西大溝SD625Aを石積みに改めたSD625Bの溝底で検出。東西2間、南北1間。柱掘形は一辺30～50cmで、いずれも柱根（橋脚）が残る。SD625Bの石積みが内側に迫り出しているため、断割り調査や柱根の取上げはしていない（Ph.25、Ph.63-2、Fig.69参照）。柱間は、東西総長が2.6m、約1.3m等間、南北が約1.1mである。柱根は検出下面から上に30～45cm残る。東南隅が径約25cmの円柱であるほかは、一辺14～23cmの角柱である。北側の3本には、柱根の検出下端から5～10cm上に貫穴がある。東・西両端のものは材が18×23cmと20×21cm、貫穴も縦約24cm、横約10cmで貫通するが、中央のものは材が14×18cm、貫穴は7×8cmで貫通しない。いずれも橋脚としては不要な加工であり、転用材である。寸法などから柱でなく大垣の桁材などと推測される。

他にSX622の南で東西に並ぶ2個の穴SX628を検出している。一辺約0.6m。断割り調査をしていないため、深さや柱痕跡が不明だが、SD625B南岸の瓦敷下で検出していることから古く、位置からすると、SX622に先行する木橋の親柱穴であった可能性がある。ちなみに、東と西の穴の心々距離は約2.7mであり、南門と中軸が揃う。

通用門の橋

また、南門西方の第11次調査では、SD625の南岸近くで、重複する2個の穴SX757・758を検出している。古いSX757は一辺30cm以上、深さ20cm以上、新しいSX757は一辺約50cm、深さ約40cm。SD625の深さからみて削平を受けており、穴ももっと深かったと推測される。位置は西面回廊の基壇西側にあたる。したがって、SX757・758はSD625に架かる木橋であり、建て替えがあった可能性が高い。既述したように、南面大垣には、柱間の復元から1箇所通用門があったと考えられるが、その門こそSX757・758の北位置にあたろう。

天武朝の南門前参道

**南門南参道SF610と側溝SD611・612ほか**（Pl.7・8、Ph.59・60）SD611・612は、上述した幹線排水路SD625Aの南岸に連結する2条の南北溝、SF610はSD611・612を両側溝とする通路である。SD611・612は南でも東西溝SD606に連結する。

東の南北溝SD611は幅約0.9～1.3m、深さは削平されており20～40cm。底の標高は北が約117.2m、南が約117.0m。西の南北溝SD612も素掘りで、幅約1.2～1.6m、深さは削平されており約30cm。底の標高は北が約117.1m、南が約116.9m。SD611・612の雨水は、SD625Aから溢れた水を含めて、南のSD606に流したことが知れる。SD611・612を側溝とする通路SF610は、検出時の路面幅8.3～8.6m、側溝心々距離9.7m前後で、ほぼ南門SB001の正面幅に合わせていることから、SB001の南参道として計画されたと考えられる。ただし詳しくみると、SD611・612は北で西に約2°振れ、SB001と中軸は揃わない。

SD611からは平城Ⅲの土器が出土している。SD612では、中央部付近で炭化物層があり、鉄滓、韃の羽口や埴塼などが、SD612とSD625Aの合流部付近では和同銭が出土。したがって8世紀中頃が廃絶時期になる。

SD606は幅1.5～2.1mの東西溝である（Pl.7）。深さは削平されており20～40cm。底の標高は116.8m前後。西で幅が広がるが、方位はSD611・612に近い。この溝は参道SF610の南を限るが、橋脚などの施設は検出されなかった。溝内からは少量の土器が出土。小片であり、平城Ⅱから平城Ⅳの間におさまるがいずれとも決めがたい。

SD606の南には後述するように東西溝SD601がある。SD601は7世紀中頃の開削だが、SD606

と共存した可能性が強い。すなわち、SD601・606を南北両側溝とする東西通路SF608Bがあり、この北は南門SB001に向かう南北方向の参道SF610が設けられたと理解されるのである。換言すると、SF608Bは後述する新山田道SF608Aを改作し、路面幅を約5.6m（側溝心々距離約7.2m）に狭めたもの、逆にこの北は後述する広場SH655Aの南北長を長くした広場SH655B（中軸位置の南北長約20.5m）であったと推測される（Fig.71参照）。

**新山田道SF608Aと側溝SD601・609**（Pl.7・8、Ph.59・60、付図1・2） SD601・609は、上述した東西溝SD606の北と南にある素掘りの東西溝である。南のSD601は幅0.7～1.0m、深さは削平されて20～40cm。底の標高は調査区東端で約117.3m、西端で117.25mであり、水は西に流れる。北のSD609はかなり削平されており、幅0.8～0.9m、深さ10～20cm。底の標高は調査区東端で約117.1m、西端で約116.8mであり、これも水は西に流れる。方位はSD609では上述したSD606とは逆で、西で北に2°振れる。SD601の方位もSD609に近い。ベースはいずれも山田寺創建時の整地土である。

新山田道

溝の埋土からは土器細片が少量出土した程度であるが、SD609は上述した参道SF610の側溝SD611・612より古く、開削は山田寺創建の7世紀中頃で、SD601が対になると推測される。SD601の堆積土は3～4層ある。遺物からは時期を推測しがたいが、上半の堆積土は奈良時代とみることも可能である。

SD601とSD609を両側溝とする東西通路SF608Aは、伽藍中軸付近で測ると、路面幅約10m、側溝心々距離約10.8m。SD609以北は、後述する幢幡遺構SX619・621・624などがある程度で、広場SH655Aであったと推定される。他方、SF608Aは、自然地形に沿って斜行する旧山田道SF614（第Ⅵ章2E参照）を山田寺の造営に合わせ東西方向に改作したと考えられる。ちなみに、SD601心と旧南面大垣SA600心との距離は、伽藍中軸付近で測ると35.95mである。

**SD596・629**（Pl.7・8） SD596は調査区西南隅で検出した斜行する小さな谷状の遺構。調査区南端は、山田寺造営時にあまり手を加えなかったようで、花崗岩風化土の地山が東南隅で標高118.35mと高く残り、北西には急傾斜で落ちる（Ph.60）。SD596はその谷地形にあたる。埋土は青灰色粘土で、遺物は出土していない（青灰色粘土面の標高117.05～117.20m）。やがてSD596は、赤褐色粘質土で整地される。この整地土には、多くの瓦片とともに、平城Ⅲの土器を主体として10世紀後半頃の土器を含み、付近がかなり平坦にされた時期を知ることができる。

寺地造成  
の南限

SD629は南門SB001の東を斜行する素掘りの溝である。南面大垣（築地）を破壊し、SD625Bの最上層に注ぐ（Ph.64-1）。東岸は調査区外である。調査区北端で幅は1.8m以上、深さ30～40cm、SD625Bとの合流部分で幅4m以上、深さ50～70cm。溝内からは、多くの瓦とともに10世紀後半の土器が出土。ほかに回廊用の双頭鴟尾や地覆石の榛原石なども出土していることから、SD629の時期は東西回廊や南面回廊の東半部が廃絶した11世紀前半以後となる。この上流は、回廊倒壊後に東南隅を西南に曲がるSD561で、のち回廊東南隅を北西に横切って東南に曲がるSD236になる（本章2F参照）。SD629やSD236は、南門SB001や中門SB003を避けるように流れていることから、11世紀前半にはこれらがなお残っていたことも示す。

南面築地を  
破壊する溝

**幢幡遺構SX604・605**（Pl.7、Ph.64-2、Fig.70） SX604・605は、南門の南方、上述した新山田道SF608上で検出した。ともに東西に並ぶ2個一対の柱穴であり、幢幡の竿を支えた支柱の穴と考えられる。類例は美濃国分寺にもある。山田寺の柱穴は重複しており、西のSX604→

新山田道上  
の幢幡遺構

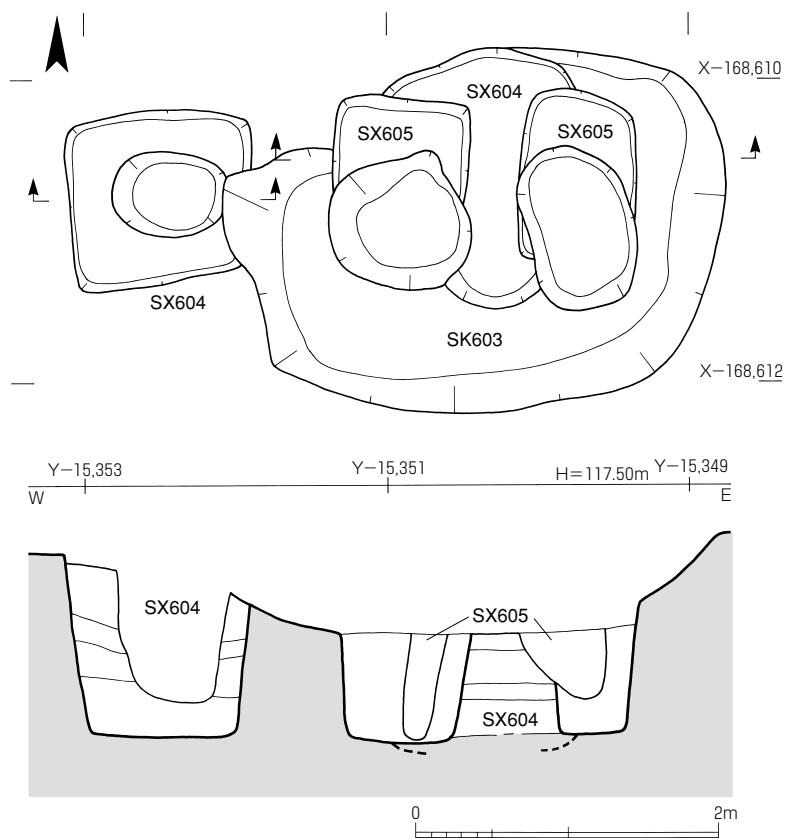


Fig.70 幢幡遺構SX604・605 1:50

大土坑SK603→東のSX605の順である。

SX604の西柱穴は、一辺約1.2m、深さ約1.3mで、大きな抜取り穴がある。東柱穴は、調査中に埋土が崩れたことや、SK603及びSX605が重複することから詳細不明な点があるが、一辺1.4m程と推定される。柱間は、柱穴の心からみて、約2.4mに復元される。

SX605の西柱穴は、一辺0.9m、深さはSK603の底面と思われるところから約0.7m。東・西柱穴ともに柱（支柱）を南に抜き取っているが、柱はわずかに残る痕跡から径25cm前後と推測できる。柱間は約1.2m。SK603は東西約3.3m、南北約2.4m、深さ45～60cm。SK603は土坑とみてきたが、SX605に先立って大きく穴を掘った可能性が強い。SX605の柱穴が深くなるので、前もって全体を掘下げたのであろう。類例は下野・薬師寺塔西の幢幡遺構である。<sup>2)</sup>

位置的にみると、SX605の東西の推定柱心は、南面大垣心から南33.45m前後、既述した新山田道SF608の南側溝SD601心から北2.55m前後、SX604の東西の推定柱心はSX605より南約15cmである。ただし、SX604及びSX605の中心、すなわち幢幡の竿の位置は、南門（伽藍）の中軸線に対してSX604は西に25cm前後、SX605は東に70cm前後振れる。後者は、既述した参道SF610の両側溝SD611・612の振れに近く、この中軸線上に設置したと考えうる。SX604が伽藍中軸から西になる点については判然としないが、上述したSD601・609が西で北に振れることに関連するのであろう。

幢幡遺構の  
年 代

SX604・605の時期は、遺物がほとんど出土していないため決め手に欠けるが、方位の振れからするとSX605の設置は天武朝であり、これに先行するSX604を山田寺創建の7世紀中頃に比定できよう。



**SX615・621・624** (Pl. 8、Ph.59) 南門前方の広場にある3条の柱列である。

広場の幢幡

SX615は東西に並んだ計6個の柱穴。柱穴は一辺0.7～1.0mの方形ないし隅丸方形、深さ1.0～1.3mで、一部では大きな柱抜き痕跡を確認している。東端の柱穴は、柱を南に抜いた穴が大きく、形がくずれている。このすぐ西の穴は浅い土坑である。

柱間は西から2間目が約5.4m、他は約3.6m。これらは従来東西堀とみてきたが、南門前を塞ぐことになり、理解できない。柱穴は掘形に比して深いこと、柱間が広いことから、それぞれに単独の柱、すなわち幢幡の竿を立てた可能性が高い。柱穴は少なくとも西にはつづかず、幢幡は伽藍中軸を挟んで左右各3本と推定できる。SX615の柱列は、方位が南面大垣とほぼ同じであり、位置も南面大垣心から南約15.0m、唐尺で50尺に位置する。埋土から遺物は出土していないが、東から2間目の柱穴はSD611と重複し、これより古いことがわかる。

SX621とSX624は、SX615と南面大垣との間にある東西方向の柱穴列である。伽藍中軸より東のSX621は2間、西のSX624は1間。ともに東西大溝SD625Aの堆積土下で検出したもので、底がわずかに残る程度である。柱穴は、SX621が一辺0.5～0.6m、SX624が南北0.8m前後、東西0.6m、深さは10cmほどだが、本来はもっと大きく、深さがSD625Aの肩から復元すると1.0～1.2mはあったと考えられる。

SX621・624は、方位が南面大垣の方位とほぼ同じで、南面大垣心との距離は約8.1m（唐尺で27尺）である。柱間は、SX621・624とも約1.8m（唐尺で6尺）等間、SX624の東端柱穴心と伽藍中軸との距離は約4.5mである。おそらく、SX621・624は、伽藍中軸からそれぞれ東西に唐尺で15尺の位置からはじまり、柱間各6尺で3間分であった可能性が高い。

従来は、SX621・624も堀とみてきたが、SX615と同様に幢幡遺構とみるべきであろう。河内・新堂廃寺でも同様の遺構があり、幢幡を建てたと推測している<sup>3)</sup>。SX624の場合、2個が支柱穴で中央に1本の幢幡が建っていたのか、それぞれ単独であったのか明らかでない。

**土坑SK626・635・638ほか** (Pl. 8、Ph.59) SK626は、南門の西南方で検出した東西約1.5m、南北約1.3mの不整形な穴である。深さは7～8cmで、底の中央は高くなる。焼土や炭に混じって、韃の羽口や鉄・銅滓、銅粒（湯玉）が出土しており、新南門SB001の造営に伴って設けられた炉の可能性もある。併出した土器は飛鳥IVであり、時期は7世紀後半になる。

新南門造営に伴う炉か

SK635は東西約3.5m、南北約3.1m、深さ約20cm。埋土からは、瓦や10世紀前半頃の土器のほか、扁額の可能性がある黒漆塗り木製品などが出土している。南面築地の南雨落溝と推定するSD637や、南門SB001の基壇を一部破壊しており、時期はこれらの廃絶時頃と推定される。北のSK638は東西約3.9m、南北約3.7m、深さ約30cm。埋土からは瓦や平安時代の土器。南面築地の北雨落溝と推定するSD639を破壊している。

新南門用の扁額か

南門SB001の東北部には多数の土坑がある。遺物の出土が少なく、時期が不明だが、比較的新しい土坑SK653からは9世紀頃の土器が出土している。他に、南門東南方で土坑SK618、南門西南方で土坑SK613などを検出。ともに大きな土坑だが浅い。出土した遺物は少なく、土器から奈良時代頃と推定される。

SK613の西北方における調査区西端の断割り調査では、南北3.9m以上、深さ約20cmの土坑SK627を検出 (Fig. 68)。山田寺創建時の整地より新しく、東西大溝SD625Bよりも古い、遺物は出土しておらず、性格等は明らかでない。

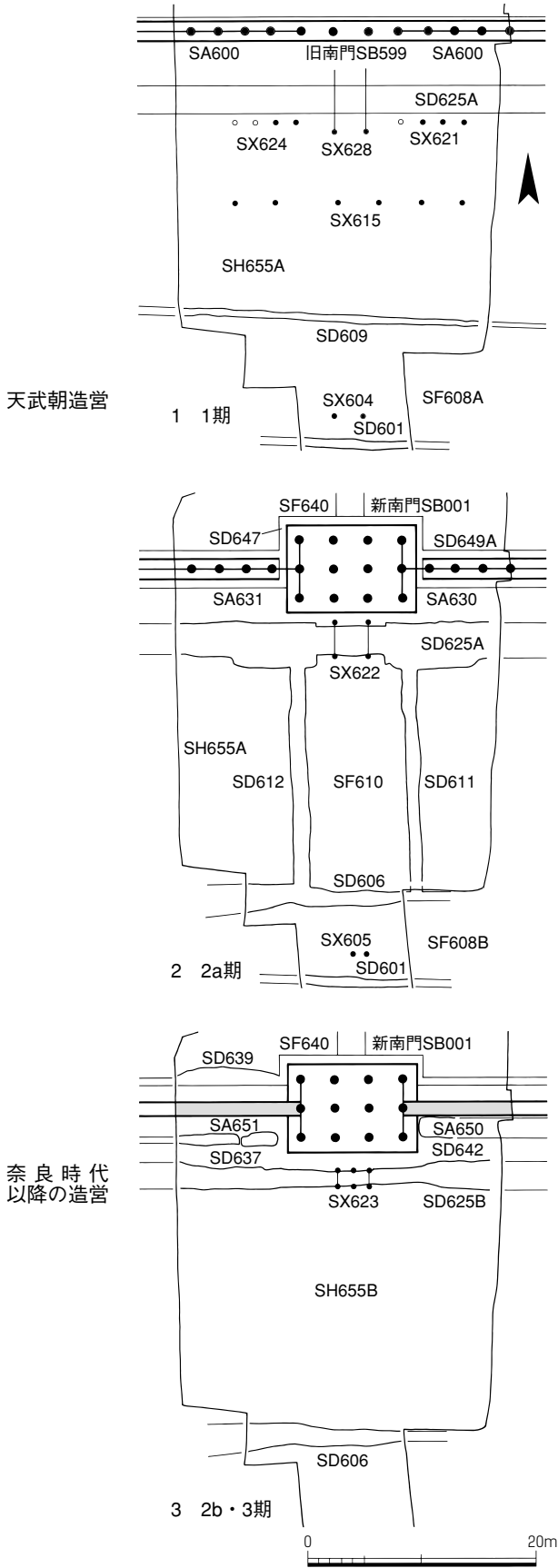


Fig.71 南門と南面大垣の変遷 1:600

iv 小 結 (Fig.71)

**時期比定** 南門及び南面大垣は、掘立柱の南門SB599と旧南面大垣SA600→礎石建ち南門SB001と掘立柱の新南面大垣SA630・631→SB001と南面築地SA650・651に変遷する。以下では、それぞれを仮に1～3期に大別、さらに2期は東西大溝の改作でa・b期に細別し、他の遺構との関連から時期を比定する。

2 a期になるのは、南門SB001と正面幅がほぼ揃う参道SF610と両側溝SD611・612、この両側溝に連結する東西大溝SD625AとSD606、SD625Aに架かる木橋SX622、SD606を北側溝とする新山田道SF608Bと南側溝SD601、SD611・612と方位の振れが同じ帷帳遺構SX605である。

SD625Aからは、平城Ⅲ（新）の土器や和同銭が出土しており、下限が8世紀中頃。上限は、SD625Aの堆積土下で検出した土坑SK626から飛鳥Ⅳの土器が出土し、7世紀後半になる。木橋SX622の柱は大垣の柱を利用したことが明らかである。4本の材の内1本は、年輪年代測定から、伐採年が665年 + a だが、665年にきわめて近いと判明。天智朝に造営の準備がなされ、天武朝に不要となった一部がSX622に用いられた可能性が高い。ただし、他の材は旧大垣の柱であった可能性もある。いずれにしても2 a期が天武朝の本格的な造営に対応するとみていい。

2 b期は東西大溝をSD625Bに改めた時期である。従来は、この時期に南面大垣を築地に改めたと推測してきたが、東面築地と一連とみて3期に比定する。

2 b期になるのは、確実にSD625Bに架かる木橋SX623である。新山田道SF608Bの北側溝SD606からは平城Ⅲ～Ⅳの土器が出土。小片のため時期を限定できないが、山田寺の南門に至る道路側溝が早々に埋まったとは考え難いことから、2 b期にもSD606は存続したと推測される。ただし、SD601や帷帳遺構SX605は、この上を8世紀中頃の土器を主

とする赤褐灰色粘質土が覆うことから2b期には機能していなかった可能性がある。

3期は新南面大垣を築地に改めた時期。後述するように東面築地は新東面大垣の倒壊部材上を整地し、10世紀前半に築造されたことが明らかである。したがって、南面築地の時期も10世紀前半に比定する。

3期になるのは、南面築地の南・北雨落溝SD637・639・642。埋土に9世紀後半～10世紀後半の土器を含む。南面東築地SA650上を斜行するSD629は、既述したように東面回廊等が倒壊した11世紀前半頃が開削時期。SD629は南門を避けるようにしており、このときには南門SB001や南面西築地はなお残っていたと判断できる。

平安時代の  
造営

最後になったが、1期になるのは、2a期より古い新山田道SF608Aの北側溝SD609とこれの対になる南側溝SD601、幢幡遺構SX604・615・621・624などである。時期は天武朝以前、7世紀中頃の山田寺創建期になる。幢幡遺構SX615とSX621・624は、南門前で近接して東西に並ぶことから、時期差があったのかもしれない。

7世紀中頃の  
造営

1期には、これまでは東西大溝SD625Aはなかったとみてきた。その根拠はSD625Aが、飛鳥Ⅳの土器を出土した土坑SK626を破壊して開削されたと判断していたことによる。だが、その重複はわずかである。当初はSD625Aの幅が幾分か狭く、やがて肩が崩れて底に埋土が堆積したと考えれば、SD625Aの開削を1期に遡らせることが可能となる。というのは、後述するように東面大垣の東では、7世紀中頃に基幹排水路SD530が開削されており、その雨水を南面ではSD625Aに流したと考えられること、SD625Aの開削を2a期とすると南門SB001の基壇との間は1.2mほど狭く、同時計画とは考え難いこと、換言すると、2a期には既存のSD625Aを踏襲せざるを得なかったと考えられるからである。この場合、SD625Aに架かる木橋SX622南方のSX628は、SX622の改修でなく、これに先行する木橋と考えることができる。

**造営計画** 南門と南面大垣より南の造営にあたっては、新山田道SF608が基準となったようである。というのは、SF608の南側溝SD601心が南面大垣心から南に35.95m、唐尺で120尺にあたるからである。この南は丘陵に向かって地山が高くなり、谷地形も残ることから、山田道の位置、すなわち南側溝の位置が造営（造成）の南限になったと推測される。

1期の配置計画では、心々距離で約10.8m（唐尺で36尺）のSD601・609を両側溝とする新山田道SF608Aを南端につくり、SD601心から北約2.4m（唐尺で8尺）にほぼ伽藍中軸に揃えて幢幡SX604を設置。北は広場SH655Aで、幢幡SX615とSX621・623を設置。SX615心とSD601心と南面大垣心との距離は、21.0mと15.0m（唐尺で70尺と50尺）。SX621・624は南面大垣心から南約8.0m、唐尺で27尺であろう。

2a期の新山田道SF608Bは、北側溝をSD606に改めて南に移し、心々距離で幅約7.2m（唐尺で24尺）に狭める。北の広場SH655Bも南に広がる。幢幡SX605はSD601から北約2.4mだが、東西方向の位置は南門への参道SF610の中軸にあわせ少し東に移る。SD611・612を両側溝とする参道SF610は、心々距離9.7m前後、唐尺で32尺の計画か。東西大溝SD625Aの推定心は、南面大垣心から約6.0m、唐尺で20尺。1期も溝心は同じと推定する。

- 
- 1) 大垣市教育委員会「美濃国分寺跡発掘調査現地説明会資料」1997年。
  - 2) 国士舘大学文学部考古学研究室『下野薬師寺跡Ⅳ』1996年、第12図。
  - 3) 大阪府教育委員会『新堂廃寺』大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1、2001年、第9図。

## J 東面・北面・西面大垣及び西門と周辺の遺構

### i 東面大垣SA500と東面築地SA535

#### a 遺存状況 (Ph.65~68)

南端近くを第9次調査、中央部を第4次調査及び第8次調査(東区)、北端部を第6次調査(北区)として実施した。

南端近くでは、2mを超える11世紀前半以降の流入・堆積土下に、東面大垣や東面築地が比較的良好な状態で残っていた(Ph.68・69)。その結果、東面大垣SA500には基壇があり建て替えていること(SA500A・B)、SA500Bは瓦葺きで10世紀前半頃に東に倒壊したこと、この倒壊部材上を整地して新たに東面築地SA535を造営していること、SA535は次第に崩れて土塁状になっていること、SA500とSA535には西雨落溝SD693・695(537)があり、東には基幹排水路SD530・531・540があることなどが判明した。

中央部でもほぼ同様の状態であったが(Ph.65~67)、北端部では削平のため、SA500の2時期の柱穴、西雨落溝や東の排水路などが残っていたにすぎない(Ph.70)。

造営の年代 SA500A・Bの造営年代は、後述するように東の排水路SD530・531との対応から、山田寺創建の7世紀中頃と7世紀後半の天武朝に比定できる。東面築地上は東面回廊倒壊の要因となった流入土、粘土・砂互層堆積Aが覆っており、11世紀前半が廃絶時期となる(本章1B参照)。

#### b 東面大垣SA500A・B (Pl.2・3・5・6、Ph.65~70、付図1・2)

南端の状況 **基壇**(Fig.72・73) SA500の基壇は、南端近くの第9次調査では残存基底幅約2.1m、残存高約0.7mである。かなり浸蝕を受けているために不明な点も多いが、大垣の柱の建て替えによる改変が認められる(Fig.72-4・5)。

旧東面大垣SA500Aは、花崗岩風化土の地山(標高117.87m前後)上にある厚さ15cmほどの整地土面に、2層の積土(厚さ約20cm)を施して基壇とし、この上面から柱穴を掘って柱を立てている。基壇基底は推定柱心から東に1.28m、西に0.82mまで残る。柱心から基壇西端までの距離は、既述した旧南面大垣SA600の柱心から北雨落溝の肩までの距離とほぼ一致する。SA500Aの基壇が柱心より東で広がる理由は判然としないが、あるいは犬走り状になっているのかも知れない。残存基壇高は、西雨落溝SD693Aの底からだ約40cm、SD693Aの肩からだ約20cmである(基壇上面の標高は118.15m前後)。

新東面大垣SA500Bは、SA500Aの基壇上に、残存する部分で4層ほどの積土(厚さ約35cm)を施して基壇とする(上面の標高118.48m)。柱は、SA500Aの柱抜き穴を利用して立てており、SA500Bの基壇築成は立柱後となる。基壇基底の幅は、浸蝕のため不明瞭だが、柱心から東では約1.3m、西では0.8~0.9m残り、SA500Aより幾分か広がった可能性がある。残存基壇高は、西雨落溝SD693B底から約80cm、SD693Bの肩からだ約65cmである。

SA500Bの東側には、基壇築成後に2層(暗青灰色砂土質土など)ほどの堆積土もしくは積土があり、上面を瓦敷としている(上面の標高118.35m前後)。瓦敷は西端が柱心から85cmあたりで南北にほぼ揃う。幅は70~80cm残り、以東はゆるやかに下る(Fig.73-3)。犬走りである

う。西側では、古い西雨落溝SD693Aの堆積土（灰色粘土）上に暗青灰色砂質土があり、これも犬走りに類似したものと考えられるが、柱心からは約1.2mと狭い。瓦敷も認められない。

中央部やや南寄りの第4次調査（Fig.72-2・3）でも、南端近くの知見と大差ないが、犬走り状の遺構は認められなかった。旧東面大垣SA500Aの基壇は、花崗岩風化土の地山上（標高117.95m前後）に直接盛土し、この上から柱穴を掘っている。基壇の残存基底幅は約1.8mで、柱心から東で約95cm、西では約80cm。残存基壇高は西雨落溝SD693Aの底から約20cm、肩から10cmほどである（基壇上面の標高118.10m前後）。新東面大垣SA500Bの基壇は、残存基底幅が約2.3m、柱心から東は約1.0m、西は約1.3m。残存基壇高は、西雨落溝SD693Bの底から約40cm、肩から約30cmである（基壇上面の標高118.36m前後）。

中央の状況

中央部の第8次調査では、1箇所を断割っただけで詳細不明だが、旧東面大垣SA500Aは創建時に谷SD526（本章2K参照）を埋めた面に盛土して基壇とする（Fig.72-1）。基壇土は約3層で、厚さ約20cm。柱穴は基壇上面から掘込む。残存する基壇上面の標高は118.38mで、南方の第9次調査区より20cmほど高い。後述する西雨落溝や東の基幹排水路のレベルからみても、第4次・第8次調査区付近が最も高く、南と北に漸次低くなっていたことがわかる。

南・北に下降

なお、東面大垣SA500の基壇上では、ほぼ中軸線上で、東西約30cm、南北約15cm、厚さ6cmほどの扁平な1個の石SX698（第9次調査）と、2個の小穴SX543（第4次調査）を検出した。同様の石は、既述したように新南面大垣SA630にもあり、壁の地覆石と推測した。東面大垣のSX698はSA500Bの積土下にあることからSA500Aの地覆石（上面の標高118.16m）、SX543はSA500Aの柱掘形より新しく、SA500Bの地覆石抜き穴と考えていいであろう。第8次調査区でもほぼ中軸線に小振りの石があるが、基壇面よりかなり下った位置にあり、SA500Aの柱抜き穴に落ち込んだものである。

**柱穴**（Ph.66～70、Fig.73） SA500Aの柱掘形は、東西1.4～2.3m、南北1.0～1.6m、深さ1.6～2.2mを測る。底の標高は、中央やや南寄りの第4次調査区で116.1～116.5m、南端近くの第9次調査区で115.9m、北端の第6次調査区で115.2～115.3mと、中央付近が最も高く、南にわずかに低く、北ではかなり下っていたことがわかる。

検出したSA500Aの柱穴9個のうち、7個は柱を南北方向に単独もしくは2本一緒に抜取り、その後この抜き穴を利用してSA500Bの柱を立てている。残る2個の柱穴のうち、1個はごく一部を検出したただけだが、他の1個、すなわち北端から2個目（第6次調査区）には柱根が残る（Ph.70-3、Fig.73-1）。柱根は16角形に面取りしたもの（径約29cm、残長約1.4m）であり、上端はノミで切断している。古い柱抜き穴は認められない。柱根の標高は、底で115.22m、柱根上端で116.51m、検出時の掘形の肩が117.16mである。基壇は削平されているため、掘形の掘込み面を確定できないが、柱穴が最も深い例（第9次調査）で基壇面から約2.2mであることから、削平は25cm程度と推測される。この仮定にたつと、復元基壇面から切断した柱根上端までは約0.9mであり、この上に新たに柱を立てた可能性は薄い。すなわち、北端から2個目の柱根は、後述する西面大垣の場合にも見られるように、SA500Aの柱をそのままSA500Bに利用したと推測できる。

新旧柱位置はほぼ同じ

SA500Bの柱は、北端部を除くと、SA500Aの柱を抜取った後、SA500Aの掘形底から0.5～0.8m上に据えた石や木の礎盤上に立てている（Ph.69、Fig.73-2・3）。いずれも柱は南北方向

第IV章 遺 跡

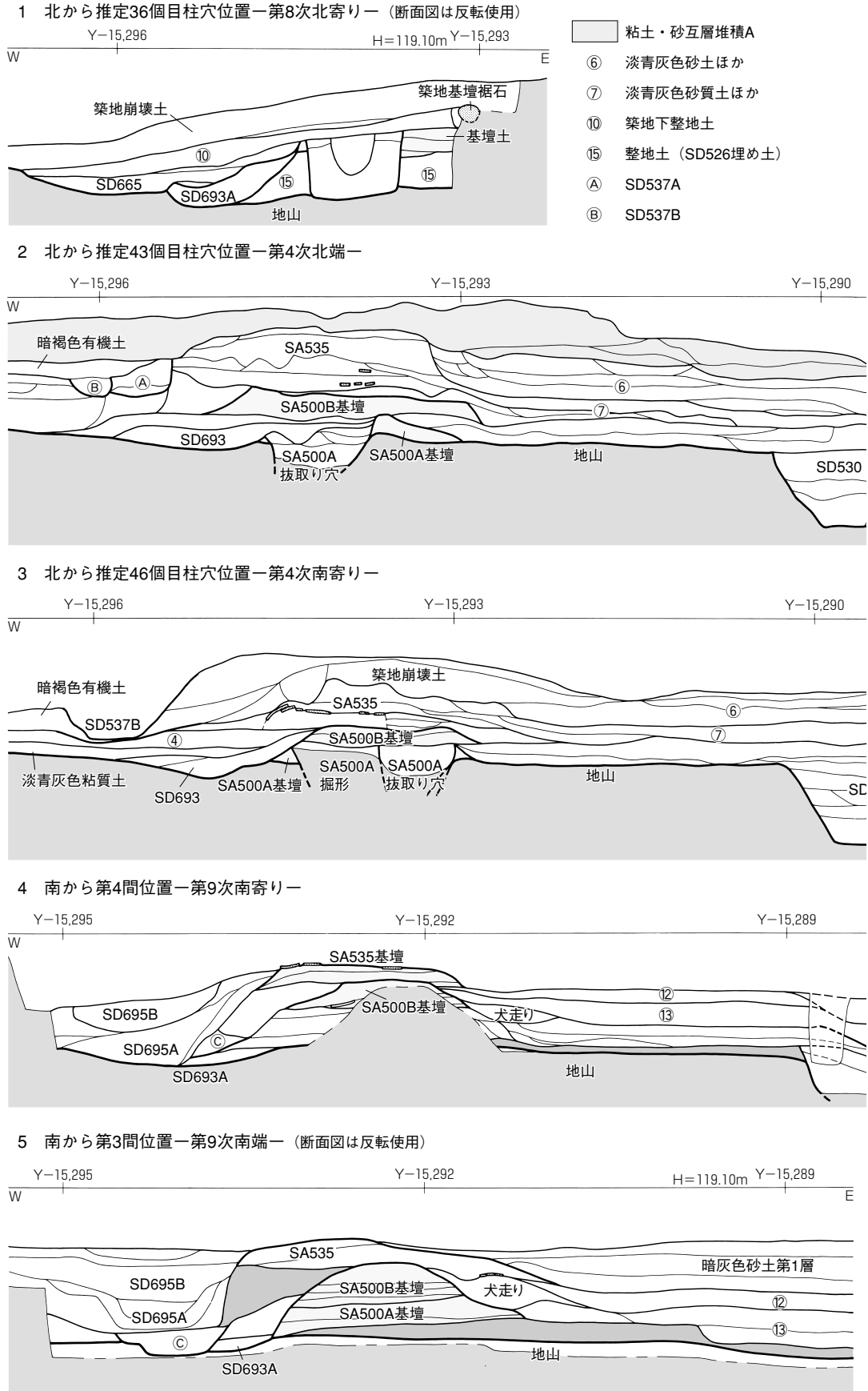


Fig.72 東面大垣SA500・東西築地SA535断面図 1:50

に抜いているが、南端近くの第9次調査区では檜の礎盤に残る圧痕から、柱は径約23cmで多角形に面取りされていたとわかる。礎盤上面の標高は、南端近くの第9次調査区で116.77m、中央やや南寄りの第4次調査区で116.40~116.95m。第6次調査区で検出したSA500Bの北端（大垣東北隅）の柱穴の底は、SA500Aと同じ標高115.34mと、北にかなり下る。

**東面大垣の復元** 新東面大垣SA500Bの柱間は、中央やや南寄りの第4次調査区で検出した推定5間分の柱穴の礎盤心々距離が2.37m等間であり、既述した新南面大垣SA630・631と同様に、

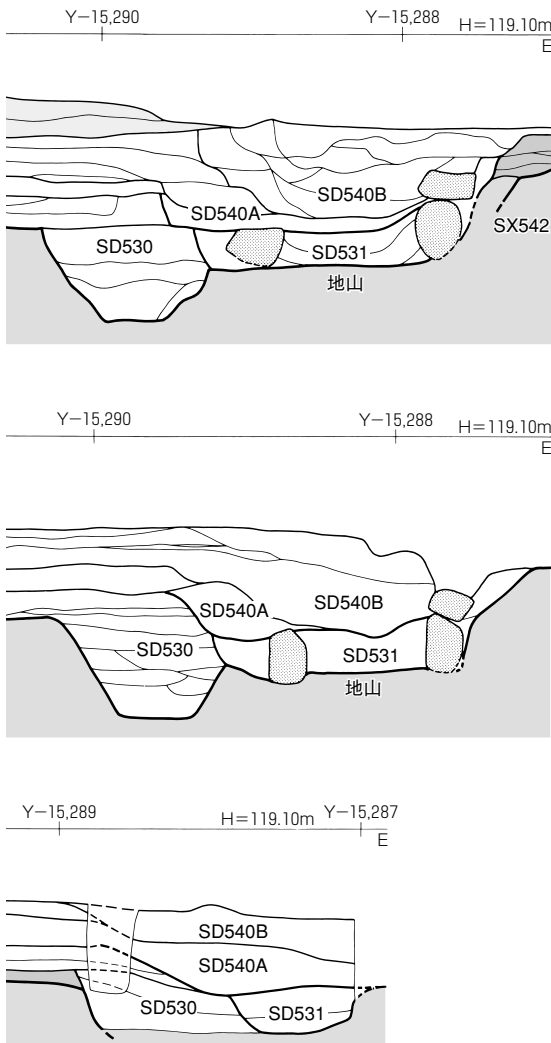
8尺を基本として計画されたと推測される。第4次調査区南端の礎盤心から第6次調査区の北端から2個目の柱根心までの距離を測ると、108.81mであり、これを2.37mで割ると45.91間になる。おそらくこの部分は46間で8尺（2.365m）等間であり、造営尺は1尺=29.56cmと考えていいであろう。ただし、SA500Bの北端1間は6.6尺と狭く、北で西に約8°振れる。造営方位が若干異なる北面大垣との施行誤差を端間で処理したのであろう。この点について後に改めて触れる。

8尺等間

他方、第4次調査区南端の柱穴（SA500Bの北端から推定48個目）礎盤心から、第9次調査区南端の柱穴（SA500Bの南端から4個目）の礎盤心までの距離は67.12mほどであり、これを29.56cmで割ると227.06尺となる。227尺は8尺×23間+3尺なので、途中に12尺1間か27尺3間の東門があったと考えられる。東門が後述する西門SB685と位置や形態が同じであったとすると、東門は3間で、この南の扉は8尺等間23間となる。方位は、SA500Bの北端から2個目の柱根心と、南端から4個目の礎盤（枅穴）心を結ぶと、北で西に0°53'44"振れる。また、この間の距離175.93mが595尺であるから、造営尺は29.57cmに補正される。ちなみに、第4次調査区で測ると、東面大垣心と東面回廊東側柱心との距離は約17.1mである。

東門あり

旧東面大垣SA500Aは、既述したように、柱を抜取った跡に新東面大垣SA500B



- 整地土
- ⑫ 倒壊部材・瓦層  
(暗灰色砂土第2層)
- ⑬ 暗灰色砂土第3層
- ◎ SD693B



第IV章 遺 跡

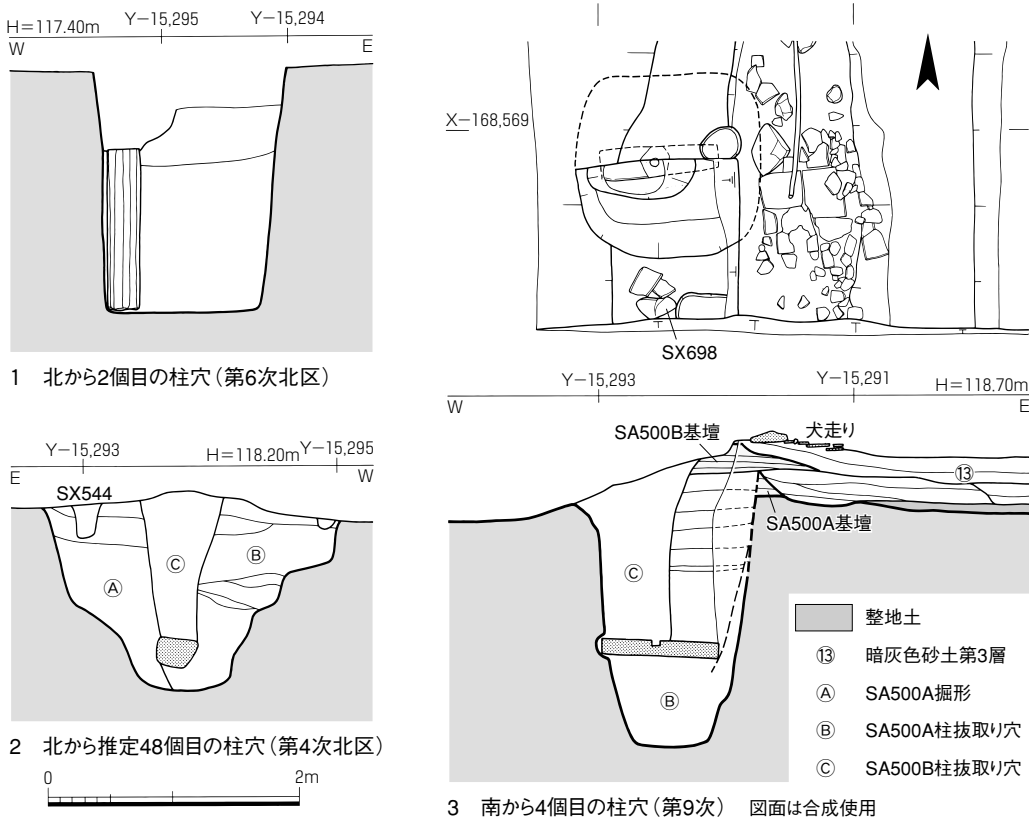


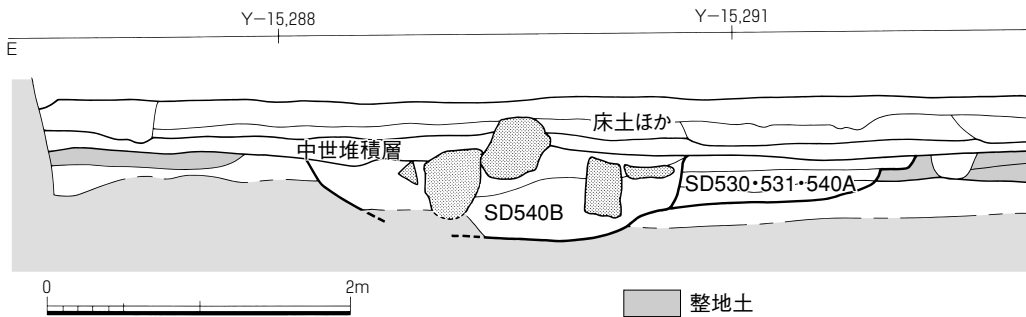
Fig.73 東面大垣SA500A・Bの柱穴 1:60

の柱を立て、一部ではそのままSA500Bにも利用された可能性があることなどから、SA500Bとほぼ同一であると推測される。

新東面大垣  
は 倒 壊

なお、南端近くの第9次調査区では、SA500Bが東に倒壊したため、建築部材の桁材2本、棟木1本、垂木2本、斗1点(第VI章9参照)のほか、葺いていた屋根瓦がそのまま落下、反転した状態で出土した(Ph.68-2、69-1、Fig.75)。

その結果、垂木の残長(約1.2m)や平瓦の葺き足(16~20cm)から、SA500Bの屋根瓦は各筋に丸瓦(筒部長約31cm)2本と平瓦(長さ34~39cm)3枚を用いていたこと、軒先には四重弧文軒平瓦(BI)を用いていたこと、軒丸瓦も使用していたと推測されるが、倒壊以前に落下してしまった可能性が高いこと、丸瓦は行基式と玉縁式を併用していたこと、丸瓦や平瓦は7世紀中頃~後半の凸面斜行子叩き目が主体だが、奈良時代の縄叩き目や、布目が荒く10世紀に入る可能性のあるものもあり、幾度となく修理があったことなどが判明した。また、倒壊部





材に混じって延喜通宝（初鑄907年）が出土したことから、SA500Bの倒壊年代が10世紀前半であることも明らかとなった。

**西雨落溝SD693A・B** (Fig.72) SD693Aは旧東面大垣SA500Aの西雨落溝、SD693Bは新東面大垣SA500Bの西雨落溝で、ともに基本的には素掘りである (Pl.2・3)。既述したようにSA500Aの東は犬走り状になっており、東雨落溝はなかったであろう。

SD693Aは、浸蝕のため両肩が不明瞭になっている所が多いが、南端近くの第9次調査区では比較的良好的な状態で残り、幅約1.1m、深さ約10cmである。SA500Aの柱心から溝心までの距離は1.35m、溝の東肩までは約0.8m。中央やや南寄りの第4次調査区での知見（付図2参照）によると、東面回廊からSD693Aまでの間は地山や整地土がゆるやかに東に傾斜しており、この区画の雨水をSD693Aで受けていたことがわかる。溝底の標高は、第9次調査区付近が117.78m、第4次調査区付近が118.82mと、わずかながら南下りである。

旧西雨落溝

SD693Aの北端は、第6次調査北区で検出しており、北面大垣下を後述する暗渠SX573で北に抜ける。SX573の南では、SD693Aの両岸は高さ10~20cm、幅10cmほどの自然石を1~2段積んでいる (Fig.77)。溝幅は内寸法で約55cm、深さは約30cm。底南端の標高は117.2m前後であり、中央部付近の第8次調査区からは北に排水していたことが知れる。SA500の柱心から溝心までの距離は約1.4m、残存する溝の東肩までは約1.2m。

南北に排水

SD693Bは、南端近くの第9次調査区でみると、幅約1.0m、深さ約20cmである。溝底の標高は前身のSD693Aと同じ117.78mだが、溝心は30cmほど西になる。中央部付近の第4次調査区では、浸蝕のため、当初の両肩が明瞭でないが、調査区北端でみると、位置はやや西に寄り、底の標高も118.1mと高い。第8次調査区でも溝は少し西に寄る。底の標高は117.98m前後。北端の第6次調査北区ではSD693Aを踏襲しており、中央部からは南だけでなく北にも排水したことが知れる。なお、第8次調査区では、宝蔵SB660AをSB660Bに改作した9世紀中頃に、SD693BをSD665に改め、位置も50~60cm西に移している (Fig.72-1参照)。SD665は宝蔵SB660Bの東北部では幅が約2.5mと広いが、部分的で、北や南はSD693Bが踏襲されたと推測される。

新西雨落溝

c 東面築地SA535 (Pl.2・3・5・6、Ph.65~70、付図1・2)

**整地と基壇** (Ph.65~68、Fig.72・73・75) 東面築地SA535は、南端近くの第9次調査によって、新東面大垣SA500Bが東に倒壊した後、この上を整地して10世紀前半に築成されたことが明らかである。

築地の年代

整地土は、西では新東面大垣SA500Bの西雨落溝SD693BやSD665（第8次調査区）を覆い、東ではSA500Bの犬走りを覆う (Fig.72)。中央付近の第4次調査の知見によると、遺存する

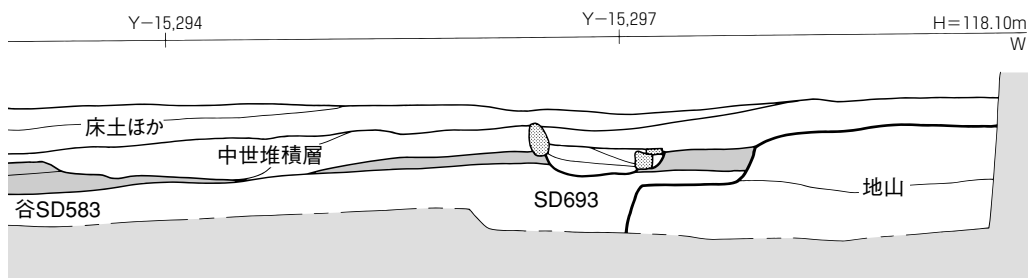


Fig.74 基幹排水路SD530・531・540と東面大垣雨落溝SD693（第6次調査北区） 1:50

SA500Bの基壇上面から10～15cmの高さ（標高118.30～118.35m）あたりから2～3層の瓦を一部では密に敷き並べ、築地本体の地固めとしている（Pl.5、Ph.66、Fig.72-2・3）。そして、標高118.40mあたりでは、SA500Bの柱心から東約1.2mの位置で南北に瓦を一行並べている。これらの瓦には奈良時代の6134系の軒丸瓦や縄叩き目平瓦を含む。中央部の第8次調査区では瓦に替えて小振りの玉石を一行並べている（Pl.6、Ph.67、Fig.72-1）。石列上面の標高は118.65m前後。南端近くの第9次調査でも東に部分的に瓦や石が並ぶ（Ph.68、Fig.75）。瓦の上面の標高118.35m前後。後述する築地本体の基底となる瓦列までの間にある厚さ20～40cmの盛土が基壇土で、上述した東の瓦列や石列は基壇裾の見切とみていいであろう。西は浸蝕が著しいため不明だが、後述のように第4次調査区の西雨落溝SD695内に大振りな石3個が落込んでおり、基壇の護岸であった可能性がある。

**築地** 築地本体の版築層は確認できなかったが、基壇上で2列の南北方向の瓦列を第8次調査区や第9次調査区で検出している（Pl.3・5・6、Fig.75）。外々での距離は約1.2mであり、SA500Bの柱心からほぼ等距離である。したがって、築地本体は1.2m間隔で並べた瓦列を土台とし、この上に築成したと考えられる。この瓦列上面の標高は、第9次調査区が118.53～118.56m、第8次調査区が118.86～118.90mであり、築地は中央付近から南に下っていたことが知れる。

第4次調査区では、築地心から東と西に60cmほど離れて並ぶ2対の小穴SX544を3箇所検出している。築地基底部の幅と一致し、築地本体を築成するときの寄柱と推定できる。

**西雨落溝SD537・695** 東面築地SA535の西雨落溝は、標高が高い中央付近の第4次調査区内で

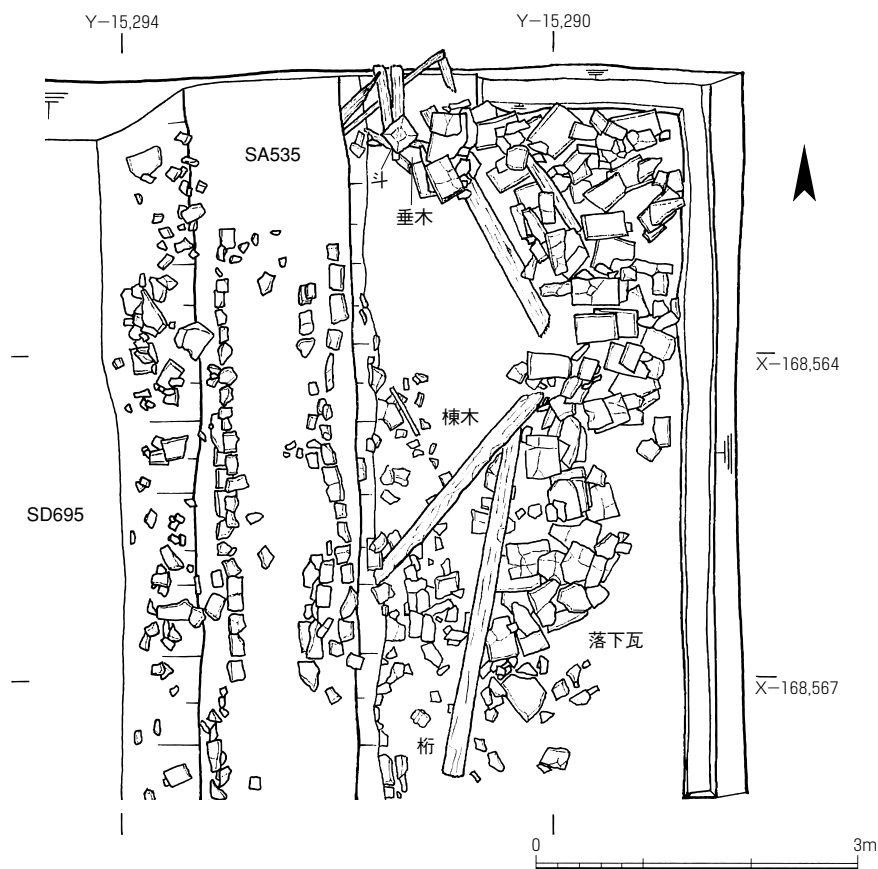


Fig.75 東面大垣SA500B（第9次調査）の倒壊状況と東面築地SA535 1:70

は途切れていることから、北をSD537、南をSD695とした。ともに素掘りである。既述したように南面築地では南と北に雨落溝があるが、東面築地では東の雨落溝を検出していない。東西大垣と同様に、雨落溝はなかった可能性が高い。

北のSD537は、第4次調査区では幅が約50cm以上、深さ約20cm（底の標高118.25m）、第8次調査区では宝蔵SB660Bに伴う東雨落溝SD662B上にあり、幅約1.3m、深さ約20cm（底の標高118.25m）。築地心から溝の東肩までの距離は1.5m前後であり、東面大垣の西雨落溝より20cmほど西に寄っている。北端の第6次調査区では削平されているが、後述するように北面築地SA570下の暗渠SX574（底南端の標高117.18m）を通して、北に抜ける。

南のSD695は、第4次調査区で幅約1.1m、深さ約10cm（底の標高118.1m前後）、第9次調査区で幅1.5m以上、深さ20cm以上（底の標高118.0前後）であり、水は南に流れる。築地心からの溝の東肩までの距離は第4次調査区では約1.4m、第9次調査区では約1.2mである。

第4次調査区の知見によると、SD537やSD695は築地が崩壊して土塁状になった時点にもほぼ同じ位置で掘直されている（Fig.72-2・3）。SD695内に比較的大きな石3個が落ち込んでいるのは築地側の護岸かも知れない。この時期のSD537内や周辺の10世紀末～11世紀初頭頃の土器を含む暗褐色有機土などから馬歯、馬肢骨などが出土している（第4次調査区）。

第9次調査区の知見（Fig.72-4・5参照）によると、SD695は溝底のレベルを上げながらも機能し続けたことがわかる。築地と西雨落溝上は、粘土、砂互層堆積Aが覆い、廃絶は東面回廊と同様に11世紀前半に比定できる。

## ii 北面大垣SA570A・B（Pl.2、Ph.70・71、付図1・2）

**柱穴**（Pl.2、Ph.70） 第6次調査北区で、東面大垣SA500の北端の柱穴とその西に約2.4mで柱掘形1個、講堂東北方（第2次調査補）で柱根の残る掘形1個を検出した。これらは、西で南に40°ほどの振れで、東西方向に並んでいるので北面大垣の柱穴と推定される。

東面大垣との交点になる東端の掘形は、東西約1.5m、南北約1.0mで、深さ約1.7m（底の標高115.34m）。柱痕跡が明瞭で、大垣東北隅の位置を示す（Fig.77）その1間西の掘形は、大部分が12世紀前半頃の土坑SK575によって壊されているが、土坑の壁で直径約30cmの柱痕跡を検出した。この柱痕跡は古い抜き取り穴の中にある。西と東の柱痕跡の心々距離は約2.4m。講堂の東北方で検出した柱穴は、掘形が一辺1.4m、深さ1.3m（底の標高114.78m）を測り、掘形の底から約35cm上に扁平な礎盤の石を据え、これに直径25cm、残長0.9mの柱根をのせていた（Ph.70-3、Fig.76）。この柱根は、他の大垣のものと同様に16角形に面取りされており、掘形底より浮いているので新北面大垣SA570Bのものと思われる。

北面大垣も  
新旧2時期

**北面大垣の復元** 新北面大垣SA570Bは、上述のように第6次調査区で検出した東端の柱間が2.4mであることから、南面大垣や東面大垣と同じく8尺間の掘立柱塀であったと思われる。東端の柱痕跡から講堂東北方で検出した柱根までの距離は52.59mを測る。かりに造営尺も東面大垣と近似して29.57cmとすると177.85尺となり、この部分は178尺であった可能性が高い。講堂東北方で検出した柱根から西面大垣SA680の延長ラインまでの距離は65.26m、220.7尺であり、これは221尺であったと思われる。前者の178尺分は8尺間21間と10尺1間になる。後者の221尺分は8尺間27間と5尺余りになる。この5尺のうち2尺は、北面大垣の左右対称性を考えると10尺1

北門及び  
通用門あり

間として吸収されるので、余りは3尺である。したがって、北面大垣にも他の大垣と同様に3間の北門があり、それが9尺等間3間であったと思われる。また、東西にある10尺の柱間は南面大垣と同様の通用門と推定できる。この場合、東端から西面大垣までの距離117.93mは399尺であったことになり、造営尺は29.56cmに補正される。

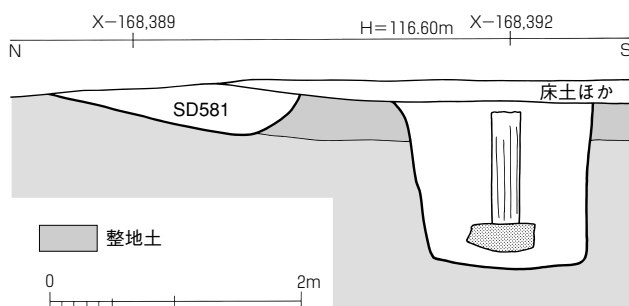


Fig.76 北面大垣SA570の柱穴とSD581 1:60

大垣東北隅  
は特殊状況

ここで注意すべきは、南面大垣に比べて北面大垣が1尺短いことである。このことから、先述したように東面大垣SA500の北端の1間は、西に大きく振れて北面大垣に連結されることになったと考えられる。換言すると、北面大垣は西面大垣を基準に造営され、その東端で東面大垣と無理に接合されたと思われる。このとき北面大垣の方位が南面大垣に比べて約19'緩いので、南北両大垣間の距離は東に行くほど狭くなる。そのために東面大垣の北端柱間は8尺で計画されながら6.6尺まで短くなったのであろう。なお、講堂北方で検出した柱根は、北門の東隣りの柱であったことになる。

旧北面大垣SA570Aについては、柱を抜いた跡にSA570Bの柱を立てていることから、SA570Bと大差ないと推定しておく。

**暗渠SX573・574** (Pl.2、Ph.71、Fig.77) 北面大垣の東端間にある南北方向の2条の暗渠である。東のSX573が古く、西のSX574が新しい。

大垣の暗渠

SX573は、幅約90cmの掘形の底に磚を敷き、西側に磚と自然石を立てたもの。蓋は残っていない。磚は一辺50～60cmの方磚を半載したものである(第V章2M参照)。底磚は5ないし6枚で、南端のみ扁平な石を用いる。側は南端部の2個が磚、以北は人頭大の自然石。底・側とも北面大垣心まではなだらかな北下り(底の標高117.04～117.22m)だが、以北は急傾斜となる(北端の底の標高116.60m)。北端の底磚は割れて北にずっているようだが、それにしても北での傾斜は急激であり、すぐ北にはこの水を受ける東西溝があったことを暗示する。SX573は、内寸法で幅約30cm、残存高24cm、検出長約2.8m。

築地の暗渠

SX573の南は南北方向の溝につながる。これらの心と東面大垣心の距離は約1.4m。既述したように東面大垣心と西雨落溝SD693の心との距離とほぼ一致することから、SX573の南の南北溝はSD693とみていい。暗渠に用いた方磚は、回廊創建の暗渠(第四章2C参照)と同じであることも、SX573が7世紀中頃に遡ることを示す。SX573の埋土からは奈良時代末頃の瓦が出土しており、少なくともこの時期まで存続していたことになる。

北面大垣も南・東面大垣と同様に内(南)側に雨落溝があったはずであるが、削平され残っていない。ただし、SX573の底磚南端は北面大垣心から南約1.4mだが、側の磚は北面大垣心から南約1.1mであり、この位置が南雨落溝の北肩と推定される。

SX574は、SX573の西壁を利用し、この東約35cmに人頭大もしくは細長い自然石や一部で磚を立てて東壁としたものである。蓋は、東西長が90cm程度の自然石で、原位置に2石が残るが、12世紀前半の土坑SK575に4石落とし込まれていた。底は蓋石下面から6～10cmの土の面で、中

次に玉縁式と行基式丸瓦を裏返しに連結して水路とする。側石や底の丸瓦列はともに北に下る。丸瓦列の底面で測ると、南端が117.34m、北面大垣心あたりが117.02m、以北は土坑SK575で破壊されているが、SX573と同様、さらに急傾斜であったと推測される。

SX574は新北面大垣SA570Bの柱痕跡上に位置することから、SA570Bを築地に改めた時期の暗渠となる。築地そのものは削平を受けて残ってないが、南には雨落溝もあったはずである。暗渠SX574側石と底の丸瓦南端は、SA570B心からそれぞれ南約1.7mと約1.8mに位置する。暗渠の南端が北面築地の基壇端とすると、北面築地の基壇幅は東面築地の約2.4mより広く、南面築地の復元基壇幅約4.2mより狭かったことになる。

SX574は既述したように12世紀前半の土坑SK575に破壊されている。東面築地の南半は11世紀前半に流入土で埋没するが、北面築地あるいは東面築地の北寄りには12世紀前半近くまで存続していた可能性がある。

**東西溝SD581** 講堂東北方で北面大垣SA570Bの柱根を発見した折に、柱根心から北約1.6mで幅約2.0m、深さ約40cmの落込みSX581を検出している (Fig.76)。削平を受けており、本来はさ

北面大垣北  
の東西大溝

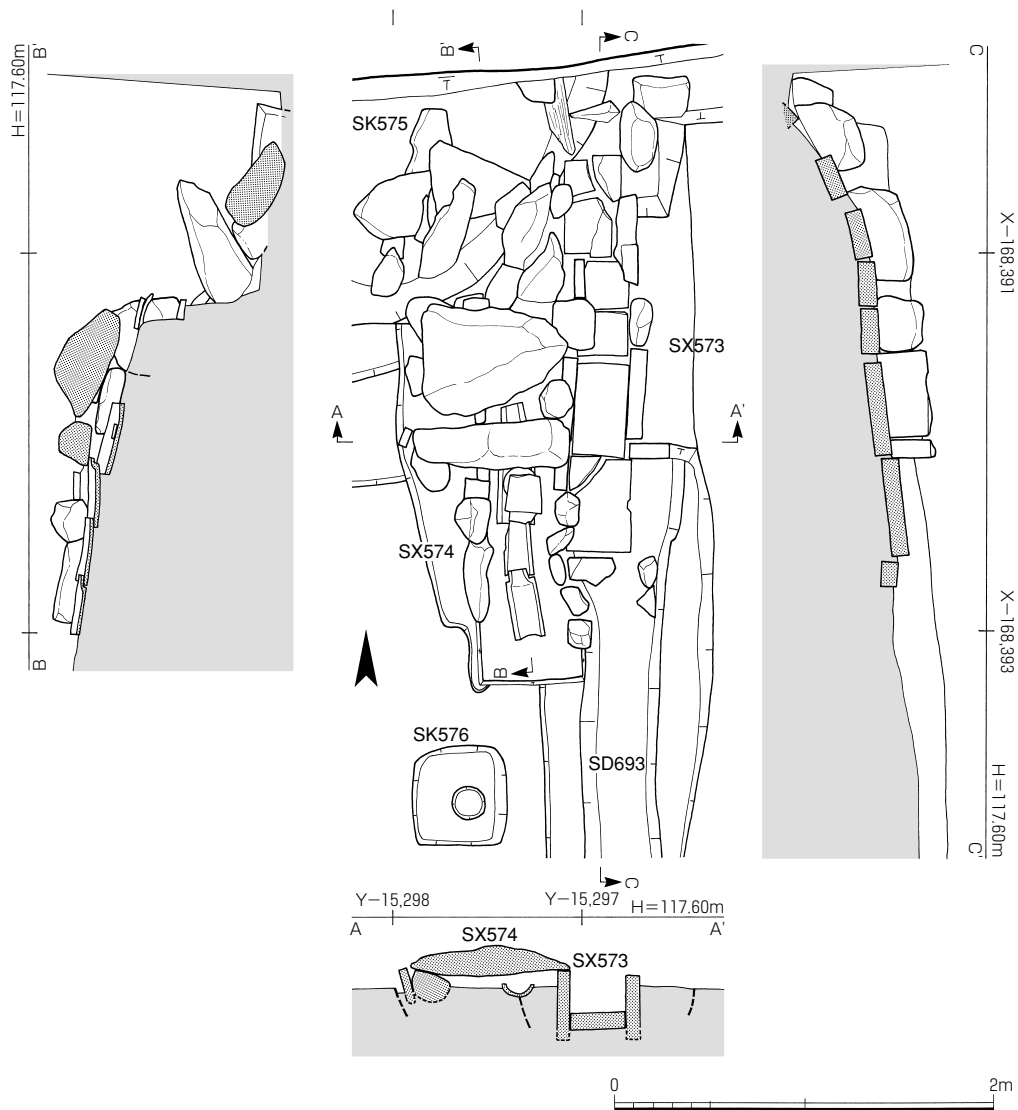


Fig.77 暗渠SX573・574 1:40

らに幅も深さもあつたあずである（底の標高115.84m）。幅約2mの調査のため遺構の性格は不明だが、瓦片を含む。

既述したように、暗渠SX573・574は北に急角度に下る（SX573の北端底の標高116.60m）。後述する東面大垣東方の基幹水路SD531・540も北面大垣の延長位置で北に急角度に下る（北端底の標高116.30m）。これらの水を北で受けるために、北面大垣ないし北面築地に沿って東西方向の大溝があつた可能性は高い。現地形も北面大垣の北では全体が一段下がっており、東西溝の存在を暗示する。したがって、SX581をそれとみて、SD581としておく。

iii 西面大垣SA680と西門SB685 (Pl.14, Ph.72, 付図1・2)

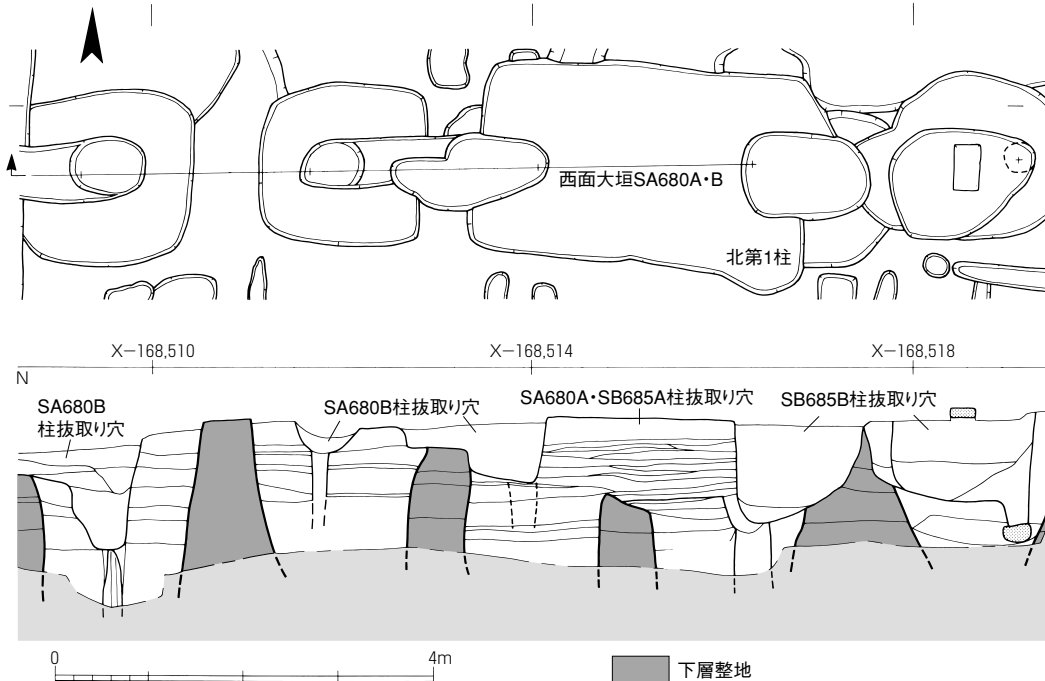
**遺存の状況** (Pl.14, Ph.72) 第8次調査西区で寺域の西限を区画する西面大垣SA680と西門SB685の掘立柱穴列を検出した。ベースは谷地形を埋めたてた厚さ2m以上の整地土面だが、後世の削平や攪乱を受け、南・東面大垣のように基壇や雨落溝、その後につくられたであろう築地も残っていなかった。他では、SA680の足場穴SS681や、SB685に取付く東西塀の可能性のあるSA686の一部を検出したにとどまる。

**SA680とSB685の遺構** (Fig.78) SA680とSB685の柱掘形は一辺1.5~1.8mのほぼ正方形で、深さは浅いもので約1.5m、深いもので2m以上である。ともに新旧2時期がある。古い西面大垣SA680Aと西門SB685Aの柱穴は、原則として隣りあう柱を南北方向に一緒に抜き取り、新しい南面大垣SB680Bと西門SB685Bはほぼ前身の柱抜き取り穴を利用して新たに柱を立てている。したがって、柱位置は新旧で大差ないと考えられる。SB685BやSA680Bの柱も、原則としては隣りあう柱を南北方向に一緒に抜いている。

検出した柱穴は計12間分である。後で触れるように、調査区南端より3個目から6個目までの3間分は柱間が広く西門SB685、この北と南が西面大垣SA680である。便宜的にSA680の西門より北の柱穴列を南から順に北第1柱穴、北第2柱穴、南の柱穴列を北から順に南第1柱穴、

西面大垣も  
新旧2時期

新旧柱位置  
もほぼ同じ



南第2柱穴と呼んで説明する。

西門SB685の柱はすべて抜き取られているが、中央間の両柱穴には礎盤の石が残る。礎盤上面の標高は115.50m前後で、両端の柱も抜き取られ痕跡からみて高さは近いと思われる。ほぼ同じ位置で下に古い柱の抜き取られ痕跡があり、礎盤の残るものがSB685B、古いものがSB685Aになる。ともに控柱はなく、棟門である。

西門2時期

西面大垣SA680では、南第1・第2柱穴、北第3・第6柱穴に、多角形に面取りを施した柱根が残る。直径約30cm、残存長1.5m以上。柱根の底の標高は、南第2柱が114.70m、他の3本は深いため底まで検出していないが、南第1柱が114.40m以下、北第3柱が114.25m以下、北第6柱が114.15m以下と、北にかなり下る。他方、北第4柱穴には古い柱抜き取られ痕跡の上に石の礎盤がある。上面の標高は115.13mであり、新西門SB685Bの礎盤上面の標高に近い。したがって、礎盤が高い位置にあるのがSA680Bで、北第3・第6柱穴の柱根は、古いSA680Aの下端部を切り残したと推測される。南第1・第2柱穴の柱根は、古い時期の柱抜き取られ痕跡が認められないことから、SA680Aの柱をそのままSA680Bに用いた可能性がある。なお、SA680Aの柱は、検出時の掘形の肩から測っても2.2m以上と、極めて深く埋められていたことが知れる。

東面大垣では、既に述べたように新しいSA500Bは古いSA500Aより柱を約70cm高く据えており、その要因の一つは基壇を高くしたことにあると思われる。南面大垣でも新しいSA630は古いSA600より柱を約70cm高く据え、20cmほどの基壇土を盛ったと推定した。西面のSA680BやSB685BがSA680AやSB685Aより柱を0.8~1.0m高く据えているのも、高い基壇をつくったことが一因であろう。ちなみに柱根の底（礎盤上面）の標高は、東面大垣SA500Bの南から4個目が116.77m、南門東脇のSA630東第2柱が116.38m、西門SB685Bが115.50m前後。部分的なデータではあるが、境内は西にかなり下っていたと考えて誤りが無い。あえて西門SB685B付近の造営時の標高を復元すると、以下のようなだろう。南門東脇のSA630の柱根は底から付近の造営時の面まで約1.3m（標高約117.90前後）、西門SB685Bの礎盤上面から柱掘形の検出面（標高116.80

寺域西下り

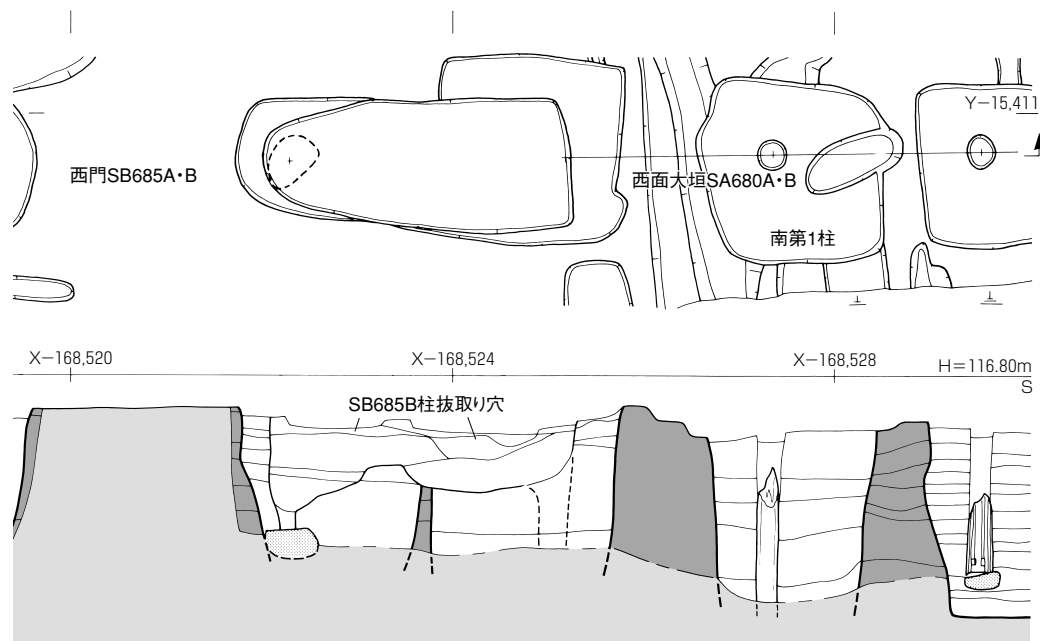


Fig.78 西面大垣SA680と西門SB685の柱穴 1:80

m前後)まで約0.8mで、柱根の深さを同じとすると差は約0.5m。この50cmほどが削平分で、SB685B付近の造営時の標高は約117.3m、南門SB001付近からは約60cmほど低かったことになる。

なお、西面大垣SA680の南第1・第2柱穴の東約2.4mの位置では、径10~20cm、深さ5~10cmの小穴SS681を2個検出した。SA680の柱と筋が揃い、穴も小さいことから、足場穴に比定。底がわずかに残っただけで、他は削平されたと考えられる。

**西面大垣と西門の復元** 中間部に西門SB685があるので柱割りは単純には決まらない。まず4本残る柱根からSA680Bの1間の平均寸法を算出すると、2.23mとなる。これが8尺であるとする、造営尺が他の大垣とあまりにも異なるので、1尺は29.73cmで7.5尺と仮定する。この造営尺で検出部分全体を割り付けると、西門SB685Bは29.64尺と半端な寸法になる。そこで、第8次調査区の北端と南端の柱根間は、30尺の西門SB685と、その南北に7.5尺等間で8間分の掘立柱塀があったとして、その合計度90尺で柱根間距離26.65mを割ると、造営尺は29.61cmに補正される。この造営尺で、調査区南端の柱根(南第2柱)から南面大垣の推定ラインまでを7.5尺で割付けると22間で推定南端柱心のわずか3cm北となる。そして、SA680Bの北端心は、下記のように復元すると、北面大垣SA570Bの推定ラインと一致する。

以上のように、SA680Bの両端の復元位置が南北両大垣とほぼ一致するので、この造営尺は適当であると思われる。この場合、北第6柱の柱根から北面大垣推定ラインまで110.1mは371.84尺となる。これは372尺で、7.5尺等間49間として4.5尺余る。つまり、調査区より北に12尺の柱間が1箇所あると思われる。これは通用門であろう。その位置は、北面回廊と講堂の中央を通る道路(第IV章2Gii参照)の西の延長と想像される。西門30尺分を加えた南北総長は、東面大垣の計画長と同様627尺になる。旧西門SB685Aも新西門SB685Bと同様に30尺と推定される。同時期の南門SB599より総長で2尺長くなり、飛鳥に面した西門を重視したとの見方もあるが、ともに棟門であり、外見上それ程の差はなかったであろう。造営方位は、第VI章第1節で述べるように、北で西に0°51'36"振れる。

**東西塀SA686** 西門SB685の東で検出した穴である。一辺1.0~1.2m、深さ約1.2mで、柱の抜取り穴や礎盤と思われる石が底にある。礎盤の位置はSB685Bの南端柱穴の推定柱心から東約2.4mであり、西門に取付く東西塀である可能性が高い。西門の柱心と西面回廊基壇西縁との推定距離は約15.5m。この間を8尺で割付けると、1間のみ12尺間になる。西面回廊と西面大垣の間を、西門の南端で区画した塀であり、広い1間分が扉になっていたであろう。

iv 東面大垣周辺の遺構 (Pl.2・3・5・26、Ph.65・66・73、付図1・2)

**南北大溝SD530・531・540** (Pl.2・3・5・26、Ph.65・66・70、Fig.72・74・79) 東面大垣及び東面築地の東にある南北方向の基幹排水路である。重複しており、SD530→SD531→SD540の順に新しい。南端近くは第9次調査、中央部やや南寄りには第4次調査、北端は第6次調査(北区)で検出している。

**当初の大溝** SD530は、地山ないし創建時の整地土面から掘込まれた素掘り溝である(Fig.72)。東肩をSD531が破壊しているが、復元すると上幅は約1.2m、北端の第6次調査北区では1.6m以上に広がる。深さは50~70cmだが、北端では削平され約30cm。溝底の標高は、中央部の第4次調査区で117.2m前後、北端の第6次調査北区では南寄りが116.95mだが、北寄りには116.40mほどと急激に下る。



南端近くの第9次調査区では検出面の底は117.45mだが、地形からみてさらに下り、中央からは南北に排水  
南に水を流したと推測される。

中央部の第4次調査区の知見によると、SD530の埋土からは7世紀中頃～後半の土器が出土しており、開削時期は山田寺創建に比定される。ただし、北端の第6次調査では7世紀の土器を主体としながらも、上層では多量の瓦とともに黒色土器や灰釉陶器も出土しており、平安時代に入ってまで存続していたことになる。中央部では次述するように7世紀後半にSD530は石積み溝SD531に改められるが、北端では素掘りのままSD530が踏襲されたと考えられる。

SD531はSD530を心々距離で約1.4m東に移したもの。中央部やや南寄りの第4次調査区では、天武朝の溝  
両岸を自然石の石積みとする(Pl.26、Ph.66-3、付図2)。内寸法で下幅約80cm。東岸では最下段に長さ0.5~1.0m、高さ0.4~0.6m、厚さ0.3~0.5mの石を立てて小さな石を重ねたのち、上に扁平な石を置く。南端近くは最上段が残り、深さが約85cmと判明する(底の標高117.55m)。西岸は最下段が東岸に比べてやや小振りであり、部分的に2段目まで残る。上の石はSD540で破壊されているが、西の遺構面(標高118.10m前後)からみて、東岸よりは25cmほど低かったと推測できる。

南端近くの第9次調査区では、SD531はSD530より1mほど西になるが、素掘りのままである。復元幅約1.0mで、深さは約30cm、底の標高は117.45mで、中央部より10cmほど低い。北端の第6次調査北区では、既述したように素掘りで、SD530を踏襲したようである。

SD531の底のレベルがSD530より高いのは、東面大垣をSA500AからSA500Bに改作するにあたって、周辺に整地を施し、基壇そのものも高くしたことによろう(Fig.72参照)。SD531の年代は、第4次調査区では埋土に7世紀後半から8世紀前半の土器を含み、存続の時期が知れる。他に溝内から木簡2点、馬毛らしきものを束ねたもの1点、石積みの裏込めから草鞋1点も出土。馬毛らしきものは一端を黒漆で固めており、伎楽面の飾りである可能性がある。

SD540はSD531上にある素掘りの南北溝である。幅は2.2~3.0m。第4次調査区ではSD531の西側石の上一段を取り除くようにして掘り込まれている。底の砂層からは8世紀後半の土器が出土しており、SD531の埋没後それほど時を経ずに改修されたと推測されるが、東面大垣を東面築地に改めた後も、順次レベルを高くしながらも存続し、最後は11世紀前半の流入土(粘土砂互層堆積A)によって埋没したようである(Fig.72参照)。なお、SD540のすぐ西の平安時代の堆積土(淡青灰色砂土)からは「□寺」の墨書土器が出土。SD540のすぐ東でこれを覆う暗灰色砂土から「経論司」と墨書がある題箋1点、この直下の淡青灰色砂質土から銅製押出仏3点など出土。伴出した土器は11世紀前半頃までのものである。東面築地の裏に捨てた可能性がなくもないが、東の丘陵から落ち込んだ可能性もある。

奈良時代に  
改修

南端近くの第9次調査区でも第4次調査区に似た状況である(Fig.72参照)。北端の第6次調査北区では既述したようにSD530の上層から平安時代に入る土器が出土しており、SD540・SD531はSD530をほぼ踏襲したと推測できるが、平安時代に入る堆積層を切って新たに石積み溝がつくられる(Fig.74参照)。かつてはこの石積み溝をSD531とみたが、石材が大きく、時期も平安時代に入ることから、SD540を北端近くだけ石積みに改めた可能性が高い(SD540B)。

SD540Bの石積みは、東岸では長さ0.6~1.1m、高さ・厚さとも0.6~0.9mの自然石を最下段に据えており、一部で2段目が残る(Pl.2、Ph.70-2、Fig.74・79)。西岸では石はやや小振り

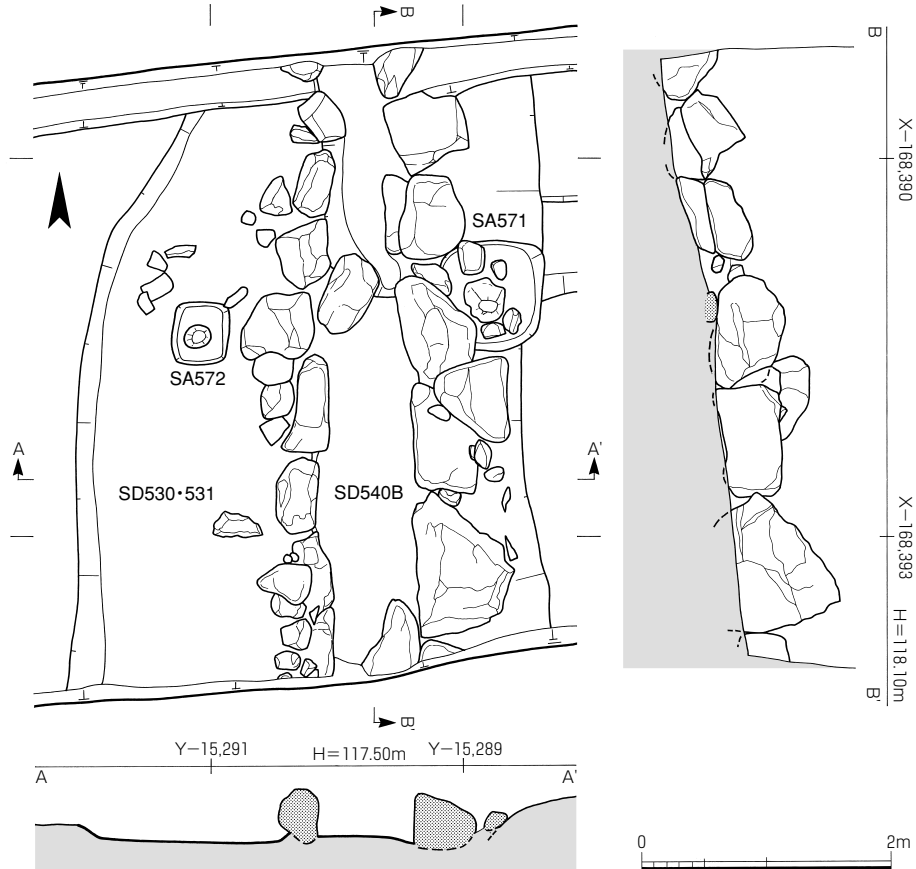
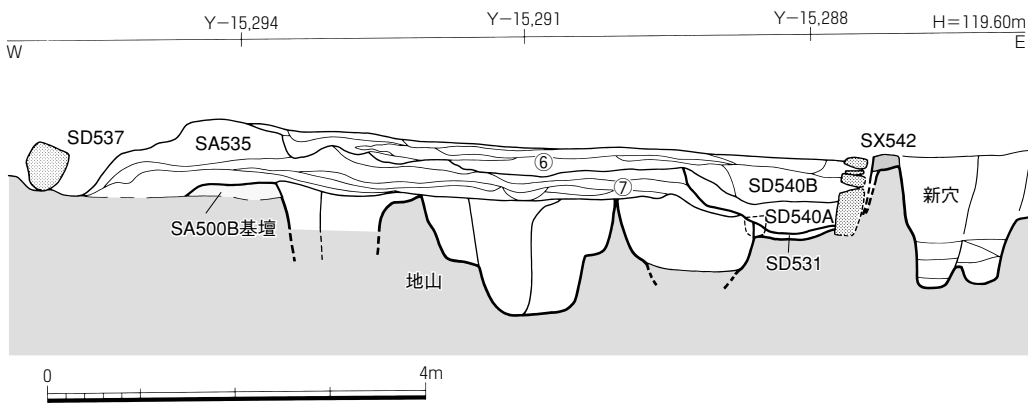


Fig.79 基幹排水路SD540B（第6次調査北区） 1:60

で一部に2段目が残る。内寸法で幅約75cm、残存部で深さ約40cm。底の標高は調査区南端で117.0m、北端で116.30mと北に急傾斜している。この水を受けるためには、既述したように、北面大垣の北に東西方向の大きな溝（SD581）があった可能性が高い。

SD540Bの埋土最上層からは11～12世紀の瓦器が出土。この上に側石の一部が落ち込んでいる。東面築地は、既述したように少なくとも中央部以南は11世紀前半に埋没しているが、北寄りはその後もしばらくは存続していた可能性を示す。

**南北溝SD529** 第4次調査区で検出した素掘りの南北溝である。溝心は基幹排水溝SD531の心から東約3.0mにある（Pl.2、Ph.65、Fig.80）。幅は、南では削平されて約0.4mだが、北では1.3～1.7m。溝の上半は断面がU字状だが、下半は断面がV字状である。西肩はSD531の東側積石の



復元上面と同じで標高118.35m前後だが、東肩はそれより25cmほど高い。したがって、SD531との間と、SD529の東約2.5mまでとは雛壇状になる（SD529の東肩の段を後述するSX525Bの前身としてSX525Aとする）。溝の深さは東肩からみると、調査区南端が約46cm（標高約117.30m）、調査区北端が約90cm（標高約117.80m）であり、水は北に流れる。

SD529の時期は、東面回廊倒壊の要因となった粘土・砂互層堆積Aが覆うことから、11世紀前半以前となる。開削時期の決め手はないが、既述したように西肩とSD531の東肩とがほぼ同じレベルであること、雛壇造成はSD531の東肩下（SX542）にもあるが、SD531の造営に際して整地して埋めたのちSD531とSD529が開削されていることなどから、SD531と同時期になる可能性が強い。近接して2条の南北溝があることについては、両者の間を通路とみることもできないが、東からの雨水をSD529とSD531と2段で受けたとも考えられる。

**東西塀SA505と雛壇造成**（Pl. 2、Ph.73、Fig.80）東面大垣SA500の中央やや南寄りの第4次調査区南端で、東面大垣から東の丘陵に向かって延びる掘立柱塀SA505と、これに関連する丘陵の雛壇造成SX510・512・525などを検出した。

SA505は13間分を検出。柱の掘形は、一辺1.1～1.4mの方形が主だが、一部には東西長が1.9mのものもある。深さは、削平や浸蝕を受けて0.6～1.2mだが、後述するように1.4～2.0mはあったと推測される。柱はほとんど抜き取られているが、調査区東端部の2個の柱穴には、直径約24cm、長さ約90cmの柱根が残る。一部では柱抜き穴の下に平瓦や扁平な石の礎盤が残る。

柱間は、東半の6間分が7尺（約2.1m）等間、以西は6尺、6尺、7尺、6尺、10尺、6尺、7尺に割付けられる。西端の柱と東面大垣SA500Bの柱心との間は2尺ほどである。西半の柱間が不揃いなのは、後述するように中央を通る南北溝SD540や丘陵の雛壇造成に関連する。

SA505の西端の柱穴は、新東面大垣SA500Bの基壇東縁を切り、しかも東面築地SA535の基壇土下になる。したがって、SA505の年代は7世紀後半以後で、10世紀前半以前。この間、SA500Bは存続しており、SA505はこれにT字状に取り付いたとみられる。西から3個目の柱穴は基幹排水路SD531の西側積石を破壊していることから、SA505の上限は8世紀中頃となるが、このすぐ西の南北溝SD540はSD531埋没後も11世紀前半頃まで存続することから、SA505とSD540はあ

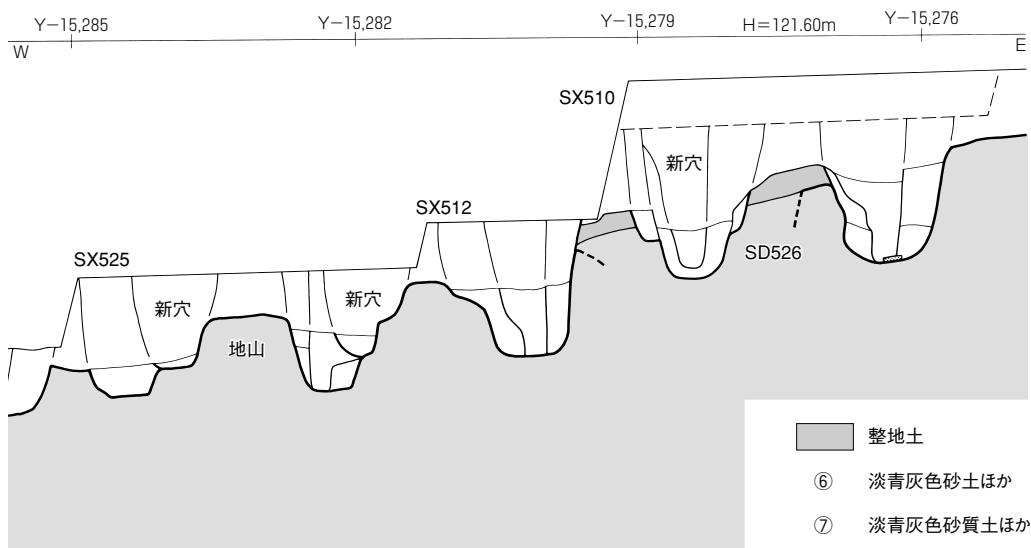


Fig. 80 東西塀SA505断面図 1:80

る期間共存したことになる。SA505の西から3間目が10尺と広いのは、SD540があるためであり、逆に両隣りを6尺に狭めたと推測しうる。

SA505の西から4個目までの柱穴は、掘形の底の標高が116.7~116.9mだが、5・6個目では117.8m前後、7個目では約118.2m、8・9個目では119.0~119.2mと段々に高くなる。こうした段差に対応するように、柱穴の7個目と8個目の間には、整地土を雛壇状に造成した段SX510がある（Fig.80）。柱穴の4個目と5個目の間、6個目と7個目の間にもそうした段（SX525B、SX512）があり、そのために柱間も6尺になったと想定する。

SA505の東半6間分は、柱掘形底が西端（標高約119.0m）から東端（標高約112.3m）まで次第に東上りとなる。西の1間分は段差があったかもしれないが、全体が西下りの比較的平坦な面になっていた可能性がある。

雛壇は主に  
8世紀中頃

雛壇造成については、従来、山田寺創建期とみてきたが、SA505との関連から、主に8世紀中頃に整備されたと考えられる。ただし、SD531の東側積石のすぐ東にも地山の段差SX542がある（Fig.72-2）。SD531の掘形より古いことから、山田寺創建時に基幹排水路SD530の東あたりは雛壇に造成したことがわかる。SD531の東側積石が西側積石より高いことも、こうした造成の名残りなのだろう。さらにSD531の時期には、既述したように東約2.0mに南北溝SD529を併設し、この東肩（SX525A）より東約2.5mを一段高い雛壇に造成しており、丘陵部の雛壇造成は漸次東に進められたと推測される。

なお、SA505の西から4・5間目には、柱抜取り穴を切る新しい柱穴がある。柱間は西が8尺、東が7尺。SA505の部分的な改修であろう。他に西から8個目の柱穴にも新旧2時期の柱抜取り穴がある。段差の大きい雛壇SX510上の柱穴であることが修理の要因であろう。

SA505の位置は、金堂心のほぼ東延長線上、東面回廊の北から1/3にあたる。東面大垣SA500Bでみると、北から3/5の位置（約110.8m）と推定される柱礎盤の1.5mほど北にある。SA500Bの柱間は8尺が基本であり、SA505はSA500Bの北から3/5の柱とこの北の柱のほぼ中間に取付けたと推測される。後述するように、東面大垣北端から東にある柱穴SA571が北限の東西塀で、これと南限のSA505とで一院、仮称「東北院」を画したと考えられる。

東北院新設

**溝状土坑SK504・508** 東西塀SA505の南と北で検出した東西に長い土坑である。南のSK504は幅約0.6m、深さ約40cm、北のSK508は幅1.0m以上、深さ約25cm。

SK504からは奈良時代の縄叩き平瓦を含む多量の瓦や8世紀後半の土器が出土。SK508からは瓦のほか、神功開宝、三彩香炉や三彩小壺の蓋、8世紀から9世紀前半までの土器が出土。

これらの土坑は、時期的には東西塀SA505と共存する。しかも溝状でSA505の北と南にあることから、その雨落溝であった可能性が高い。とすると、SA505は9世紀前半頃までは存続し、少なくとも東半の屋根には瓦を葺いていたことになる。SK508から三彩香炉が出土していることは、既述した基幹排水路SD540とその周辺の堆積土（第4次調査区）出土の「□寺」の墨書土器、「経論司」と墨書した題箋、銅製押出仏などが、東の丘陵から落ち込んだ可能性のあることとともに、SA505の北側の区画、仮称「東北院」が蔵あるいは仏堂を構えるような区画であったことを想像させる。

**東西塀SA571** 北面大垣の東方で検出した1個の柱穴である。掘形は、一辺約90cm、深さ約40cm。直径約37cm、長さ約28cmの柱根が残る（Ph.70、Fig.79）。材はケヤキである。

SA571の時期は、柱掘形が東面大垣SA500の東にある基幹排水路SD540Bの東側積石掘形で破壊されていることから、平安時代に入った頃が廃絶時期。位置は、北面大垣の東延長線上で、大垣東北隅の柱痕跡から約6.6mにあたる。既述したように、南には東面大垣から東に延びる東西塀SA505がある。SA571が北限の東西塀で、仮称「東北院」を画した可能性が高い。とするとSA571の造営は奈良時代中頃で、少なくとも9世紀前半まで存続していたSA505との年代観とも矛盾しない。

ちなみに、SA571とSA505との距離は、109.5m前後であり、東面大垣の北からほぼ3/5を占めたことになる。東西規模は不明だが、東80mあたりでは自然に近い丘陵が残っており、南北長より短くなる。しかも、西端部14mほどの範囲は基幹排水路や雛壇造成地であり、建物の建つ空間はより狭くなる。

東北院規模

SA571と北面大垣との間には、1個の柱穴SX572がある（Fig.79）。掘形は一辺約50cm、深さ約30cmで、直径約20cmの柱根が残る。材は松のようだ。SD530の上半の堆積土を除去して検出しており、平安時代以前になる。SA571を1間（約2.4m）分西に延ばしたとも考えられるが、SA571と大垣東北隅の柱痕跡を結ぶ線上より25cm南になり、柱穴も小さいことから、仮設的なものになろう。

**その他の遺構** 第6次調査北区で小さな柱穴SX576、土坑SK575、第4次調査区で掘立柱建物SB501、3基の土坑SK503・545・550などを検出している。

SX576は大垣東北入隅近くで検出した1個の柱穴である（Pl.2、Fig.77）。掘形は一辺約50cm、深さ約50cmで、径約17cmの柱痕跡がある。位置的には東面築地の西雨落溝SD537と重なり、10世紀前半以前と推測される。小規模な建物の東北隅柱穴の可能性もあるが、建物としても位置的にみて仮説的なものであろう。

SK575は北面築地の暗渠SX574の北出口を破壊している土坑（Pl.2、Ph.71）。東西3.0m以上、南北1.5m以上、深さ約1.1m。土坑内からは、暗渠SX574の蓋石、多量の瓦のほか、白磁、土師器、黒色土器、瓦器などの土器が多数出土。土器の年代は10世紀から12世紀前半。土器は、土師器皿・杯などの日常容器が主体であり、僧の生活に関わるものであった可能性が強い。

僧用の土器

SB501は、第4次調査区の東端部、東西塀SA505の南約6mの位置にある掘立柱建物である（Pl.2）。掘形は一辺約30cm、深さ約40cm。桁行1間以上、梁行2間の南北棟建物であり、柱間はともに2.1mである。柱掘形から平安時代前半期の黒色土器や土師器が出土。

SK503は、上述したSK504と重複し、これより古い楕円状の土坑（Pl.2）。南北1.0m以上、東西約1.0m、深さ約35cm。土坑内からは飛鳥Ⅳの土器が出土。

SK545・550は東面大垣と東面回廊の間（第4次・第6次調査区）にある不整形な土坑。ともに回廊創建時の整地下で検出した。SK545は、東面大垣と東面回廊のほぼ中間にあり、長さ0.8m以上、最大幅2.4m（Pl.5、Ph.1・65）。溝状で底の凹凸が著しい。周辺には乳白色の粘土が帯状に斜走しており、SK545はその採掘坑であった可能性が高い。SK550は一部が東面回廊の基壇下になる（Pl.5、Fig.28）。長さ約4.8m、幅2.2m以上、深さ約0.7m。これもSK545と同様に乳白色粘土の採掘坑であろう。

白土採掘坑

なお、この乳白色粘土は分析の結果、火山灰であり、東面回廊の白壁や垂木先瓦などの彩色に用いられたことが判明している（補論6参照）。

## K その他の遺構

### i 山田寺創建以前の遺構

#### a 古墳時代の遺構

山田寺の創建にあたっては寺域の西寄りでは厚さ2m以上の整地が行われていること、この下には断割り調査で古墳時代の遺物を含む堆積層があることを確認している（第IV章1A・B参照）。部分的な検出にとどまるが、いずれも谷の堆積土のようである。山田寺南門SB001の南を西ないし西南西に下降するSD593、東面回廊SC060の南半部付近を北西に下降するSD568、SD568の南の小さな谷SD730、SD568の北の小さな谷SD569などがある。

**SD593** SD593は、山田寺南門SB001南方の断割り調査において、山田寺創建整地（上面の標高117.6m前後）下約1.7mで検出している（付図2）。主流の北肩（標高約116.30m）は南門の中軸位置で測ると南10.8m付近にあり、ここから南に急角度に下る。深さ1.9m以上。北はゆるやかに上る。

堆積土は灰黒色粘土や暗灰色砂などが3～4層あり、古墳時代中期、5世紀（布留式）の土師器などが出土している。最上層の堆積土は北肩を覆い、SD593はさらに拡がっていたことがわかる。ベースは青灰色砂層で、遺物は出土していない。

南門SB001前の東西大溝SD625の肩や底でも、5世紀の古式須恵器を含む暗灰色粘質土層を確認している。位置は第7次調査区東端部のSD625Aの北肩から約4mまでの範囲（上面の標高117.1～117.3m）であり、以北は自然堆積か地山の青灰色砂層や粘質土となる（上面の標高は最も高いところで117.90m）。調査区西端部では5世紀の堆積土はSD625Aの底（標高約116.5m）で検出。南門の西は、式内社・東大谷日女神社が鎮座する独立小丘につながる尾根であったと考えられるので、谷SD593の北縁は西で南に振れ、南門付近は基壇前面あたりになるのではと推測される。

第7次調査の南端部は、山田寺創建時にも造成の手があまり加えられなかったようで、丘陵裾が高く残り、北西に下る小さな谷SD596も残る。地山（花崗岩風化土）は北下りで、既述した山田寺創建時の新山田道南側溝SD601の北4～6mあたりから、暗灰色粘質土がはじまる。これをSD593の堆積土とすると、谷の南北幅は30mほどとなる。

**SD568・569・730** SD568は山田寺の東面回廊の南から第2間と第11間目を南・北岸とする（Fig.28参照）。幅は25m前後。肩は山田寺創建時の造成で平坦にされ、標高が118.0m前後。深さは50cmまで確認したが、底はかなり下になるようである。堆積土からは5世紀の古式須恵器や布留式の土師器が出土。東面回廊の東約4mの、第5・6次調査区東壁の断面（Fig.81）で見ると、最終的には谷の心が北に寄り、幅も2/3程度になる。東面回廊の西では、SD568の堆積土上を北西に下る斜行溝SD566がある（Pl.4）。幅約50cm、深さ約60cm。ここからも古式須恵器が出土している。

SD568の西延長部は、北縁が金堂基壇北方の、後述するSD569の下、南縁が塔基壇下あたりであろうが、深いため後述するSD730と区別できない（上面の標高116.7m前後）。

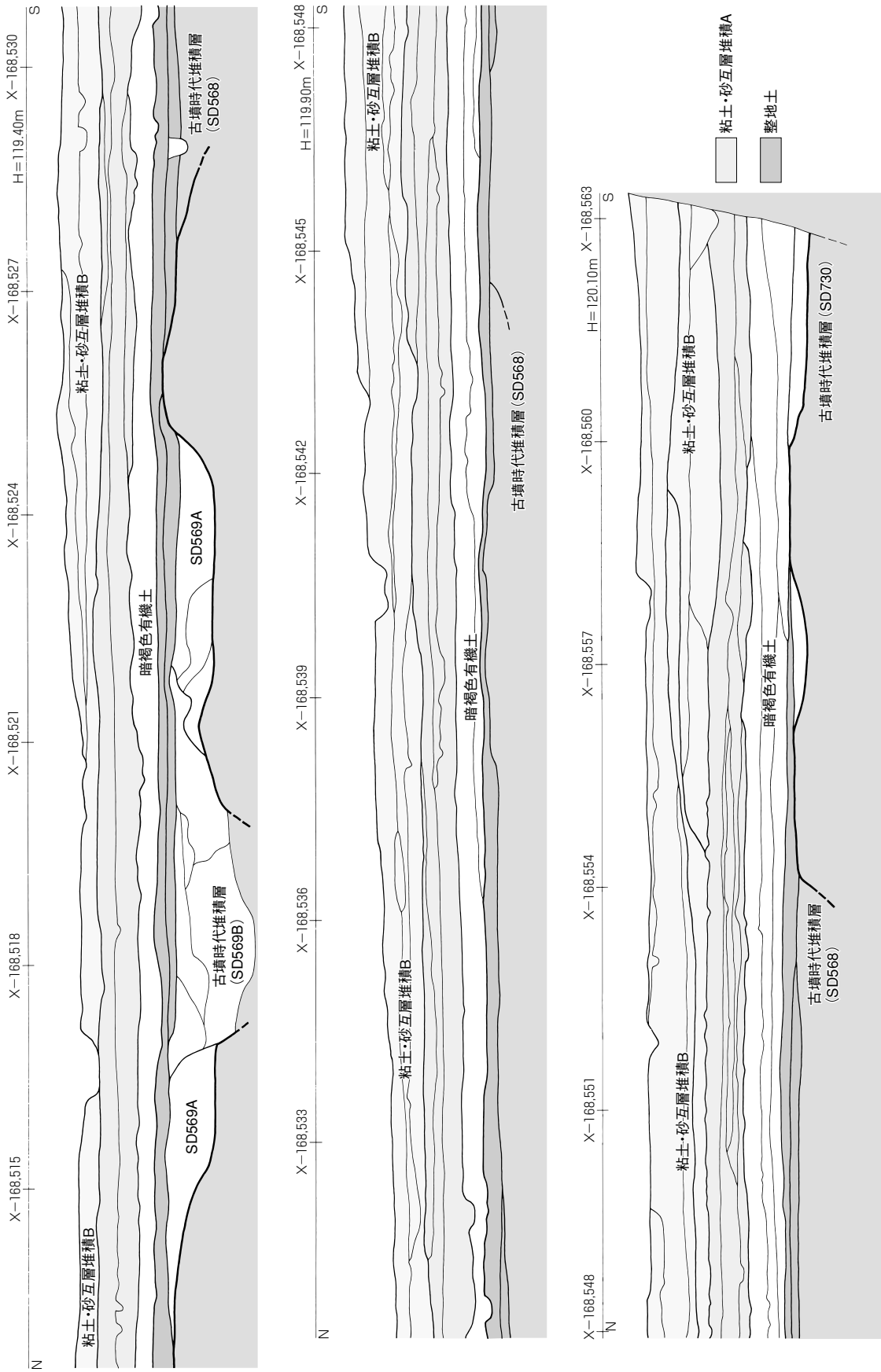


Fig. 81 東面回廊SC060東の南北土層図 1:80

SD569は第6次調査区東壁下 (Fig.81) では、SD568の北肩から北に約2.5mにある。幅は約13m。肩の標高は117.9~118.0mで、深さは約1.3mまで確認した。さらに深くなる。最終的には、谷は中央部で幅約5.5mになる。堆積土からは5世紀の古式須恵器や布留式の土師器が出土した。

SD569の西延長部の北縁は、東面回廊の南から第11間から第14間 (Fig.28参照)、金堂東方で東面回廊西約7m付近 (Fig.20参照)、金堂基壇の北約10m (Fig.44参照)、北面回廊の東から第16間 (第2次調査区西壁) のほぼ中央部で検出している (Fig.41参照)。肩の標高は117.8~118.0m前後である。

SD730は山田寺の回廊東南隅を北西に下降する (Fig.17参照)。第5次調査区東壁南端部 (Fig.81) でみると、幅3m以上だが、深さは約20cmである (底の標高117.90m前後)。山田寺創建時に、丘陵を削平しているが、残存する深さからみて、谷頭に近いと考えられる。遺物は出土していないが、堆積土は暗灰色砂質土であり、古墳時代の谷の一つである可能性が高い。

SD730の西延長部は不明だが、回廊東南入隅から西約10mの、蛇行溝SD236の北肩以北は、地山 (花崗岩風化土) が北に下降しており、ここが南縁に近いと推測される。

なお、SD593上には後述するように7世紀前半の斜行大溝SD619、SD568・730上でも7世紀前半の堆積層があり、上述した谷は5世紀以降、6世紀にも堆積を重ねた可能性はある。さらに第5次調査では縄文後期の土器が出土しており、谷底の堆積は5世紀以前になる可能性もある。

b 7世紀前半の遺構

山田寺の南門SB001南方で検出した2条の斜行溝SD607・619、これとほぼ平行する掘立柱塀SA620、中門SB003と塔SB005の間で検出した東西溝SD007、回廊東北部を北西に下る斜行溝SD526などがある。

**SD607・619** (Pl.7・8、Ph.74-1、付図1・2) SD619は南門南方で山田寺創建時の整地土 (厚さ約0.8m) を部分的に掘り下げて検出した素掘りの大溝である。既述した古墳時代の谷SD593の主流と重なり、これを継承したものといえる。北肩は標高約116.55m。ここから南に急角度に下り、深さは約1.5m、上幅は4.4m以上である。

堆積土は底から40cmほどで、この上を山田寺創建時の整地土で埋めていることから、7世紀中頃にも機能していたことがわかる。堆積土は2層 (厚さ約40cm) で、両層から飛鳥Iの土師器や須恵器、曲物の底板や台脚などの木製品、鉄刀身が残る鹿角製の刀子柄、獣骨、二枚貝、そして木簡が出土した。木簡は49点で、北岸から集中的に出土。主に習書で、記載内容に顕著なものはないが、木簡が出土したことは注目される。

木簡出土

SD607はSD619の南を斜行する素掘り溝である。一部は山田寺の創建整地下になり不明な点もあるが、山田寺南門の南でみると、幅約1.8m、深さ30cm以上 (肩の標高は117.15m)、調査区西壁では幅はほぼ同じだが、深さは約20cm (肩の標高約117.0m)。SD607の堆積土からは、量は少ないが飛鳥Iの須恵器が出土。時期はSD619と同じで、ほぼ平行することから、SD607・619は道路SF614の両側溝とみなしうる。

SD619の北肩とSD607の北肩との距離は約13.5m。SD619の南肩を検出していないので、SF614の路面幅は確定できないが、仮にSD619の幅が検出幅の2倍とすると8.8mであり、SF608の路



面幅は4.7mほどとなる。

**SA620** (Pl.8) SD619の北肩から1.2~1.5mの距離にある柱穴列である。3間分を検出。検出面はSD619と同様に古墳時代の堆積土面である。柱穴は一辺0.6m前後、深さ約0.6m、柱間は約2.1m等間とみていいであろう。方位は東で北に12°前後振れる。一部を検出しただけなので、建物か塀か確定できないが、SD619の北肩近くにあり、これとほぼ平行することから、建物でなく、SD619の北側を画す塀の可能性が高い。

**SD007** 山田寺中門SB003推定位置の北北西、第1次調査西区東壁の断割り調査で検出した幅約80cm、深さ約25cmの素掘り溝である (Fig.82)。堆積土は2層あり、上層の灰色粘質土から飛鳥Ⅰの土器片が少量出土した。肩の標高は116.60m前後。第1次調査区の東区西壁下でもSD007の南肩らしきものを検出しており、方位は西で南に振れる。

SD007上には、7世紀前半の土器片を含む厚さ10cm前後の青灰色粘質土があり、この土を山田寺創建整地土 (下層整地) が覆う。青灰色粘質土面は、第1次調査東区西壁下の断割り調査によって、南はSD007から南約8mまで (上面の標高約116.60m)、北は塔の中央の西あたりまで (上面の標高約116.64m) 確認している。南北約37mの範囲にわたり、しかも上面はほぼ平坦である。SD007の南は、近世の川SD008等があり不明だが、既述したSD619の北肩は標高が約116.55mであり、SD007とSD619間もほぼ平坦面であった可能性は高い。とすると、平坦面は南北60m近くになる。

7世紀前半  
に平坦面

塔と金堂間の東西断面 (付図2) でみると、青灰色粘質土面の標高は、塔北で約117.40m、これより西約13mの塔北西部 (第1次調査東区西壁) で約116.60m。さらに西約28mの西面回廊推定位置だと、青灰色粘質土はなく、山田寺創建整地土下が古墳時代SD568の堆積土から自然流路の青灰色ないし褐色砂層となる (上面の標高約115.1m)。塔北から西への傾斜がかなり強いことからすると、SD619から北に続く平坦面は、塔あたりで終わっていたのかもしれない。また、塔北から西方約55mあたりでは、既に触れたように (第IV章1A)、山田寺創建整地土は谷を埋めるように西に急角度に下ることから、7世紀前半における平坦面の西限を考える目安となる。東側の手掛かりは掴んでいない。

**SD526ほか** (Pl.2、Ph.65) 第4次調査において、基幹排水路SD531東方で検出した斜行溝。調査区北壁の断面 (付図1) によると、幅3.1m以上、深さ約90cmで、上を創建時の整地土が覆う (底の標高117.60m前後)。埋土は礫混じりの青灰褐色粗砂などで、上層からは飛鳥Ⅰの土器、回廊所用の山田寺式四重弧文軒平瓦AⅠ1点などが出土した。

SD526の南部分は雛壇造成SX510下で検出。第4次調査区東端 (北Ⅱ区) の南辺は厚さが0.9mほどの整地土で埋めており、SD526は東南から北西に下る小さな谷であったと推測される。SD526の北西延長部は、宝蔵SB660北 (第8次調査東区) の北壁で西肩らしきものを検出。東面

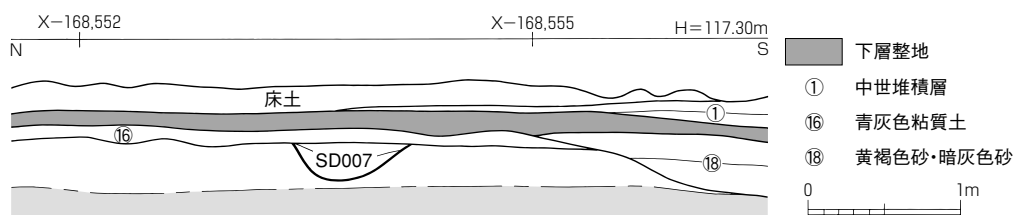


Fig.82 溝SD007付近土層図 1:50

大垣SA500Aや基幹排水路SD530下になるので、SD526の埋戻しと整地は山田寺創建当初となる。講堂（第3次調査）付近は削平が著しいが、基壇東南隅から北は砂礫層であり、谷SD526の南肩がこの付近にあったことを暗示する。

以上のほかに、回廊東北隅下で検出した幅約9.5m、深さ約20cmのSD419（Fig.19参照）や、大垣東北隅下のSD583（Fig.74）がある。前者は金堂と北面回廊の間を西南西に下る。砂層が主である。SD526の分流かもしれないが、切通しであった可能性もある。後者は、幅11m以上、深さ60cm以上。堆積土の最上層は暗青灰色粘質土、この下は暗灰色粘土。西肩は東面大垣の西側溝SD693のすぐ西の地山（花崗岩風化土）である。鞍部に近く、谷の向きはよくわからない。遺物は出土しておらず、年代も不明である。

**山田道改作** **小結** 『日本霊異記』には、雄略天皇の隨身である少子部栖軽が鳴雷を求めて磐余宮から軽の諸越の衢に向けて走った「阿倍山田前道」の記載があり、このいわゆる山田道は山田寺の南門前を通ると推定されている<sup>1)</sup>（第III章2E参照）。SD607・619を両側溝とする斜行道路SF614が古い時期の山田道で、山田寺創建にあたっては東西道路SF608に改めた可能性が高い。西は式内社・東大谷日女神社が鎮座する小丘の南麓をまわって飛鳥に、東は丘陵であることから山田寺の東、おそらく仮称「東北院」のすぐ東を通して北東に抜けていたと推測される（第VI章2E参照）。

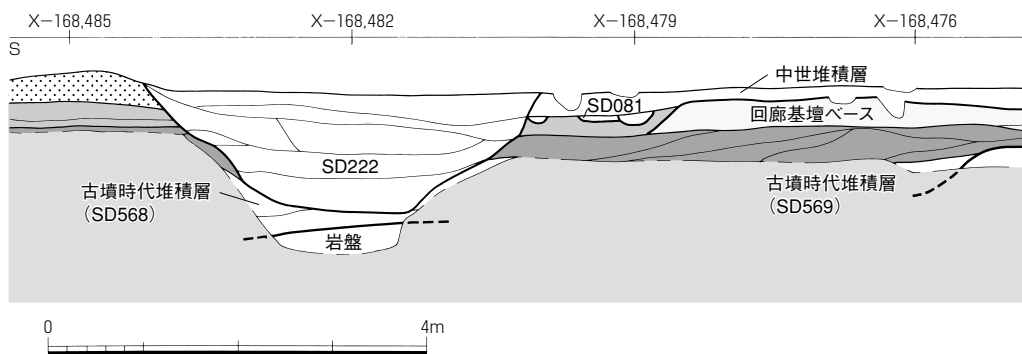
SD619のすぐ北にある塀SA620は、以北に続く平坦面の南限を区画する。平坦な面はSA620から山田寺の塔付近までおおよそ60mあたりまで続き、西は塔の西約55mあたりまで広がっていた可能性がある。この区画は、SD619の北岸から木簡が出土していることからみて、単なる集落ではない。

**石川麻呂の邸宅跡か** 第II章ですでに触れたように、山田寺の願主である蘇我倉山田石川麻呂の「山田」「石川」は地名を示し、山田寺の名も地名によること、『日本書紀』の大化5年（649）条には石川麻呂の長子興志が倭に居て寺（山田寺）を造営しており、割注で興志の居た場所が「山田家」と記すことなどから、山田寺の近くに石川麻呂の邸宅があったとみて誤りはない。その旧宅、少なくとも一族の邸宅がSA620以北の区画であった可能性は十分にある。

## ii 中世の遺構

後述する梵鐘鑄造遺構のほかに、溝7条、井戸8基、土坑4基などがある。山田寺の東面回廊付近や南門南方は、中世の厚い堆積土（第IV章1B参照）に覆われており、井戸や溝などを設ける状況になったと推測される。

**溝** 山田寺北面回廊SC080の西半で検出したSD221～223、SD239、SD481・482、講堂SB100東



北で検出したSD455がある。

SD221～223 (Pl.11・12, Ph.37, Fig.83) は、幅3.5～4.5m、深さ0.7～1.4mの素掘り溝で、コ字状に連結する。底の標高は南の東西溝SD222が117.15m前後、北の東西溝SD223が調査区東端で約117.68、西端で約117.52m、両者をつなぐ南北溝SD221が117.45～117.56mである。掘込み面は、北面回廊削平後の厚さ約20cmの堆積土（整地土か）上面である。溝内の堆積土は3～5層あり、13～15世紀の土器のほか、鎌倉時代前期（12世紀末～13世紀中頃）の巴文軒丸瓦（左巴文A・右巴文A種）や鬼瓦D種、鎌倉時代前期から室町時代中期（14世紀末～15世紀初）の丸瓦完形品などが出土している。

SD222は深い溝だが、西の第3次調査西区では検出（遺構面118.1m前後）しておらず、この東で南北方向の溝（仮称SD251）と連結した可能性が高い。とすると、SD221～223、SD251で囲まれた区画は内々で南北12.6m、東西9～10mとやや南北に長い長方形となる。小仏堂か鐘楼あるいは経蔵などの蔵があったのであろうが、礎石などは残っていない。溝にかかる橋の遺構も検出していない。北の東西溝SD223は長方形区画から東約11mまで確認している。北は講堂の礎石が残っていることから、折れ曲らず、さらに東方に延びていた可能性があるが、第3次調査東区では削平のためか検出していない。

SD239 (Pl.12) はSD221のすぐ東にある幅約40cm、深さ約10cmの南北細溝である。12世紀後半の土器が出土しているが、北面回廊の基壇を切っており、開削時期は中世になろう。

SD481・482 (Pl.14, Ph.38) は北面回廊西端部で検出した素掘りの溝である。SD481は幅約80cm、深さ約30cmの斜行溝。底の標高は調査区南端が117.55m、北端が117.30mと、水は北東に流れる。溝内からは13世紀頃の瓦器が出土。SD482はSD481と接続する東西溝。幅約80cm、深さ約40cm。底の標高はSD481との接続部が117.32m、調査区西が117.20m前後と、水は西に流れる。年代を決める遺物は出土していないが、後述する井戸より古く、下限は14世紀後半である。

SD455 (Pl.16, Ph.55) は幅5.8m以上、深さ2.2m（底の標高115.70m前後）の素掘り溝である。砂や粘質土の堆積層が5～6層あり、13～15世紀の土器が出土。SD455は、山田寺講堂の基壇北にある焼土混りの赤茶褐土を切っており、講堂焼亡後の開削と考えられる。

井戸 (Pl.27, Ph.74・75) 山田寺塔SB005の南西方でSE230、塔の南東方でSE231・233・234、北面回廊SC080の西半でSE218・448、北面回廊東半の北側でSE432・433を検出した。他に講堂の東でも井戸SE468・469を検出しているが、ともに近世以降である。

SE230 (Pl.13, 27-6, Ph.74-3) は、一辺約2.9mの隅丸方形の掘形に、長さ20～50cm、幅20～60cm、厚さ10～60cmの自然石を円形に積んだもの。深さは約1.7mで、石積みは3～5段残

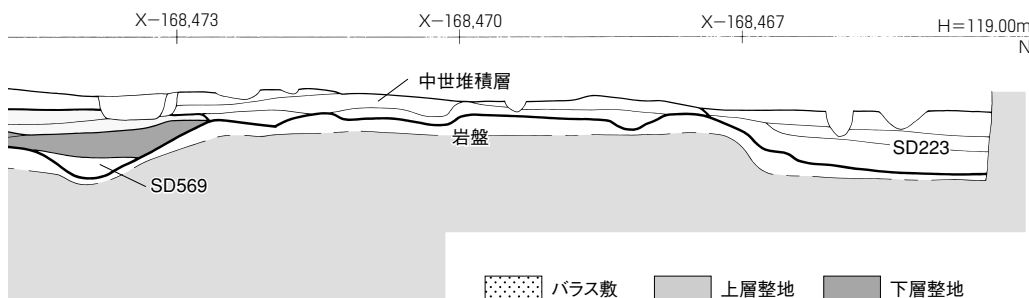


Fig.83 溝SD222・223断面図 1:80

中世の  
方形区画

るが、下1/3は石積みが崩れている。井戸内からは13世紀前半～中頃の土師器や瓦器、そして青磁合子蓋、曲物の底板、陽物形木製品などが出土している。

SE231 (Pl. 2・27-4, Ph.75-3) は、南北約1.8m、東西約1.2mの楕円状の掘形に、長さ30～80cm、幅20～40cm、厚さ20～35cmの自然石を円形にめぐらせたもの。底に大きな石を据えていたのは側石の安定を図ったためであろう。内径60～70cm、残存部の深さ約40cm。井戸内からは14世紀頃の土器が出土している。掘形は既述したSD236を切っており、井戸開削は山田寺焼亡後の12世紀後半以降となる。

SE233 (Pl. 2, 27-3, Ph.75-1) は、SE231の北約1.6mにある石積みの井戸。掘形は径約1.5mの略円形で、長さ10～30cm、幅10～25cm、厚さ10～20cmの自然石を円形に積む。掘形の肩からの深さは約1.2mだが、石積み2～4段残る程度である。底の中央は35cmほど低くし、曲物を2重に据えている。内側の曲物は内径約30cm、高さ約18cmで、平板な石を底に敷いた上に据えている。外側の曲物は径約42cm、高さ約10cmで、上に石を置き、中段の面とする。遺物は出土していないが、中世と推測する。なお、曲物と曲物の間の北東部には細い竹を立てていた。井戸を埋戻したときの息抜きかもしれない。

SE234 (Pl. 3, 27-1) は、SE233の北北東約7.4mにある石積みの井戸。掘形は径約1.6mの略円形で、長さ20～40cm、幅20～30cm、厚さ10～20cmの自然石を円形に積む。内径約80cm、残存部の深さ約55cm。石積みは4段残る。これも底に石を置く。遺物は曲物底板、5世紀(布留式)の土師器片が出土した程度だが、中世と推測する。

SE218 (Pl.12) は、掘形が一辺約2.1m、深さ約1.2mで、内側に径約1.3mの井戸脇を抜き取った痕が残る。埋土からは13世紀後半の土器が出土した。

SE480 (Pl.14, 27-3, Ph.75-2) は、径約1.7mの掘形内に、人頭大もしくはそれと前後する自然石と、中段に瓦片を円形に積んだもの。深さは2.4m前後だが、石もしくは瓦積みは1.5mほどが残る程度である。内径は下端で約60cm、残存部上端で約70cm。これも底には大きな石を据えている。井戸内からは14世紀後半の土器のほか、鎌倉時代前期の巴文軒丸瓦(右巴文A種)や均整唐草文軒平瓦Ⅳ各1点などが出土。

SE432 (Pl. 6, 27-5, Ph.75-4) は、残存部で径約1.0mの掘形に人頭大の石を円形に並べたものである。石積みは1段が残るだけで、その石も一部が残る程度である。底の中央は一段下げ、底を打ち欠いた土師器の羽釜を正位に据えている。羽釜の口径は約46cm、復元高約35cm。年代は14世紀頃になろう。

SE433 (Pl. 6) はSE432の西約3.5mにある円形の井戸。掘形は径約90cm、深さ約30cmで、内に径55～60cmの井戸枠抜き取り痕がある。埋土から年代を知りうる遺物は出土していないが、掘形は11世紀前半の灰褐色粘質土を切っており、中世になる可能性がある。

**土坑** 山田寺塔SB005西でSK201、金堂SB010北西でSK228、北面回廊SC080東端近くでSK425、講堂SB100東でSK450を検出した。

SK201 (Pl.10) は南北約5.5m、東西4.5mの楕円状の土坑。深さは約50cm、土坑内からは若干の瓦や中世の瓦器が出土。SK228 (Pl.11・12) は東西4.2m以上、南北約4.4mの隅丸方形で、深さは約40cm。若干の瓦のほか13世紀中頃～後半の土器が出土。

SK425 (Pl. 5) は北面回廊の北足場穴SS079と重複し、これより新しい土坑。一辺約90cmの隅

丸方形で、深さ約30cm。土坑内からは多くの瓦と、12～13世紀中頃の土器が出土。

SK450 (Pl.10) は東西約4.2m、南北約2.7mの楕円状の土坑。深さは約20cm。土坑内からは13世紀後半～14世紀の土器が出土している。

**小結** 中世の遺構は、山田寺の北面回廊SC080から北では大きくて深い溝があるのに対して、北面回廊から南では井戸が目立つ。

北面回廊以北の大溝については、かつては集落を囲む環濠とも考えられたが、その一部であるSD221～223と仮称SD251は長方形の区画をなし、この中に小仏堂か、鐘楼、あるいは経蔵などの蔵が建てられていた可能性が高い<sup>2)</sup>。この区画内には13世紀後半の井戸SE218があり、区画溝はSE218が廃絶した後に開削されたと考えられる。後述する講堂東の梵鐘鑄造遺構SK440は、13世紀前半～中頃や13世紀後半の土器を含み、山田寺の梵鐘が興福寺西金堂のものとなった承久2年(1220)以後、13世紀後半の鑄造を示す。

鎌倉時代に  
山田寺再興

SD221～223から鎌倉時代前期(12世紀末～13世紀中頃)頃の瓦がセットで出土していることからすると、山田寺の再興がこの時期に遡って始まり、その後改修などで不用となった瓦をSD221～223に廃棄したとも考えられる。

北面回廊以北、とくに講堂周辺からは、総点数は多くないが鎌倉時代前期から室町・江戸時代に至る瓦がまとまって出土している(第V章2参照)。江戸時代のもは現山田寺の造営に関わろうが、鎌倉～室町の瓦は再建山田寺本堂のあったことを窺わせる。13世紀末頃～14世紀初頭頃の「興福寺」の文字文軒平瓦があることからすると、この再興には興福寺が深く関わった可能性が強い。史料からは、弘安2年(1279)には山田寺の衆徒と多武峯寺との間で、山田寺領の田畠や墓をめぐる争いがあったことが明らかで、この時期に山田寺が再興されていたことを窺いうる。

再建山田寺の本堂がどこにあったのかは不明だが、出土瓦からみると創建山田寺の講堂付近になろう。大和・秋篠寺では創建講堂礎石上に鎌倉時代の本堂を建てており<sup>3)</sup>、山田寺創建講堂上に中世の本堂が再建されたと考えても無理はあるまい。

SD223とSD455は、約35mの距離をおいてほぼ平行する。大和・西大寺では、中世になって金堂や東塔を囲む幅3m以上の濠が検出されている<sup>4)</sup>。SD223やSD455は再建山田寺の主要建物を画す防御・防災用の濠であったとみていいであろう。

他方、創建山田寺の北面回廊以南で井戸が目立つことは、この一帯が集落であったことを暗示する。建物は検出していないが、塔南方や西方は深く削平されており、この付近にその存在が推定されよう。

1) 岸 俊男「飛鳥と方格地割」『史林』第53巻第4号、1970年。

2) 大和・本薬師寺も創建後に東塔周辺に幅広の溝をめぐらす(『飛鳥・藤原宮概報25・26』1995・1996年)。福永信雄氏の教示によれば、河内・瓜生堂廃寺の推定塔跡の傍にも室町時代の濠がある(東大阪市教育委員会『瓜生堂遺跡第47-2次発掘調査資料』2000年)。

3) 7間4面と推定される旧講堂基壇上に、鎌倉時代初期頃に現本堂(5間4面)が建てられている(『大和古寺大観5』秋篠寺・法華寺・海龍王寺・不退寺、岩波書店、1978年)。

4) 西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年、pp.54～56・170・171。

iii 中世の梵鐘鑄造遺構SK440 (Pl.16, Ph.74, Fig.84)

SK440は講堂跡の東側約3.5mの位置で検出した方形の土坑状遺構である。内部から出土した鑄型などから、梵鐘の鑄造跡と考える。一辺約2.3mのほぼ方形をなし、方位は東でやや北に振れる。深さは削平のため0.4mである。底面の四周に幅0.2~0.3m、深さ約0.1mの溝をめぐらしており、土坑の底面は一段高くなる。この段の中央西よりと東よりに径0.3~0.5mの2個の小穴と、両者をむすぶ幅約0.2mの溝状遺構とがある。西側の小穴は焼けて硬質になっており、内部に焼土が充満していた。また、西側の小穴の底面には軒丸瓦瓦当（山田寺創建時の瓦D種）を裏向けにおいてあった。

近年、梵鐘鑄造遺跡は各地で発見されている。それらを参考にすると、中央の段は、梵鐘鑄造用の定盤の基部であって、東と西の小穴は、懸木の柱穴と推定できる。土坑内の四周の溝底部には、北東、南西に小穴があり、南東にもごく浅い穴の底部らしき痕跡が残る。梵鐘鑄型を固定したり、鑄上がった梵鐘を土坑から運び上げる際の支柱の痕跡と推定できよう。周囲の溝の機能は、湿気抜きと思われる。

土坑埋土からは多量の焼土や焼けた瓦のほか、梵鐘の鑄型、鞆の羽口、土師器や瓦器が出土した。土器は13世紀前半~中頃が主だが、13世紀後半のものもあり、鑄造の年代を知ることができる。周辺の焼土層から「興福寺」の文字文軒平瓦も出土。

鑄造年代は  
13世紀後半

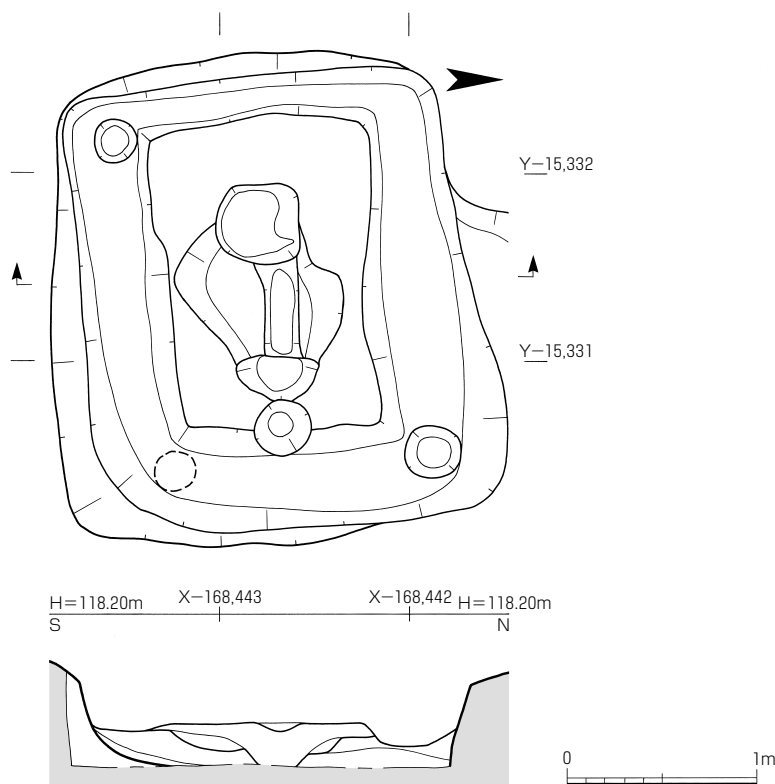


Fig.84 梵鐘鑄造遺構SK440 1:40

1) 土坑底部周囲の溝、土坑隅の小穴、懸木の痕跡などは、古代・中世の梵鐘鑄造土坑に通有の特徴である（神崎勝「梵鐘の鑄造遺跡とその変遷」『考古学研究』157号、1993年）。